

図96 屋代遺跡群出土のウマ 2

1：環椎 2：軸椎 3・4：右上腕骨 5：左上腕骨 6・7：右橈骨 8：左橈骨
 9：右肩甲骨 10・11：左肩甲骨 12：右中手骨 13：左中手骨・左第4中手骨 14：左中手骨

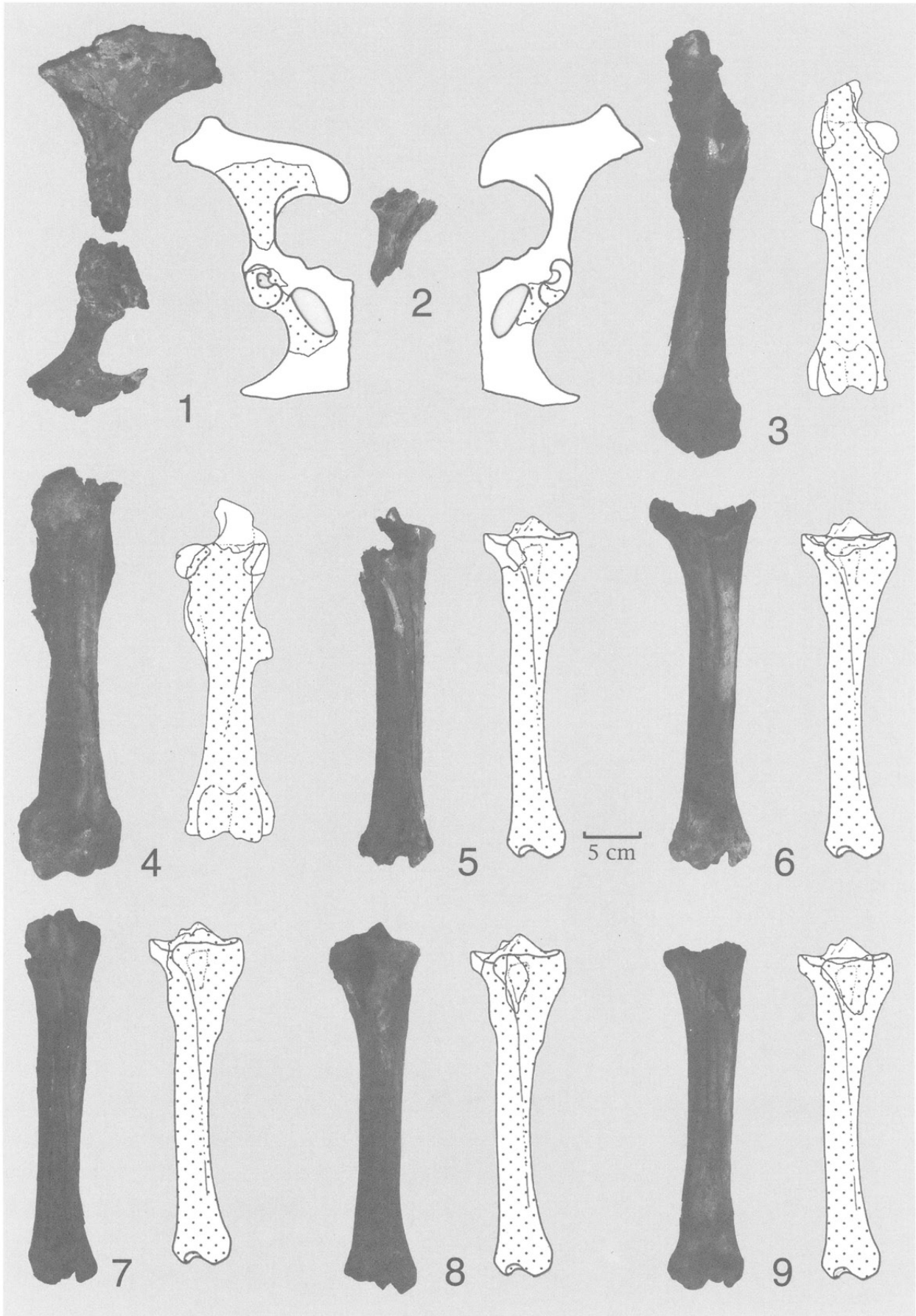


図97 屋代遺跡群出土のウマ 3

1：右寛骨 2：左寛骨 3：右大腿骨 4：左大腿骨 5～9：右脛骨

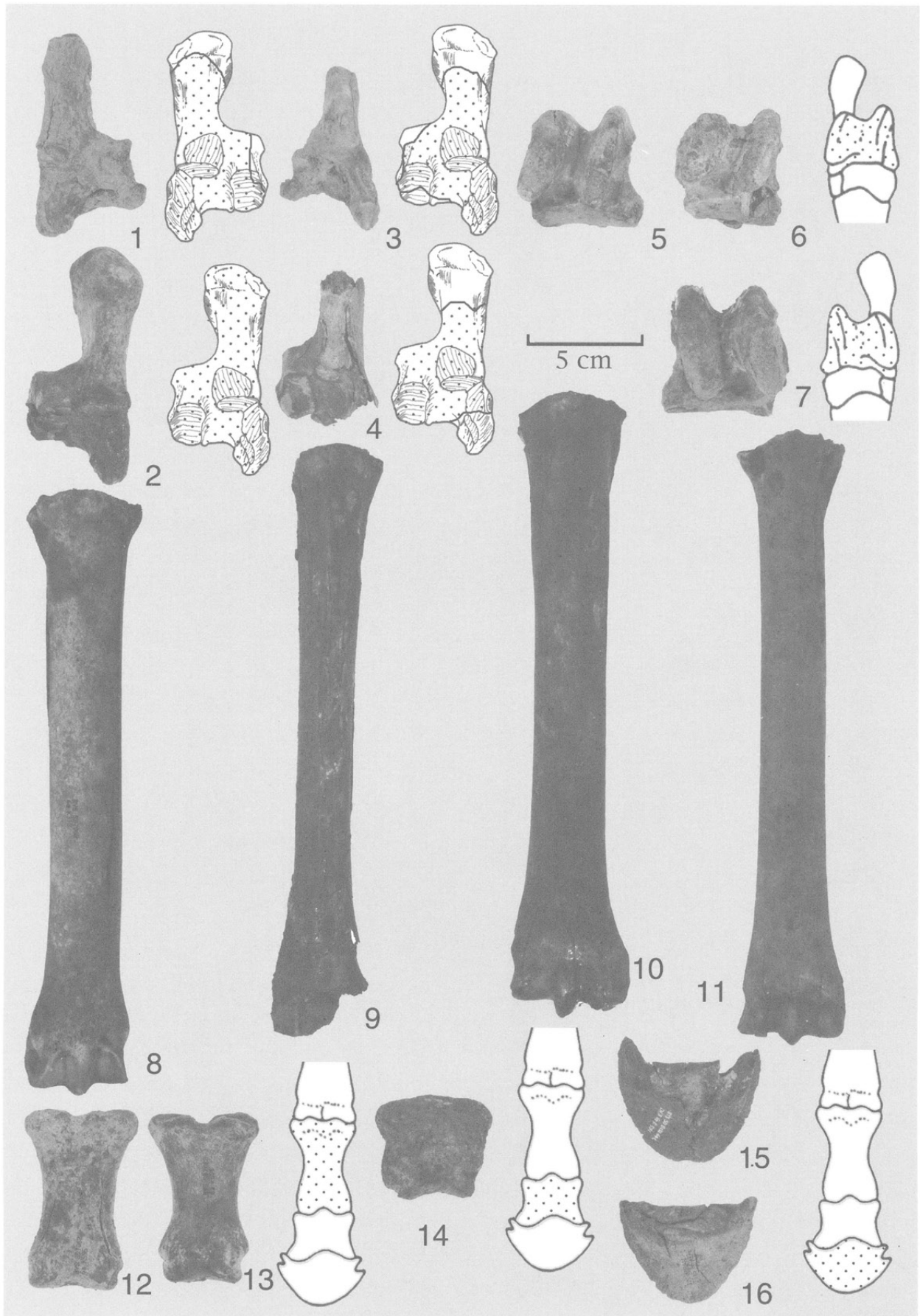


図98 屋代遺跡群出土のウマ 4

1 : 右踵骨 2~4 : 左踵骨 5・6 : 右踵骨 7 : 左距骨 8 : 右中足骨
 9~11 : 左中足骨 12・13 : 基節骨 14 : 中節骨 15・16 : 末節骨

第6章 微化石と動・植物遺体の分析

表73-(2) 屋代遺跡群出土脊椎動物骨 遺構別一覧

出土遺構 ト、基本 層位	出土場所	土器編年	年代	台帳番号		重量 (g)	種名	骨名	部位	左右	上下	状態 1 2	c p h d h p e s s d s d e	備考	
				地区番号	台帳番号										
SC7010		古代8期前半	9c後半	6a	古 01020	18	ウマ	歯	M1		右	上	F		
SC7010		古代8期前半	9c後半	6a	古 01020	22	ウマ	歯	M3		右	上	F		
SC7010		古代8期前半	9c後半	6a	古 01020	84	ウマ	歯							
SC7027	第4水田面大畦盛土内	1期後半	7c末~8c初	6a	古 15288	10	ウマ	歯	下顎歯片						
SC8001		古代8期前半	9c後半	6b	古 03052	4	ウシ	歯							
SC8001		古代8期前半	9c後半	6b	古 04062	177	ウマ	下顎骨+歯	P2-M2		右		F		
SC8001	1層	古代8期前半	9c後半	6b	古 35694	17	ウマ	指骨	基節骨(前肢か後肢)				C	1	
SC8001		古代8期前半	9c後半	6b	古 35692	25	ウマ	足根骨	距骨		左		C	1	解体痕あり
SC8001		古代8期前半	9c後半	6b	古 35692	25	ウマ	足根骨	距骨		左		C	1	解体痕あり
SC8001		古代8期前半	9c後半	6b	古 08155	30	ウマ	中足骨			左		F	1 1 1	
SD126		古代8期前半	9c後半	1	古 04068	10	ウマ	歯	P2		右	下	F		
SD126		古代8期前半	9c後半	1	古 04068	18	ウマ	歯	P3またはP4		左	下	F		
SD126		古代8期前半	9c後半	1	古 04068	20	ウマ	歯	M1		左	下	F		
SD280.281		古代7期?~8期前半	9c中頃?9c後半	1	古 04074	19	ウシ	歯					F		
SD287		古代7期?~8期前半	9c中頃?9c後半	1	古 02024	14	ウシ	歯					F		
SD3032-SD3035	E-20トレンチ	古代7期?~8期前半	9c中頃?9c後半	3	古 02026	5	ウマ	歯							
SD3067		古代6~8期	9c	3	古 02022	11	ウマ	歯	M2		左	下	F		
SD3067		古代6~8期	9c	3	古 02022	12	ウマ	歯	M1		左	下	F		
SD3067		古代6~8期	9c	3	古 02022	13	ウマ	歯	M1		右	上	F		
SD3067		古代6~8期	9c	3	古 02022	13	ウマ	歯	M3		左	下	F		
SD3067		古代6~8期	9c	3	古 02022	13	ウマ	歯	P3		左	下	F		
SD3067		古代6~8期	9c	3	古 02022	19	ウマ	歯	P4		左	下	F		
SD3067		古代6~8期	9c	3	古 02022	25	ウマ	歯	M3		右	上	F		
SD3067		古代6~8期	9c	3	古 02022	28	ウマ	歯	M2		右	上	F		
SD3067		古代6~8期	9c	3	古 02022	33	ウマ	歯	P4		右	上	F		
SD3097?3099		古代5期?~8期	8c末?9c後半	3	古 02033	15	ウマ	歯	P4		右	下			
SD3098				3	古 01004	23	ウマ	歯	臼歯(M1?)		左	下	F		
SD3243		古代8期前半	9c後半	3	古 02029	3	ウマ	歯	切歯片						
SD3243	SD3244、45との分岐点	古代6~8期	9c	3	古 02036	1	ウマ	歯							
SD3245		古代6期前後	9c前半前後	3	古 02040	10	ウシ	歯	臼歯片						
SD3262		古代6期	9c前半	3	古 03045	2	ウマ	歯							
SD4514		古代6~8期前半	9c	4	古 02032	1	ウマ	歯							
SD4514		古代6~8期前半	9c	4	古 05090	11	ウマ	歯	P4		右	上	F		
SD4514	(-2)	古代6~8期前半	9c	4	古 05089	14	ウマ	歯	臼歯片			上			
SD4514	(-2)	古代6~8期前半	9c	4	古 05089	15	ウマ	歯	M3		左	下	F		
SD4514	(-2)	古代6~8期前半	9c	4	古 05090	16	ウマ	歯	M2		右	下	F		
SD4514	(-2)	古代6~8期前半	9c	4	古 05089	28	ウマ	歯	P3またはP4		左	下	F		
SD4532	底面(粘土層)	古代6期	9c前半	4	古 01002	11	ウシ	歯							
SD4532	検出面	古代6期	9c前半	4	古 05093	68	ウシ	歯							
SD4532	覆土(粘土層)	古代6期	9c前半	4	古 05084	208	ウシ	上腕骨			右		F	1 1 1 1	
SD4532	検出面	古代6期	9c前半	4	古 05093	16	ウシ	足根骨	踵骨					1	
SD4532		古代6期	9c前半	4	古 05092	119	ウマ	歯							
SD5007	覆土上層	古代6期?~7期	9c前?~中頃	5b	古 08252	4	イノシシ(ブタ)	下顎骨	下顎頭		左		F		
SD5007	覆土上層	古代6期?~7期	9c前?~中頃	5b	古 08252	29	ニホンジカ	上腕骨			左		F	1	解体痕あり
SD6003		古代2期	8c前半	5a	古 02031	3	ニホンジカ	歯					F		
SD7016		古代?~8期前半	8c?~9c	6a	古 01005	19	ウマ	大腿骨	骨頭		左		F	1	
SD7016		古代?~8期前半	8c?~9c	6a	古 01005	86	ウマ	大腿骨			左		F	1 1	
SD7016		古代?~8期前半	8c?~9c	6a	古 06110	42	ウマ	中足骨					F	1	
SD7020		古代6?~7期	9c前?~中頃	6a	古 01015	17	ウシ	歯	M1		右	上	F		
SD7020		古代6?~7期	9c前?~中頃	6a	古 02027	3	ウマ	歯							
SD7020		古代6?~7期	9c前?~中頃	6a	古 02028	9	ウマ	歯	下顎歯片						
SD7020		古代6?~7期	9c前?~中頃	6a	古 19380	16	ウマ	歯	M3		右	下	F		
SD7020		古代6?~7期	9c前?~中頃	6a	古 19378	26	ウマ	歯	M3		右	下	F		
SD7020	骨一括-1	古代6?~7期	9c前?~中頃	6a	古 06150	31	ウマ	歯	M3		左	上	F		
SD7024		古代3期?~8期前半	8c中頃?~9c後半	6a	古 02032	12	ウマ	歯	P3		右	上	F		
SD7024	トレンチ	古代3期?~8期前半	8c中頃?~9c後半	6a	古 02033	16	ウマ	歯							
SD7024		古代3期?~8期前半	8c中頃?~9c後半	6a	古 02029	28	ウマ	歯	M3		左	上	F		
SD7025		古代6?~7期	9c前?~中頃	6a	古 02035	1	イヌ	歯	C		右	上	F		
SD7025		古代6?~7期	9c前?~中頃	6a	古 03044	1	イヌ	歯	C		左	上	F		
SD7025		古代6?~7期	9c前?~中頃	6a	古 03044	2	イヌ	歯	C		右	下	F		
SD7025		古代6?~7期	9c前?~中頃	6a	古 06108	63	ウシ	上顎骨			右		F		
SD7025		古代6?~7期	9c前?~中頃	6a	古 06108	93	ウシ	頭蓋骨	前頭骨片				F		
SD7025		古代6?~7期	9c前?~中頃	6a	古 07126	10	ウシ	下顎骨	下顎頭		右		F		若年
SD7025		古代6?~7期	9c前?~中頃	6a	古 04078	16	ウシ	下顎骨	下顎枝		左		F		
SD7025		古代6?~7期	9c前?~中頃	6a	古 04074	138	ウシ	下顎骨+歯	dP3, dP4, M1		右		F		若年
SD7025		古代6?~7期	9c前?~中頃	6a	古 04062	1620	ウシ	下顎骨+歯	M1?M3				F		多量の土含み
SD7025		古代6?~7期	9c前?~中頃	6a	古 05090		ウシ	下顎骨	歯		左				土含み
SD7025		古代6?~7期	9c前?~中頃	6a	古 03053	1	ウシ	歯	I3		右	下	F		
SD7025		古代6?~7期	9c前?~中頃	6a	古 03051	2	ウシ	歯	I1		左	下	F		

第6章 微化石と動・植物遺体の分析

表73-(6) 屋代遺跡群出土脊椎動物骨 遺構別一覧

出土遺構 (ト、基本 階位)	出土場所	土器編年	年代	台帳番号		重量 (g)	種名	骨名	部位	左右	上下	状態 1 2	c p h d h p e p s s d s d e	備考	
				地区 番号	台帳 番号										
SD7035	第4水田面	古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 12230	110	ウマ	上腕骨			左	F		1		
SD7035		古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 09172	120	ウマ	燒骨			左	F		1 1 1 1		
SD7035		古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 11210	126	ウマ	中手骨			左	C	1			
SD7035	骨一括	古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 11213	142	ウマ	中手骨			右	C	1			
SD7035	骨一括2	古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 11219	168	ウマ	中手骨			右	C	1			
SD7035		古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 11211	29	ウマ	指骨	中節骨 (前肢か後肢)			F		1 1 1 1 1		
SD7035		古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 12224	70	ウマ	大腿骨			左	F			1	
SD7035	骨一括1	古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 11219	203	ウマ	大腿骨			右	F		1 1		
SD7035		古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 10187	212	ウマ	大腿骨			右	F		1 1		
SD7035	第4水田面	古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 11220	265	ウマ	脛骨			右	F		1 1 1 1		
SD7035		古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 09172	276	ウマ	脛骨			右	F		1 1 1 1		
SD7035		古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 09173	136	ウマ	中足骨			右	F				
SD7035		古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 10190	143	ウマ	中足骨			左	F		1 1 1 1		
SD7035	骨一括1	古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 12224	1	トリの一種	大腿骨				F		1	コジュケイ大	
SD7035	セクションベル ト	古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 25483	5	ニホンジカ	下顎骨	下顎枝		左	F				
SD7035		古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 31615	3	ニホンジカ	中手骨又は 中足骨				F			1 焼骨	
SD7035		古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 11212	18	ニホンジカ	足根骨	踵骨		左	C	1		解体痕	
SD7035	骨一括-1	古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 33660	4	ニホンジカ	足根骨	距骨		左	F			切断痕	
SD7036		古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 12237	19	ウシ	頭蓋骨	頬骨		右	F				
SD7036		古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 10197	6	ウシ	歯	P2		右上	F				
SD7036		古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 10197	9	ウシ	歯	P3		左上	F				
SD7036		古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 10197	10	ウシ	歯	P3		右上	F				
SD7036		古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 10197	13	ウシ	歯	P3		右上	F				
SD7036		古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 10197	19	ウシ	歯	M1		左上	F				
SD7036		古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 10197	29	ウシ	歯	M1		右上	F				
SD7036		古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 10197	40	ウシ	歯	M1		右上	F				
SD7036		古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 10197	40	ウシ	歯	M1		左上	F				
SD7036		古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 10197	42	ウシ	歯	M2		右上	F				
SD7036		古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 10197	43	ウシ	歯	M2		左上	F				
SD7036		古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 15281	12	ウシ	指骨	末節骨			F	1			
SD7036		古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 12234	99	ウシ	脛骨			左	F		1 1 1 1	焼骨、幼体	
SD7036	第4水田面	古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 12239	202	ウシ	脛骨			左	F		1 1 1		
SD7036		古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 11214	252	ウシ	脛骨			左	F		1 1 1 1		
SD7036		古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 19367	102	ウマ	肩甲骨			左	F	1			
SD7036		古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 36718	17	ウマ	上腕骨			左	F			1 切断痕	
SD7036	第4水田面	古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 12240	37	ウマ	上腕骨			右	F		1		
SD7036		古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 18358	260	ウマ	上腕骨			左	F		1 1 1 1		
SD7036		古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 14268	34	ウマ	尺骨	滑車部		左	F		1		
SD7036	骨一括-1	古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 18349	14	ウマ	手根骨	橈側手根骨		左	C	1			
SD7036		古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 19371	26	ウマ	寛骨	腸骨		右	F				
SD7036		古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 12236	45	ウマ	寛骨	坐骨部		左	F				
SD7036		古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 12237	258	ウマ	脛骨			右	F		1 1 1 1		
SD7036		古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 12235	62	ウマ	足根骨	距骨		右	C	1			
SD7036	土器一括	古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 23460	4	ニホンジカ	下顎骨+歯	P2, P3		左	F				
SD7036	土器一括	古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 24464	17	ニホンジカ	上腕骨			右			1	解体痕	
SD7036	土器一括	古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 24463	13	ニホンジカ	中手骨				F		1		
SD7036		古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 10198	16	ニホンジカ	脛骨			左	F			1	
SD7037				6a 古 09169	13	ウシ	歯	M2?			F				
SD7038		古代1期末?~2 期初頭	7c末?~8c初 頭	6a 古 11218		ウマ	頭蓋骨+下 顎骨				F				

表73-(9) 屋代遺跡群出土脊椎動物骨 遺構別一覧

出土遺構 フリット 基本 層位	出土場所	土器編年	年代	台帳番号		重量 (g)	種名	骨名	部位	左右	上下	状態 1 2	c p h d h p e p s s d s d e	備考
				地区 番号	台帳 番号									
SD7062		古代1期後半	7c末	6a古	15293	334	ウシ	脛骨		左	C	1		
SD7062	骨一括	古代1期後半	7c末	6a古	19362	61	ウシ	足根骨	踵骨	右	F		1 1 1	
SD7062	分層1(分層2)	古代1期後半	7c末	6a古	36702	34	ウシ	足根骨	距骨	右	F			
SD7062		古代1期後半	7c末	6a古	19362	109	ウマ	肩甲骨		左	F		1	
SD7062	骨一括	古代1期後半	7c末	6a古	19362	172	ウマ	肩甲骨		右	F	1		
SD7062	セクションパルト 分層1(分層2)	古代1期後半	7c末	6a古	36702	218	ウマ	上腕骨		左	F		1 1 1 1	
SD7062	骨一括	古代1期後半	7c末	6a古	19362	290	ウマ	上腕骨		右	F		1 1 1 1	
SD7062		古代1期後半	7c末	6a古	15292	387	ウマ	橈尺骨		右	C	1		
SD7062	骨一括	古代1期後半	7c末	6a古	19362	7	ウマ	手根骨	第III手根骨	右	C			
SD7062		古代1期後半	7c末	6a古	16317	196	ウマ	中手骨+第4中手骨		左	C	1		
SD7062	骨一括	古代1期後半	7c末	6a古	19362	6	ウマ	中手骨又は中足骨	第2か第4中手骨か中足骨		F		1 1 1	
SD7062	骨一括	古代1期後半	7c末	6a古	19362	6	ウマ	中手骨又は中足骨	第2か第4中手骨か中足骨		F		1 1	
SD7062	骨一括	古代1期後半	7c末	6a古	19362	8	ウマ	中手骨又は中足骨	第2か第4中手骨か中足骨		F		1 1	
SD7062	骨一括	古代1期後半	7c末	6a古	19362	9	ウマ	中手骨又は中足骨	第2か第4中手骨か中足骨		F		1 1 1 1	
SD7062	骨一括-19	古代1期後半	7c末	6a古	19362	14	ウマ	中手骨又は中足骨			F			1
SD7062	骨一括	古代1期後半	7c末	6a古	19362	17	ウマ	中手骨又は中足骨	第2か第4中手骨か中足骨		F		1 1 1	
SD7062		古代1期後半	7c末	6a古	37733	23	ウマ	指骨	末節骨(前肢か後肢)		C			
SD7062		古代1期後半	7c末	6a古	19362	30	ウマ	指骨	中節骨(前肢か後肢)		C	1		
SD7062	骨一括	古代1期後半	7c末	6a古	19362	32	ウマ	指骨	中節骨(前肢か後肢)		C	1		
SD7062	骨一括-12	古代1期後半	7c末	6a古	19362	52	ウマ	指骨	後肢基節骨		C	1		
SD7062		古代1期後半	7c末	6a古	16312	52	ウマ	指骨	後肢基節骨		C	1		
SD7062	骨一括-11	古代1期後半	7c末	6a古	19362	61	ウマ	指骨	前肢基節骨		C	1		
SD7062		古代1期後半	7c末	6a古	15261	246	ウマ	寛骨		左	F			
SD7062	骨一括-18	古代1期後半	7c末	6a古	19362	27	ウマ	大腿骨	骨頭		F		1	
SD7062	骨一括-16	古代1期後半	7c末	6a古	19362	70	ウマ	大腿骨		左	F		1 1 1	
SD7062		古代1期後半	7c末	6a古	16316	456	ウマ	大腿骨		左	F		1 1 1 1	
SD7062		古代1期後半	7c末	6a古	16314	372	ウマ	脛骨		右	F		1 1 1 1	
SD7062		古代1期後半	7c末	6a古	15295	414	ウマ	脛骨		左	C	1		
SD7062	骨一括-10	古代1期後半	7c末	6a古	19362	65	ウマ	足根骨	踵骨	左	C	1		
SD7062		古代1期後半	7c末	6a古	15292	63	ウマ	足根骨	距骨	左	C	1		(26503)
SD7062	土器一括	古代1期後半	7c末	6a古	24478	14	ウマ	足根骨	中心足根骨	右	C	1		
SD7062	骨一括	古代1期後半	7c末	6a古	19362	31	ウマ	足根骨	中心足根骨+第3足根骨	右	F			
SD7062	骨一括	古代1期後半	7c末	6a古	19362	32	ウマ	足根骨	中心足根骨+第3足根骨	左	F			
SD7062	骨一括	古代1期後半	7c末	6a古	19362	166	ウマ	中足骨		右	F		1 1 1 1	
SD7062		古代1期後半	7c末	6a古	16315	216	ウマ	中足骨		左	C	1		
SD7062		古代1期後半	7c末	6a古	16313	224	ウマ	中足骨		右	C	1		
SD7062		古代1期後半	7c末	6a古	19361	1	ニホンジカ	頭蓋骨	角片		F			焼骨
SD7062	骨一括	古代1期後半	7c末	6a古	19362	11	ニホンジカ	下顎骨	下顎枝	右	F			
SD7062	骨一括	古代1期後半	7c末	6a古	19362	91	ニホンジカ	下顎骨+歯	P2?M3	右	F			
SD7062	セクションパルト分層2	古代1期後半	7c末	6a古	23449	1	ニホンジカ	指骨	基節骨		F		1	焼骨
SD7062	骨一括	古代1期後半	7c末	6a古	19362	29	ニホンジカ	中足骨		右	F	1		
SD7065	上層シルト、骨一括7	古代1期前半	7c中?~後半	6a古	17340	17	イノシシ(ブク)	上腕骨		右	F		1	解体痕
SD7065		古代1期前半	7c中?~後半	6a古	18345	8	ウシ	歯	P2	左上	F			
SD7065	骨一括-10	古代1期前半	7c中?~後半	6a古	36706	9	ウシ	歯	大白歯	左上	F			(26518)
SD7065	上層シルト、骨一括10	古代1期前半	7c中?~後半	6a古	17340	17	ウシ	歯	M3	左下	F			(27530)
SD7065	上層シルト	古代1期前半	7c中?~後半	6a古	17340	128	ウシ	中足骨		右	F		1 1 1 1	解体痕あり
SD7065		古代1期前半	7c中?~後半	6a古	18345	49	ウマ	下顎骨	下顎体+下顎枝		F			
SD7065		古代1期前半	7c中?~後半	6a古	18345	80	ウマ	下顎骨	下顎体	左	F			
SD7065		古代1期前半	7c中?~後半	6a古	18345	182	ウマ	下顎骨	P2-M2	右	F			
SD7065		古代1期前半	7c中?~後半	6a古	18345	565	ウマ	下顎骨		左	F			
SD7065	骨一括	古代1期前半	7c中?~後半	6a古	36706	5	ウマ	歯	I2	左上	F			(27529)
SD7065	上層シルト、骨一括9	古代1期前半	7c中?~後半	6a古	17340	10	ウマ	歯	I1	左上	F			(26516)
SD7065	上層シルト、骨一括8	古代1期前半	7c中?~後半	6a古	17340	10	ウマ	歯	I1	右下	F			(27528)
SD7065		古代1期前半	7c中?~後半	6a古	18345	10	ウマ	歯	P3	左下	F			
SD7065		古代1期前半	7c中?~後半	6a古	18345	23	ウマ	歯	P2	右下	F			
SD7065	骨一括-6	古代1期前半	7c中?~後半	6a古	36706	25	ウマ	歯	P4	右下	F			(26513)
SD7065		古代1期前半	7c中?~後半	6a古	18345	26	ウマ	歯	M3	右下	F			
SD7065	骨一括-4	古代1期前半	7c中?~後半	6a古	36706	31	ウマ	歯	M3	右下	F			(26515)
SD7065	上層シルト、骨一括11	古代1期前半	7c中?~後半	6a古	17340	34	ウマ	歯	P3	左上	F			(26517)
SD7065	上層シルト、骨一括13	古代1期前半	7c中?~後半	6a古	17340	35	ウマ	歯	M1	右上	F			(27533)
SD7065	上層シルト、骨一括12	古代1期前半	7c中?~後半	6a古	17340	37	ウマ	歯	M1	左上	F			(26514)
SD7065	骨一括-5	古代1期前半	7c中?~後半	6a古	36706	41	ウマ	歯	P4	右下	F			(26512)
SD7065	骨一括-8	古代1期前半	7c中?~後半	6a古	36706	42	ウマ	歯	M2	左上	F			(27532)
SD7065	上層シルト	古代1期前半	7c中?~後半	6a古	17340	15	ウマ	上腕骨		右	F		1	(27535)

表73-(10) 屋代遺跡群出土脊椎動物骨 遺構別一覧

出土遺構 グリッ ド、基本 層位	出土場所	土器編年	年代	台帳番号		重量 (g)	種名	骨名	部位	左右	上下	状態 1 状態 2	c p h d h p e s s d s d e	備考	
				地区番号	台帳番号										
SD7065	上層シルト、骨一括17	古代1期前半	7c中?~後半	6a 古	37739	100	ウマ	上腕骨		右	F		1 1 1	17340	
SD7065	上層シルト、骨一括3	古代1期前半	7c中?~後半	6a 古	27523	142	ウマ	上腕骨		右	F		1 1 1	17340	
SD7065	上層シルト	古代1期前半	7c中?~後半	6a 古	18352	156	ウマ	上腕骨		右	F		1		
SD7065	上層シルト	古代1期前半	7c中?~後半	6a 古	17340	17	ウマ	尺骨	橈骨接合部	右	F		1	(27526)	
SD7065	下層・砂層、骨一括	古代1期前半	7c中?~後半	6a 古	26511	41	ウマ	中手骨			F		1 1	解体痕、(36706)	
SD7065	上層シルト、骨一括16	古代1期前半	7c中?~後半	6a 古	37738	69	ウマ	中手骨			F		1	17340	
SD7065	上層シルト	古代1期前半	7c中?~後半	6a 古	17340	132	ウマ	中手骨		左	C	1			
SD7065	上層シルト、骨一括18	古代1期前半	7c中?~後半	6a 古	17340	18	ウマ	中手骨または中足骨			F			1	(37740)
SD7065	上層シルト、骨一括18	古代1期前半	7c中?~後半	6a 古	17340	23	ウマ	指骨	基節骨(前肢か後肢)		F		1 1	(37740)	
SD7065	上層シルト、骨一括18	古代1期前半	7c中?~後半	6a 古	17340	23	ウマ	指骨	中節骨(前肢か後肢)		F		1 1 1	(37740)	
SD7065	上層シルト、骨一括14	古代1期前半	7c中?~後半	6a 古	17340	23	ウマ	寛骨	寛骨臼部	左	F			(27534)	
SD7065	上層シルト	古代1期前半	7c中?~後半	6a 古	17340	28	ウマ	寛骨	腸骨	左	F			(27535)	
SD7065	上層シルト	古代1期前半	7c中?~後半	6a 古	17340	30	ウマ	寛骨	坐骨	左	F			(27535)	
SD7065	上層シルト	古代1期前半	7c中?~後半	6a 古	17340	60	ウマ	寛骨	破片		F			(27535)	
SD7065	下層・砂層、骨一括2	古代1期前半	7c中?~後半	6a 古	26510	23	ウマ	大腿骨	遠位端前面	左	F		1	(36706)	
SD7065	下層・砂層、骨一括2	古代1期前半	7c中?~後半	6a 古	36715	27	ウマ	大腿骨	遠位内側	右	F		1		
SD7065	上層シルト、骨一括15	古代1期前半	7c中?~後半	6a 古	17340	35	ウマ	大腿骨		右	F		1	(37737)	
SD7065	上層シルト、骨一括6	古代1期前半	7c中?~後半	6a 古	27526	90	ウマ	大腿骨		左	F		1 1	17340	
SD7065	上層シルト、骨一括6	古代1期前半	7c中?~後半	6a 古	36715	22	ウマ	脛骨	近位外側	左	F		1	若年	
SD7065	上層シルト、骨一括5	古代1期前半	7c中?~後半	6a 古	27525	142	ウマ	脛骨		左	F			若 17340	
SD7065	破片一括	古代1期前半	7c中?~後半	6a 古	30582	352	ウマ	脛骨		左	F		1 1 1 1		
SD7065	土器一括	古代1期前半	7c中?~後半	6a 古	36706	13	ウマ	足根骨	距骨	左				(26509)	
SD7065	土器一括	古代1期前半	7c中?~後半	6a 古	23451	10	ウマ	足根骨	中心足根骨	左	F				
SD7065	下層・砂層、骨一括14	古代1期前半	7c中?~後半	6a 古	36706	40	ウマ	中足骨			F		1	骨折痕	
SD7065	骨一括-11	古代1期前半	7c中?~後半	6a 古	36716	43	ニホンジカ	頭蓋骨	角	右	F				
SD7065	骨一括-11	古代1期前半	7c中?~後半	6a 古	36706	2	ニホンジカ	歯	M2	右上	F			(27531)	
SD7065	上層シルト、骨一括14	古代1期前半	7c中?~後半	6a 古	17340	8	ニホンジカ	中手骨	前面		F		1	(27534)	
SD7065	上層シルト、骨一括4	古代1期前半	7c中?~後半	6a 古	27524	50	ニホンジカ	中足骨		右	F		1	17340	
SD7067		古代1期前半	7c中?~後半	6a 古	37736	1	イヌ	歯	M2	左下	F				
SD7067		古代1期前半	7c中?~後半	6a 古	37736	2	イノシシ(ブク)	歯	白歯片		F				
SD7067		古代1期前半	7c中?~後半	6a 古	32639	13	ウシ	歯	P3	左下	F				
SD7067		古代1期前半	7c中?~後半	6a 古	34666	103	ウシ	歯	M1-M3	右下	F				
SD7067		古代1期前半	7c中?~後半	6a 古	34664	226	ウシ	橈骨		右	C	1			
SD7067		古代1期前半	7c中?~後半	6a 古	34665	172	ウシ	大腿骨		右	F		1 1 1		
SD7067		古代1期前半	7c中?~後半	6a 古	23455	43	ウマ	下顎骨	下顎枝	左	F				
SD7067		古代1期前半	7c中?~後半	6a 古	23456	9	ウマ	歯	I1	左上	F				
SD7067		古代1期前半	7c中?~後半	6a 古	23453	9	ウマ	歯	I2	右上	F				
SD7067	土器一括	古代1期前半	7c中?~後半	6a 古	23458	22	ウマ	歯	M2	左上	F				
SD7067	骨一括-1	古代1期前半	7c中?~後半	6a 古	32639	26	ウマ	歯	M1	右下	F				
SD7067	土器一括	古代1期前半	7c中?~後半	6a 古	32639	39	ウマ	歯	P4	左下	F				
SD7067	土器一括	古代1期前半	7c中?~後半	6a 古	23457	40	ウマ	歯	P4	右下	F				
SD7067		古代1期前半	7c中?~後半	6a 古	23454	52	ウマ	歯	M2	右上	F				
SD7067		古代1期前半	7c中?~後半	6a 古	36713	344	ウマ	脛骨		右	F		1 1 1 1		
SD7067		古代1期前半	7c中?~後半	6a 古	19376	258	ウマ	中足骨		左	C	1			
SD7068	骨一括	古墳		6a 古	25497	3	ウマ	手根骨	第3手根骨	左	C	1			
SD8004		古代8期前半	9c後半	6b 古	16310	8	ウシ	歯							
SD8004		古代8期前半	9c後半	6b 古	02022	10	ウシ	歯	下顎歯片						
SD8004		古代8期前半	9c後半	6b 古	02023	13	ウシ	歯	M3	右下	F				
SD8004		古代8期前半	9c後半	6b 古	16311	15	ウシ	歯							
SD8004		古代8期前半	9c後半	6b 古	02022	21	ウシ	歯	M3	右下	F				
SD8004		古代8期前半	9c後半	6b 古	16310	94	ウシ	歯	P4	右上	F			土含み	
SD8004		古代8期前半	9c後半	6b 古	16311	146	ウシ	歯	M2-M3	左上	F			土含み	
SD8004		古代8期前半	9c後半	6b 古	16310	162	ウシ	歯	M2-M3	右上	F			土含み	
SD8004		古代8期前半	9c後半	6b 古	01007	3	ウマ	歯							
SD8004		古代8期前半	9c後半	6b 古	16312	34	ウマ	中手骨+第4中手骨		左	F		1 1		
SD8020		古代6期前後	9c前半前後	6b 古	02034	27	ウマ	歯							
SD8021		古代4期?~7期	8c後半?~9c中頃	6b 古	28557	1	ウシ	歯							
SD8021		古代4期?~7期	8c後半?~9c中頃	6b 古	22440	3	ウマ	歯	I2	右上	F				
SD8021		古代4期?~7期	8c後半?~9c中頃	6b 古	18360	3	ウマ	歯							
SD8021		古代4期?~7期	8c後半?~9c中頃	6b 古	02033	4	ウマ	歯	I3	左上	F				
SD8021		古代4期?~7期	8c後半?~9c中頃	6b 古	27532	11	ウマ	歯	大白歯	右下	F				
SD8021		古代4期?~7期	8c後半?~9c中頃	6b 古	02029	19	ウマ	歯	M3	左下	F				
SD8021		古代4期?~7期	8c後半?~9c中頃	6b 古	02031	19	ウマ	歯							

表73-(14) 屋代遺跡群出土脊椎動物骨 遺構別一覧

出土遺構 グリッド ド基本 層位	出土場所	土器編年	年代	台帳番号		重量 (g)	種名	骨名	部位	左右	上下	状態 1 2	c	p	h	d	h	p	e	p	s	d	s	d	e	備考	
				地区 番号	時代 番号																						
SD8032	44層	古代1期後半	7c末?~8c初頭?	6b古	21418	7	ウマ	橈骨				F															
SD8032	44層	古代1期後半	7c末?~8c初頭?	6b古	21417	245	ウマ	橈骨		右		C	1														
SD8032	44層	古代1期後半	7c末?~8c初頭?	6b古	21415	269	ウマ	橈尺骨	橈骨後面のみ	左		F															
SD8032	I-23 44層	古代1期後半	7c末?~8c初頭?	6b古	21418	11	ウマ	手根骨	第3手根骨	左		F															
SD8032	44層	古代1期後半	7c末?~8c初頭?	6b古	22428	138	ウマ	中手骨		右		F															
SD8032	44層	古代1期後半	7c末?~8c初頭?	6b古	22428	5	ウマ	中手骨又は中足骨	第3か第4中手骨か中足骨			F															33656
SD8032	44層	古代1期後半	7c末?~8c初頭?	6b古	22428	6	ウマ	中手骨又は中足骨	第3か第4中手骨か中足骨			F															33656
SD8032	44層	古代1期後半	7c末?~8c初頭?	6b古	21418	14	ウマ	指骨	基節骨(前肢か後肢)			F															
SD8032	N-3 44層	古代1期後半	7c末?~8c初頭?	6b古	22423	14	ウマ	指骨	末節骨(前肢か後肢)			F															
SD8032	I-23 44層	古代1期後半	7c末?~8c初頭?	6b古	21418	22	ウマ	指骨	中節骨(前肢か後肢)			F															
SD8032	44層	古代1期後半	7c末?~8c初頭?	6b古	24462	30	ウマ	指骨	末節骨(前肢か後肢)			C															
SD8032	I-23 44層	古代1期後半	7c末?~8c初頭?	6b古	21418	41	ウマ	指骨	後肢基節骨			C															
SD8032	44層	古代1期後半	7c末?~8c初頭?	6b古	21416	119	ウマ	大腿骨	前面欠	右		F															
SD8032	N3 44層	古代1期後半	7c末?~8c初頭?	6b古	24462	160	ウマ	大腿骨		左		F															
SD8032	44層	古代1期後半	7c末?~8c初頭?	6b古	22424	294	ウマ	大腿骨		右		F															
SD8032	39層	古代1期後半	7c末?~8c初頭?	6b古	21414	12	ウマ	脛骨	外側端	左		F															
SD8032	44層	古代1期後半	7c末?~8c初頭?	6b古	22468	282	ウマ	脛骨		右		F															
SD8032	44層	古代1期後半	7c末?~8c初頭?	6b古	21419	310	ウマ	脛骨		左		F															
SD8032	N-3 44層	古代1期後半	7c末?~8c初頭?	6b古	24462	36	ウマ	足根骨	踵骨	右		F															
SD8032	I-23 44層	古代1期後半	7c末?~8c初頭?	6b古	24463	54	ウマ	足根骨	距骨	右		C															
SD8032	44層	古代1期後半	7c末?~8c初頭?	6b古	22427	168	ウマ	中足骨		右		C															
SD8032	39層	古代1期後半	7c末?~8c初頭?	6b古	22421	196	ウマ	中足骨		左		C															
SD8032	35層、一括4	古代1期後半	7c末?~8c初頭?	6b古	27524	11	ウマ	手根骨	第3手根骨	左		C															
SD8032	35層、一括6	古代1期後半	7c末?~8c初頭?	6b古	27524	11	ウマ	手根骨	橈側手根骨	左		C															
SD8032	35層、一括2	古代1期後半	7c末?~8c初頭?	6b古	27524	37	ウマ	指骨	後肢基節骨	左		C															
SD8032	35層、一括3	古代1期後半	7c末?~8c初頭?	6b古	27524	35	ウマ	足根骨	踵骨	左		F															
SD8032	35層	古代1期後半	7c末?~8c初頭?	6b古	27524	50	ウマ	足根骨	踵骨	左		C															
SD8032	35層、一括5	古代1期後半	7c末?~8c初頭?	6b古	27524	11	ウマ	足根骨	中心足根骨	左		C															
SD8032	第2モミガラ層	古代1期末~2期初頭	7c末?~8c初頭	6b古	25487	84	ウマ	肩甲骨		左		F															
SD8032	第2モミガラ層	古代1期末~2期初頭	7c末?~8c初頭	6b古	25486	7	ウマ	手根骨	第4手根骨	右		C															
SD8032	第2モミガラ層	古代1期末~2期初頭	7c末?~8c初頭	6b古	25486	89	ウマ	大腿骨		右		F															
SD8032	第2モミガラ層	古代1期末~2期初頭	7c末?~8c初頭	6b古	25488	274	ウマ	脛骨		右		F															
SD8032	第2モミガラ層	古代1期末~2期初頭	7c末?~8c初頭	6b古	33641	35	ウマ	足根骨	踵骨	左		F															
SD8032	第2モミガラ層	古代1期末~2期初頭	7c末?~8c初頭	6b古	32640	46	ウマ	足根骨	踵骨	左		C															
SD8032	第4モミガラ層	古代1期末~2期初頭	7c末?~8c初頭	6b古	19365	48	ウマ	足根骨	踵骨	右		F															
SD8032	第2モミガラ層	古代1期末~2期初頭	7c末?~8c初頭	6b古	25486	55	ウマ	足根骨	踵骨	右		C															
SD8032	第2モミガラ層	古代1期末~2期初頭	7c末?~8c初頭	6b古	25489	6	ウマ	足根骨	中心足根骨	左		F															
SD8032	第2モミガラ層	古代1期末~2期初頭	7c末?~8c初頭	6b古	25489	108	ウマ	中足骨		左		F															
SD8032	第2モミガラ層	古代1期末~2期初頭	7c末?~8c初頭	6b古	25485	172	ウマ	中足骨		右		C															
SD8032		古代1期?		6b古	33660	97	ウマ	上顎骨		右		F															
SD8032		古代1期?		6b古	25490	41	ウマ	上腕骨		右		F															
SD8032		古代1期?		6b古	14279	116	ウマ	上腕骨		右		F															
SD8032		古代1期?		6b古	14272	416	ウマ	上腕骨		左		F															
SD8032		古代1期?		6b古	14268	129	ウマ	橈尺骨		右		F															
SD8032		古代1期?		6b古	32636	112	ウマ	中手骨		右		C															
SD8032		古代1期?		6b古	32638	230	ウマ	脛骨		右		C															
SD8032	最下層、骨一括1	古代1期後半	7c末?~8c初頭	6b古	30583	7	ニホンジカ	歯	大白歯	左上		F															
SD8032	最下層、骨一括2	古代1期後半	7c末?~8c初頭	6b古	30583	4	ニホンジカ	指骨	基節骨			F															
SD8032	最下層湧水坑2、一括2	古代1期後半	7c末?~8c初頭	6b古	31614	18	ニホンジカ	足根骨	距骨	右		C															
SD8032	14層	古代1期末~2期初頭	7c末?~8c初頭	6b古	25000	3	ニホンジカ	指骨	基節骨			F															

表73-(15) 屋代遺跡群出土脊椎動物骨 遺構別一覧

出土遺構 の 基本 層位	出土場所	土器編年	年代	台帳番号		重量 (g)	種名	骨名	部位	左右 上下 状態 1 2	c p h d h p e p s s d e	備考
				地区 番号	台帳 番号							
SD8032	M5?M6	古代1期後半	7c末?~8c初頭	6b 古	36718	10	ニホンジカ	足根骨	距骨	左 C	1	
SD8032		古代1期?		6b 古	27535	8	ニホンジカ	頭蓋骨	角片	右 F		焼骨
SD8032	骨一括-1	古代1期後半		6b 古	25499	13	ニホンジカ	上腕骨		右 F	1	焼骨
SD8032 (SD8038)		古代1期後半	7c末?~8c初頭	6b 古	27528	146	ウシ	大腿骨		左 F		1 1 1
SD8034			8c?	6b 古	14264	43	ウシ	頭蓋骨?	頭蓋骨片?	右 F		
SD8034			8c?	6b 古	14265	5	ウシ	歯	切歯	下 F		I2?
SD8034			8c?	6b 古	16319	8	ウシ	歯	P4	左上 F		
SD8034			8c?	6b 古	16318	11	ウシ	歯	M1	左上 F		
SD8034			8c?	6b 古	16318	14	ウシ	歯	M1?	右上 F		
SD8034			8c?	6b 古	14265	14	ウシ	歯	M3?	左上 F		
SD8034			8c?	6b 古	16318	27	ウシ	歯	M2?	左上 F		
SD8034			8c?	6b 古	17323	32	ウシ	中手骨		不明 F		
SD8034			8c?	6b 古	13260	150	ウシ	脛骨		左 F		1 1 1
SD8034			8c?	6b 古	16320	19	ウシ	足根骨	距骨	右		
SD8034			8c?	6b 古	32633	37	ウシ	足根骨	距骨	右 C		解体痕あり
SD8034			8c?	6b 古	16320	45	ウマ	肩甲骨		右 F	1	
SD8034			8c?	6b 古	14262	177	ウマ	橈尺骨		右 F		1 1 1
SD8034			8c?	6b 古	31608	140	ウマ	中足骨		左 F	1	
SD8035		古代2期	8c前半	6b 古	06105	25	ウシ	歯	M3	右上 F		
SD8035		古代2期	8c前半	6b 古	16039	17	ウマ	歯	M3	左下 F		
SD8035		古代2期	8c前半	6b 古	16039	20	ウマ	歯	M1	下 F		
SD8035		古代2期	8c前半	6b 古	16039	30	ウマ	歯	臼歯	右下 F		
SD8035		古代2期	8c前半	6b 古	06104	35	ウマ	歯	I2	右下 F		
SD8035		古代2期	8c前半	6b 古	16039	39	ウマ	歯	大白歯	右下 F		
SD8038	2層(粘土性中)、一括2	古代1期末?~2期初頭	7c末?~8c初頭	6b 古	18353	228	ウシ	大腿骨		右 F		1
SD8038?S D8040		古代1期末?~2期初頭	7c末?~8c初頭	6b 古	38752	15	ウシ	足根骨	第2, 第3足根骨	左 C	1	
SD8039	(歯)一括-1	古代1期	7c末	6b 古	17333	1	イヌ	歯	P4	左下 F		
SD8039		古代1期	7c末	6b 古	25496	11	イノシシ(ブタ)	椎骨		右 F		
SD8039		古代1期	7c末	6b 古	20385	52	ウシ	肩甲骨	下縁	左 F		
SD8039		古代1期	7c末	6b 古	23451	18	ウシ	指骨	中節骨	右 C	1	骨髄食痕
SD8039		古代1期	7c末	6b 古	23451	30	ウシ	指骨	基節骨	右 C	1	
SD8039		古代1期	7c末	6b 古	25496	186	ウシ	寛骨		左 F		
SD8039		古代1期	7c末	6b 古	27523	17	ウシ	脛骨		右 F		1 若年
SD8039		古代1期	7c末	6b 古	23452	92	ウシ	足根骨	踵骨	左 C	1	
SD8039		古代1期	7c末	6b 古	23453	104	ウシ	足根骨	踵骨	左 C	1	
SD8039		古代1期	7c末	6b 古	23454	12	ウシ	足根骨	第2+第3足根骨	左 C	1	
SD8039		古代1期	7c末	6b 古	23454	56	ウシ	足根骨	C+第4足根骨	左 C	1	
SD8039		古代1期	7c末	6b 古	20386	38	ウマ	下顎骨	体部	右 F		
SD8039		古代1期	7c末	6b 古	20386	52	ウマ	下顎骨	下顎角部	右 F		
SD8039		古代1期	7c末	6b 古	32627	60	ウマ	下顎骨+歯	P2部分下顎体+P2	右下 F		
SD8039		古代1期	7c末	6b 古	20386	360	ウマ	下顎骨(片)		右 F		
SD8039		古代1期	7c末	6b 古	20386	4	ウマ	歯	I2	左下 F		
SD8039		古代1期	7c末	6b 古	32627	4	ウマ	歯	I3	左上 F		
SD8039		古代1期	7c末	6b 古	20386	8	ウマ	歯	I1	左下 F		
SD8039		古代1期	7c末	6b 古	19364	384	ウマ	大腿骨		右 F		1 1 1 1
SD8040		古代1期末~2期初頭	7c末?~8c初頭	6b 古	37739	12	ウシ	手根骨	尺側手根骨	左 C	1	
SD8040		古代1期末~2期初頭	7c末?~8c初頭	6b 古	24478	14	ウシ	手根骨	第4手根骨	右 F		
SD8040		古代1期末~2期初頭	7c末?~8c初頭	6b 古	19373	42	ウシ	足根骨	距骨	右 F		
SD8040		古代1期末~2期初頭	7c末?~8c初頭	6b 古	19376	91	ウシ	中足骨		左 F		1 1 1 1 若い個体
SD8040		古代1期末~2期初頭	7c末?~8c初頭	6b 古	19371	32	ウマ	椎骨	環椎(右側)	右 F		
SD8040		古代1期末~2期初頭	7c末?~8c初頭	6b 古	18341	98	ウマ	上腕骨		左 F		1 1
SD8040		古代1期末~2期初頭	7c末?~8c初頭	6b 古	18341	122	ウマ	上腕骨		左 F		1 1 1
SD8040		古代1期末~2期初頭	7c末?~8c初頭	6b 古	19367	118	ウマ	橈尺骨		右 F	1	1 1 1 1
SD8040		古代1期末~2期初頭	7c末?~8c初頭	6b 古	18349	234	ウマ	橈骨		右 F	1	
SD8040		古代1期末~2期初頭	7c末?~8c初頭	6b 古	19372	29	ウマ	大腿骨		右 F		1
SD8040		古代1期末~2期初頭	7c末?~8c初頭	6b 古	36717	170	ウマ	中足骨		右 F		1 1 1 1
SD8040		古代1期末~2期初頭	7c末?~8c初頭	6b 古	19368	12	ニホンジカ	足根骨	踵骨	右 F		1 解体痕あり
SD8041		古代1期	7c初頭?~後半	6b 古	26502	6	イヌ	椎骨		右 F		
SD8041		古代1期	7c初頭?~後半	6b 古	29562	55	ウシ	脛骨		左 F		1
SD8041	2層	古代1期	7c初頭?~後半	6b 古	18355	887	ウマ	下顎骨		左右 F		
SD8041	2層	古代1期	7c初頭?~後半	6b 古	18355	44	ウマ	歯	切歯I1?I3	左右 C	1	
SD8041		古代1期	7c初頭?~後半	6b 古	25481	65	ウマ	椎骨	環椎	右 C	1	
SD8041	3層	古代1期	7c初頭?~後半	6b 古	28559	43	ウマ	上腕骨		左 F		1

表73-(17) 屋代遺跡群出土脊椎動物骨 遺構別一覽

出土遺構 の 基本 層位	出土場所	土器編年	年代	台帳番号		重量 (g)	種名	骨名	部位	左右 上下 状態 ₁ 状態 ₂	c ph dh pe ps s ds de	備考
				地区 番号	台帳 番号							
		古代1期	7c後半?~末	6b 古	35686	264	ウマ	脛骨		左 F		
		古代1期	7c後半?~末	6b 古	26516	340	ウマ	脛骨		右 C	1	
		古代1期	7c後半?~末	6b 古	35688	39	ウマ	足根骨	踵骨	左 F	1	
	一括	古代1期	7c後半?~末	6b 古	27540	39	ウマ	足根骨	距骨	F		1
		古代1期	7c後半?~末	6b 古	35687	46	ウマ	足根骨	距骨	右 F		1
		古代1期	7c後半?~末	6b 古	24471	160	ウマ	中足骨		右 F		1 1 1 1
		古代1期	7c後半?~末	6b 古	24461	182	ウマ	中足骨		F		1 1 1 1
		古墳8期新相	7c初頭	6b 古	38748	4	ウシ	歯	I2	左下 F		(SD8032側から流れ)
		古墳8期新相	7c初頭	6b 古	38748	8	ウシ	歯	I3	左下 F		
		古墳8期新相	7c初頭	6b 古	20382	1020	ウマ	上顎骨+歯	右P2-M3, 左P3+M3	F		
		古墳8期新相	7c初頭	6b 古	28546	20	ウマ	歯	M2	右上 F		SD8032側から流れ
		古代1期前半	7c中?~後半	6b 古	21403	29	イヌ	下顎骨+歯	M2	右下 F		
		古代1期前半	7c中?~後半	6b 古	21412	35	ウシ	肋骨		F		
		古代1期前半	7c中?~後半	6b 古	21407	68	ウシ	肩甲骨	下縁	左 F		
		古代1期前半	7c中?~後半	6b 古	21406	100	ウシ	上腕骨		左 F		1
		古代1期前半	7c中?~後半	6b 古	21408	148	ウシ	上腕骨		左 F		1
		古代1期前半	7c中?~後半	6b 古	32639	310	ウシ	上腕骨		右 F	1	
		古代1期前半	7c中?~後半	6b 古	22431	244	ウシ	橈骨		右 C	1	
		古代1期前半	7c中?~後半	6b 古	22429	351	ウマ	下顎骨+歯	P4-M3	左下 F		
		古代1期前半	7c中?~後半	6b 古	20391	512	ウマ	下顎骨+歯	P2-M2	右下 F		
		古代1期前半	7c中?~後半	6b 古	33649	525	ウマ	下顎骨+歯	P3-M3	左下 F		
		古代1期前半	7c中?~後半	6b 古	20390	5	ウマ	歯	I1	右下 F		
		古代1期前半	7c中?~後半	6b 古	20393	6	ウマ	歯	I1	左下 F		
		古代1期前半	7c中?~後半	6b 古	20390	8	ウマ	歯	I1	左下 F		1 1 1 1
		古代1期前半	7c中?~後半	6b 古	20393	9	ウマ	歯	I2	左下 F		
		古代1期前半	7c中?~後半	6b 古	21408	23	ウマ	椎骨	軸椎	F		
		古代1期前半	7c中?~後半	6b 古	21409	178	ウマ	肩甲骨		右 F	1	
		古代1期前半	7c中?~後半	6b 古	22437	232	ウマ	橈尺骨		右 F		1 1 1 1
		古代1期前半	7c中?~後半	6b 古	21411	29	ウマ	尺骨		右 F		1
		古代1期前半	7c中?~後半	6b 古	20388	26	ウマ	指骨	基節骨(前肢か後肢)	F		1 1 1 1
		古代1期前半	7c中?~後半	6b 古	23446	31	ウマ	指骨	中節骨(前肢か後肢)	F		1 1 1 1
		古代1期前半	7c中?~後半	6b 古	30600	42	ウマ	指骨	基節骨(前肢か後肢)	F		
		古代1期前半	7c中?~後半	6b 古	24464	68	ウマ	指骨	基節骨(前肢か後肢)	C	1	
		古代1期前半	7c中?~後半	6b 古	30598	39	ウマ	寛骨	恥骨部	右 F		
		古代1期前半	7c中?~後半	6b 古	21401	80	ウマ	寛骨	寛骨臼部+坐骨	左 F		
		古代1期前半	7c中?~後半	6b 古	21413	81	ウマ	寛骨	腸骨	右 F		
		古代1期前半	7c中?~後半	6b 古	22438	144	ウマ	寛骨		右 F		
		古代1期前半	7c中?~後半	6b 古	22438	192	ウマ	寛骨		右 F		
		古代1期前半	7c中?~後半	6b 古	22430	246	ウマ	大腿骨		右 F		1 1 1 1
		古代1期前半	7c中?~後半	6b 古	31602	154	ウマ	脛骨		右 F		1 1 1
		古代1期前半	7c中?~後半	6b 古	23460	204	ウマ	脛骨		左 F		1 1 1
		古代1期前半	7c中?~後半	6b 古	21410	322	ウマ	脛骨		右 F		1 1 1 1
		古代1期前半	7c中?~後半	6b 古	20389	364	ウマ	脛骨		右 C	1	
		古代1期前半	7c中?~後半	6b 古	23092	441	ウマ	脛骨		左 F		1 1 1 1
		古代1期前半	7c中?~後半	6b 古	20388	40	ウマ	足根骨	踵骨	F		1
		古代1期前半	7c中?~後半	6b 古	22432	18	ウマ	中足骨		左 F		1 1
		古代1期前半	7c中?~後半	6b 古	31601	130	ウマ	中足骨		右 C	1	前面なし
		古代1期前半	7c中?~後半	6b 古	30593	192	ウマ	中足骨		左 C	1	de一部欠け
		古代1期前半	7c中?~後半	6b 古	21401	20	ニホンジカ	橈骨		左 F		1 1
		古代1期前半	7c中?~後半	6b 古	21404	18	ニホンジカ	足根骨	踵骨	左 F		1
				4 古	06102	6	ウマ	歯	M2	左上 F		
				4 古	06102	7	ウマ	歯	M1	左上 F		
				4 古	06102	8	ウマ	歯	M3	左上 F		
				4 古	06102	18	ウマ	歯				
	古代面検出中	古代6期?~7期	9c前半?~中	4 古	02038	2	ニホンジカ	歯				
		古代7期?~8期前半	9c中?~後半	1 古	02039	40	ウマ	歯	上顎歯	上 F		
		古代4期?~5期	8c後半?~9c初頭	5b 古	46101	1	ヒト	歯	小白歯	F		
			9c?	5b 古	21517	2	ウシ	歯		F		
	覆土			5a 古	01002	5	イノシシ(ブク)	歯	M1	左上 F		
				5a 古	02036	63	ニホンジカ	中足骨		右 C	1	
			9c	6b 古	01018	9	ウマ	歯		F		
		古代8期前半	9c後半	3 古	01019	28	ウマ	歯				
		古代8期前半	9c後半	3 古	01001	1	ウマ	歯				
	第3検出面	古代8期前半	9c後半	3 古	01006	18	ウマ	歯				
	第3検出面	古代8期前半	9c後半	3 古	01010	3	ウマ	歯				
	第3検出面	古代8期前半	9c後半	3 古	01007	22	ウマ	歯				
	第3検出面	古代8期前半	9c後半	3 古	01011	7	ウマ	歯				
	第3検出面	古代8期前半	9c後半	3 古	02021	12	ウマ	歯				
	第3検出面	古代8期前半	9c後半	3 古	01002	6	ウマ	歯		F		
	第3検出面	古代8期前半	9c後半	3 古	03056	9	ウマ	歯				
	第3検出面	古代8期前半	9c後半	3 古	01014	55	ウマ	歯				

表73-(18) 屋代遺跡群出土脊椎動物骨 遺構別一覧

出土遺構 ド、基本 層位	出土場所	土器編年	年代	台帳番号		重量 (g)	種名	骨名	部位	左右	上下	状態 1 2	c ph dh pe ps s ds de	備考	
				地区 番号	台帳 番号										
SX3013	第3検出面	古代8期前半	9c後半	3	古 01014	107	ウマ	歯	下顎歯片						
SX3015	第3-2検出面	古代8期前半	9c後半	3	古 01012	69	ウマ	歯							
SX3018	第3-2検出面	古代8期前半	9c後半	3	古 01003	11	ウマ	歯							
SX3018		古代8期前半	9c後半	3	古 01020	21	ウマ	歯							
SX7033				6a	古 32627	206	ウシ	中手骨							
SX7036		古代1期前半	7c中?~後半	6a	古 14272	238	ウシ	下顎骨	歯槽部+下顎 枝	右	C	1			
SX7036		古代1期前半	7c中?~後半	6a	古 14272	11	ウシ	歯	P3	右	F				
SX7036		古代1期前半	7c中?~後半	6a	古 14272	18	ウシ	歯	M1	右	F				
SX7036	骨一括(土器集 中-3)	古代1期前半	7c中?~後半	6a	古 21407	18	ウシ	歯	M1	左	F				
SX7036		古代1期前半	7c中?~後半	6a	古 14272	53	ウシ	歯	M3	右	F				
SX7036	土器集中-3	古代1期前半	7c中?~後半	6a	古 18350	206	ウシ	中足骨		左	C	1			
SX7036		古代1期前半	7c中?~後半	6a	古 21405	3	ウマ	歯	I2	左	F				
SX7036		古代1期前半	7c中?~後半	6a	古 14272	4	ウマ	歯	I1	右	F				
SX7037		古代1期後半	7c末	6a	古 37732	57	イノシシ(ブタ)	下顎骨+歯	C+M2	右	F				
SX7037		古代1期後半	7c末	6a	古 33647	140	ウマ	中足骨+第 4中足骨		左	F		1 1 1 1		
SX7037		古代1期後半	7c末	6a	古 17326	55	ウマ	上腕骨		左	F		1 1	つぶれている	
SX7037		古代1期後半	7c末	6a	古 33647	151	ウマ	橈骨		左	F		1	破片多数	
SX7037		古代1期後半	7c末	6a	古 17327	7	ウマ	指骨	末節骨 (前肢か後肢)		F				
SX7037		古代1期後半	7c末	6a	古 33647	23	ウマ	指骨	基節骨 (前肢か後肢)		F				
SX7037		古代1期後半	7c末	6a	古 33647	111	ウマ	足根骨	踵骨+距骨+C III	左	F				
セクション ヘルト 分層				6a	古 19363	43	ウマ	指骨	基節骨 (前肢か後肢)		C	1			
第2水田 対応層		古代6期?~7期	9c前半?~中	6a	古 06115	15	ウシ	歯	M2	右	F				
第2水田 対応層		古代6期?~7期	9c前半?~中	6a	古 06115	16	ウシ	歯	M2	左	F				
第2水田 対応層		古代6期?~7期	9c前半?~中	6a	古 06115	22	ウシ	歯	M2	左	F				
第2水田 対応層		古代6期?~7期	9c前半?~中	6a	古 06115	26	ウシ	歯	M3	左	F				
第2水田 対応層		古代6期?~7期	9c前半?~中	6a	古 09175	272	ウシ	下顎骨+歯	P2-M3	右	F				
第2水田 対応層		古代6期?~7期	9c前半?~中	6a	古 09175	1	ウシ	歯	I1	左	F				
第2水田 対応層		古代6期?~7期	9c前半?~中	6a	古 09175	1	ウシ	歯	I2	右	F				
第4水田 対応層		古代1期末?~2 期	7c末?~8c初 頭	6a	古 11208	298	ウシ	下顎骨+歯	P4-M3	左	F				
第4水田 対応層		古代1期末?~2 期	7c末?~8c初 頭	6a	古 27539	18	ウシ	歯	M3	右	F				15290
第4水田 対応層		古代1期末?~2 期	7c末?~8c初 頭	6a	古 13244	172	ウシ	上腕骨		右	F		1 1 1 1		
第4水田 対応層		古代1期末?~2 期	7c末?~8c初 頭	6a	古 10193	272	ウシ	橈骨		右	C	1			
第4水田 対応層		古代1期末?~2 期	7c末?~8c初 頭	6a	古 13243	80	ウシ	中手骨		右	F		1 1 1		
第4水田 対応層		古代1期末?~2 期	7c末?~8c初 頭	6a	古 10194	122	ウシ	中足骨		右	F		1 1 1		
第4水田 対応層	骨一括	古代1期末?~2 期	7c末?~8c初 頭	6a	古 13245	56	ウシ	膝蓋骨		左	C	1			
第4水田 対応層	骨一括	古代1期末?~2 期	7c末?~8c初 頭	6a	古 11209	46	ウマ	歯	P4	左	F				
第4水田 対応層		古代1期末?~2 期	7c末?~8c初 頭	6a	古 09167	33	ウマ	尺骨	滑車部	右	F		1		
第4水田 対応層	トレンチ、土器 一括	古代1期末?~2 期	7c末?~8c初 頭	6a	古 24462	44	ウマ	指骨	基節骨 (前肢か後肢)		C	1			
第4水田 対応層		古代1期末?~2 期	7c末?~8c初 頭	6a	古 37735	174	ウマ	脛骨		左	F		1 1 1		
第4水田 対応層		古代1期末?~2 期	7c末?~8c初 頭	6a	古 15283	27	ウマ	椎骨	軸椎歯突起部	左 右	F				解体痕あり
第5水田 対応層		古代1期後半	7c末	6a	古 15289	20	ウシ	歯	M2	右	F				
第5水田 対応層		古代1期後半	7c後半?~末	6a	古 14261	480	ウマ	大腿骨		右	F		1 1 1 1		
第5水田 対応層		古代1期後半	7c後半?~末	6a	古 29572	21	ニホンジカ	橈骨		右	F		1		
南北畦畔	北側、軽石を含 む層直下の層			6a	古 06114	74	ウマ	肩甲骨	下縁	左	F		1 1 1		
南北畦畔	北側、軽石を含 む層直下の層			6a	古 06114	78	ウマ	肩甲骨		左	F		1 1		
南北畦畔	北側、軽石を含 む層直下の層			6a	古 06112	207	ウマ	上腕骨		左	F		1 1 1		
南北畦畔	北側、軽石を含 む層直下の層			6a	古 06111	164	ウマ	中手骨+第 2中手		右	F		1 1 1 1		
南北畦畔	北側、軽石を含 む層直下の層			6a	古 06114	212	ウマ	大腿骨		右	F		1 1		
南北畦畔	北側、軽石を含 む層直下の層			6a	古 06113	236	ウマ	中足骨		左	C	1			
不明	溝南斜面砂層上			6	古 17331	28	ウマ	歯	小白歯	左	F				
不明	平安1 水田面		8期前半	6	古 02021	31	ウマ	歯	P3	左	F				

第7章 手工業生産物に関する成分分析

第1節 IV・V層出土の手工業生産物を対象とした成分分析

7世紀前半～9世紀後半にかけては在地における各種物品の生産性が向上する時期にあたる。『古代1編』では、原材料や製品の搬入経路、あるいは在地での生産技術などをかいま見するため、IV・V層から出土した手工業生産物を対象に成分分析を行った。

分析のねらい 屋代遺跡群⑥区からは7世紀後半～8世紀前半の木簡が出土しており、その内容から郡家や初期国府が近隣に存在した可能性が示された(長野県埋蔵文化センター1996)。郡家を中心とした地域では、一般集落と異なった製品が集中的に生産されていた可能性がある。本章での分析対象にはなっていないが、布の織手を列記した木簡(59号木簡)などの事例は、郡家周辺で集中的な布生産が行われていた可能性を示唆している。また、搬入品の中にも特異なものが含まれている可能性がある。

分析の方法と対象 第1節では、鉄・銅といった金属製品や鍛冶関連遺物を対象に化学分析、蛍光X線分析などを実施した。鍛冶関連遺物は、古代1期前後から8期前半のほとんどの時期で確認されており、1～2期の例は郡家や初期国府?との関係で注目される。また、8期頃には官衙施設周辺のみならず、各集落内に鍛冶遺物が存在しており、鉄製品の普及との関係で注目される。

第2節では、屋代遺跡群⑤区で出土したガラスの付着していたガラス玉鑄型を対象として、ガラスの蛍光X線分析を行った。また、第3節では、漆および赤色顔料に対し、光学顕微鏡による観察や蛍光X線分析を行った。ガラス玉の生産や漆の存在は、一般集落とは異なる屋代遺跡群のあり方を示していよう。

さらに、屋代遺跡群域へ持ち込まれた須恵器の産地を推定するため、X線回折試験と化学分析を依頼した。この結果については、肉眼観察による分類とあわせて第8章第1節2(6)Dに掲載した。

各分析を依頼した先と文責は各項に記した。

また、鍛冶関連遺物や土器胎土分析、漆および赤色顔料については、『古代1編』以外の時代も対象に分析を実施している。それらの結果は各分冊に掲載するとともに、『総論編』で総括を行う予定である。

参考文献

長野県埋蔵文化財センター 1996 『長野県屋代遺跡群出土木簡』

第2節 金属製品成分分析

1 更埴条里遺跡・屋代遺跡群出土 鉄製品・鉄滓・羽口等の分析・調査

川崎テクノリサーチ株式会社 分析・評価センター

埋蔵文化財調査研究室 岡原 正明

伊藤 俊治

はじめに

更埴条里遺跡および屋代遺跡群より出土した鉄滓、鉄塊、鉄製品および羽口について、学術的な記録と今後の調査のための一環として化学成分分析を含む自然科学的観点での調査のご依頼がありました。

調査の観点として、鉄滓については、

①製鉄原料の推定、②製鉄工程上の位置付け、③観察上の特記事項など、

鉄塊と鉄製品については、

①残存金属の確認、②金属鉄成分の分析、③加工状況や観察上の特記事項など、

また、羽口については、

①耐火度、②胎土成分、③観察上の特記事項など、を中心に調査しました。

その結果についてご報告いたします。

(1) 調査項目および試験・検査方法

A. 調査項目

表75に分析対象とした資料とその分析項目を記載した。

B. 重量計測と磁着度調査

計重は天秤を使用して行い、小数点1位で四捨五入してあります。また磁着度調査については、直径30mm・1300ガウス(0.13テスラ)のリング状フェライト磁石を使用し、感応検査により、「強・やや強・中・やや弱・弱」の5ランクで調査項目の表または個別調査結果の文中に表示しました。

C. 外観の観察と写真撮影

各種試験用試料を採取する前に、試料の両面をmm単位まであるスケールを同時写し込みで撮影しました。必要に応じ資料の切断箇所や切断面の写真も追加しました。また、試料採取時の特異部分についても撮影を行っております。

D. 化学成分分析

化学成分分析はJISの分析法に準じて行いました。分析方法は分析結果記載の367頁の一覧表と一緒に示してありますので、ご参照下さい。この調査は、化学成分から鉄を作るために使用した原料の推定と、生産工程のどの部分で発生した鉄滓かの判断用データを得るために行いました。また、羽口に使用されている粘土も特別に選択使用していたのかの判断用に分析しました。鉄塊系遺物や滓に残存している微小な金属部分の分析はEPMAに付属する特性X線分光分析装置(EDX)を用いて行いました。分析項目は、鉄塊や鉄製品18成分、鉄滓や鍛造剥片等は18成分、羽口12成分です。

E. 顕微鏡組織写真

試料の一部を切り出し樹脂に埋め込み、細かい研磨剤などで研磨(鏡面仕上)します。その後、顕微鏡

表75 資料および調査項目一覧表

資料番号	総(分析)番号	構成図番号	資料の性格	遺跡名	仮地区	出土位置	重量(g)	磁着度	外観写真	外観写真	成分分析	組織写真	X線回折	EPMA	X線透過	耐火度
1	95-70	8	鉄塊系遺物	更埴	K	SF901	2.3	中	あり	○断	○EP	○M		○M	○	
2	95-71	1	含鉄鉄滓	更埴	K	SF901	44.1	弱	あり	○	○EP	○M	○	○M		
3	95-72	17	鉄製品(釘)	更埴	K	SF901	6.4	強	あり	○断	○	○M.L.C		○M.L.C	○	
4	95-73	2	椀形鍛冶滓	更埴	K	SF901	51.2	弱	なし	○	○	○	○			
5	95-74	3	椀形鍛冶滓	更埴	K	SF901	195.6	弱	なし	○	○	○	○			
6	95-75	10	羽口	更埴	K	SF901	35.0	弱	-	○	○	○実				○
7	95-76	14	鍛造剥片	更埴	K	SF901	-	中	-	○	○	○				
18	96-06	78	炉内製錬滓	屋代	⑤b	SB5061	166.1	稍弱	なし	○	○	○	○			
19	96-07	83	流出製錬滓	屋代	⑤b	SB5061	140.6	稍弱	なし	○	○	○	○			
20	96-08	102	鍛造剥片	屋代	⑤b	SB5061	5片	中	-	○		○.○実				
21	96-09	103	粒状滓	屋代	⑤b	SB5061	5粒	一部強	-	○		○.○実				
22	96-10	93	含鉄椀形鍛冶滓	屋代	⑤b	SB5061	47.9	稍強	あり	○断	○	○M	○	○M	○	
23	96-11	94	椀形鍛冶滓	屋代	⑤b	SB5061	466.7	稍強	なし	○	○	○	○			
24	96-12	89	椀形鍛冶滓	屋代	⑤b	SB5061	39.4	稍強	なし	○	○	○	○			
25	96-13	90	椀形鍛冶滓	屋代	⑤b	SB5061	237.3	一部強	なし	○	○	○	○			
26	96-14	95	鉄塊系遺物・錆化	屋代	⑤b	SB5061	9.5	稍強	なし	○	○	○	○			○
27	96-15	99	炉壁・二次被熱	屋代	⑤b	SB5061	59.0	弱	-	○	○	○実				○
28	96-16	71	鍛造剥片	屋代	④f	SK4847	5片	強	-	○		○.○実				
29	96-17	72	粒状滓	屋代	④f	SK4847	3粒	強	-	○		○.○実				
30	96-18	61	椀形鍛冶滓	屋代	④f	SK4847	92.8	中(下部弱)	なし	○	○	○	○			
31	96-19	64	鉄塊系遺物	屋代	④f	SK4847	8.1	強	あり	○断	○EP	○M		○M	○	
32	96-20	68	鉄製品(釘?)	屋代	④f	SK4847	13.0	強	あり	○断	○EP	○M		○M.L.C	○	
33	96-21	65	羽口	屋代	④f	SK4847	60.5	先端強	-	○	○	○実				○
34	96-22	18	含鉄椀形鍛冶滓	屋代	①g	SK470	305.0	中	なし	○	○	○	○			
35	96-23	24	羽口	屋代	①g	SK470	14.7	-	-	○	○					○
36	96-24	26	炉壁・二次被熱	屋代	①g	SK470	37.6	-	-	○	○					
37	96-25	28	含鉄椀形鍛冶滓	屋代	①g	SK535	45.9	稍強	なし	○	○	○	○			
38	96-26	31	鉄塊系遺物・錆化	屋代	①g	SK535	44.3	中	なし	○断	○	○	○			○
39	96-27	32	鉄塊系遺物・錆化	屋代	①g	SK535	5.5	強	-	○断	○EP	○M		○	○	
40	96-28	33	羽口	屋代	①g	SK535	4.3	弱	-	○	○					
41	96-29	39	炉壁・二次被熱	屋代	①g	SK538	36.6	稍弱	-	○	○					○
42	96-30	41	炉壁・二次被熱	屋代	①g	SK543	14.1	弱	-	○	○					○
43	96-31	51	鍛造剥片	屋代	①g	SF 8	3片	稍強	-	○		○				
44	96-32	52	粒状滓	屋代	①g	SF 8	4粒	稍強	-	○		○				
45	96-33	43	椀形鍛冶滓	屋代	①g	SF 8	36.6	稍弱	-	○	○	○	○			
46	96-34	50	炉壁・二次被熱	屋代	①g	SF 8	79.6	弱	-	○	○					○
47	96-35	55	鉄塊系遺物	屋代	①g	SF 12	3.8	強	あり	○断		○M		○M	○	
48	96-36	56	粘土溶解・鍛冶滓	屋代	①g	SF 12	8.5	弱	-	○	○					
49	96-37	57	炉壁	屋代	①g	SF 12	38.0	稍弱	-	○	○					

(「構成図番号」等、一部埋文センターで付け加えた。資料8~17、50以降は来年度刊行の『古代2 中・近世編』に掲載する。)

註：1. 分析番号、遺跡名、出土位置および資料の性格は貴センターの記録によりました。

2. MC反応とはメタルチェックによる残存金属の反応の強弱を意味します。

3. 外観写真の〔断〕は資料の切断箇所や切断面の写真も追加撮影したものです。

4. 成分分析の〔EP〕はEPMAによる微小金属部分の定量分析を行ったものです。

5. 組織写真の〔実〕は実験顕微鏡による観察、写真撮影を指します。

6. 組織写真やEPMAで〔L〕は資料の長手方向を、〔C〕は断面方向を言います。また、〔M〕は金属部分の観察を指します。

7. 調査項目・その他で〔耐〕は耐火度を示します。

で観察しながら代表的な断面組織を拡大して写真撮影し、溶融状況や介在物(鉱物)の存在状態等から加工状況や材質を判断します。鉄滓の場合にも同様に処理・観察を行い、製鉄・鍛冶過程での状況を明らかにします。原則として100倍と400倍で撮影します。必要に応じ実体顕微鏡による観察も行いました。

F. X線回折測定

試料を粉碎して板状に成形し、X線を照射すると、試料に含まれている化合物の結晶の種類に応じて、それぞれの固有の反射(回折)されたX線が検出されることを利用して、試料中の未知の化合物を観察・同定するものです。多くの種類の結晶についての標準データが整備されており、ほとんどの化合物が同定されます。装置の仕様や測定条件は382頁の表76に示してあります。

G. EPMA(X線マイクロアナライザー)による観察

高速電子線を200μmφ程度に絞って、分析対象試料面に照射し、その微小部に存在する元素から発生する特性X線を測定するもので、金属鉄中の介在物や鉄滓の成分構成を視覚から確認するために、二次元の面分析を行いました。装置の仕様や測定条件は382頁の表76に示してあります。

H. 耐火度試験

製鉄に使用された炉壁や羽口について、どの程度の耐火性のある粘土を使用していたのかを判断するた

めに試験しました。この調査も JIS 規格『耐火れんがの耐火度の試験方法』に準じて実施しました (385頁、表81・82)。

1. X線(放射線)透過試験

X線発生装置を用い最適のX線強度を選択して、写真撮影を行います。同一のX線強度と照射時間の場合には、照射される物質の質量が重い程、また寸法が厚い程X線が吸収され写真上では黒くなり、その反対ではX線が簡単に透過する関係上白く写ります。したがって、凹凸や異種金属が共用されているとか錆で金属部分が薄くなっている場合でも状況が濃淡で判別できます。試験条件は下の表76に示してあります。

(2) 各分析条件および装置一覧

各分析条件と装置は以下の通りです。

表76 各分析条件および装置一覧

F. X線回折測定

①測定装置

理学電気株式会社製ガイガーフレックス (RAD-IIA型)

②測定条件

① 使用X線	Co-K α (波長=1.79021Å)
② K β 線吸収フィルター	Fe
③ 管電圧・管電流	50kV・35mA
④ スキャンング・スピード	2°/min.
⑤ サンプリング・インターバル	0.020°
⑥ D. S. スリット	1°
⑦ R. S. スリット	0.3mm
⑧ S. S. スリット	1°
⑨ 検出器	シンチレーション・カウンター

G. EPMA (X線マイクロアナライザー)

測定条件

測定装置：島津製作所製 EPM-810

i) 加速電圧	20kV
ii) 試料電流	0.02 μ A
iii) EBS像倍率	\times 400
iv) ライン分析速度	μ m/cm
v) ビーム径 (定量時)	約 50 μ m ϕ
vi) 積算時間 (定量時)	10sec

測定結果

別添のEBS像及び、定量分析結果を御参照下さい。

I. X線(放射線)透過試験

①試験装置：(株)理学電気製 RF250EGS-2

②試験条件

①焦点・フィルム間距離	900mm
②電流・電圧	110kvp・5mA
③露出時間	0.2~0.3min
④使用フィルム	フジ #50
⑤現像条件	5分・28°C

(3) 分析結果

分析の結果は表77・79・80に示した通りです。

表77 化学成分分析結果 (EPMA による金属部分の定量分析)

(Wt%)

分析No.	構成図No.	遺物種類 (名称)	出土遺構	C	Si	P	S	Ca	Mg	Al	Ti	V	O	Fe
95-70	8	鉄塊系遺物	SF901	1.36	<0.01	0.18	0.02	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	98.42
95-71	1	含鉄鉄滓	SF901	1.50	<0.01	0.07	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	0.02	<0.01	98.25
96-27	32	鉄塊系遺物 (錆化)	SK535	1.53	<0.01	0.01	0.06	<0.01	0.02	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	98.38
96-19	64	鉄塊系遺物	SK4847	1.65	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	0.02	<0.01	<0.01	<0.01	98.28
96-20	68	鉄製品 (釘?)	SK4847	0.19	<0.01	0.04	<0.01	<0.01	<0.01	0.02	<0.01	<0.01	<0.01	99.64

表78-(1) 調査・考察結果のまとめ

No.	総番号(分析番号) 資料の性格 出土遺構	外観写真	X線透過 写真	化学成分分析 (数値は%)	組織写真	X線回折	EPMA	耐火度試験	その他
1	95-70 鉄塊(製錬)系遺物 SF901	錆化鉄塊、磁 着度中程度	金属鉄残 存	Cの含有量1.36と高い 、Siや他の元素の含有少	C量の多い製錬過程 の溶鉄が比較的ゆっ くり凝固	片状黒鉛多数 、不純物少			製錬原 料は不 明
2	95-71 含鉄製錬鉄滓 SF901	錆化割れ、木 炭痕、土砂付 着、錆化鉄塊 か		Cの含有量1.50と高い 、Siや多元素の含有は少	C量の多い、製錬過 程の溶鉄が凝固した 鉄	Fe304、 α -Fe00H などの不純物が 少ない、介在 物中にはTi、 V存在			鉄源砂 鉄
3	95-72 鉄器(釘) SF901	切断面矩形、 表面は厚い錆 に覆われ、土 砂が付着	中心部に 長く金属 残存	表面の錆部分の金属鉄(M .Fe)含有量は0.45、全 鉄(T.Fe)35.5と低、造 滓成分(SiO ₂ +Al ₂ O ₃ +C aO+MgO)は35.4と高	残存金属の表面はC が多く硬度を増すため 滲炭、中心部はフェリ ト組織で靱性保持か	鍛造(鍛冶)加工の ためかC方向に比 しL方向介在物は2 ~3倍延伸			鉄源鉄 石
4	95-73 製錬滓 SF901	発泡粗鬆、中 央部に大きな 空洞		T.Fe:39.7、FeO:40.8 と少、造滓成分34.8と やや多、TiO ₂ :9.46で 多、Vも0.34存在、Cu: 0.001、結合水(C.W.)は 1.08	短冊状のファイヤイト、 不定多角形のウルト セライトの結晶存在	ファイヤイト、ウルト セライトの強いピークを観 察			鉄源砂 鉄
5	95-74 坩形精錬鍛冶滓 SF901	発泡粗鬆、植 物繊維痕が認 められる、坩 形鍛冶滓の元 形品		T.Fe:48.0、FeO:46.5 とやや多、Fe ₂ O ₃ :16.1 と少、M.Fe:0.61含、造 滓成分31.2と多、TiO ₂ : 2.48、V:0.12、Cu:0.00 3、C.W.:1.38とやや多	短冊状のファイヤイト、 少量のウルトセライトと 酸化鉄結晶存在	ウルトセ、マグ初物の 中程度のピーク、強い ファイヤイトのピーク、 キシ水酸化鉄存在			鉄源砂 鉄
6	95-75 羽口 SF901	先端の熔融鉄 滓附着部に弱 い磁着力		シリカ:66.2とやや多、耐 火度を高めるアルミ:14.7 とやや少、耐火度を低下 させる塩基性成分やや多	白色石英様の小礫を 強度向上のため混合			耐火度:1, 080℃、通 常の粘土を 使用	
7	95-76 鍛造剥片 SF901	表面平坦、光 沢乏しい黒色 小片、磁着度 中程度		資料量少なく分析不能	断面の厚さ0.4~0.8 mm、内部は全体灰白 色繭状のウルトセ ライトで構成、典型的 鍛造剥片の組織				
18	96-06 製錬滓 SB5061	3方に割り欠 き面、黒色発 泡、重量感、 磁着度弱		T.Fe:39.7、FeO:43.6、 Fe ₂ O ₃ :7.83と少、造滓 成分:31.6と非常に多、 TiO ₂ :14.1、Vも0.37、C u:0.001で非常に少、C. W.:0.53と少	一面に灰白色マグ初 物、多角形状のウルト セライト結晶、灰色短冊 状ファイヤイト存在	ウルトセライト、中程 度のファイヤイトのピー ク			鉄源砂 鉄
19	96-07 製錬(流出)滓 SB5061	大きな泡が表 面に固まった 感じ、黒色緻 密、磁着度や や弱		T.Fe:39.2、FeO:46.5、 Fe ₂ O ₃ :3.93、と少、造 滓成分は31.0と多、TiO ₂ :15.9、Vも0.40と多、 Cu:0.001、C.W.:0.20と 少	一面に灰白色多角形 ウルトセライト結晶、灰 色短冊状ファイヤイトも 存在	ウルトセライトと中程 度のファイヤイトのピー ク			鉄源砂 鉄
20	96-08 鍛造剥片 SB5061	黒褐色で光沢 持つものと、 暗赤褐色に錆 化し平滑扁平 な資料、磁着 度中程度		資料量少なく分析不能	断面0.5~1.2mmで一 面に灰白色繭状のウ ルトセライト、青黒色部分 はシリカからなるガラス 状鉄質				
21	96-09 粒状滓 SB5061	やや光沢持つ 黒褐色、一部 に強い磁着度		資料量少なく分析不能	径0.9~1.2mmの球形 、断面に多数のまる い気泡、素地組織は ウルトセライトで構成				
22	96-10 含鉄製錬滓 SB5061	割れ散見、切 断面に海綿鉄 状の残存金属 、磁着度やや 強	一個の塊 の陰影濃 く金属の 残存が推 定、地は 錆化著し い	T.Fe:46.5、FeO:35.1、 Fe ₂ O ₃ :21.6とやや多、M .Fe:4.09も含、造滓成 分は20.2とやや少、TiO ₂ :13.1、Vも0.92と多、 Cu:0.002、C.W.:2.00と 多	製錬中生成した未溶 解純鉄が海綿鉄状に 存在	ウルトセライトの強いピ ーク、ファイヤイト、ケ ーサイト等のピーク	SE像の中央部 は鉄、その周 辺滓にTiを含 む	鉄源砂 鉄	
23	96-11 製錬滓 SB5061	一部に植物繊 維(木炭)痕、 大きき割に 重量感なし、 磁着度やや強		T.Fe:53.2、FeO:47.6、 Fe ₂ O ₃ が22.6とやや多、 M.Fe:0.42と僅か含、造 滓成分19.0と少、TiO ₂ : 6.35、Vも0.40と多量、 Cu:0.001、C.W.:1.51	少量の灰白色繭形ウ ルトセライト、灰白色多角形 の結晶	中程度のウルトセ、フ ァイヤイト、高いウルト セライトのピーク、キシ 水酸化鉄のピークも			鉄源砂 鉄
24	96-12 坩形鍛錬鍛冶滓 SB5061	割欠き面なく 表面平坦、 底部凹状、磁 着度やや強		T.Fe:54.6、FeO:54.0と 多、Fe ₂ O ₃ :17.6、M.Fe: 0.33、造滓成分は23.7 、TiO ₂ :0.83、Vも0.026 、Cu:0.004、C.W.:1.16	灰白色繭状ウルトセ、 短冊状ファイヤイト結晶 、ウルトセライト結晶は 認められない	マグ初物存在ピーク 低い、強いウルトセ、 ファイヤイトのピーク			鉄源砂 鉄
25	96-13 製錬滓 SB5061	上部は木炭痕 、砂礫附着、 下部も砂礫付 着、黒色発泡 緻密重量感、 一部磁着度強		T.Fe:40.4、FeO:42.2、 Fe ₂ O ₃ :10.4と少、M.Fe: 0.33、造滓成分は33.1 とやや多、TiO ₂ :11.8、 Vも0.22と高い、Cu:0.0 01、C.W.:0.65	ウルトセライト、ファイ ヤイトの短冊状の結晶、 マグ初物樹枝状結晶も 認められる	強いウルトセ、 中程度のファイヤイトの ピーク			鉄源砂 鉄
26	96-14 製錬滓 SB5061	水との接触が 長いのか水 酸化鉄と砂礫 が固着、磁着 度やや強	陰影薄く 金属残 存の可能 性少	T.Fe:32.2、FeO:13.8と 非常に少、Fe ₂ O ₃ :30.4 と多、M.Fe:0.18、造滓 成分は42.4と非常に多 、TiO ₂ :7.05、Vも0.17 と高い、Cu:0.002、C.W .:3.54と多	多量のウルトセ、 マグ初物結晶、灰白色 虫状箇所はキシ水酸 化鉄で金属鉄が錆化 したもの	ウルトセ、マグ初 物、ケーサイトが検出 、シュートアロイトも 存在			鉄源砂 鉄
27	96-15 炉壁(二次被熱) SB5061	多量の対痕、 礫、土器片混 入、磁着度や や弱		シリカが66.5とやや多、耐 火度を高めるアルミ16.5 耐火度を低下させる塩基 性成分は他の粘土類に比 しやや低い	淡黄色や石英と思わ れる鉱物の礫や土器 破片が強度向上のため 添加			耐火度1,1 80℃、今回 測定粘土中 三番目に高 い	
28	96-16 鍛造剥片 SK4847	やや光沢、青 灰色と暗赤褐 色、磁着度強		資料量少なく分析不能	10倍実体顕微鏡では 厚さ測定不能、一面 ウルトセ結晶、典型的 鍛造剥片組織				
29	96-17 粒状滓 SK4847	光沢乏しく青 灰色、一部錆 化暗赤褐色の ものも、磁着 度強		資料量少なく分析不能	径は1.1~2.5mm、内 部に小空孔多数、一 面に灰白色ウルトセ、 典型的粒状滓組織				

表78- (2) 調査・考察結果のまとめ

30	96-18 椀形鍛錬鉄治洋 SK4847	三方割欠き面、黒色で凹凸、下部も顆粒状凹凸、磁着度中、下部弱		T. Fe: 22.9, FeO: 17.1, Fe ₂ O ₃ : 13.4と少、造洋成分は64.3と極端に多、TiO ₂ : 0.76, Vも0.015と少、Cu: 0.004, C.W.: 0.65と少	一面に緻密繭状ウラスト結晶、ファイライトの結晶も、所々に黒い空孔	ファイライト、ウラストの中程度ピーク、ウラスト、マグネサイトのピーク			鉄源砂鉄
31	96-19 鉄塊(製錬)系遺物 SK4847	中央部に割れ、錆化進行中、強いMC反応、切断面に金属、磁着度強	幅の広い陰影が観察、金属鉄残存	Cの含有1.65と多、燐(P)が0.55存在するが、Siや他元素少なく、純度の高い鉄、Ti、V量は0.01以下	一面に白い針状ウラスト結晶、その間を微細なC量の多いマトリックスが占、製錬後の溶鉄が徐冷してできたと推定	SE像で黒い部分はCで、マトリックス結晶になっている部分			原料は砂鉄か否か不明
32	96-20 鉄塊(製錬)系遺物 SK4847	錆部剥落、切断面に金属、強いMC反応、磁着度強	金属鉄の陰影が観察、端部は完全に錆化	Cの含有量は0.19、Siや他元素の含有量が少ない鉄、Ti、V量も0.01以下と少、しかし、E.P.M.Aの結果から砂鉄の可能性	一面に白いウラストの針状網目状結晶、この間をC量の多い微細マトリックスが占、製錬後の溶鉄の徐冷により生成		Ti、Vを多く含む、し方向延伸少、鍛冶加工の形跡なし		鉄源砂鉄
33	96-21 羽口 SK4847	全周の約1/6の羽口、先端部に鉄滓付着し強い磁着力		羽口61.3と少、耐火度高める7割は18.2とやや多、耐火度を低下させる酸化シリカ、酸化カルシウムが1.46、1.89、1.05とやや多	褐色部分と被熱灰白色部分を観察、一面に細気泡、強度向上のため白い石英燐配合			耐火度1,080℃、今回測定粘土中程度	
34	96-22 椀形鍛錬鉄治洋 SK470	三方割欠き面、黒色発泡粗鬆、木炭質、粗粒、磁着度中		T. Fe: 52.1, FeO: 53.8と多、Fe ₂ O ₃ : 14.4と少、M. Feが0.22と僅か、造洋成分は28.5とやや少、TiO ₂ : 0.35, Vも0.012, Cu: 0.001と非常に少、C.W.: 0.83	灰白色繭状のウラスト、ファイライトの結晶、ウラスト初期は認められない	強度度のウラスト、ファイライトのピーク、マグネサイト、矽水酸化鉄のピーク検出			鉄源砂鉄
35	96-23 羽口 SK470	薄い肌色のきめ細かな粘土塊		羽口72.1と非常に多、耐火度高める7割は13.8と少、耐火度を低下させる塩基性成分は多				耐火度1,040℃と、今回測定粘土中最低値	
36	96-24 炉壁・二次被熱 SK470	羽口先端状、発泡融融部分が付着した資料		羽口67.7とやや多、耐火度高める7割は16.7とやや少、耐火度を低下させる塩基性成分は少					
37	96-25 椀形鍛錬鉄治洋 SK535	二箇所割欠き面、窪みに明色酸化鉄、内部は黒色発泡、磁着度やや強		T. Fe: 56.7, FeO: 58.5と多、Fe ₂ O ₃ : 15.7と少、造洋成分は22.5とやや多、TiO ₂ : 0.50, Vも0.012, Cu: 0.002非常に少、C.W.: 0.94と少	洋中僅かな空孔、灰白色繭状のウラスト結晶、やや崩れた短冊状ファイライト結晶	ウラスト、ファイライトの強いピーク			鉄源砂鉄
38	96-26 鉄塊(製錬)系遺物 SK535	MC反応なく元金属鉄部分は完全に錆化、磁着度中	一部に陰影濃い部分があるが金属は残存しない	T. Fe: 45.67と少、FeO: 4.64と極めて少、Fe ₂ O ₃ : 58.4と非常に高、M. Feが1.17と僅か、造洋成分は20.5とやや少、TiO ₂ : 0.19, Vも0.040, Cu: 0.026少、C.W.: 0.69と非常に多	灰白色非結晶の金属が酸化、錆化し生成した矽水酸化鉄が多量	ゲージサイトの強いピーク			鉄源砂鉄
39	96-27 鉄塊(製錬)系遺物 SK535	錆化進行中鉄塊、金属残存、磁着度強	中央部に二資料をよぶ亀裂	C含有量1.53と非常に高、Siや他元素の含有なく炭素含有を除き綺麗な鉄、Ti、V: 0.01以下と非常に少	白い針状ウラスト結晶中に黒いマトリックスが存在、製錬後の炭素量の多い溶鉄が急速凝固した鉄塊		灰色箇所は酸化鉄、灰黒色箇所は造洋成分、この中にTi存在		鉄源砂鉄
40	96-28 羽口 SK535	先端近傍小破片、磁着度弱		羽口59.7とやや少、耐火度高める7割は17.8とやや高、耐火度を低下させる塩基性成分はやや高い					
41	96-29 炉壁・二次被熱 SK538	片状、手で割れる、灰橙色部と黒色部、後者に弱磁着力		羽口59.7%とやや少、耐火度高める7割は16.8%、耐火度を低下させる塩基性成分ははやや高				耐火度は1,040℃強と今回測定粘土中最低値	
42	96-30 炉壁・二次被熱 SK543	軟質資料、熱影響で変色、磁着度弱		羽口60.9%とやや高、耐火度高める7割は17.2%とやや高、耐火度を低下させる塩基性成分ははやや高				耐火度1,060℃と今回測定粘土中、中の下	
43	96-31 鍛造剥片 SF8	暗青灰色で光沢あり滑らかな3片、内1片黒褐色で光沢滑、扁平で磁着度強		資料量少なく分析不能	一面に灰白色のウラスト結晶存在、剥片特有の組織、剥片内部に無数の小空孔				
44	96-32 粒状滓 SF8	黒褐色で光沢有、磁着度やや強		資料量少なく分析不能	一面に灰白色のウラスト結晶存在する典型的粒状滓(湯玉)				
45	96-33 椀形鍛錬鉄治洋 SF8	両面に植物繊維(木炭)痕、内部に大空洞、一段滓、磁着度やや弱		T. Fe: 51.8, FeO: 50.2と多、Fe ₂ O ₃ : 18.0、造洋成分は28.2とやや多、TiO ₂ : 0.96, Vも0.048存在、Cu: 0.003で非常に少、C.W.: 1.73	灰白色繭状のウラスト樹枝状のマグネサイト結晶、やや崩れた短冊状のファイライト結晶、酸化鉄主体の滓	ウラスト、ファイライトの比較的強いピーク、マグネサイト、矽水酸化鉄も存在			鉄源砂鉄
46	96-34 炉壁・二次被熱 SF8	一部発泡、灰分が固化したような脆い部分等硬さにムラ、磁着度弱		羽口60.4とやや高、耐火度高める7割は16.8、耐火度を低下させる塩基性成分ははやや高い				耐火度1,060℃と今回測定粘土中、低値	
47	96-35 鉄塊(製錬)系遺物 SF12	重量感あり割れもない、MC反応強、磁着度強	残存金属の陰影、中空の鉄塊		白い針状と網目状のウラスト結晶、その中に黒いマトリックス、製錬後の炭素量の多い溶鉄が急速凝固した鉄塊		比較的純度の高い鉄、SE像で縞模様はC含有量高い部分		鉄源砂鉄か否か不明
48	96-36 溶融炉壁 SF12	粘土などが溶融発泡した感じ、磁着度弱		羽口58.8とやや低い、耐火度高める7割は17.2、塩基性成分ははやや高、T. Fe: 7.36と他粘土資料に比し2%程高い、滓中の鉄分で若干溶浸				資料量少なく測定不能	
49	96-37 炉壁 SF12	両面平坦、細粒で均質な粘土使用、磁着度弱		羽口60.6とやや高、耐火度高める7割は17.1、耐火度を低下させる塩基性成分ははやや高い					

(註) 資料95-77~81 96-01~05、38~56は来年度刊行の『古代2 中世編』に掲載する。
理文センターにおいて表化、文章の簡略化を行った。

表79 鉄生産関連遺物関係化学成分分析結果

単位% (m/m)

分析No.	構成図No.	遺物種類 (名称)	出土遺構	成 分																	
				T.Fe	M.Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	C.W.	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	TiO ₂	MnO	P ₂ O ₅	Cr ₂ O ₃	Na ₂ O	K ₂ O	C	V	Cu
95-72	17	鉄製品 (釘)	SF901	35.5	0.45	8.25	40.94	4.54	27.1	6.11	1.51	0.72	0.81	0.07	4.090	0.001	0.88	0.60	0.94	0.029	0.003
95-73	2	椀形鍍治滓	SF901	39.7	0.31	40.82	10.95	1.08	21.5	6.29	3.65	2.64	9.46	0.42	0.517	0.095	0.56	0.98	0.21	0.34	0.001
95-74	3	椀形鍍治滓	SF901	48.0	0.61	46.50	16.08	1.38	22.9	5.37	1.78	1.16	2.48	0.17	0.412	0.051	0.54	0.87	0.20	0.12	0.003
96-6	78	炉内製錬滓	SB5061	39.7	0.33	43.60	7.83	0.53	21.0	5.97	1.12	3.51	14.1	0.62	0.202	0.063	0.48	0.83	0.07	0.37	0.001
96-7	83	流出製錬滓	SB5061	39.2	0.31	46.50	3.93	0.20	19.9	6.53	1.12	3.62	15.9	0.63	0.203	0.087	0.47	0.77	0.04	0.40	0.001
96-10	93	含鉄椀形鍍治滓	SB5061	46.5	4.09	35.12	21.60	2.00	12.6	4.74	0.55	2.35	13.1	0.49	0.166	0.340	0.32	0.41	0.27	0.92	0.002
96-11	94	椀形鍍治滓	SB5061	53.2	0.42	47.60	22.56	1.51	13.0	3.50	1.06	1.45	6.35	0.25	0.339	0.170	0.26	0.47	0.12	0.40	0.001
96-12	89	椀形鍍治滓	SB5061	54.6	0.33	53.99	17.59	1.16	19.2	3.36	0.88	0.21	0.83	0.11	0.281	0.001	0.40	1.06	0.20	0.62	0.004
96-13	90	椀形鍍治滓	SB5061	40.4	0.33	42.18	10.41	0.65	22.8	5.65	1.04	3.59	11.8	0.57	0.205	0.031	0.46	0.81	0.07	0.22	0.001
96-14	95	鉄塊系遺物 (錆化)	SB5061	32.2	0.18	13.82	30.42	3.54	32.3	7.56	0.69	1.88	7.05	0.33	0.162	0.040	0.92	1.03	0.25	0.17	0.002
96-18	61	椀形鍍治滓	SK4847	22.9	0.28	17.09	13.35	0.65	46.6	13.1	3.11	1.45	0.76	0.12	0.327	0.001	1.88	2.00	0.09	0.015	0.004
96-22	18	含鉄椀形鍍治滓	SK470	52.1	0.22	53.78	14.41	0.83	19.8	5.15	2.73	0.83	0.35	0.08	0.263	0.001	0.86	1.21	0.06	0.012	0.001
96-25	28	含鉄椀形鍍治滓	SK535	56.7	0.25	58.51	15.68	0.94	17.1	4.02	0.89	0.47	0.50	0.06	0.227	0.001	0.53	0.58	0.07	0.012	0.002
96-26	31	鉄塊系遺物 (錆化)	SK535	45.6	1.17	4.64	58.36	6.59	16.0	3.37	0.69	0.43	0.19	0.05	3.49	0.001	0.38	0.36	1.66	0.040	0.026
96-33	43	椀形鍍治滓	SF8	51.8	0.22	50.19	17.97	1.73	21.5	5.20	0.66	0.83	0.96	0.14	0.218	0.005	0.46	0.50	0.08	0.048	0.003

[分析方法] は JIS に準拠し、以下の方法で行いました。
 T.Fe : 三塩化チタン還元-ニクロム酸カリウム滴定法
 M.Fe : 臭素メタン-ホルム分解-EDTA 滴定法
 FeO : ニクロム酸カリウム滴定法 Fe₂O₃ : 計算
 C : 燃焼-赤外線吸収法
 CaO、MgO、MnO、Cr₂O₃、Na₂O、V、Cu : ICP 発光分光分析法
 SiO₂、Al₂O₃、CaO、MgO、TiO₂、P₂O₅、K₂O : ガラスビード蛍光 X 線分析法
 * CaO、Mg、MnO、は含有率に応じて ICP 分析法または蛍光 X 線分析法で分析しています。

表80 羽口・炉壁関係化学成分分析結果

単位% (m/m)

分析No.	構成図No.	遺物種類 (名称)	出土遺構	成 分												
				SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	Na ₂ O	K ₂ O	TiO ₂	MnO	C	T.Fe	Igloss	C.W.	
95-75	10	羽口	SF901	66.2	14.7	1.24	0.89	1.50	1.05	0.92	0.15	0.26	7.06	2.47	1.54	
96-15	99	炉壁・二次被熱	SB5061	66.5	16.5	1.27	0.71	1.48	1.76	0.93	0.26	0.30	4.47	4.24	2.59	
96-21	65	羽口	SK4847	61.3	18.2	2.63	1.25	2.23	1.53	0.85	0.14	0.17	6.41	2.28	1.53	
96-23	24	羽口	SK470	72.1	13.8	1.05	0.86	1.46	1.89	0.90	0.15	0.21	4.03	1.97	1.35	
96-24	26	炉壁・二次被熱	SK470	67.7	16.7	0.49	0.71	0.42	1.92	0.89	0.12	0.22	4.99	3.18	1.80	
96-28	33	羽口	SK535	59.7	17.8	2.77	1.36	2.01	1.53	0.85	0.14	0.28	5.85	4.81	2.94	
96-29	39	炉壁・二次被熱	SK538	59.7	16.8	2.96	1.36	1.89	1.67	0.79	0.19	0.97	5.29	6.26	3.10	
96-30	41	炉壁・二次被熱	SK543	60.9	17.2	3.47	1.76	2.24	1.57	0.81	0.19	0.39	4.76	4.21	3.44	
96-34	50	炉壁・二次被熱	SF8	60.4	16.8	3.20	1.47	1.98	1.64	0.80	0.15	0.72	5.13	5.92	3.32	
96-36	56	粘土溶解・鍍治滓	SF12	58.8	17.2	3.11	1.69	1.88	1.99	0.92	0.21	0.60	7.36	3.87	2.20	
96-37	57	炉壁	SF12	60.6	17.1	3.13	1.54	1.95	1.82	0.83	0.22	0.17	5.64	4.61	3.07	

[分析方法] は JIS に準拠し、以下の方法で行いました。
 SiO₂、Al₂O₃、CaO、MgO、TiO₂、MnO、Na₂O、K₂O、T、Fe、C : 燃焼-赤外線吸収法
 C.W. : カールフィッシャー法
 Igloss : 重量法

表81 耐火度試験結果 (更埴条里遺跡・屋代遺跡群)

分析番号	耐火度 (SK)	色 調	膨 張・収 縮	試験後の状況
更埴条里遺跡 95-75	01a	茶 色	膨 張	発 泡
屋代遺跡群 96-15 96-21 96-23 96-29 96-30 96-34	5a 01a 03a+ 03a+ 02a+ 02a	茶 色 茶 色 茶 色 茶 色 茶 色 茶 色	膨 張 膨 張 膨 張 膨 張 膨 張 膨 張	普 通 普 通 普 通 普 通 普 通 普 通
〔備 考〕 試験条件 : 酸素プロパン炉法				

表82 ゼーゲルコーン温度比較表

温 度 (°C)	コーン 番号	温 度 (°C)	コーン 番号	温 度 (°C)	コーン 番号	温 度 (°C)	コーン 番号
600	022	940	08a		3		23
650	021		08	1,160	4a	1,580	26
670	020	960	07a		4	1,610	27
690	019		07	1,180	5a	1,630	28
710	018	980	06a		5	1,650	29
730	017		06	1,200	6a	1,670	30
750	016	1,000	05a		6	1,690	31½
790	015a		05	1,230	7		31
	015	1,020	04a	1,250	8	1,710	32½
815	014a		04	1,280	9		32
	014	1,040	03a	1,300	10	1,730	33
835	013a		03	1,320	11	1,750	34
	013	1,060	02a	1,350	12	1,770	35
855	012a		02	1,380	13	1,790	36
	012	1,080	01a	1,410	14	1,825	37
880	011a		01	1,435	15	1,850	38
	011	1,100	1a	1,460	16	1,880	39
900	010a		1	1,480	17	1,920	40
	010	1,120	2a	1,500	18	1,960	41
920	09a		2	1,520	19	2,000	42
	09	1,140	3a	1,530	20		

注: コーンは正確な温度の測定をするものではない。耐火度の数値を概略の温度で示す場合のみ上の温度表が使われる。

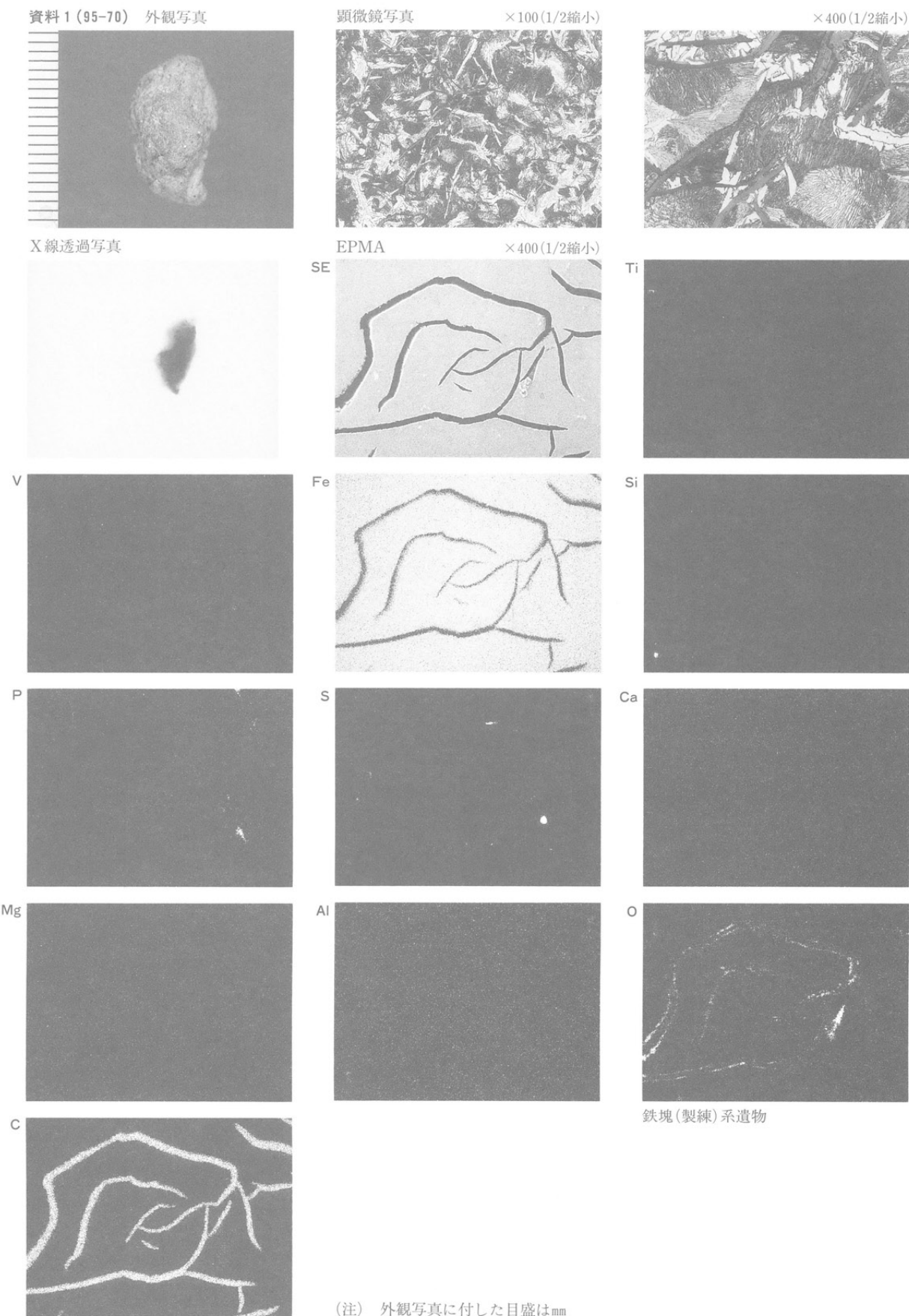


図99 鍛冶関連遺物の分析・調査 (更埴条里遺跡) 1

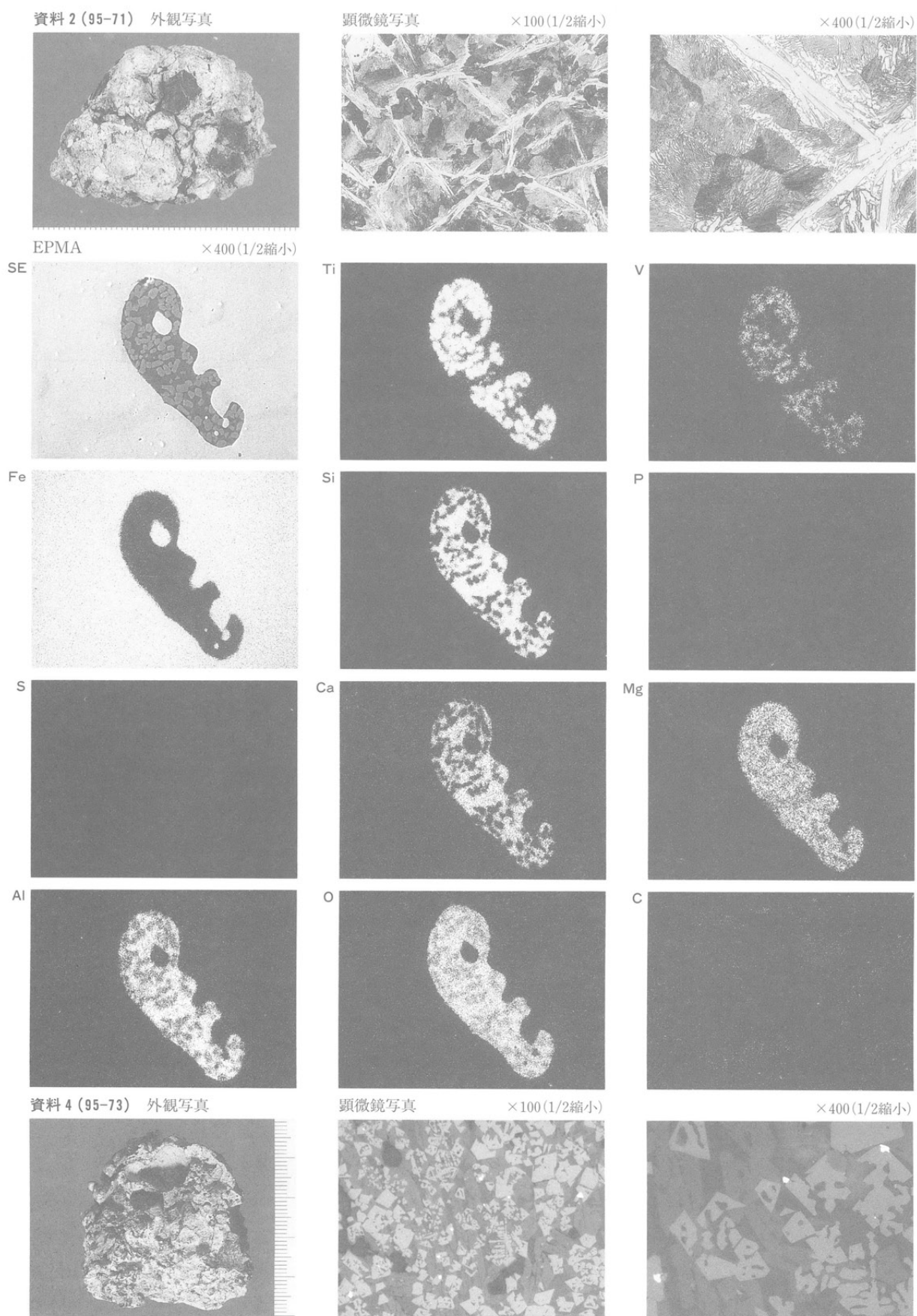
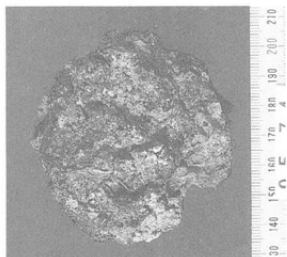
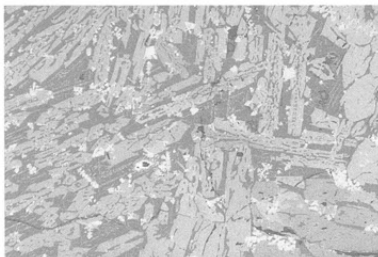


図100 鍛冶関連遺物の分析・調査 (更埴条里遺跡) 2

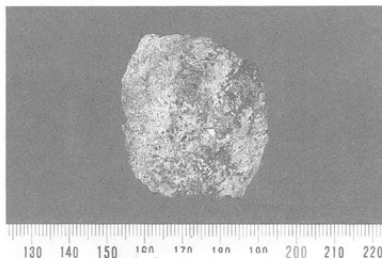
資料5(95-74) 外観写真



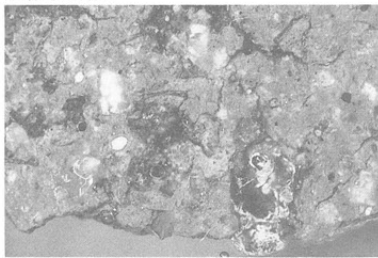
顕微鏡写真



資料6(95-75) 外観写真



顕微鏡写真

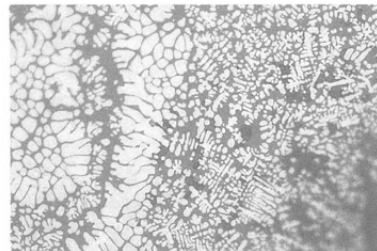
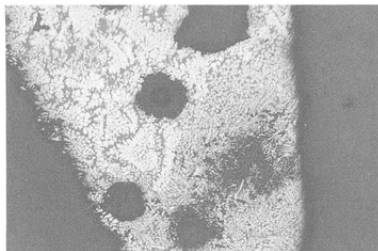


資料6
×100(1/2縮小)

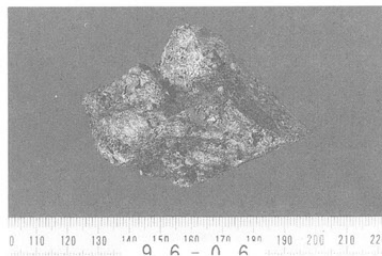
資料7(95-76)



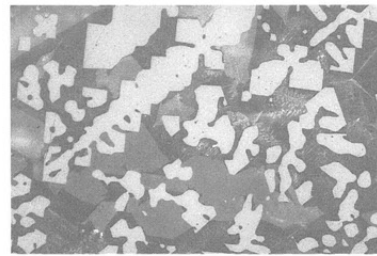
顕微鏡写真



資料18(96-06) 外観写真



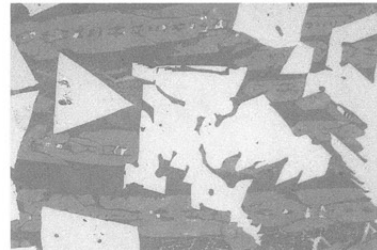
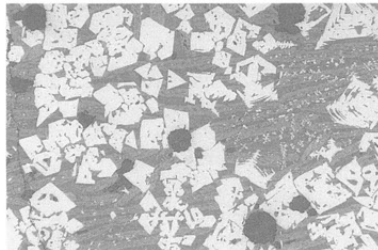
顕微鏡写真



資料19(96-07) 外観写真



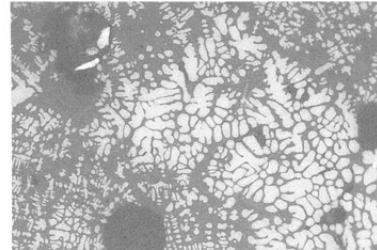
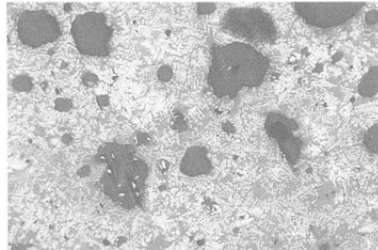
顕微鏡写真



資料20(96-08)



顕微鏡写真



以上×100(1/2縮小)

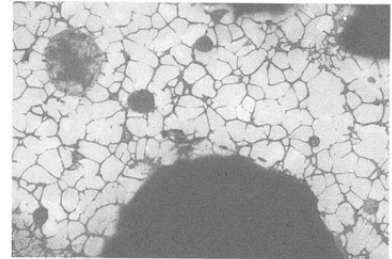
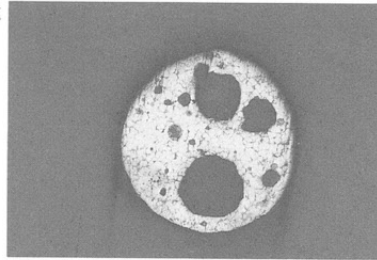
以上×400(1/2縮小)

図101 鍛冶関連遺物の分析・調査 (更埴条里遺跡・屋代遺跡群) 3

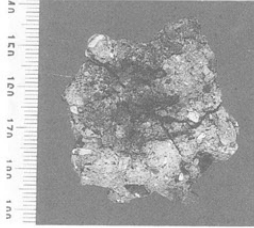
資料21(96-09)



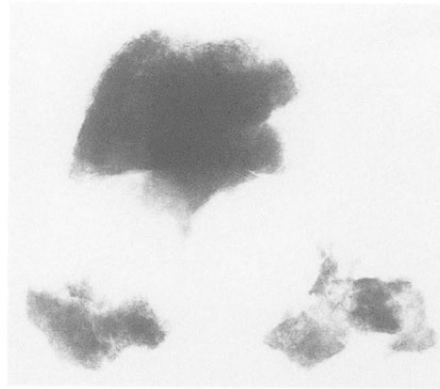
顕微鏡写真



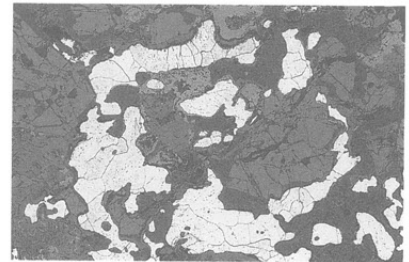
資料22(96-10) 外観写真



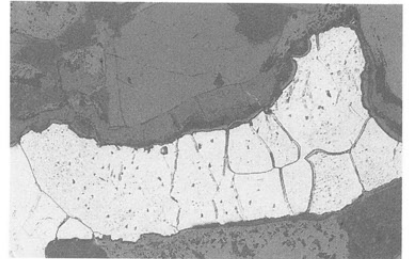
X線透過写真



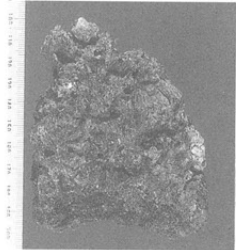
×100(1/2縮小)



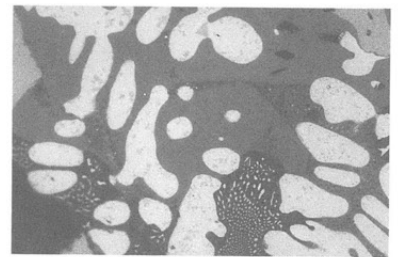
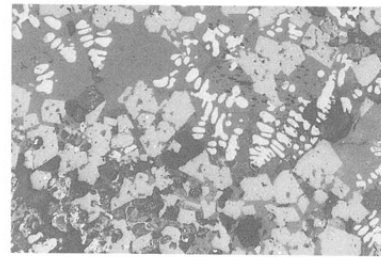
×400(1/2縮小)



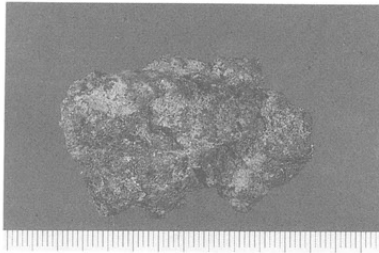
資料23(96-11) 外観写真



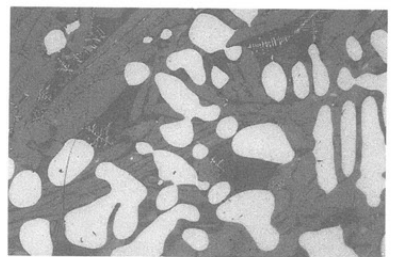
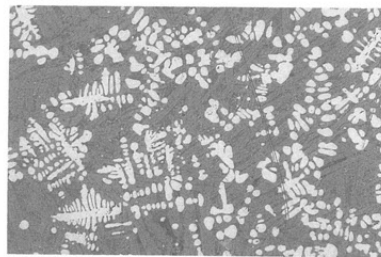
顕微鏡写真



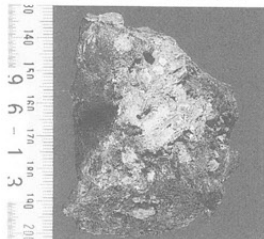
資料24(96-12) 外観写真



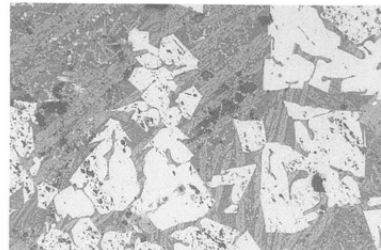
顕微鏡写真



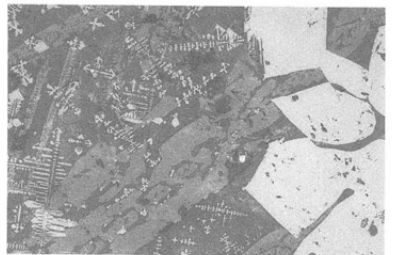
資料25(96-13) 外観写真



顕微鏡写真



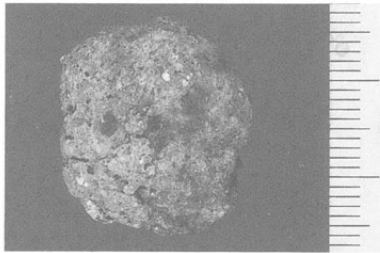
以上×100(1/2縮小)



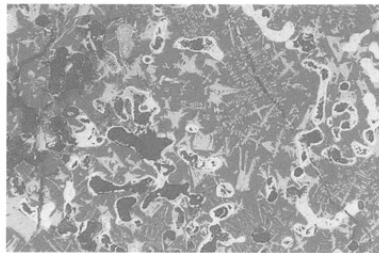
以上×400(1/2縮小)

図102 鍛冶関連遺物の分析・調査 (屋代遺跡群) 4

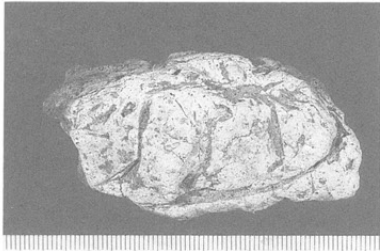
資料26(96-14) 外観写真



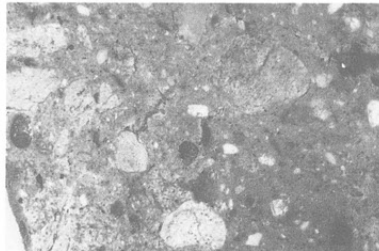
顕微鏡写真



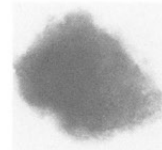
資料27(96-15) 外観写真



顕微鏡写真



資料26 X線透過写真

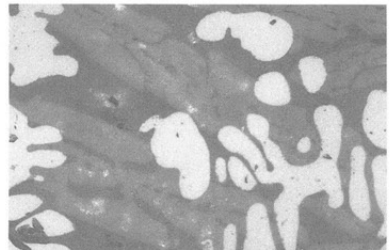
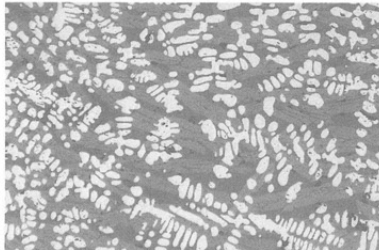


資料27
×10(1/2縮小)

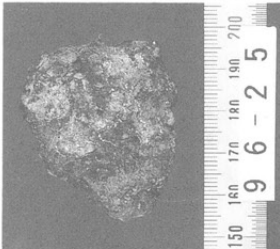
資料34(96-22) 外観写真



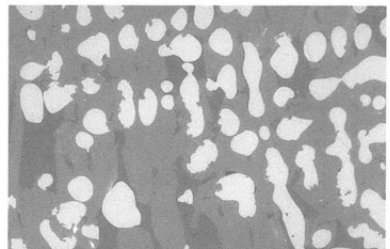
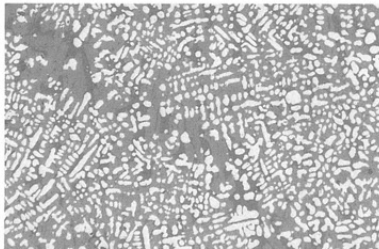
顕微鏡写真



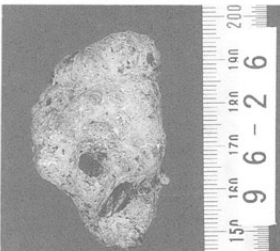
資料37(96-25) 外観写真



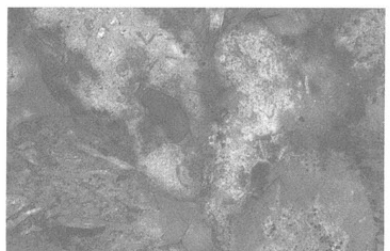
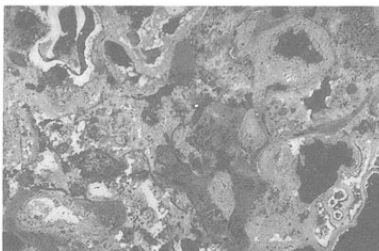
顕微鏡写真



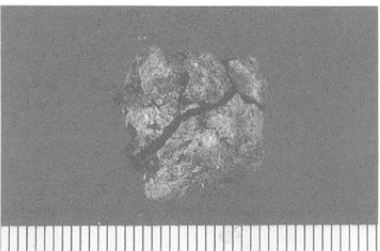
資料38(96-26) 外観写真



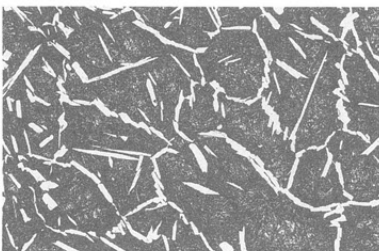
顕微鏡写真



資料39(96-27) 外観写真



顕微鏡写真



以上×100(1/2縮小)

以上×400(1/2縮小)

図103 鍛冶関連遺物の分析・調査 (屋代遺跡群) 5

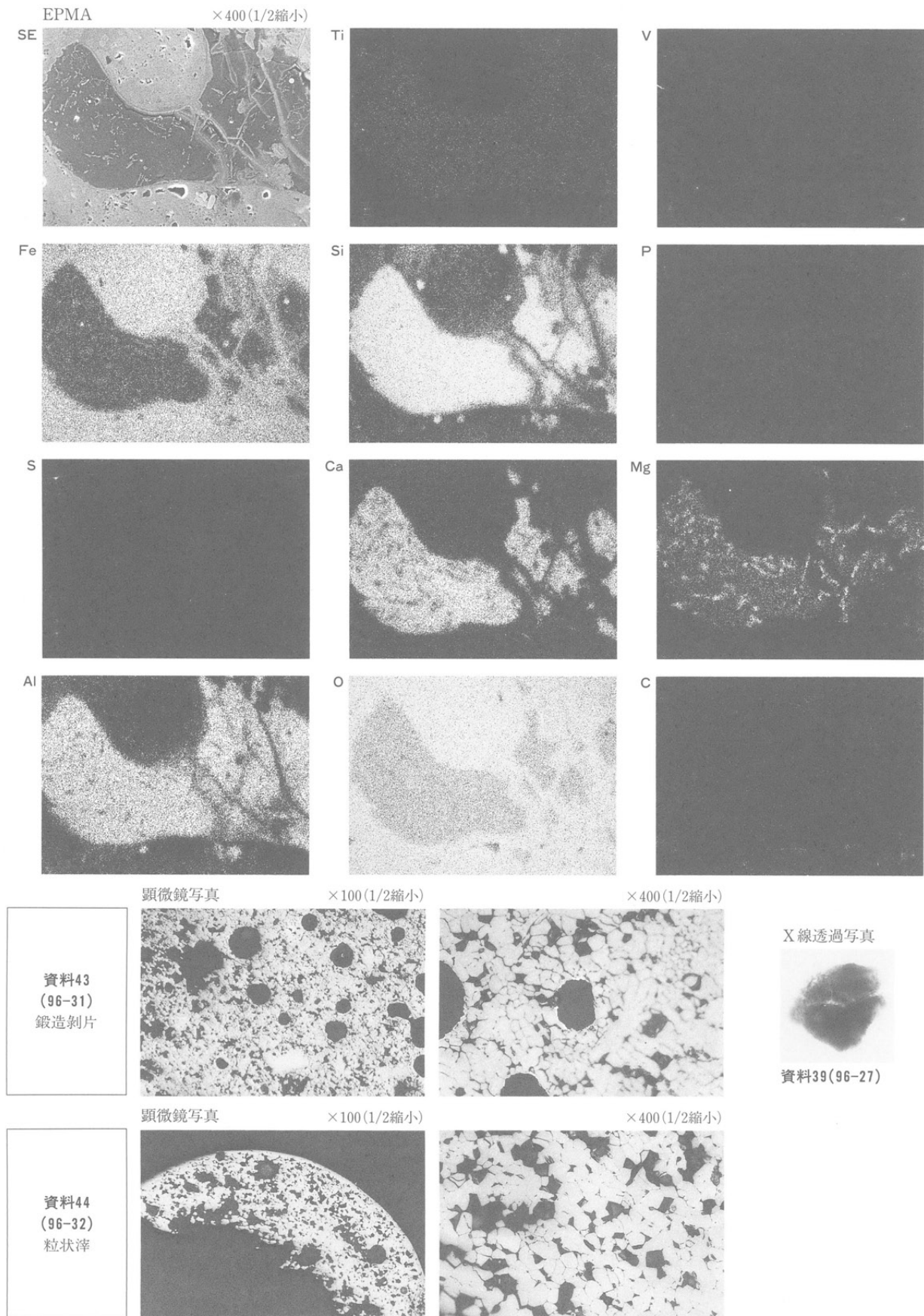
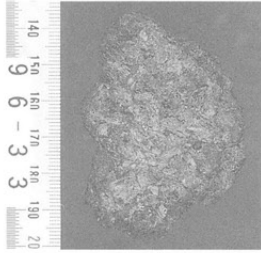
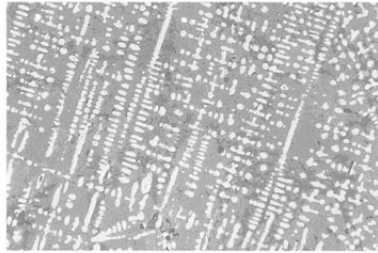


図104 鍛冶関連遺物の分析・調査(屋代遺跡群) 6

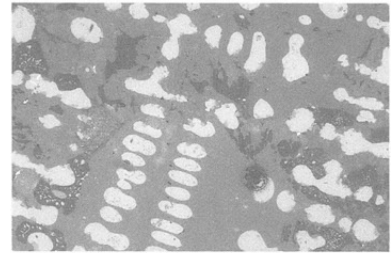
資料45(96-33) 外観写真



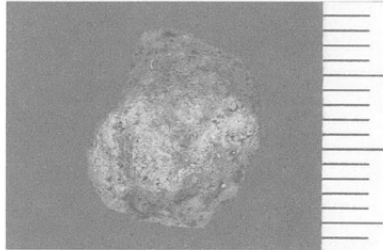
顕微鏡写真 ×100 (1/2縮小)



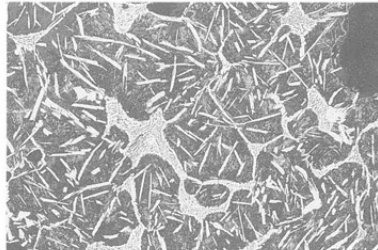
×400 (1/2縮小)



資料47(96-35) 外観写真



顕微鏡写真



EPMA ×400 (1/2縮小)

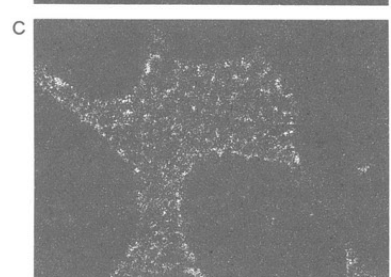
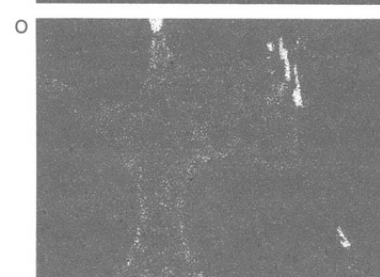
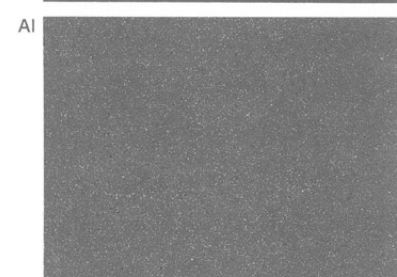
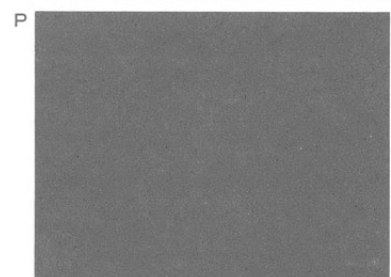
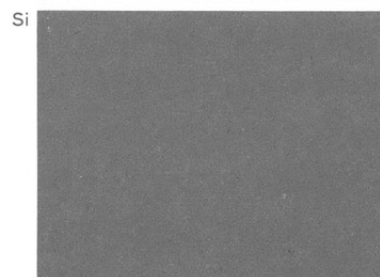
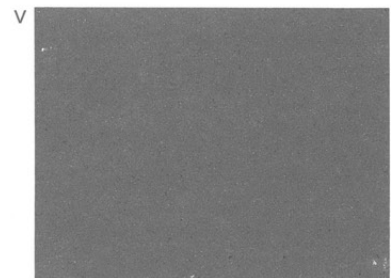
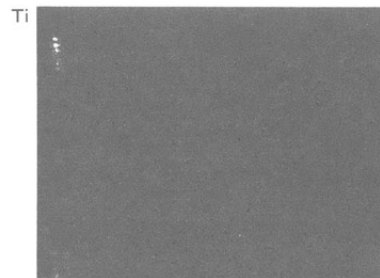
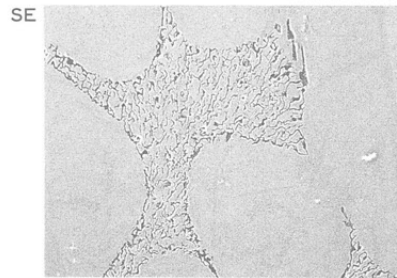


図105 鍛冶関連遺物の分析・調査 (屋代遺跡群) 7

2 屋代遺跡群出土銅製品の材質について

分析の経緯 筆者はSB4201出土の銅鏡(11C前半)・SD7048出土銅鈴(7C末)の蛍光X線を用いた非破壊的手法による材質調査を、奈良国立文化財研究所平成7年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修「保存科学応用課程」で行った。ここではその結果を報告する。

調査の方法 調査に用いた装置はテクノス製エネルギー分散型非破壊蛍光X線分析装置TREX650で、標準資料を用いた半定量分析を行った。分析条件は、電圧45kV、電流0.3mA、測定時間150秒、X線照射面積1mmφ、ターゲットはモリブデンである。

また、両者ともX線ラジオグラフィーによる透過撮影を行い、製造技法の検討を併せて行っている。

分析の結果 図106に銅鏡、図107に銅鈴の分析結果を呈示した。これらに関して同研修講師の村上隆氏から次のようなコメントをいただいた。「銅鏡：厳密な意味では「佐波理」とはいえない。古代の佐波理鏡

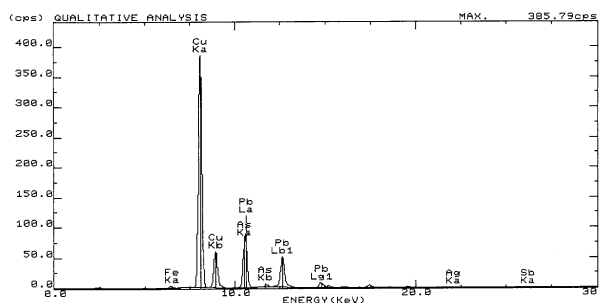


図106 銅鏡分析データ

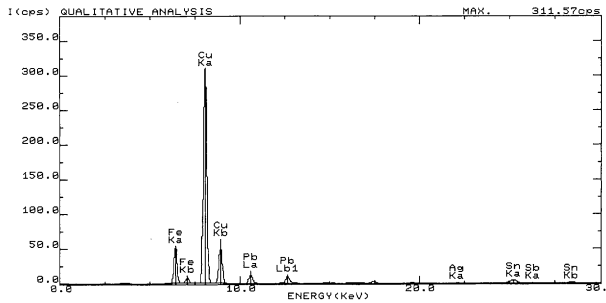


図107 銅鈴分析データ

は“銅－錫”系の合金で、組成は銅80%、錫20%をとるのが一般的である。また、厚みも0.5mm以下と非常に薄い場合が多い。この銅鏡は“銅－鉛－ひ素”系の合金であり、厚さも1mmと厚い。佐波理を目指して作ったもので時代もかなり下がろう。」「銅鈴：“銅－錫－鉛”系の青銅。铸造製と思われる。」

銅鏡分析結果からの考察 群馬県では7世紀後半から9世紀代の7遺跡7個体の銅鏡を中心にした銅製容器に係わる材質調査がなされた。その結果、元素の構成比別にIタイプ：銅－錫合金 IIタイプ：銅－錫－(鉛)－(ひ素)合金 IIIタイプ：銅－錫－鉛－(ひ素)合金 IVタイプ：銅－鉛－ひ素合金の4つのタイプが設定されている(村上1998)。特にI～IIIのタイプは7世紀第4四半期から8世紀中葉、IVタイプは9世紀代という年代の違いがみられる。また、器面の厚さは鉛の少ないIタイプのものが0.2mm、IIタイプの最薄部が0.4mmであるのに対し、鉛の多いIIIタイプのものは1.0mmと厚くなる。屋代遺跡群出土の銅鏡は、錫がほとんど含まれず、鉛・ひ素の含有量の多さから、上の分類でのIVに該当するとの指摘を受け、1mmの器厚もそれを裏付けている。

さて県内では9世紀代以降、集落からの銅鏡の出土量が増大し、その用途は仏教信仰専用道具であった可能性が指摘されている(原1996)。実際に群馬県でIVタイプに分類された国分境遺跡などは寺院に関連する遺跡と考えられる。法隆寺や正倉院宝物の「佐波理」や7～8世紀の銅－錫を中心にした薄手で質の良い銅鏡が、やがて仏具などを中心に一般に広く普及する中での生産・流過程の変化がこのような地域をこえての材質の類似性を生んだのであろうか。今後、通時的に更に多くの地方出土銅鏡の非破壊成分分析の集成が期待されよう。本稿作成にあたり、村上隆氏・神谷佳明氏から多くのご教示をいただいた。

引用・参考文献

- 桜岡正信・神谷佳明 1998 「金属器模倣と金属器指向」『財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』15
 原明芳 1996 「銅鏡考」『長野県の考古学』
 村上隆 1994～1996 「法隆寺に伝世する銅製容器の科学的調査(I)～(III)」『奈良国立文化財研究所年報 1993～1995』
 村上隆 1998 「群馬県出土の銅製容器の材質について」『下東西・清水上遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

第3節 更埴条里遺跡・屋代遺跡群から出土したガラスの材質分析

東京大学アイソトープ総合センター

小泉 好延

東京大学原子力研究総合センター

小林 紘一

はじめに

更埴条里遺跡・屋代遺跡群から出土したガラス玉、ガラス小片、およびガラス玉の鑄型と推定される鑄型に付着した針状ガラスの材質分析を行った。ガラスが出土した遺構は5世紀から9世紀と年代に広がりがある。

ガラス試料は大部分がビーズであるが、出土例が少ない平板小片ガラスと鑄型に残された針状の青緑色ガラスがそれぞれ1試料存在する。遺物を損なわないで得られるガラスの特性は重量、密度、色調、内泡状態などであるが、これらの形状と簡単な観察内容から、製造技術や産地、流通などの考古学的な知見を得るには限界がある。ガラス特性で重要な材質を明らかにすることによって、材質による分類と製造技術や流通などに迫ることができよう。従来、材質の分析は湿式化学分析が行なわれていた。この方法は分析精度が高く、ガラス原料を考察する優れているが、一方では試料が損なわれることから分析される試料数は少なく、多量のデータ蓄積から推定できる材質分類や時代変遷の有無、詳細な製造技術、地域差異、産地、流通などの考古学上の考察を行うことが困難であった。非破壊分析は分析精度がやや劣るが、貴重な考古学資料が損なわれることなく、多くの古代ガラスのデータが蓄積できることから、これらの考古学上の考察が可能である。以下、本遺跡から出土したガラスの材質分析の結果を述べる。

1 ガラス試料と分析方法

(1) 分析試料

分析したガラス試料はガラス玉14試料、鑄型付着ガラス1試料、平板小破片1試料である。出土遺構の年代と色調などは表82に示した通りである。出土遺構の年代に不確定性があるが、5世紀から8世紀末の住居跡から出土したガラス試料もある。色調は青色、青緑色、空色が多い。

(2) 分析方法

PIXE分析法（荷電粒子励起X線分析、Particle Induced X-ray Emission）を用いた。PIXE分析は、加速器によって高エネルギーに加速した陽子や α 粒子を分析試料に照射し、試料の含有元素から発生する特性X線のエネルギースペクトルを半導体型放射線検出器で測定し、多元素を同時に分析する方法である。一般には環境汚染物質や金属、生物などの微量分析に使用されている。これまで、装置の規模が大きく考古学試料の組成分析にはあまり普及していないが、筆者らは約10年前から考古遺物のガラスや青銅、陶磁器の材質分析に使用している。PIXE分析の特徴は試料破損が無く、多元素を同時に分析できることである。最近、筆者らはPIXE分析をナトリウムから鉛まで同時に分析できるよう改善した。

(3) 試料処理と分析装置の条件

試料は表面の汚れを除去するために、蒸留水・エタノール1：1溶液で、低出力にした超音波器で3分間の洗浄を行った。PIXE分析は東京大学原子力研究総合センターのタンデム加速器を用い、照射エネルギーと粒子は3 MeVのプロトン、照射ビーム径0.5mm、照射電流値0.5～1 ナノアンペア (nA)、照射電荷量200～1000ナノクーロン (nC) の条件で行った。X線検出は高純度Si半導体検出器とCZT半導体検出器の特性の異なる2つの検出器を使用し、測定した特性X線エネルギースペクトル (PIXEスペクトル) の解析から元素同定と定量を行った。

2 結果

測定したPIXEスペクトル例を図108・109・110・111・112に示した。定量分析の結果を表に示す。

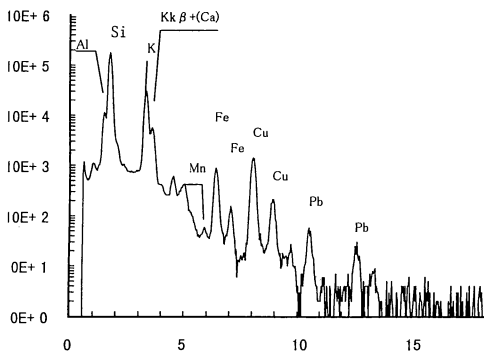


図108 資料3 (79) ガラス玉・カリ石灰ガラス

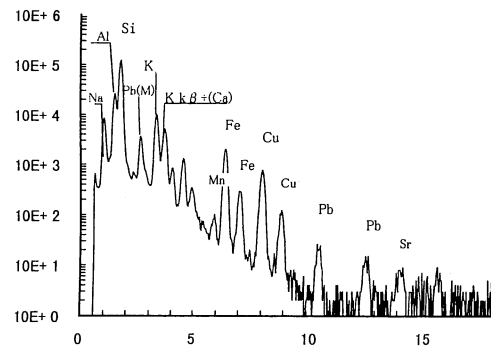


図109 資料14 (14) ガラス玉・ソーダ石灰ガラス

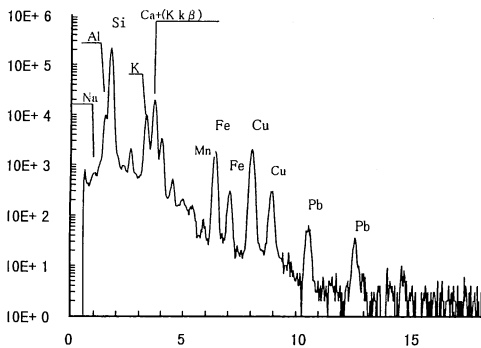


図110 資料13 (98) 両者に分類できないガラス玉

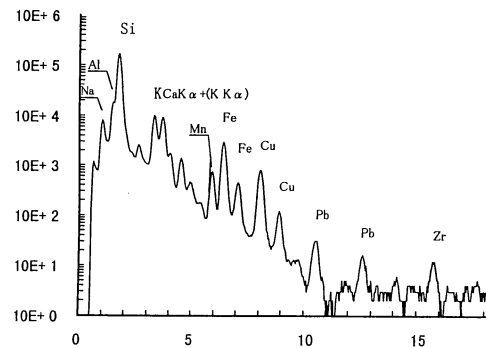


図111 資料22 (99) 鋳型に付着していた針状ガラス・ソーダ石灰ガラス

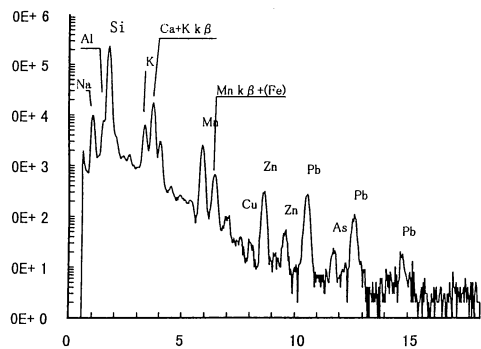


図112 資料4 ガラス小片・ソーダ石灰ガラス

図108～112 PIXEスペクトルの横軸はX線エネルギー-keV 縦軸は計数率(対数表示)。プロトンの照射量は約500ナノクーロン (nC)。

表83 ガラスの材質分析結果

試料番号 (報告番号)	定量値は酸化物の重量パーセント													遺構・年代	色調
	SiO ₂	Al ₂ O ₃	Na ₂ O	K ₂ O	CaO	MnO	Fe ₂ O ₃	CuO	TiO	ZnO	PbO	SnO	ガラス材質分類		
ガラス玉															
21	84.7	7.0	n.d	4.5	0.54	0.03	1.00	1.70	0.23	n.d	0.39	n.d	カリ石灰ガラス	包含層・不明	青色
16 (96)	83.3	6.0	n.d	6.0	0.77	0.02	0.89	2.13	0.21	n.d	0.49	0.22	カリ石灰ガラス	包含層・不明	青色
18 (97)	82.7	6.7	n.d	7.0	0.53	0.02	1.04	1.59	0.15	n.d	0.32	n.d	カリ石灰ガラス	包含層・不明	青色
19 (95)	76.4	6.0	0.2	13.7	0.37	n.d	0.73	2.26	n.d	n.d	0.37	n.d	カリ石灰ガラス	包含層・不明	青色
3 (79)	64.4	9.7	1.2	19.4	0.63	0.02	1.14	2.63	0.34	n.d	0.56	0.03	カリ石灰ガラス	土抗覆土・不明	青・空色
13 (98)	79.2	5.1	n.d	3.7	7.63	0.02	1.49	2.24	0.12	n.d	0.42	0.14	両者に分類不可	住居床面・不明	青色
10 (94)	71.2	6.5	4.7	6.6	8.67	0.05	2.04	0.09	0.09	n.d	0.07	n.d	ソーダ石灰ガラス	包含層・不明	青色
1 (7)	67.1	13.1	7.6	5.3	1.95	0.06	1.61	2.04	0.50	n.d	0.81	0.04	ソーダ石灰ガラス	住居床面・5世紀以降	青・空色
14 (14)	66.1	14.2	11.5	3.5	1.64	0.03	1.59	0.82	0.52	n.d	0.14	n.d	ソーダ石灰ガラス	灘・8世紀	青色
12 (90)	63.3	11.2	15.5	3.2	3.18	0.09	2.25	0.60	0.61	n.d	0.06	n.d	ソーダ石灰ガラス	包含層・不明	青色
9	63.8	11.6	15.6	2.5	2.91	0.07	1.55	1.12	0.59	n.d	0.25	n.d	ソーダ石灰ガラス	包含層・不明	青色
15 (古墳編81)	61.5	11.8	16.1	2.6	3.03	0.06	2.06	1.69	0.75	n.d	0.38	0.07	ソーダ石灰ガラス	住居床面・5世紀	紺色
17 (80)	62.7	12.3	17.8	1.9	2.95	0.05	1.32	0.15	0.40	n.d	0.40	n.d	ソーダ石灰ガラス	礎石盛土中・9世紀	青緑色
8 (92)	55.0	15.9	20.7	2.0	2.87	0.06	1.28	1.6	0.28	n.d	0.23	0.03	ソーダ石灰ガラス	包含層・不明	青色
罫型に付着した針状ガラスと平板小片ガラス															
22 (99)	63.88	7.29	15.07	4.83	5.21	0.24	2.40	0.33	0.33	n.d	0.42	n.d	ソーダ石灰ガラス	住居・7世紀末	罫型に付着した針状ガラス・青緑色
4	65.65	4.22	16.58	2.39	7.36	1.87	0.31	0.02	0.00	0.36	1.24	n.d	ソーダ石灰ガラス	包含層・不明	平板小片・紺色

*: n.d 検出限界値以下。 Na₂Oのn.dは0.2wt%以下。
 定量値はガラス形状が不定形のため、検出された元素濃度の合計を100wt%として補正して求めた。

3 考 察

(1) 古代ガラスの材質

主成分組成による分類

古代ガラスの主成分はケイ素 (Si)、アルミニウム (Al)、ナトリウム (Na)、カリウム (K)、カルシウム (Ca)、マグネシウム (Mg)、鉛 (Pb)、バリウム (Ba) などである。主成分の組成によってアルカリ石灰ガラス、鉛ガラスに分類されるが、アルカリ石灰ガラスは、さらに、カリウムを多く含有し、ナトリウムが少ないカリ石灰ガラスとナトリウムとカルシウムを多く含有するソーダ石灰ガラスに分類される。

着色成分組成による分類

紺、紺青、青、緑色のガラス玉は色調によってマンガン (Mn)、銅 (Cu) を含有していることが多い。これらの元素はガラスの着色に関与している。マンガンを含有する場合、本分析では検出限界値以下の0.05wt %以下の微量なコバルトも着色に関与している可能性がある。マンガンと銅成分が同時に1～3wt % (酸化物) 含有されている場合は少ない。紺、紫紺、紺青色の場合はマンガンを含有し、青、緑系統の色調の場合は銅を含有している。

アルカリ石灰ガラス玉は主成分と着色成分・色調で分類するとおおむね、1) カリ石灰ガラスで、マンガン (コバルト) 含有の紺色系ガラス玉と銅を含有する紺青・青・緑色系のガラス玉、2) ソーダ石灰ガラスも同様に、マンガン含有の紺色系ガラス玉と銅を含有する紺青・青・緑色系のガラス玉に分類される。ガラスの色調が類似していても、分析を行わなければ材質による分類はできない。ガラスの製造技術や流通などの検討にはガラスの色調だけによる区別ではなく、主成分と着色成分による分類が必要である。

(2) 更埴条里遺跡・屋代遺跡群出土のガラス

更埴条里遺跡・屋代遺跡群出土のガラス玉と鋳型付着ガラス、ガラス小片の分析結果は以下のように整理できる。

- ・ガラス玉試料の主成分は、すべてアルカリ石灰ガラスで、鉛ガラスは1試料もなかった。アルカリ石灰ガラスにはカリ石灰ガラスとソーダ石灰ガラスが存在した。
- ・ガラス玉5試料が4.5～19.4wt % (酸化物) のカリウム濃度を含有するカリ石灰ガラスで、8試料が4.7～20.7wt % (酸化物) のナトリウムを含有するソーダ石灰ガラスである。また、ナトリウム、カリウム濃度が低く、両者の分類できないアルカリ石灰ガラスが1試料存在した。
- ・ソーダ石灰ガラスの大部分はアルミニウムが11～15.9wt %と高濃度である。
- ・材質分類と時代との関係は、年代が不明な包含層からの出土試料が多く明確な傾向を考察できない。強いて言えば、ソーダ石灰ガラスは5世紀末から9世紀の遺構から出土している傾向がある。
- ・着色成分は青系統の色調を持つガラス玉の銅濃度が0.6～2.6wt %であるが、10試料が1～2.6wt %の範囲にあり比較的濃度が高い。
- ・着色には関係しない微量成分として、チタン、鉛、錫が検出された。チタンは鉄とやや正の相関があり、ケイ素やカリウム、ナトリウムなどの主成分原料に含有されていたものであろう。鉛濃度は2試料を除くと、銅の約20パーセント濃度で正の相関があり、意図的に調合されたものではなく、着色材として用いられた銅原料に含まれていた成分であろう。出土年代が異なるにも関わらず銅濃度と鉛濃度に正の相関があったことは、ガラスに含まれる微量な鉛を解釈する上で興味深い。
- ・ガラス鋳型と推定される鋳型の破損断面の穴内部に、青緑色のガラスと推定される付着物が認められた。形状を破損しないように取り出された針状の付着物は重量10mgで、ガラス玉分析と同じ方法で材質分析を

行った。定量の結果を表に示したが、材質の主成分はアルカリ石灰ガラスでソーダ石灰ガラスに分類されるガラスと判断される。青緑色の着色成分も従来のガラスの着色成分と矛盾がない。この分析結果と鋳型の観察からガラス玉加工の技術が考察できよう。

・ガラス玉の出土に比べ、平板なガラス片の出土例は少ない。試料の小片はガラス玉の破損片ではなく、平板な860mgの小片である。分析結果によれば主成分からアルカリ石灰ガラスでソーダ石灰ガラスに分類される。着色成分は透明感のある紺色の色調で、検出されたマンガン濃度は0.87wt%と比較的高い。また、主成分や着色成分から混入したとは考えられない濃度の亜鉛が0.36wt%、鉛1.24wt%が検出された。試料の詳細な出土状況は別項で記述されているが、中世～平安時代地層の下の包含層より出土していることから近世のガラスとは考えられず、「古代ガラス」の中で比較的亜鉛濃度が高い事例と考えてよいだろう。

謝辞

加速器による分析に協力いただいた東京大学原子力研究総合センターの羽鳥聡さん、中野忠一郎さんに感謝いたします。

参考文献

- 小泉好延・小林絃一 1996 「宝薬山古墳から出土したガラス玉の材質分析」『大田区立郷土博物館紀要』第7号
- 小泉好延・小林絃一 1996 「古代ガラスの元素分析」『第14回 PIXE シンポジウム予稿集』
- 小泉好延・小林絃一 1996 「PIXE 分析による古代ガラスの元素組成」『第13回日本文化財科学学会要旨集』
- 小泉好延・小林絃一 1999 「榎田遺跡より出土したガラス玉の材質分析」『榎田遺跡』長野県埋蔵文化財センター
- 小林直子・高橋春男・小泉好延・佐藤和朗 1992 「長野県大室25号噴出土の古代ガラス玉の見かけ密度と化学組成—完全非破壊法による定量化の試み」『大室古墳群』長野県埋蔵文化財センター
- 富沢威・富永健・小泉好延 1990 「有馬遺跡出土ガラス玉の材質分析」『関東自動車道地域文化財発掘報告書』第32集 有馬遺跡二
- 藤田等 1994 『弥生時代のガラスの研究』名著出版
- 伊藤彰 1997 『—ガラスにおける—「炎と色の技術」』アグネ技術センター

第4節 古代の漆・赤色関係資料

国立歴史民俗博物館

永嶋 正春

はじめに

屋代遺跡群・更埴条里遺跡（以降、屋代遺跡群と呼称）から出土した古代（奈良・平安時代）の資料の中には、漆や赤色顔料に関係した資料が見出される。それらの資料の持つ意味合いについて、少しでも客観的な情報を抽出することができれば、それらの資料とそれらが出土した遺跡の内容や性格を論ずる上で幾分かの参考になることが期待できる。

それらの資料は、土器に漆様のものが付着残存しているものや、土器片に赤色顔料が僅かに付着しているものであったりする。決して、典型的な漆塗り製品や赤色塗彩製品として捉えられるものではない。しかしながらその分、在地性の高い資料と理解することができるわけであり、古代における屋代遺跡群の生活と文化の一端を確実に示してくれる資料としてむしろ重要である。

以上のことを念頭に置きながら、屋代遺跡群出土の標記資料について概括してみたい。今まで多くの漆・赤色関係資料を調査してきた筆者の経験を踏まえた上で、光学顕微鏡による観察や蛍光 X 線分析をも実施したものがある。

1 漆関係資料

No.14 漆付着土器（須恵器杯 B III 屋代遺跡群 SD8021-20 図版330） 内面に、巻頭図版 4-1 に示したような塗膜状をした付着物が認められる。半光沢のある黒色を呈するもので、縦横に微視的なクラックを発生しており、器表面への付着は弱いものになっている。微片の周囲は浮き上がりを生じており、剥落寸前のものも多く認められる。かつては、恐らく内面のほぼ全面に付着していたのであろうが、上記の様な性状のため、その大半を逸失したものと理解できる。

全体的な外観性状は、本資料は漆の要具（用具）すなわち漆液容器と考えるべきものであり、須恵器本体への漆塗装ではない。外面に漆の付着が認められないのも当然である。残存する漆は、素黒目漆と判断されるが、クラックや浮き上がりの発生あるいは黒色味が強い様子からは弱い加熱（加温）があったことがわかるので、あるいは少量の生漆を弱く加温しながら黒目加工した容器である可能性も考慮する必要がある。

No.2 漆文字「十」のある土器（須恵器杯 B II 屋代遺跡群 S K8016-1 図版338） 外側面に「十」と記された土器である。黒色～褐黒色のやや光沢のある色調、肉盛りのある質感からは、墨書ではなく漆で書かれたことが明白な資料である（巻頭図版 4-2）。素黒目漆で書かれたものと判断される。なお筆勢からは、外底面側を文字の天として書かれたことがわかる。墨書ではなく“漆書土器”である点が注目される。

No.15 漆付着土器（土師器杯 A II 更埴条里遺跡 SK9259-2 図版332） 内面の一部個所を中心に、かなり艶のある黒色塗膜状物質が残存している（巻頭図版 4-3）。その色調やクラックの発生状況などからすると、熱で黒目られた漆が残存しているものと理解される点で、No.14の資料と同類のものとして判断される。無論現状の付着分は当初から見れば一部に過ぎず、大方の漆は剥落したものである。

No.27 紡錘車 (屋代遺跡群 SD7046 図版355) 一部が大きく欠けた石製の紡錘車であるが(巻頭図版4-4)、その欠けた面を含むほとんど全面に漆塗りが認められる(巻頭図版4-4・5)。加えて、欠けた面を中心にして孔から放射方向に通直性のある線状の圧痕が観察される(巻頭図版4-6)。これらの外観性状からすれば、この紡錘車に塗られた漆の意味合いは次のように理解される。すなわち、紡錘車的一端が大きく欠けた時点で、その割れ面に漆を塗って相互の接着固定をはかり、その仮固定と補強の目的で糸を纏いたものである。なお糸纏き後に全面に漆を塗り、糸の安定補強と面のなめらかさの回復を行っている。糸上の漆は薄いため大部分でその表面が開放され、繊維そのものの実質は腐朽消失したものと考えられるが、繊維の圧痕を漆に留めている状況が観察される(巻頭図版4-7・8)。使用されている糸であるが、圧痕で見える限りその太さは概ね0.15~0.3mmで、撚りはあったとしてもごく軽いものであり、また繊維の幅は、10ミクロン(0.01mm)前後と推定できることから、絹糸と見て間違いなからう。

その他の資料 以上の資料以外に、漆の要具として漆の付着を認めることのできる資料が少なからず存在するように観察されるが、一方では燻べや吸炭につながる資料も認められる。両者でその外観が近似するものもあり、それらを峻別するためにはさらに丁寧な調査が必要である。したがって今回の報告にあたっては、上記のような典型的なものにのみ留めておきたい。

2 赤色関係資料

No.19 内面に赤色顔料の付着した灰釉陶器片 (屋代遺跡群 SX 1 実測不可 古代8期後半~9期)

付着物はやや明るい柔和な赤色を示しており、朱の付着を予測させるものであるが、蛍光X線分析によって有意に検出された元素が水銀(Hg)であることから、予測通り朱(HgS、赤色硫化水銀)が付着残存したものと判断する。朱を解いた絵の具のパレットと考えるべきであるが、朱墨をおろした転用硯である可能性も考慮すべきであろう。金属顕微鏡で見える限り、朱の粒子は細かいものである。

No.21 内面に赤色顔料の付着した土器片 (屋代遺跡群 SK5746 実測不可 時期不明) 土器の内面に、良好な発色をした赤色顔料が付着している。蛍光X線分析で有意に認められる元素は鉄(Fe)であることから、ベンガラ(α -Fe₂O₃、赤色酸化鉄)と判断されるが、その粒子形態が問題となる。

金属顕微鏡で資料そのものを直接観察したものが巻頭図版4-9であるが、パイプ状をしたベンガラ粒子の存在が確認できる。なおごく僅かに採取した試料中に見られるパイプ状ベンガラ粒子を示したものが、巻頭図版4-10・11である。きわめて小さな土器片ではあるが、本土器片が古代範疇の資料であったとすれば、パイプ状ベンガラ粒子が検出された例としては、最も新しい時期のものにならう。ちなみに、長野県下で時代を最も遡ったパイプ状ベンガラ粒子の確認例は、今のところ縄文時代前期初頭になる^(註)。なお今回の調査において、パイプ状ベンガラ粒子の存在が確認された古代の赤色顔料(ベンガラ)関係資料は、原料様の資料を含めてもこれ1例だけである。赤色顔料の残存状況からは、土器に赤色塗彩したものとは考えがたい。おそらく赤色顔料のパレットとしての使用痕跡であろう。

その他の資料 岩石質を呈する赤色の小塊が数点検出されており、なかには比較的良好な赤色発色を示しながら、やや軟質で粉碎のしやすいものも含まれている。いずれも蛍光X線分析によって鉄系の赤色物と判断されているが、No.21に見られるほどの赤色の良好さには達しないものばかりである。したがって、仮にこれらを粉碎したとしても、最良質のベンガラ顔料にはなり得ない。

註 永嶋正春 1997 「川原田遺跡・下弥堂遺跡出土の赤彩資料、漆資料について」『川原田遺跡—縄文編—』御代田町教育委員会参照。

第8章 成果と課題

第1節 屋代遺跡群における古代の土器

—善光寺平南縁の7世紀前半～9世紀後半の土器編年—

屋代遺跡群・更埴条里遺跡（以下屋代遺跡群と呼ぶ）の発掘調査で出土した7世紀～11世紀の土器は、テンバコ数にして2,000箱以上にのぼる。時期別による遺構の粗密はあるものの、同一遺跡内において継続して土器の変化を追うことができる好資料群である。特に、7世紀後半～8世紀前半にかけては、紀年銘木簡が同一層位から出土し、いままで明確な根拠に欠けていた実年代について一定の見解を示すことができた。また、全県的に資料数の豊富でなかった7世紀後半～末にかけての良好な資料群も得ることができた。さらに、9世紀代の資料については、一定量の灰釉陶器が相伴しており、県内の編年研究の進んだ他地域との対比も可能となった。ここでは、屋代遺跡群で出土した土器の分析を通して、7世紀前半～9世紀後半までの土器編年を行う^(註1)。

1 時間軸の設定

県内の集落遺跡における古代の土器編年の時間軸の設定は、各遺跡においてもっとも出土量が多く変化がとらえやすい杯Aの形態変化、量的変化を基本にして作られたもののほか、杯Aのほかに甕等の変化も織り交ぜながら作られたもの等いろいろなものがみられる（堤1988、原1989、小平1990、寺島1991等）。今回、屋代遺跡群の土器の分析においては、杯Aの変化を基本に据えて時間軸を設定する。これまでの研究の中で明らかにされてきている杯Aの変化の方向とは次の4点である。

- ① 杯Aの主体は須恵器から黒色土器になり、さらに土師器へと移っていくこと。須恵器杯Aが主体になる前に、非ロクロ土師器の杯が主体になる段階があること。
- ② 須恵器杯Aの底部切り離し技法は、ヘラ切りから糸切りへと変化する事。
- ③ 須恵器杯Aの形態は、底径の減少と体部の傾斜を大きくする方向で変化する事（外傾指数が大きくなる方向で変化する事）。^(註2)
- ④ 土師器杯Aのみになる段階では、法量に縮小傾向がみられること。

さらに杯A以外の視点として、須恵器杯蓋Aは須恵器杯蓋Bより早く出現することも加え、これらの変化の流れにそって屋代遺跡群で今回出土した良好な資料群を並べると、層位的にも切り合い関係の上からも、さらに相伴する灰釉陶器の編年観からも矛盾しないことがわかった。

そこで、今回出土した良好な資料群を上記の杯Aの変化をふまえてならべ、「古代～期」と呼んで古代の土器の時間軸とすることとした。なお、各期の特徴をより明確にとらえやすくするため、非ロクロ土師器、須恵器、黒色土器、土師器の各遺構における組成比も加味したが、これは杯Aのみではなく食膳具全体におけるそれぞれの比率を採用することにした^(註3)。また、各遺構の組成比は重量比で計算し、個体数による組成比は参考程度に扱ったが、おおづかみにみるならばおおむね同様の傾向を示すと考えている。個々の土器の出土状況は個別に参照しながら検討した。なお、今回、屋代遺跡群出土土器の分析にあたって新しく導入した方法は、次の2点である。

① 糸切り底の須恵器杯 A の形態変化を、外傾指数や外面の底径の変化によってつかもうとしたのではなく、内面の底径を計る事によってつかもうと試みたこと^(註4)。

② 須恵器杯 A の質（胎土と焼き）の変化を編年上の時代を画する重要な指標と考え、特に軟質須恵器の登場に着目し、その定義を明確にして細分を行い利用したこと^(註5)。

以下に各期を設定した基本的特徴（定義）を示す。これまで述べてきたように、各期の特徴は、杯 A の変化を基本に置きつつ食膳具全体に見られる動向を考えて設定したものである。（ ）内はその期の良好な資料を持つ遺構である。屋代遺跡群出土資料で十分でない時期の資料については屋代遺跡群にできるだけ近い他遺跡の資料を参考にしている。

古代 0 期： 食膳具の主体は非ロクロ土師器のみの段階で、歴史時代的須恵器（須恵器杯蓋 A、杯 G、杯 A、杯 B 等）はともなわない段階。非ロクロ土師器杯 C 類、I 類が主体をしめる^(註6)。

（長野市中条22号住、長野市屋地II A15号住）

古代 1 期： 食膳具の中に歴史時代的須恵器（以後須恵器と呼ぶ）が登場する段階。須恵器杯蓋 A を組成にもつ段階で須恵器杯蓋 B との共伴関係により前半と後半にわかれる^(註7)。

1 期前半： 須恵器杯蓋 A のみで、須恵器杯蓋 B は組成に加わらない段階。

（SD7065=SD7067=SD8044 4～5層=SD8049、高速道篠ノ井 SB7249、更埴市諏訪南沖III15号住）

1 期後半： 須恵器杯蓋 B が登場し、須恵器杯蓋 A と共存する段階。

（SD7058、SD7062・SX7037、SD7048=SD7057=SD8044 1～2層）

古代 2 期： 食膳具の主体は須恵器がほとんどで、須恵器杯 A はすべてへら切り（手持ちへら削り、回転へら削り、へら切り後ナデ等も含む）の段階。須恵器杯蓋 A はなくなり須恵器杯蓋 B のみになる^(註8)。

（SD7030、SD7032=SD8028 3～5層）

古代 3 期： 食膳具の主体は須恵器で、須恵器杯 A にへら切りと回転糸切り（以後糸切りと呼ぶ）が共存する段階。へら切りの方が糸切りよりも多い。糸切りの須恵器杯 A の内面底径の平均は 7 cm 中ごろ～7 cm 後半以上に集中する。

（新幹線更埴条里 SB5054、同 SB5052、同 SB5055、新幹線屋代 SB6052）

古代 4 期： 食膳具の主体は須恵器で、須恵器杯 A にへら切りと糸切りが共存する段階。糸切りの方がへら切りより多い。糸切りの須恵器杯 A の内面底径の平均は 7 cm 台～8 cm 台に集中する。

（SB6099、SB5104、新幹線更埴条里 SB5016、同 SB5035、同 SB5042、長野市屋地II A2号集石）^(註9)

古代 5 期： 食膳具の主体は須恵器だが、黒色土器が増え始め、その比率は 2 割前後以下の段階。須恵器杯 A は糸切りのみとなり、その内面底径の平均は 6 cm 末～7.5 cm 前後に集中する。

（SB6116、SB5033、SB6038、SB6086、SB6104）

古代 6 期： 食膳具における須恵器の比率が低下し、黒色土器が増大して、その比率が 2 割前後～4.5 割前後の段階。須恵器杯 A の内面底径の平均は 5 cm 後半～6 cm 後半に集中する。

（SB9006、SB65、SB9077、SB9073、SB9059、更埴市馬口II23号住、SB3031、SB3016、SB63）

古代 7 期： 食膳具の主体は黒色土器になり、その比率が 4.5 割前後以上の段階。須恵器杯 A（含、軟質須恵器杯 A）の内面底径の平均は 5 cm 後半～6 cm 前半に集中する。須恵器杯 A の胎土と焼きが明らかに悪くなり、須恵器の質 A タイプと B タイプ（軟質須恵器）が 6 期まで主体だった硬質の D タイプの量を圧倒するようになる^(註10)。出土量が豊富な場合黒色土器の比率が 6.5 割前後を境に前半と後半とに分ける場合もある。

（SB9084、SB4009、SB5053、SB4504、SB72、SB3014、SB51）

古代8期： 食膳具の主体は黒色土器であるが、新たに土師器の食膳具が登場し、須恵器がわずかに残る段階。黒色土器の方が土師器より多い。須恵器杯A（含、軟質須恵器）の内面底径の平均は古代7期よりも大きめになり、ばらついた値を示すようになる。遺跡を広範囲におおう9世紀後半の洪水砂の上下により、前半と後半とに分ける^(註11)。洪水時の食膳具における土師器の比率は「1割～3割」前後である。

(SB41、SB9067、SB9050、SB8、SB9043・・・以上8期前半 SB861、SB848・・・以上8期後半)

『古代1編』で扱う土器の対象は古代0期～8期前半までとなり、8期後半以降は『中・近世編』の対象となるが、『古代1編』では8期後半も含めて8期として記述する。

2 食膳具の変容（編年表1・4）

(1) 須恵器

A. 杯A（編年表1）

古代1期前半に出現し、1期後半から須恵器杯Bとともに食膳具の主流をなす。2期までの底部整形はすべてヘラによるもので（ヘラ切り、手持ちヘラ削り、回転ヘラ削り、ヘラ切り後ナデ等で、以後ヘラ切りと呼ぶ）回転糸切り（以後糸切りと呼ぶ）はみられない。3期になって底部整形に糸切りのものが出現する。この段階ではヘラ切りのものが糸切りのものより多い。4期になってヘラ切りと糸切りの比率が逆転し、糸切りのもののほうが多くなる。5期になるとヘラ切りはすでになく、糸切りのみとなる。糸切りの杯Aは、時期の変化に応じて、内面の底径が明確に縮少する方向で変化する。これは、器の容量の変化と関連が深いと思われるが、ヘラ切りの杯Aにはみられない大きな特徴であり、編年の大きな指標の1つとなる。この糸切りの杯Aの内面底径の変化を各時期ごとにまとめると図113のようになる。

量的変化、質的变化 杯Aの食膳具にしめる量的な問題は、1期前半の出現期には量的に少ないものの、1期後半から飛躍的に増大し、6期まで食膳具の主流をしめる。7期は、黒色土器の増大にともない主流の座をゆずり、減少をつづけ、8期は食膳具のごくわずかの部分をしめるまでに衰退し、この段階をもって消滅する。また減少に転じようとする転換点になる6期から、明らかに質（胎土と焼き）に粗悪化の傾向がみられる。具体的には、6期に、それまでの質のいい硬質の杯A（須恵器の質Dタイプ）に混じって灰白色系のもろい胎土で器面にさわると、白い粉状のものが手につくような弱々しい（もろい）胎土をもつものがあらわれてくる（須恵器の質Cタイプ）。明らかに胎土の質の低下がうかがわれる。このCタイプの杯Aは、6期を中心にみられる特徴的なものである（編年表4）。次の7期には、胎土と焼きの粗悪化がさらに進行し、劇的な変化となって表れる。それは、灰白色を呈し従来もっていた胎土の緻密さも硬さも無いもの（須恵器の質Bタイプ）や、さらに、黒斑をもつもの（須恵器の質Aタイプ）が出現しそれらが須恵器杯Aの半分以上を確実にしめるようになるのである（編年表4）。この質の変化は編年の大きな指標の1つになる。また、A、B、C、Dの中間的な要素をもつものも散見される。それらをどちらのタイプに入れるかについては迷う場合も多いが、6期には、CタイプとDタイプの中間型がよくみられ、7期には、B

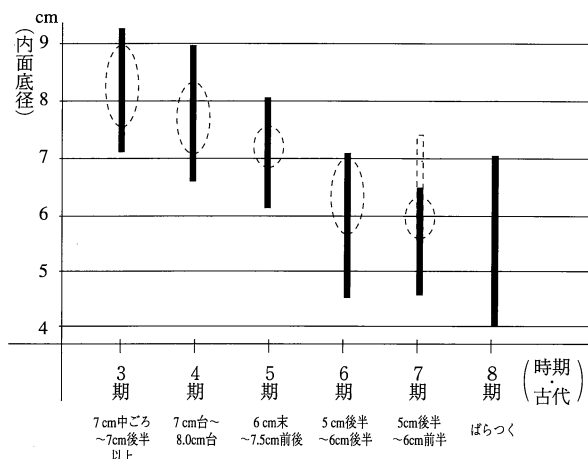


図113 糸切り底の須恵器杯A、内面底径平均値の時期的変化

— 内面底径の分布範囲
 ○ 内面底径の平均値の分布範囲

タイプとDタイプの間中型がよくみられる。

底部調整がヘラ切りの杯Aの特徴 底部調整がヘラ切りの杯Aは、1期前半から4期まで見られるが糸切りの杯Aと違い形態は多様で(箱型、逆台形型、逆台型で深いもの=深型、椀型等)、時期ごとの変化が乏しいため編年の指標として形態変化をつかむことは難しい。しかし、ある程度の時期幅をもたせた中でなら、特徴的な器形、調整をもつものを指摘することが可能であるため以下に述べる(図114)。

① 須恵器杯A出現期の1期前半～後半にかけて、他の時期にはあまり見られない独得な器形をもつものがみられる。具体例をあげると以下ようになる。

ア 底部を回転ヘラ削りし、立ち上がりの急な深い器形をもつもの。1期前半のSD7065に1例確認できる。

イ 体部中位にへこみをもち、口縁部にかけて内わんするもの。底部は手持ヘラ削り、腰部は回転ヘラ削りである。1期後半のSD7062に1例確認できる。

ウ 器壁が厚く、口径が小さめで(12cm前後)器高が低い器形(3.5cm前後)をもつ。重くこぢんまりした、平べったい器の印象をもつもの。1期後半のSD7049と2期(第3水田対応層)のSD7032に1例ずつ確認できる。1期後半の清水古墳にも類例がみられる。

エ 口径は小さめで、底部が厚く、口縁端部が明瞭に内わんしながら終息するもの。1期後半のSD7045と2期(第3水田対応層)のSD7030に1例ずつ確認できる。

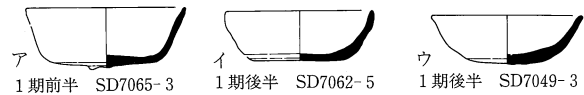
② 底部の一部分がとびだした器形をもつものは、1期後半を中心にその前後の時期にみられる。底部のとび出し方は2種類あり、a 底部全体がでっぱるもの(オ・カ) b 底部の中央部がでっぱるもの(キ・ク・ケ)に分けられる。

③ 体部が明瞭に外わんするものは、1期後半からみられはじめ(コ)、2期に顕著にみられる(シ)。外わん傾向は内面により顕著にみとめられる。他方で体部が外わんせずにまっすぐにのびる形態の杯Aも存在し、両者が共伴する。また、この外わん傾向は、3期にはみられなくなり、1期後半から2期までの大きな特徴となる。(まれに3期に小片で外わんするものがみられる場合もある。)

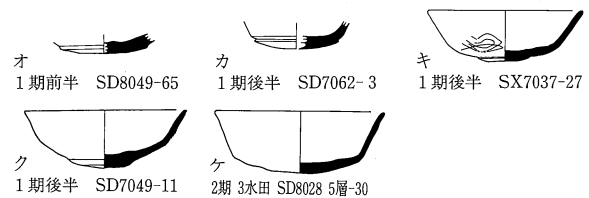
④ 底部中央部に小さな円形の平坦面を残すように整形するものは1期後半から2期にかけて多く確認できる(ス・セ)。それ以降では4期の新幹線更埴条里SB5042で1例確認できた。

⑤ 底部に④よりはるかに大きい平坦面を作り、腰部をナデ調整するもの(したがって腰部のところへへこみがみられる器形になる)は、1期前

① 独特な器形をもつもの(ア～エ)



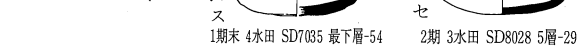
②-a 底部全体がでっぱるもの(オ・カ)
②-b 底部中央部がでっぱるもの(キ・ク・ケ)



③ 体部が外わんするもの(コ・サ・シ)



④ 底部に小さな平坦面をもつもの(ス・セ)



⑤ 底部に大きな平坦面と腰部のくぼみをもつもの(ソ～ニ)

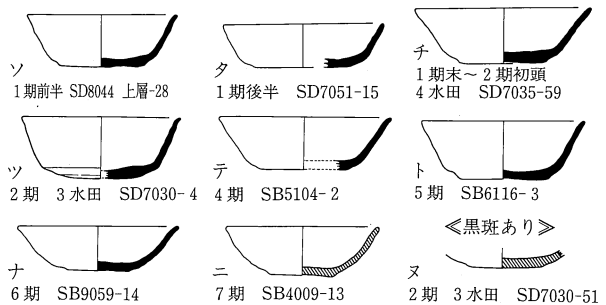


図114 特徴的な器形・調整をもつ須恵器杯A

3水田は第3水田対応層の略

S = 1 : 6

4水田は第4水田対応層の略

半からわずかにみられはじめ(ソ)、2期では各遺構に複数みられるようになる。また、この腰部にへこみのみられる器形は、底部に回転糸切りが登場する3期以降の杯Aにもみられ、少数ではあるが6期までは確認できるため、有力な編年の指標とはなりえない。また、7期前半もSB4009(ニ)には、わずかに痕跡でいどにへこみが残る(ソニ)。

- ⑥ 2期までは形態は多様だが3期、4期になると椀型、箱型、深型の数が減り、糸切りの形態に一般的な逆台形のものが多めになってくる。

器形、整形、焼成等における特徴

- ① 口径が14cmをこえるものは、1期末(第4水田対応層)から確認できる。1期前半～1期後半(第5水田対応層)のものの中には、口径が14cmをこえるものは確認できなかった。
- ② 黒斑をもつもの(須恵器の質Aタイプ)は、7期に急増するが、その初期の例が2期(第3水田対応層)のSD7030-51とSD8028 3～5層に1例ずつ確認できる。6期まで継続して確認例がある。量的には非常に少ない(編年表4 図114-ヌ)。
- ③ ヒダスキをもつものは編年表4に統計値を示したとおり、2期末～3期にみられ始め5期まで一般的にみられる。各遺構における出土の割合は、約半分前後といったところである。6期の初頭でわずかにみられるものの、6期の中で急激に減少し、7期以降はまったくみられなくなる。6期でも後半段階にみられるヒダスキは太くうすめなものが多く、それ以前のもは、そういった例も見られるが、ピシッと器面に焼きついた感じをうけるものも多い。
- ④ 底部整形が、回転へら削りのものは1期前半から、手持へら削りのものは1期後半から確認でき、これのみで編年上の指標とするのは難しい。
- ⑤ 静止糸切りは、4期に確認例が多い。

色からみた特徴 標準資料とした遺構の杯Aを色によって分類したものが図115である。量が莫大になるため、全体的な傾向がつかみやすい遺構のみ図化した。色の種類は以下のように分類した。

- ① 暗灰色系(暗青灰色、暗緑灰色、黒褐色も含む)

N系、2.5Y系の3/1～2/1^(註12)くらいの暗く感じる胎土をもつもの。見た感じが暗っぽくみえるもので、中には黒びかりするような胎土のものもある。

- ② N系(青灰色、緑灰色も含む)

赤味のない灰色又は青灰色や緑灰色の胎土をもつもの。N、10G、10BGの6/1～4/1くらいの胎土をもつもの。

- ③ 2.5Y系

やや赤味がある灰色や灰オリーブ、黄灰、灰黄色などの胎土をもつもの。7.5Y、5Y、2.5Yの6/1～4/2くらいの胎土をもつもの。

- ④ 灰白色系

白っぽい胎土をもつもの。赤味を感じないものも多い。N、10G、10BG、7.5Y、5Y、2.5Y、10YRの8/1～7/2くらいの胎土をもつもの。

- ⑤ 橙色系(なまやけ系)

なまやけ状態で焼かれたもので橙色系の胎土をもつもの。部分的ななまやけ状態のため部分的にN系、2.5Y系等の色が混じるものもある。10YR、7.5YR、5YR、2.5YRの7/4～6/8くらいの胎土をもつもの。

- ⑥ その他

暗赤灰色系 紫灰色系











































































時期	遺構	暗灰色系	N系	2.5Y系	灰白色系	橙色系(なまやけ系)	その他
1期前半	SD 8049						
	SD 8044						
	SD 7065						
1期後半	SD 7058						
	SD 7045						
2期	SD 7030 下層						
	SD 7032						
3期	SB 4228						
4期	SB 6036						
	SB 5104						
5期	SB 6116						
	SB 6104						
6期	SB 65						
							
							
7期	SB 4009						
							
8期	SB 9067						
							
							
							

図115 須恵器杯A、色調別時期的変化

色からみた特徴は以下のようである。

- ① 古代0期から8期までの杯Aにみられる色は、暗灰色系、N系、2.5Y系、灰白色系の4種を基本とし、これになまやけ状態の橙色系が加わって構成される。
- ② 各遺構では、これらが2～3種類ずつ組合わさって出土し、まれにそれ以上の組み合わせになる場合もみられる。これは、各遺構内において明確な色の違いとして意識され、ほとんどN系で占められる杯Gとは明確な対象をなす。
- ③ 基本4種は古代0期からみられ、なまやけ系も0期からみられる（古墳時代の須恵器では古墳5期～古墳8期の資料になまやけ系は未確認である）。
- ④ 6期から各遺構内において、N系と灰白色系の比が増大し、暗灰色系、2.5Y系は少なくなる。
- ⑤ 7期になると、須恵器の質Aタイプ、Bタイプがめだって増加するため灰白色系の比率が非常に高くなる。この傾向は8期も同様である。
- ⑥ ある時期に特徴的にみられるものについてあげると以下のようになる。

ア なまやけ系とは違い暗赤灰色、にぶい赤褐色（5 YR5/3）を示すものが2期にみられる（SD 7030-14・22・37）。

イ 青紫灰色系（5 PB6/1、5/1）は7期に特徴的にみられる（SB4009-6）。（土識帳には青灰色の範ちゅうになっているが、青灰色でもN系とは明らかに違うため、この色の表記にした。）

B. 杯H（編年表1）

5世紀からみられる器種である。古代1期前半までは確実に出土例がみられ、1期後半の遺構からも僅かではあるが出土例が確認できる。屋代遺跡群は溝からの出土例が多いため混入の可能性も考えなければならぬが、古代2期には完全に消滅していると思われる。形態変化を明確につかむために、古墳7期併行（図化したのは6世紀中ごろの資料）と古墳8期（6世紀後半～7世紀初頭）の出土例も参考にしながら考えることにする。屋代遺跡群出土の杯Hを色別、形態別に分けたものが図116である。

形態からみた特徴 杯Hの形態は明瞭に2系統に分けることができる。形態a、形態bと呼んで区別し説明する。

形態a…… 受け部に比して、立ち上がり部が短く、内傾度も強いタイプである。比較的厚手のまま変化しする。5世紀から連続して系譜のおえるタイプである。

形態b…… 受け部に比して、立ち上がり部が長く、内傾度も形態aに比べると弱く、上方へ立ち上がるタイプである。厚手のものから1期前半には薄手のものへと変化する。新たに登場するタイプで5世紀以来の系譜はおえない^(註13)。

色については、両形態ともほとんど全ての色合いをもっている。古代0期～1期前半前葉までは形態aが多く、1期前半に形態bが増えるようである。形態a、形態bともに1期後半まで継続してみられる。

法量からみた変化 時期が新しくなるほど口径が小さくなる方向で変化していく。屋代遺跡群に近い他遺跡の例も参考にしながら口径の変化をグラフ化したものが図117である。口径は口縁部の先端から先端までで計測してある。

この表と杯蓋Hの法量、さらに、善光寺平から僅かに離れた地域での資料をも頭におきながら、各時期の法量の目安を考えると以下のようになる^(註14)。

古墳8期……9.3cm前後～14.0cm前後

古代0期……9.0cm前後～11.5cm前後(想定)

古代1期前半……8.0cm前後～10.5cm前後

古代1期後半……8.0cm前後～10.5cm前後

時期	色	暗灰色系	N系	2.5 Y系	灰白色系	橙色 (なまやけ系)	器壁
TK10型式 (古墳7期併行)				11.2 SB6024			厚手のものが多い
古墳8期			11.6 SB6003	形態a 13.0 SB6070	13.8 SB6070	形態b	
古代0期 1期前半前葉				10.2 SB6111-6		9.5 SB6027-3	
古代1期前半		8.7 SD8049 4層-71	8.7 SD8049-67 10.4 SD8049 4層-72	8.4 SD7065 上層-22 8.5 SD7065 上層-24 9.8 SD8044 下層-53			薄手のものが多い
古代1期後半		(9.0) SD7046-46	8.6 SD7056 最下層-8				

図116 須恵器杯H、色調別・形態別時期的変化 口縁部上の数値は口径(cm) S=1:6

また、古墳8期は厚手のものも多く、古代1期前半と後半は薄手のものが多い。古代0期はこの期に限定できる資料はないが、古墳8期と古代1期前半の特徴をもつものが、混ざりあいながら出土すると考えられる。しかし、この期独自の特徴を抽出することは難しい。

C. 杯G (編年表1)

畿内周辺では、すでに古代0期には確実に出現している器形である。それらの地域からの搬入により、古代1期前半かそれより古い段階に、まれにごく少数出土する場合も想定される。しかし、集落内で一般的にみられ始めるのは古代1期前半からである。洪水砂でパックされた溝の資料によると(図118)、第4水田の洪水砂でパックされた段階までは複数の遺構から確実な出土例があり、第3水田対応層のSD7030でも僅かにみられる。第3水田対応層の段階ではこの遺構以外に出土例がなく、明らかに形態的に古いものがみられ、混入の可能性が非常に高いため、杯Gの存続は第4水田対応層にあたる2期初頭までと考えておく。

形態としては、全時期を通して①平底で台形または四角形の角張った形のもの、②でっぱった底をもつもの、③丸底のものがみられる。法量からみると、1期前半には口径8.5cm~10.5cmの小さなものが多い。1期後半から口径10.5cm~11.5cm前後の大きな法量のものもみられるようになり、10.5cm以下の小さなものと共存する。口径10.5cm以上の大きなものは新しい要素といえることができる。色からみると、どの時期にもN系のものが非常に多いのが特徴であり、同じ食膳具の須恵器杯Aが多様な色あいをもつとは対症的である。底部調整については、回転ヘラ削り、手持ちヘラ削り、ヘラ切り、ヘラ切り後ナデといった種類がみられるが、どの時期にも多様にみられ、編年上の指標にはなりえない。

D. 杯B (編年表1)

古代1期前半に出現する。出現期は量的に非常に少ない。1期後半から増加し、須恵器杯Aとともに食膳具の一角を占める重要な器種となる。この器種の大きな特徴として、法量の分化が非常に顕著なことがあげられる。法量による分類の基準は、表84のように行った。すでに、1期後半の段階で、ここに分類した全ての法量の遺物が確認でき、また、1期末~2期初頭の第4水田対応層のSD7035、2期の第3水田対応層のSD7030では同一遺構内において、すでに4法量にも分化している。同一遺構内にお

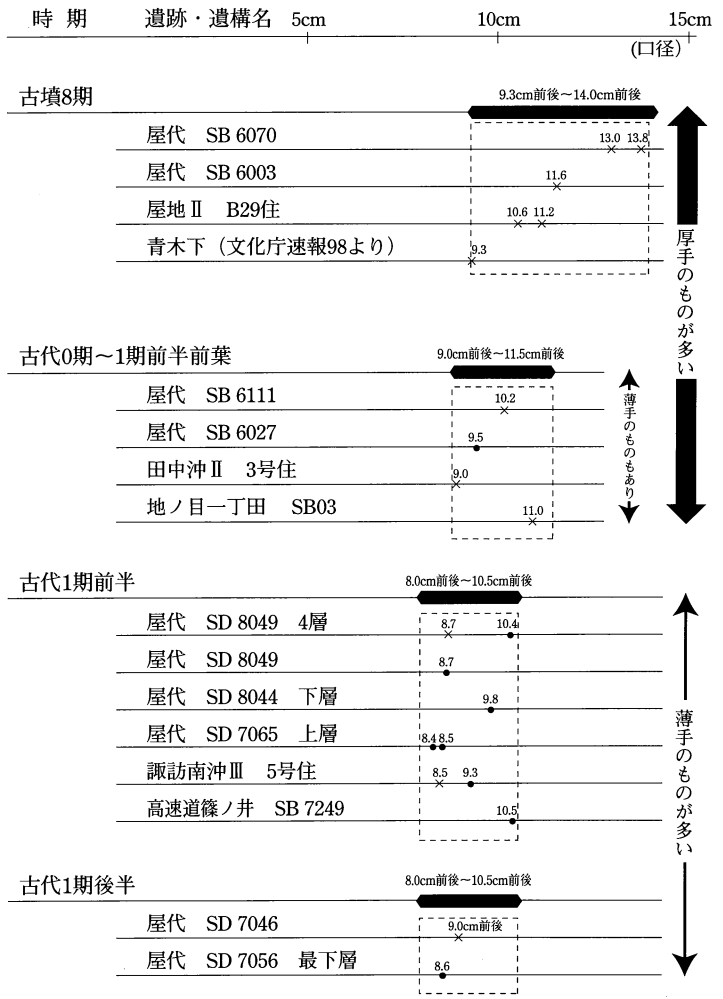


図117 須恵器杯H、法量の時期的変化 (口径) ×印・・・形態a
•印・・・形態b

表84 杯Bの法量による分類

	口径	器高
B VI	8.0~9.9cm	A
B V	10.0~11.9cm	A or B
B IV	12.0~13.9cm	B
B II	14.0~15.9cm	
B I	16.0cm~	
B III	14.0~18.0cm	6.0cm前後~7.5cm前後のA

器高の項のA、Bの説明
A…口径の割に器高の高い一群
B… // 低い一群

形態等		平 底	でっぱった底	丸 底	その他	遺構	口 径		
時期	小さい杯G						大きい杯G	径	
							8.5cm	10.5cm	11.5cm
5 水田の洪水砂によりパッケ	古 代 1 期 前 半					SB 4217			
				 		SB 5096	8.6	9.4	9.7
						SD 8049		10.1	
						SD 5044	9.6	10.2	
				 		SD 7065	8.9	9.3	
	1 期 後 半					SD 7042			
						SD 7046		10.4	11.6
						SD 7048	9.8		
						SD 7049	10.0	10.3	
		 		 		SD 7051		11.1	11.5 11.3 11.6
4 水田の洪水砂によりパッケ	1 期 末 2 期 初 頭					SB 4205			11.4
						SD 7047		10.8	
						SD 7036	9.2		
						SD 8038		10.5	
						SD 7035		11.0	
					SD 7038			11.3	
3 水田の洪水砂によりパッケ	2 期					SD 7030	9.7	10.8	11.6
							すべて混入の可能性大		

図118 須恵器杯G、法量の時期的変化

右下の文字は色を示す。 S=1:6

る法量分化としては、従来知られている県内の例では最も早い。

各期の特徴 古代3期、4期については、屋代遺跡群には良好な資料が少ないため、近隣の遺跡の出土資料を参考にした。各期の特徴をわかりやすく図120に図化した^(註15)。

古代1期前半

この期に出現する。量的に少ない。SD8044-55に定形化されない例が1点のみみられる。

古代1期後半

急増する。高台の形は定形化されず、多様なものが多い。外に踏ん張った形が多く、平面接地のものはやや多めで、次に内面接地が続く。外面接地は少ない。高台底面に溝状の窪みをもつものも少量ある。高台径は広い。底部が高台底面よりとび出す形態もみられる。杯部の器形は逆台形に定形化されたものも多いが定形化されないものも多い。黒光りするような固い焼きのものや精選された緻密な胎土をもつものが多い。また、量は少ないが内外面を黒色塗彩するものがこの時期にめだってみられる。

古代2期

量的に多く、杯Aとともに食膳具の重要な一角をになう。高台の形は定形化されず多様で、外にふんばった内面接地のものが多い。平面接地、外面接地のものは少ない。高台底面に溝状の窪みをもつものも散見される。高台径は広い。底部が高台底面よりとび出す形態もみられる。杯部の器形は例外を除いて逆台形に定形化される。胎土や焼きについては、1期後半の特徴を引き継ぐが、混和材として白い微粒子が1期後半のものよりやや多めに混入されるようになり、以後もこの傾向は続く。

古代3期

食膳具の重要な一角をになう食器にはかわりないが須恵器杯Aに比べると量的に少なくなる。この傾向は以後もずっと続く。高台の形は四角形のものが多くなり、多様な形態のものは少なくなる。外に踏ん張る平面接地または平面接地に近い外面接地が多くなる。2期に多かった内面接地は非常に少なくなる。高台径は広いものが多いが2期に比べやや小さくなり始める。底部が高台よりとび出す形態は非常に少ないがまれにみられる。高台底面に溝状の窪みをめぐらすものが多くなっていく。底部外面に糸切の痕跡が小さく残るもの(aタイプ)がみられはじめる。

底部の糸切のタイプをその大きさによりa、b、cに分けると以下のようなものである(図119)。これは杯Bを底面から見た図で、2重円は高台部を示す。斜線部は糸切りの範囲を示す。

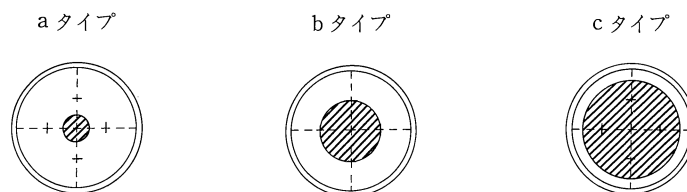


図119 須恵器杯B、底部糸切りの範囲

古代4期

高台の形はやや外に踏ん張った明確な外面接地が多くなる。3期に引き続き平面接地、平面接地に近い外面接地も引き続きみられる。多様な高台は例外的になり、高台底面に溝状の窪みをめぐらすものが多い。高台径は縮小化傾向だが、まだ大きめで、底部が高台の底面よりとび出す形態をもつものはなくなる。底部外面に糸切りが小さく残る例(aタイプ)も見られるが、全面を回転ヘラ削りするものが多い。

古代5期

高台の形は、やや外に踏ん張るかストンと垂直に落ちる形で、高台底面に溝状の窪みをもった明確な

外面接地が多い。高台径の縮小化傾向が引き続きみられ、大きめのもの、小さめのものが混在してみられる。底部外面を全面回転ヘラ削りする例もあるが、小さめの糸切りを残すもの(aタイプ)や、新たにやや大きめの糸切りの残るもの(bタイプ)がみられ始める。

古代6期

食膳具に占める量は、須恵器杯Aに比べればはるかに少ないが、少ないながらも各法量のものをもっている。高台の形は、5期に定形化したものを引き継いでいる。杯部の形や高台の形に明らかに定形外のものがみられるようになる。高台径は縮小化傾向が続き、やや大きめのものもある反面、めだって小さいものも目につく。底部外面を全面回転ヘラ削りする例もあるが、糸切りの残存例が小さめのaタイプや、やや大きめのbタイプに加えて、高台接地部近くまで大きく残るcタイプも出現する。固い焼きで、緻密な胎土をもつものがある反面、粗悪化した胎土や器面にヌタ状のものが残り、明らかに胎土の質の低下がみられるもの(須恵器の質Cタイプ)もみられる。また、焼きの質の低下により灰オリブ系(7.5Y6/2or5/2)の甘い焼きで、硬度の落ちたものがみられ始める。

古代7期

非常に少なくなり、この期をもって消滅する。個体数の減により、個々の特徴を抽出するのは困難である。

編年上の際だった特徴 各時期の特徴は、各時期にまたがってだぶるものが多いため、単品でみた場合3～4時期の時期幅で考えざるをえないのが現状である。そんな中で特に、時期をより限定できると思われる特徴についてのみ以下に記す。1期前半と7期については資料が少なすぎるため検討の対象から外した。

- ① 高台径が広く明確な内面接地のものは、1期後半～2期に多い。
- ② 高台径が広い平面接地または外面接地のものは、1期後半～3期にみられる。
- ③ 高台底面に溝状の窪みを持ち、平面接地または外面接地の高台をもつものは3～6期に多いが、その中でも、
 - ア 高台径が特に広いものは3～4期的である。
 - イ 高台径が特に狭いものは5～6期的である。
 - ウ 特に6期には高台径が極端に狭いものがみられる。
 - エ 中間的な高台の幅のものは(例 3期の新幹線更埴条里SB5052、6期のSB9077等)、3～5期を通してみられ、6期にも若干みられるため、高台径だけからの時期の限定は難しい。
- ④ 定形化されない多様な高台をもつものは、1期後半～2期に多い。また、定形化されない逆台形以外の杯部をもつものは、1期後半に多い。また、それらは6期にもみられるが、底面の調整、胎土、焼き、高台径の特徴によりおおかたは区別がつく。
- ⑤ 底部が高台底面よりとび出す形態をもつものは1期後半～2期に多くみられ、3期にはごく僅かになる。
- ⑥ 底部外面に糸切りの痕跡が残るものは3期からみられるが、その痕跡が、
 - ア 小さめなaタイプは3期～6期を通してみられ、
 - イ やや大きめなbタイプは5期～6期、
 - ウ 大きいcタイプは6期からみられる。
- ⑦ 胎土に質の低下や焼きに甘さがみられるものは6期に多い。
- ⑧ 内外面を黒色塗彩するものは、1期後半を中心にみられる。
- ⑨ その他

杯BIVで口径12cm台で高さが3.2cm前後の背の低い一群が3期、4期にみられる。それら一群は、高

時期(古代)	高台の形					器形			糸切り痕の残り方
	内面接地	平面接地	外面接地	高台の定形化の程度 (多様な例)	高台底面のくぼみの有無	高台径	底部のでっぱり の有無	杯部の定形化され ないものの有無 (定形化以外の例)	
前1 半期									
1 期後半	やや多い 	やや多い 	少ない 	多様なものが多い 	少ない 	広い 	 有	定形化されないものが多い 	
2 期	多い 	少ない 	少ない 	多様なものが多い 	少ない 	広い 	 有	逆台形にほぼ定形化 (定形化されない例) 	
3 期	非常に少ない 	多い 	多い 	多様でなくなり、ほぼ四角形に 定形化される (多様な例) 	増加 	広いが、やや小さめになる 	 ごく少	逆台形にほぼ定形化	糸切り aタイプ出現 2重円は高台を 示す。 斜線は糸切りの 範囲を示す。 小さく残る
4 期	ごくまれ 	多い 	多い 	多様なものは例外的 (多様な例) 	多い 	縮小傾向だが、まだ大きめ 	無	同	
5 期	ごくまれ 	少なめ 	非常に多い 	多様なものは例外的 (多様な例) 	非常に多い 	縮小傾向、大小混在 	無	同	糸切り bタイプ出現 やや 大きめに残る
6 期	少 	やや多い 	多い 	多様なものがふえはじめる (多様な例) 	多い 	縮小傾向続く 大きめのものも少しある 	無	定形化されないものが散見 (定形化されない例) 	糸切り cタイプ出現 大きく 残る 胎土の 粗悪化 焼きの 低下
7 期							無		不 明

図120 須恵器杯B、時期的変化

台径が同時期のもの比べて小さい(例 新幹線屋代 SB6052、新幹線更埴条里 SB5016)。

E. 杯蓋 H (編年表 1)

資料数が少なく、はっきりとしたことは言えない。代表的なものを 5 例図示した (図121)。古代 0 期～1 期前半前葉または 1 期前半の例では、腰部にややはっきりした凹線をもつものもあるが、痕跡程度のものみられる。1 期後半の例では腰部にみられていた凹は痕跡程度のものになっている。屋代遺跡群出土資料をみる限り、薄手のみはみられない。杯 H の蓋というセット関係でみた場合、時期が新しくなるにつれて口径が小さくなるであろうという予測がたつ。屋代遺跡群に近い遺跡での出土例を加えながら口径の変化をグラフ化したものが図122である。この表と杯 H の法量を参考にしながら各時期の法量の目安を考えると以下ようになる。

古墳 8 期……10.5cm前後～15.0cm前後 (杯 H から想定)

古代 0 期……10.0cm前後～12.5cm前後 (想定)

古代 1 期前半……9.0cm前後～11.5cm前後

古代 1 期後半……9.0cm前後～11.5cm前後

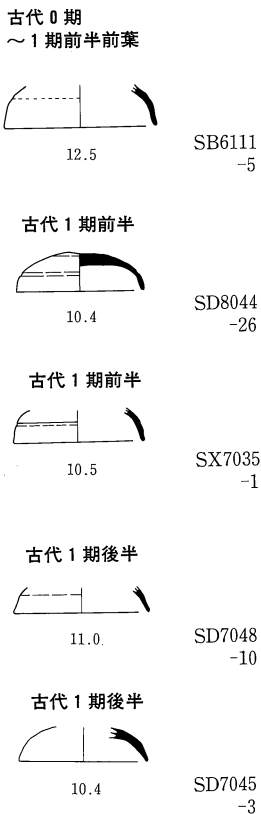


図121 須恵器杯蓋H
数値は口径(cm) S=1:6

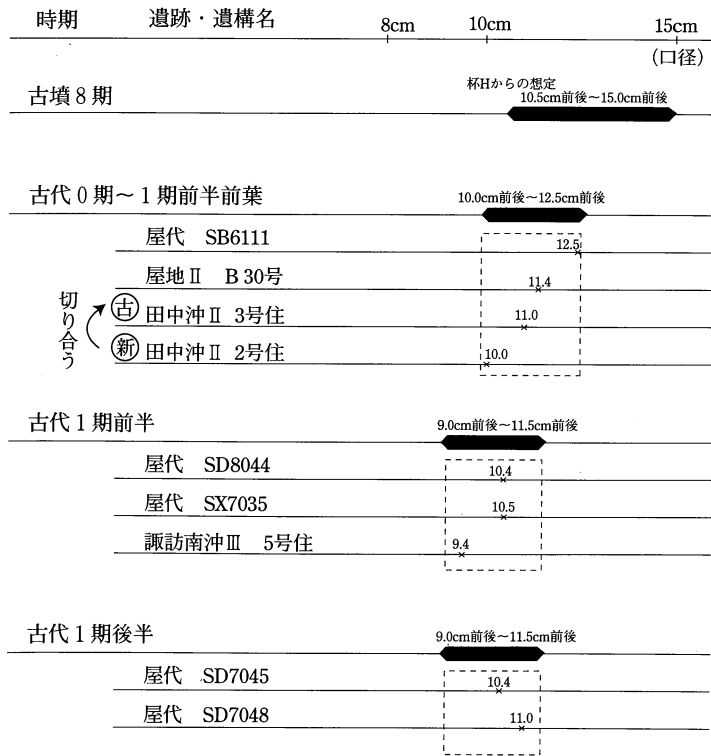


図122 須恵器杯蓋H、法量の時期的変化 (口径)

F. 杯蓋 A・B (編年表 1)

内面にかえりをもつ杯蓋 A は 1 期前半に出現する。須恵器杯 G 又は杯 B の蓋になる。都ではこの時期の前段階 (古代 0 期に併行する時期) には確実に出現しており、そういった地域からの搬入により早い時期にもまれには出土することも考えられるが、集落から恒常的な出土をみるのは 1 期前半からである。1 期前半には杯蓋 B は出土しない。1 期後半になり内面のかえりが消失し杯 B の蓋となる杯蓋 B が出現し、杯蓋 A とともに共存する。杯蓋 A は 2 期には消滅すると考えられるため^(註16)、土器の出土量が多い遺構で両者が共存している場合、その遺構の時間的位置付けは、杯蓋 A が量的に多い方がより古めで、杯蓋

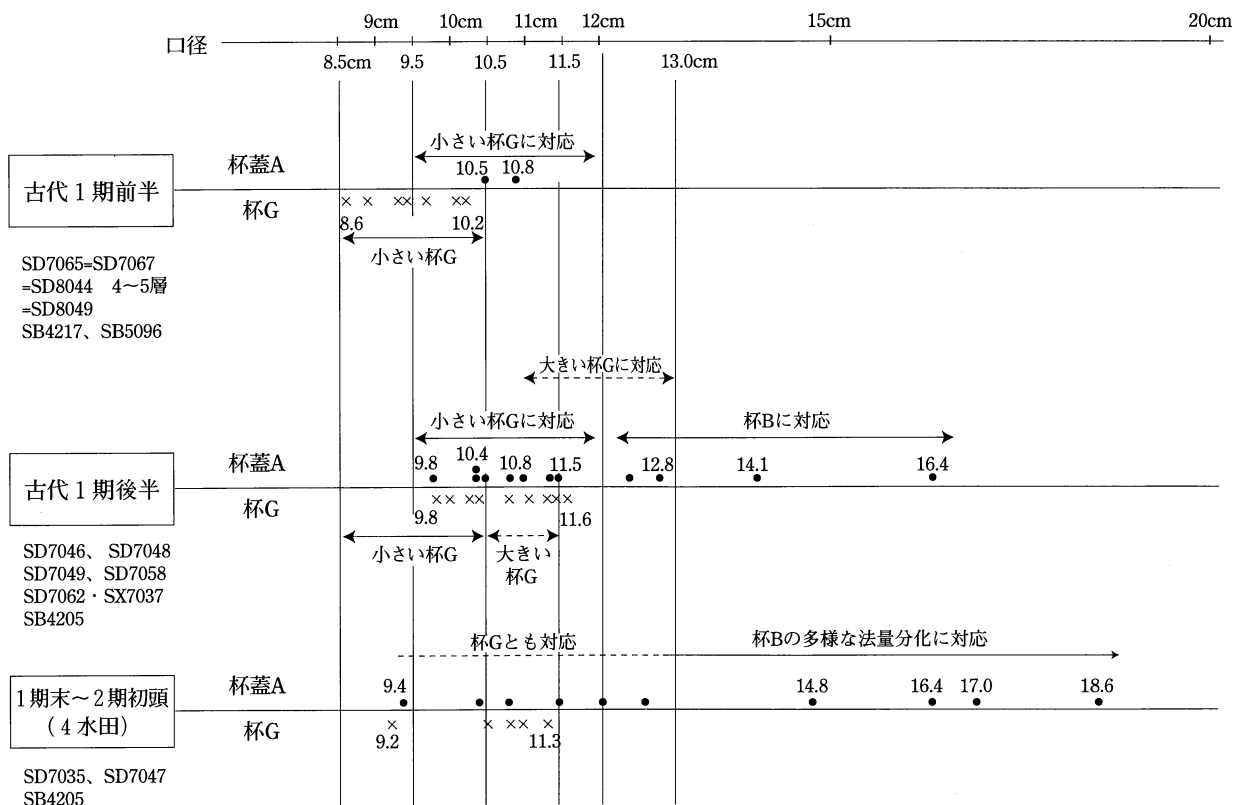


図123 須恵器杯蓋A (●印) と杯G (×印) の法量の対応関係

Bの方が多い場合はより新しい様相と判断することができる。2期以降は杯蓋Bのみとなり、6期までは一定量の出土があるが、7期には激減し消滅する。

杯蓋Aの変化 (図123) 法量からみた場合、杯蓋Aは杯Gに対応した蓋となることが多いため、1期前半では杯Gの小さめの法量(口径8.5cm前後～10.5cm前後)に対応する小さなものが多い。具体的には口径がおおむね11.9cm以下のものがあげられる。杯Bに対応する蓋となるものも考えられるが、これは大きめだが数は少ないと思われる。1期後半になると杯Gは、従来の小さめのものに加えて、やや大型のもの(口径10.5cm～11.5cm後)が出現してくる。従って、杯蓋Aも従来の11.9cm以下の小さいものと、杯Gの大きめの法量に対応する口径11.0cm～12.9cmくらいのもが目立ってくる。第4水田対応層(1期末～2期初頭)になると(この時期のある段階で杯蓋Aは消滅すると考えているが)、杯Bが法量分化を伴って多量に出現する時期でもあるため、それに対応した多様な法量をもつ杯蓋Aが見られるようになる。このうちのいくつかは杯Gと対応するものもあろう。かえりの形態からみた特徴は、1期前半、1期後半の両時期において、かえりが口縁部より突出するものや、そうでないものがみられ、編年上の決め手にはならなかった。但し、かえりが著しく退化した形態は1期後半にみられる。

杯蓋Bの変化 杯蓋Bの形態は大きく分けると①ドーム状を呈するもの、②平らにつぶれるものの2つに分けられる。①は更に丸みをもったドーム形のものや、丸みをもたないからかさ状のものにわけられる(図124)。②は裏返すと鏡のような感じを受ける。全時期を通じて①が圧倒的に多く、②は新しい時期になるほど減少傾向のようにみえる。杯蓋Bは以下に示す4つの視点から観察する。

ア つまみの形態 イ 天井部の回転へう削りの範囲 ウ 折り返し部の形態と調整 エ 胎土

この4つの視点に立って各期にみられる特徴を図にしたものが図125である。この観察結果からみると、杯蓋Bは、多い少ないという違いはあるものの各期に共通する特徴をもつものが多く、4つの視点で観察できる残りのよい個体であっても、後述する非常に明確な特徴がない限り、単品でみた場合、3～4時

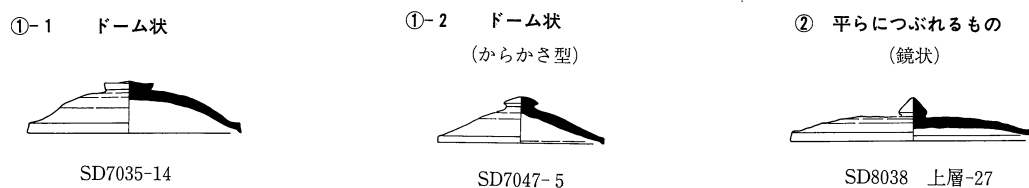


図124 杯蓋Bの形態

期程の広い時期幅の中しか位置付けることができない。大きくみると1期後半～3期、4期～6期のものに共通性をもつ傾向がある。時期を限定できるより明確な特徴としては、次のものがあげられる。なお、7期は資料数が少ないため、検討の対象からはずした。

- ① つまみにしっかりした長めの頸部をもち、より強いくびれ方をしたものは1期後半～2期にみられ、くびれ方が弱いものは6期に多くみられる。
- ② つまみの大きさが大きいものは、1期後半～3期にみられる。
- ③ 天井部の回転ヘラ削りが明らかに半分以上で広いと感じるものは、1期後半～4期のものに多い。
- ④ 折り返し部が外に向かって折り返されるものは、1期後半～2期に多い。
- ⑤ 折り返し部の内側の調整が弱いものは、4期と5期にはほとんど見られず、1期後半～3期のものによくみられる。
- ⑥ 混和材としての砂の含有が少なめで、非常に緻密な胎土をもつものは1期後半にみられる。胎土と焼きがやや不良なものは6期にみられる。

G. 皿A・B (編年表1)

量的に少ないが古代6期、7期にみられる。8期のものは非常にまれだが皿Aの出土が1例のみみられる。この器種は従来あまり出土例がなかったが、近年、新幹線屋代遺跡でまとまった出土がみられた。それらも検討すると、口径は皿Aが10.5cm～12.5cm、皿Bが11.0～13.0cmの範囲内におさまるものが多く、皿Bのほうが皿Aよりやや大きな傾向をもつようである。

H. 高杯 (編年表1)

量的には少ない。小型、中型の2タイプがみられ、小型タイプは古代1期前半～2期初頭(第4水田対応層)まで、中型タイプは1期後半～2期(第3水田対応層)まで確認できる^(註17)。

I. 高盤 (編年表1)

量的に少ない。屋代遺跡群では古代1期後半～2期に確認できる。3期に比定される更埴市の上日向窯や馬口II 8号住にも出土例が知られるため、3期までは数を減らしながらも存続するようである。

J. 鉢A (編年表2)

量的に少ない。古代1期後半から出土例がみられ、8期まで確認できる。口径10cm台から30cm台まで同一形態の相似形で法量差をもっている。器形は須恵器甕Eと共通するが、甕Eは叩き調整をする大型品であるのに対し、鉢Aはロクロナデで調整することにより区別される。

K. 鉢D (編年表1)

第4水田対応層(古代1期末～2期初頭)から出土例がみられ、2期を中心に一定量の出土がみられる。4期前半に位置付く屋地II A 2号集石にも出土例がみられる。金属器を意識して作っている可能性が高い。



















観察ポイント		時期 (古代)		1期後半	2期	3期	4期	5期	6期	7期
		代表例								
つまみの形態	くびれ方	弱	 SB5013-1						多°	
		強	 SD8028 3~5層-16	より強いくびれ有° 頭あり	 SD7047					
	大きさ	大	 SD7030-61		多°					
		中	 SD4521-3							
		小	 SB4825-1							多°
	くぼみ状のつまみ		 SD7035-45	より深いくぼみ有°	 SD7047					
ケズリの範囲	あきらかに半分以上	 SB4205-10				散見				
	半分前後	 SB4223-1								
	あきらかに半分以下	 SB9002-1							多°	
おりかえし部の形態・調整	外へ	 SD7038-13		多°						
	垂直に	 SD7030-59		極多°	極多°	多°				
	内へ	 SB6038-1		極少°	少°		極多°	極多°	多°	
	外の調整	弱	 SD7062-14		多°	多°	多°			多°
		強	 SB4205-8		極少°	やや多°		極多°	多°	多°
	内の調整	弱	 SD7062-17		極多°	極多°				極少°
		強	 SB73-6		極少°	極少°		極多°	極多°	多°
胎土・焼成	良		混和材少なめのもの多い	混和材の砂多め(以後同じ)						
	やや不良									

図125 須恵器杯蓋Bの時期的変化

・ 7期については出土量少につき、不明部分が多い。 S = 1 : 6

・ 多、少等の記載は { 同期における傾向をさす場合は右肩へ
1期~7期までの中における傾向をさす場合は右肩へ○印

(2) 黒色土器 A

A. 杯 A (編年表1)

古代2期末~3期のSK4622に出土例があり初現となる。4期までは出土量のごくわずかである。5期から徐々に出土量が増え、7期~8期には須恵器杯Aにかわって食膳具の主体となる。8期後半から減少に転じ、9期までは一定の出土量があるが、10期以降はごくわずかの出土例が確認できるのみである。形態からみると(図126)、口径に比して器高の低いA形態(器高3.0cm~4cm台)と口径に比して器高の高いB形態(器高5.0cm以上 口径との関係で5.0cmよりやや高い一群でもA形態にした方がいいものもある)とがあり、出

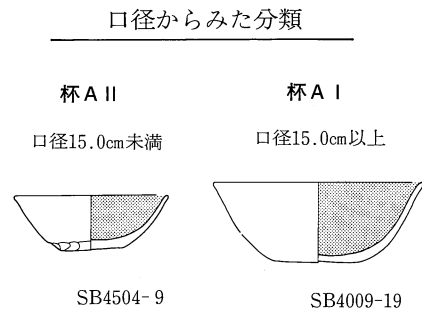
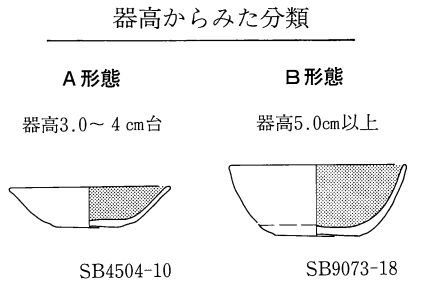


図126 黒色土器A杯Aの形態分類
S=1:6

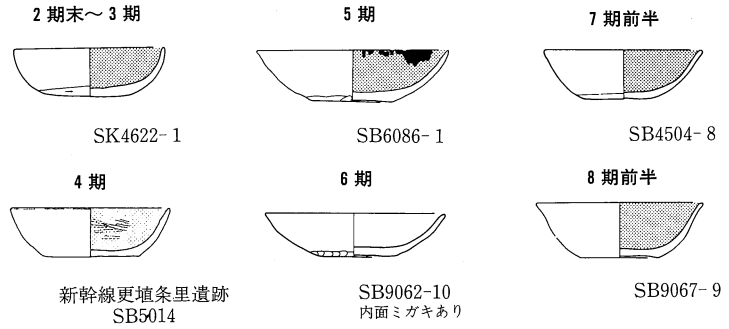


図127 黒色土器A杯A、A形態の時期的変化 S=1:6

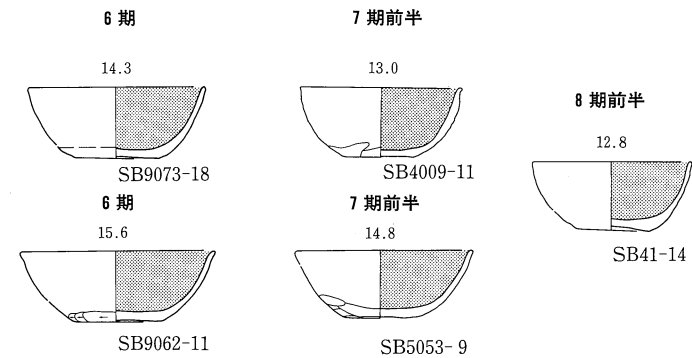


図128 黒色土器A杯A、B形態の時期的変化

上図は口径が小さくなる例。口径が大きいまものも一定量残るので注意 S=1:6

現時からみられる。また口径の面でも、口径15.0cm以上の杯A Iと口径15cm未満の杯A IIの2法量が出現時からみられる。A形態、B形態という2つの形態と15.0cmをさかいにした大小2法量をもつありかたは9期までは確認出来る。10期以降は資料が少なく断定できない。

形態と法量の変化 形態別にみた変化の方向は、A形態では(図127)、口径に比して底径が広く、ずんぐりした逆台形の器形が古い要素で、5期を前後する時期に口径に比して底径の狭い、スマートに定形化された逆台形のものが多くなる。また、7期前半から口径12.0cm～14.0cm、器高3.2cm～5.0cmの範囲の器形が非常に多くみられるようになる(図129)。B形態では(図128)、口径16cm以上のより大きなものは8期後半までは一定量確認できるが、時代の変化とともに口径の小さいものがみられ、6期では口径14cm～15cm台が多いのに対して、7期～8期では13.0cm前後のものもみられている(図129)。

底径と底部調整の変化 底径(外面の底径)からみた特徴は(図129)、7期前半以降、底径6.0cm以下のものが多くなる。6.0cm以上のものでも回転糸切りのもが目につくようになる(図129の×印)。6期以前では6.0cm以上の例が多い。6.0cm以下のものは、ほとんど腰部に調整が施されている。底部調整からみた特徴は、6期以前のものは、腰部まで調整をもつものが多く、腰部に調整をもたないものもあるが、その場合は、底部を手持へら削りするものが多く、回転糸切りのみという例は非常に少ない。7期前半から回転糸切り未調整のものが増え始め、7期後半には多数を占めるようになる。7期全体でみると7期は腰部に調整をもつものと回転糸切りのもが入り混じった段階といえる。8期前半以降は回転糸切り未調整のものが非常に多い。また、底面を手持へら削りのみで調整するものは4期～9期を通してみられ、底部と腰部に手持へら削りをもつものは2期末～8期後半にみられる。さらに、底部と腰部に回転へら削りをもつものは6期～8期前半にみられるというように1つの調整の継続期間は長いため、単品でみた場合、調整のみで編年上の位置を限定することは難しい。

内面のミガキ整形の変化 ミガキは時期が新しくなるほど粗悪化され、黒色処理した表面のつやや、光沢

感がなくなっていく方向で変化している。6期までは丁寧
に磨いており、黒色処理の表面につやがあり、光沢をもつ
ものが多い。つやや光沢の落ちるものは少なめである。7
期前半は6期までの状態を引き継ぐものもあるが、つやや
光沢のないものも増加し、入り混じった様相を呈する。7
期後半以降大きな変化が起こり、つやや光沢のあるものも
僅かに残るが、ミガキはあるものの、つやがなく光沢をも
たないものが多くなる。さらに、8期前半からはミガキの
退化傾向は一層顕著で、ミガキが荒いもののほか、ミガキ
のないものや、暗文をもつものも一定量みられるようにな
る(図126)。

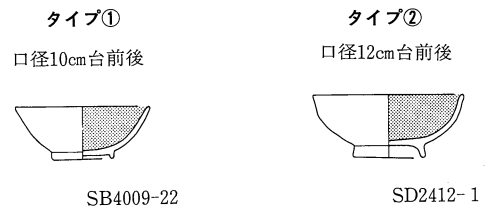
B. 椀・小椀 (編年表1)

古代6期からみられる。出現時に法量の大きい椀と、法
量の小さい小椀にすでに分化しており、以後ずっと法量差
をもちつづける(図130)。これらはさらに法量により、小
椀は10cm台前後のタイプ①と12cm台前後のタイプ②に分け
られ、椀は14~15cm台前後のタイプ③と17cm台以上のタイ
プ④に分けることが可能である。中でもタイプ③の法量が
圧倒的に多数をしめ、つぎにタイプ①と②の小椀が少量み
られ、一番大きなタイプ④はごく少量である。『中・近世
編』の対象となるが10世紀後半から食膳具が大小の2法量
に分化するのにもなって登場してくる小椀は、このタイ
プ①よりもさらに小さい法量となってあらわれ、明確に区
別することができる。

この器種は、灰釉陶器や緑釉陶器の影響をうけやすく、
いろいろな点でそれらを模倣した痕跡が顕著である(図
131)。模倣や影響されたとみられる点を箇条書きであげら
ると以下ようになる。

- ① 灰釉陶器、緑釉陶器の出現する6期からみられ始める。
- ② 黒笹14号窯式の灰釉陶器の高台を模倣した短く、四角
に角張った高台をもつものが6期~7期前半にかけてみ
られる(図131-1)。
- ③ 京都洛北系の緑釉陶器(○類)の高台を模倣したもの
がみられる(図131-2)。
- ④ 光ヶ丘1号窯式の灰釉陶器に顕著にみられる玉縁口縁
を模倣したものがみられる(図131-3)。
- ⑤ 光ヶ丘1号窯式等にみられる三日月高台を模倣したも
のがみられる(図131-4)。
- ⑥ 小椀、椀といった法量差がみられるのも灰釉陶器の影
響と考えられる。

小椀(タイプ①、②)



椀(タイプ③、④)

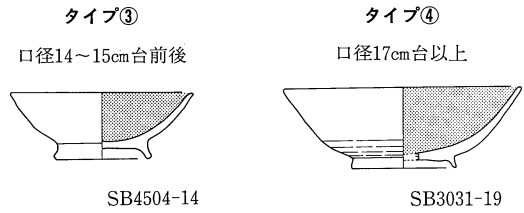


図130 椀・小椀、法量からみた分類 S=1:6

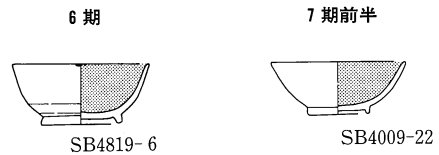


図131-1 黒笹14号窯式の高台模倣

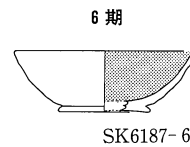


図131-2 緑釉陶器の高台模倣

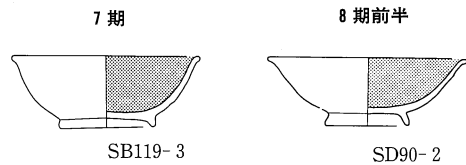


図131-3 光ヶ丘1号窯式の玉縁口縁模倣

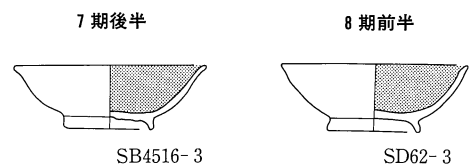


図131-4 光ヶ丘1号窯式等の三日月高台模倣

⑦ 光ヶ丘1号窯式に顕著にみられる浅めの椀形で、腰のはる丸みを持つ器形(図131-5-ア)と腰がはらずにまっすぐに口縁までのびる器形(図131-5-イ)の両方の器形がみられる。

また、この器種は非常に多様性に富み、様々な形を持ったものが多く、特殊な事例により時期の限定ができるものはあるものの、器形の変化が追いつらい。図132には8期前半の例でこの多様性を示した。図132-1は直線的な体部の形態が特徴的であり、図132-2は深椀で高台幅も狭く、まるで10世紀末からみられる丸石2号窯式の灰釉陶器を模倣したかのような器形であり、器形の多様性の例となる。図132-3は三日月高台とは逆向きに反り返っており、高台の多様性の1例である。

C. 皿A(編年表1)

古代8期のみにもみられる。形態的には4種類に分けられる(図133)。①杯Aの器高を低くしたタイプで、やや湾曲気味に立ち上がるもの(タイプ①)。②小さな底部を持ち口縁部がL字状に直立して立ち上がるもの(タイプ②)。③大きな底部を持ちやや湾曲気味に立ち上がるもの(タイプ③)。④直線的な立ち上がりを持つもの(タイプ④)の4種類である。口径は12cm~13cm台前後で、10世紀後半以降の食膳具の2法量分化にともなって登場する皿とは法量が全く違い、2法量分化した法量のちょうど中間の法量となる。

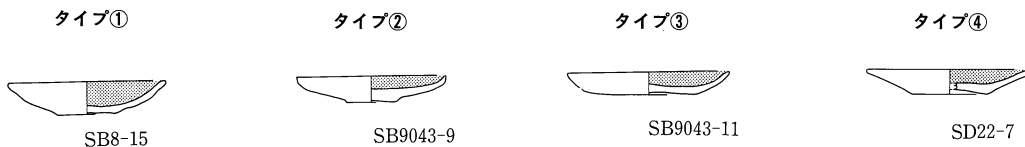


図133 黒色土器A皿Aの形態 S=1:6

D. 皿B(編年表1)

古代6期から出土例がみられ8期までみられる。形態変化は黒色土器B皿Bと似た傾向を示す。

E. 盤B(編年表1)

法量によりI、IIに分けられる。盤B Iは椀に足高高台を付けた形になり、古代8期からみられる。盤B IIは皿に足高高台を付けた形となり、古代7期よりみられる。

F. 鉢A(編年表2)

古代6期からみられ9期以降もわずかみられる。7期、8期が多めに見られる。

G. 鉢B(編年表2)

古代6期からみられ、9期まで確認できる。7期、8期に出土例が多い。

(3) 黒色土器B

A. 椀・小椀(編年表1)

ア、腰のはる丸みをもつ器形
イ、腰がはらず、まっすぐに口縁までのびる器形

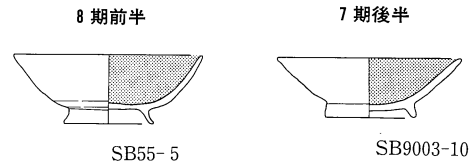


図131-5 光ヶ丘1号窯式にみられる2つのタイプの器形の模倣

図131 黒色土器A椀・小椀にみられる灰釉・緑釉陶器の模倣 S=1:6

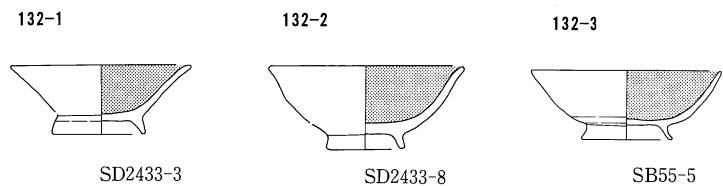


図132 黒色土器A椀・小椀における器形の多様性 8期前半 S=1:6

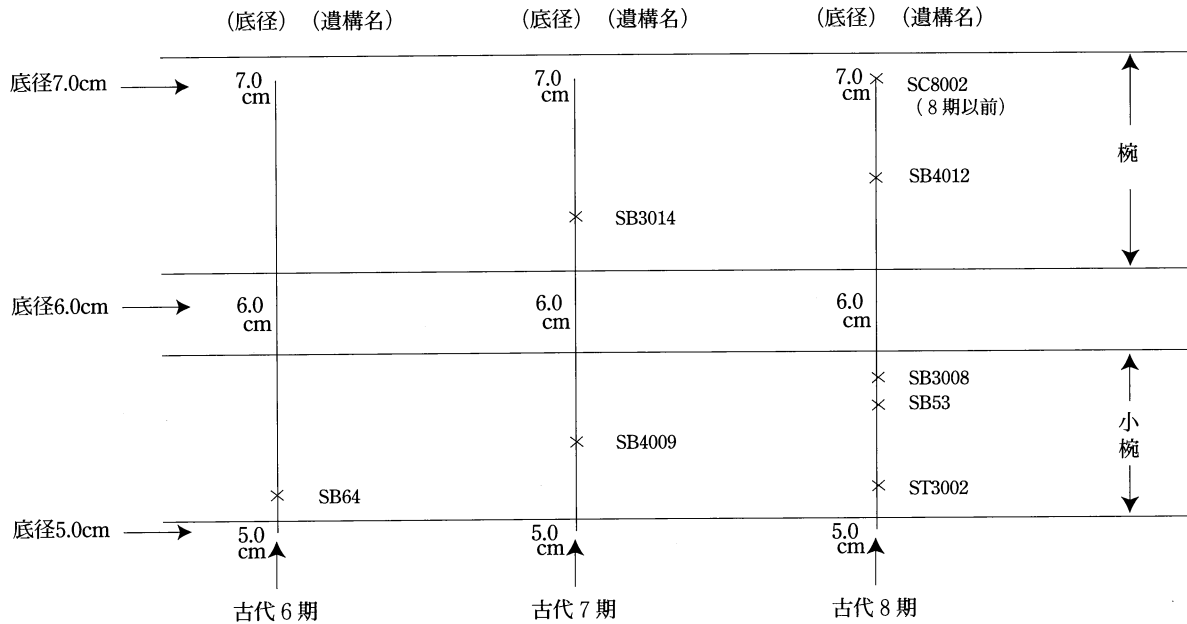


図134 黒色土器B碗・小碗における底径値の時期的変化

古代6期から出現し、8期以降も存在する。完形となるものは少ないが、唯一の完形例（SC8002）をみると深碗状の形態となる。底部の破片が多いが、実測できた8例について時期ごとに底径値を出すと図134のようになる。これによると、底径が5 cm台と6 cm台に大きく分けることができ、5 cm台のものは小碗、6 cm台のものは碗として区別できそうである。また、出現期の6期は量的に少なく、8期にむけて徐々に増加していくようであるが、量的には非常に少ない。

B. 皿B（編年表1）

古代6期に出現し、8期までみられる。6期はやや少なめで7期、8期に増える。口径12～13cm台のものが多く、6～7期前半には高台が低く、薄手でしっかりした作りのものが多く、明らかに定型化からはずれた形のものもある。7期後半～8期では高台が高めで、厚手のものが多い。

C. 耳皿（編年表1）

非常に少なく、屋代遺跡群内では古代8期のみにもみられる。高台の付かないものと付くものがある。

D. その他

明確に遺構に伴う完形例はないが、黒色土器B杯Aが古代6期～8期にかけて存在する可能性がある。SB4511掘方（6期）、SB111（7期前半）等であり、いずれも小片であるが、外面にもミガキを持つ。V区カクラン（図版346-1）は完形例で、図示していないが同じ位置から黒色土器A杯Aが複数出土している。一括遺物と考えれば7期後半～8期前半に相当する。出土例の増加をまちたい。

(4) 土師器

A. 杯A・碗・盤B I（編年表1）

これらは古代8期に出現し、9期以降も引き続きみられる器種である。特に杯A、碗については8期以降の食膳具の主流となる重要な器種であるが、それらの詳細な変化については『中・近世編』にゆずる。

B. 皿A（編年表1）

古代8期に出現し、8期と9期のみにもみられる特徴的な器種である。黒色土器A皿Aと似た形態をもち以下の5つのタイプに分けられる（図135）。

タイプ①……杯Aの器高を低くしたタイプ。やや内わんぎみに立ち上がる。

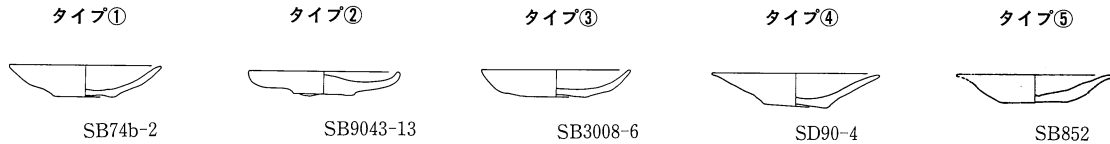


図135 土師器皿Aの形態

S=1:6

タイプ②……小さな底部をもち、口縁端部がL字状に直立して立ち上がる。

タイプ③……大きな底部をもち、やや内わんぎみに立ち上がる。

タイプ④……直線的な立ち上がりをもつ。

タイプ⑤……タイプ④と似ているが口縁端部が水平に引き出される（図は8期後半のもの）。

タイプ⑤のみ黒色土器 A 皿 A では確認できていないが、他は黒色土器 A 皿 A と共通する。口径は11cm~12cm台前後のものが多い。10世紀後半以降の食膳具の2法量分化にともなって登場する皿とは、法量が全く違い、2法量分化した法量のちょうど中間の法量となる。

C. 皿B（編年表1）

屋代遺跡群の例では、古代8期のみにもみられる。

D. 耳皿（編年表1）

屋代遺跡群の例では古代8期のみにもみられる。無台のもののみで、有台の例はない。見込み部に一孔穿孔される例もみられる。

E. 盤A（編年表2）

屋代遺跡群の例では古代6期から確認できる。9期以降も引き続きみられる器種である。量的に少なく、破片での出土例しかみられない。食膳具に入れたが、その他の分類に入れるほうが妥当かもしれない。

F. 鉢A・B（編年表2）

ともに7期から確認でき8期まで存在する。鉢Aは9期までわずかに確認できるが、鉢Bは9期以降は確認できない。

(5) 非ロクロ土師器

A. 杯C類（編年表1）

古墳時代から系譜のおえるもので、古代0期から2期までは一般的に出土がみられる。0期には食膳具の主流をしめる。3期、4期はまれに出土する例がみられるが非常に少ない。法量的には10.0cm前後から15.0cm前後位までの数法量をもっている。2期には小さめの法量のもの少なくなる傾向にある。内面黒色処理されるものが多い。

B. 杯I類（編年表1）

古墳時代から系譜のおえるもので、古代0期から第4水田対応層の2期初頭までは出土がみられる。杯C類に比べると出土量は少なめである。2期（第3水田対応層）以降はごくまれである。法量的には9.0cm前後から13cm台までの数法量がみられる。内面黒色処理されるものが多い。

C. 杯L類（編年表1）

古代1期前半と1期後半のみにもみられる特徴的な杯である。10cm台から14cm台までの数法量をもつ。にぶい橙色の胎土をもち外面へラ削り、内面から口縁部外面まではナデという整形であり、黒色処理はされない。胎土も整形もあきらかに在地のものとは違う。在地の胎土をもつものもみられる。佐久方面、さらに群馬県方面に類例が多いようであり、存続期間も各地域により差があるようである。

D. その他の杯類（編年表1）

〈屋代遺跡群〉

SD7065 (1期前半)



1

SB6025 (1期前半)



2

SB4519 (1~2期)



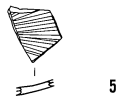
3

SB6039
(古墳8期新相~古代2期)



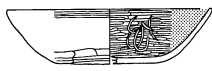
4

SB6022 (5期後半~8期)



5

SB58 (6期)



6

SK531 (6期前後)



7

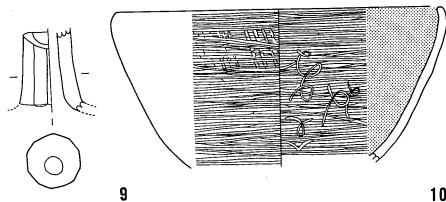
ST3005 (8期前半)



8

〈更埴条里遺跡〉

SB9001 (6期)…他に面取高杯の小片2点あり



9

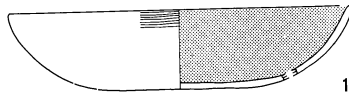
10

SB9002 (6期)



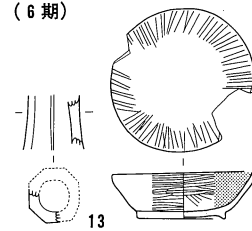
11

SB9014 (6期)



12

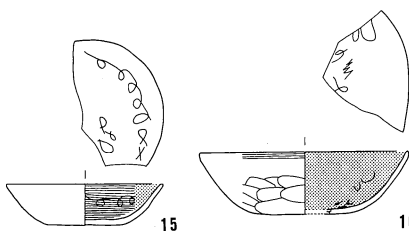
SB9013
(6期)



13

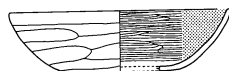
14

SB9006 (6期)

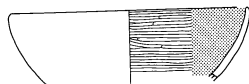


15

16

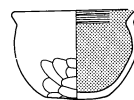


17

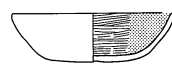


18

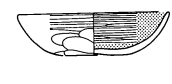
SB9074
(6期)



19

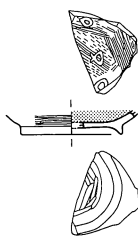


20



21

SB9077 (6期)

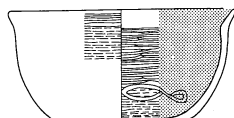


22

SB9081 (6期)



23



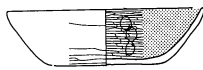
24

SD906 (6~7期)



25

SD966 (5期後半~8期)



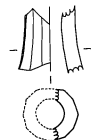
26

SD983 (6期)



27

SD1022 (6期?)



28

包含層

K地区III層

K地区III層



32



33

SD1032 (6期)



30



31

0 10 (図1/6) 20cm

図136 更埴条里遺跡・屋代遺跡群出土の畿内系土器

古墳時代から系譜のおえるその他の杯類として、杯A類、杯B類、杯D類、杯E4類があるが、これらはごくわずか古代1期まで出土例がみられている。内面黒色処理されるものが多い。

E. 高杯（編年表1）

古墳時代から系譜のおえるものである。古代0期から2期までは一般的にみられる。3期にもごくわずかみられるが、3期以降は非常に少ない。口径10.0cm前後の小さいものから、18cm台の大きなものまで数法量をもつ。編年表1にあるような脚の長いものは古代0期までみられ、1期以降は長めのものはほとんどみられず、中型か小型の脚になる。内面黒色処理されるものが多い。

F. 鉢（編年表1）

古墳時代から系譜をおえるものである。古代0期から1期後半にかけてみられる。法量、形態ともに非常に多様である。内面黒色処理されるものも多いが、されないものもみられる。

(6) 搬入系土器

A. 畿内系土器

屋代遺跡群、更埴条里遺跡出土の畿内系土器を図136に集成した。集成図の8のみロクロ使用だが、他はすべて非ロクロである（9世紀代の在地の黒色土器A杯Aはすべてロクロ使用）。さらに、高杯は脚部に面取りをしている。杯類では内面に暗文をもつものが多い。胎土も在地のものとは明らかに異った橙色を示すものが多い。図化できなかった小片も含め計36点（屋代遺跡群8点、更埴条里遺跡28点）の出土がみられる。時期的にみると大きく2つに分けられる。1つは古代1期～2期にかけてみられる一群（1～4）で屋代遺跡群にみられ、小片のみであるが内面は黒色処理されず、放射状の暗文がみられる。らせん文をもつものもみられる（1）。もう1つは、6期に集中的にみられ、更埴条里遺跡の非常に限られた一定の地区に集中的に出土する。1つの遺構から複数出土する例も多い。橙色で明らかに在地のものと違った胎土をもつものも多く、杯、椀類は内面黒色処理されたものがほとんどで、内面に暗文をもつ例や外面を手持ちへう削りする例も多い。鉢類、高杯もみられる。一部ではあるが、玉田芳英氏に御教示を得た。1は鉢で平城IIまたは8世紀初頭前後、胎土その他は畿内。4は小片でなんともいえないが、奈良時代前半で畿内系。5は胎土から平城ではないが畿内の他の地域のものか。11は9世紀前半で畿内のもの。胎土も畿内のもの。13、14は畿内。20、21は削りが荒く赤っぽく畿内ではない。19は平城宮SE311B、9世紀初頭に類似するものがある。

B. 灰釉陶器（編年表1）

古代6期から出土例がみられる。確認できる器種は椀Aと皿であり、食膳具にしめる割合は少ない。段皿は7期から出土例がみられ始める。狭縁のものと広縁のもの2タイプがみられる。8期には小椀も確認でき器種はバラエティーとなる。

出現する窯式の様相をみると（図137）、6期から猿投の黒笹14号窯式（K14）の灰釉陶器がみられ始める^(註18)。K14の出土がみられる6期の更埴市馬口II23号住では、共に出土した須恵器杯A3点は、すべて須恵器の質Dタイプの硬質な焼きであり、内面底径の平均値は5.9cmと小さめである。また7期でK14をとともなうSB9084では、共伴した須恵器杯A11点の内面底径の平均値は6.1cmとほぼ似た数

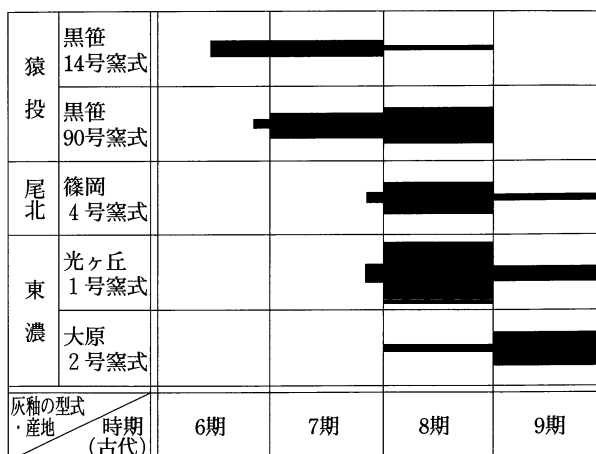


図137 灰釉陶器の供給地の時期的変化（古代9期まで）

値だが、須恵器の質では軟質須恵器である A タイプと B タイプが全体の5.5割をしめ、硬質な D タイプのものより多くなっている。したがって K14 の出現時期は、6 期の中でもその初期の内面底径が大きい段階でなく、内面底径が 6.0cm 前後と小さくなり、須恵器の質は、硬質の D タイプが主体をしめる段階から出現していることがわかる。そして、須恵器の質が軟質の A、B タイプに主体が逆転する時期にもひきつづきみられるという事になる。また K14 は伝世されるようで 8 期まで出土例がみられる。

猿投の黒笹 90 号窯式 (K90) の灰釉陶器は 6 期末に位置付く SB3016 から長頸壺の出土がみられるのが初現で (同じ 6 期の SD4514 から K90 の皿が出土している)、7 期に出土例が増すように見える。7 期の出土例としては、屋代遺跡群では K90 をともなう良好なセット関係をもった遺構はないが、不十分な資料ながら 7 期の SB4032 や 2 軒重複しているが 2 軒とも 7 期前半と考えられる SB4505 の例をみると、食膳具にしめる黒色土器の比率が重量比で 5.5 割～6 割位の時が多いようである。K90 の出現は 6 期～7 期に移り変わる頃で、7 期前半代に出土例が増すととらえておく。そして、8 期にも出土量は多く、9 期以降激減し、ほとんどみられなくなる。

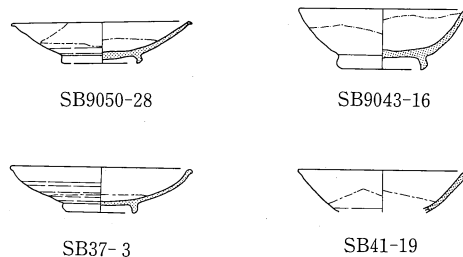
両面ハケぬりを特徴とする東濃の光ヶ丘 1 号窯式の灰釉陶器は、7 期後半から出現する。これは食膳具にしめる黒色土器の比率でみた場合、K90 出現時よりもやや増え食膳具の 8 割前後位も黒色土器がしめるような段階から多数の出土例が確認できる。K90 の出現と光ヶ丘 1 号窯式の出現は明確に時期差があるといえよう。光ヶ丘 1 号窯式は 7 期後半～8 期にかけて非常に出土量が多く 9 期にも数を減らしながら一定の出土量がみられる。光ヶ丘 1 号窯式と同様の特徴をもつ尾北の篠岡 4 号窯式のものも一定量の出土がみられる。出土の時期と量は光ヶ丘 1 号窯式と同じ傾向にある。7 期後半～8 期は、光ヶ丘 1 号窯式、黒笹 90 号窯式、篠岡 4 号窯式といったハケぬりの灰釉陶器が圧倒的多数をしめ、それに混ざる形で黒笹 14 号窯式のものもわずかに確認される。

また、特筆すべきことであるが、つけがけで施釉した東濃の大原 2 号窯式に属する灰釉陶器も遺跡全体を広くおおむね洪水以前の遺構からわずかであるが出土例がみられる (図 138)。この洪水の年代は圧倒的な出土量をほこる光ヶ丘 1 号窯式と篠岡 4 号窯式の年代観から仁和 4 年 (888 年) を前後する時期であることは確実で、これよりも古い遺構から大原 2 号窯式の特徴をもつ灰釉陶器が複数出土していることは、開始時期が 10 世紀前半とされている大原 2 号窯式の年代観について再考をせまる一つの資料となろう。なお、大原 2 号窯式の灰釉陶器が洪水直前の層位から出土した例は石川条里遺跡にも存在する^(註 19)。貯蔵具の灰釉陶器をも頭におきながら以上のことを簡単な図にまとめると、灰釉陶器の各型式の消長は図 137 のようになる。

C. 緑釉陶器

緑釉陶器の出土総数は 86 点 (屋代遺跡群 40 点、更埴条里遺跡 46 点) である。この内、今回報告分に該当する古代 8 期前半までのものは、総数 36 点 (屋代遺跡群 34 点、更埴条里遺跡 2 点) である (表 85)。これを胎土、釉調、技法等により分類

古代 8 期前半 (洪水前) 出土の大原 2 号窯式の灰釉陶器



古代 8 期前半 (洪水前) で大原 2 号窯式の可能性のあるもの

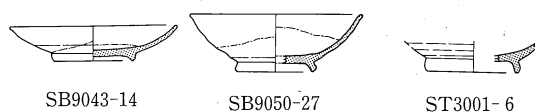


図 138 古代 8 期前半の大原 2 号窯式の灰釉陶器 S=1:6

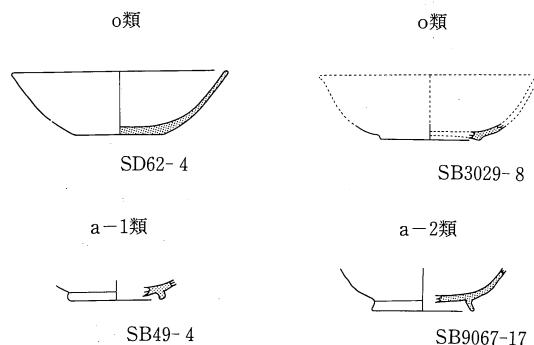


図 139 緑釉陶器の分類 その 1

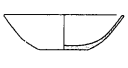


分類	胎土	釉					技法	高台	産地	他の報告とのおおまかな対応		備考			
		色調	ツヤ	釉着	施釉部位	施釉				吉田川西	松本平総論編				
o類	灰白色または灰黄色系軟質	黄色味の強い淡黄緑色 or 淡黄緑色 a類より黄色味が強い	有	良	全	均一に施釉	器面全体をヘラミガキ	無高台平底が多い 	京都系(洛北系)	/	A類				
a類	a-1類	灰白色～灰色系明るめ やや硬質～硬質	有	良	全	均一に安定的に施釉	器面全体をヘラミガキ	 短いもの多い	ていねいにナデ整形	その他	a類	B類	a-3類は今回報告分にはない		
	a-2類	灰色系暗め 硬質・須恵器的						緑色						 長いもの多い	京都系(洛西系)
	a-3類							淡緑色						ヘラで整形したあとが残る	
b類	灰白色系 やや硬質～硬質	淡緑色 or 淡黄緑色	有	良	全	均一に安定的に施釉	ヘラガキがあるが ない部分もみられる (特に外面)		猿投系	その他	b類	/			
x類	上 記 以 外							不 明		g類 x類	/				

図140 緑釉陶器の分類 その2

した(図139~140)。産地については井上喜久男氏に実見していただいた結果を記載した。分類の方法は県内の緑釉陶器についての報告例のうち、出土量が多く分類基準もしっかりしている『吉田川西遺跡』の分類(原1989)を基本に、一部松本平『総論編』の分類(小平1990)も頭におきながら産地の結果ともあわせて行った。その分類にもとづいて緑釉陶器の消長をまとめたものが図141である。それによると、初現は古代6期で、複数の遺構からの出土がみられる。そのほとんどが、京都

時期 分類	6期	7期	8期 前半	8期 後半
o類	■			
a-1類				■
a-2類			■	
b類			

図141 緑釉陶器の消長

表85 緑釉陶器一覧表

No.	図版No.	掲載No.	遺跡名	出土遺構・層位	時期	器種	分類	産地	巻頭図版	備考	緑釉番号
1	261	9	屋代	SB3034	6期	皿	o類	京都(洛北系)	3-9		1
2			屋代	SB5013 2層	6期	碗	o類	京都(洛北系)	3-5		2
3			屋代	SB6120 覆土下層	6期	皿	o類	京都(洛北系)	3-6		3
4	294	2	屋代	SC2	6~8期	皿	o類	京都(洛北系)	3-7		4
5			屋代	SB5133 トレンチ	2期のSBへの混入	小片	x類			磁器質 緑釉?	5
6	260	8	屋代	SB3029	7期前半	皿	o類	京都(洛北系)			6
7			屋代	ST8	7期	碗	o類	京都(洛北系)			7
8			屋代	SB6118	7期	?					9
9			屋代	SD281 2層	7~8期前半	皿(2片)	o類	京都(洛北系)	3-8	緑釉番号29と同一か	10, 11
10	300	7	屋代	SD273	7期後半~8期前半	碗(4片)	x類	?	3-25~28		12~15
11			屋代	SD291	7期後半~8期前半	小片(2片)	o類	京都(洛北系)	3-10.11		16, 17
12			屋代	SB41	8期	皿	x類	?	3-24		18
13	247	4	屋代	SB49	8期前半	碗	a-1類	猿投系	3-17		19
14	253	5	屋代	SB74 a	8期前半	皿(3片)	a-1類	猿投系	3-18.19	巻頭図版No.18はSB74出土	20~22
15			屋代	SB76-77	8期前半	皿	o類	京都(洛北系)		緑釉番号29と同一か	23
16			屋代	SB76-77	8期前半	小片	x類	?			24
17	290	8	屋代	SB6085	8期前半	段皿	a-1類	猿投系	3-16	緑釉番号26と同一か	25
18	290	10	屋代	SB6085掘方	8期前半	段皿	a-1類	猿投系	3-15	緑釉番号25と同一か	26
19			更埴条里	SB9043	8期前半	碗	o類	京都(洛北系)	3-13		27
20	238	17	更埴条里	SB9067	8期前半	碗	a-2類	尾北系	3-20		28
21	298	4	屋代	SD62	8期前半	杯(無高台)	o類	京都(洛北系)	3-3	緑釉番号10.11.23と同一か	29
22			屋代	SD237 上層	8期前半	小片	o類	京都(洛北系)	3-12		30
23	347	4	屋代	I区 S4 IV-Y5-1層	6~8期	皿	o類	京都(洛北系)	3-14	緑釉番号34と同一か	31
24			屋代	VII区 OS18 IV-1層上面	6~8期	碗	b類	猿投系	3-22	緑釉番号35.36と同一か	32
25	334	1	屋代	SK4139	6~8期	底部	o類	京都(洛北系)	3-4		33
26			屋代	I区 III-1層	6~8期	皿	o類	京都(洛北系)		緑釉番号31と同一か	34
27	346	3, 4	屋代	VII区 カクラン	6~8期	碗(2片)	b類	猿投系	3-21.23	緑釉番号32と同一か	35.36

系（洛北系）の0類であり、7期まで0類が主体を占める。0類は8期前半までは出土例が確認出来るものの、8期後半以降は確認できない。また、8期前半から出土量を増すのが猿投系のa-1類である。8期前半は、緑釉陶器の供給地が転換を迎える時期であり、それまで主体となってきた京都系（洛北系、0類）の中に、猿投系（a-1類）が搬入され始める。また同時に客体ではあるが尾北系のa-2類や猿投系のb類もみられている。

D. 須恵器

肉眼観察による分析 屋代遺跡群出土の5世紀～10世紀までの約600点の須恵器を、各務原市教育委員会の渡辺博人氏に観察していただき、生産地の特定をしていただいた。図142、表86～88はその結果をもとにまとめたものである。図142の須恵器、時期別の供給地の変化をもとに気付いた点について簡単にふれる。なお、在地としたものの特徴をまとめると、胎土内の粒子が粗いこと、厚みがある器形で、ぼってりした感じをもつこと、黒や白のつぶつぶした粒子を多量に含むこと、くすんだ色をしていることなどである。

① 須恵器出現期の5世紀代では搬入品が圧倒的多数をしめる。しかし在地で生産されたとと思われるものも少数ながら存在する。

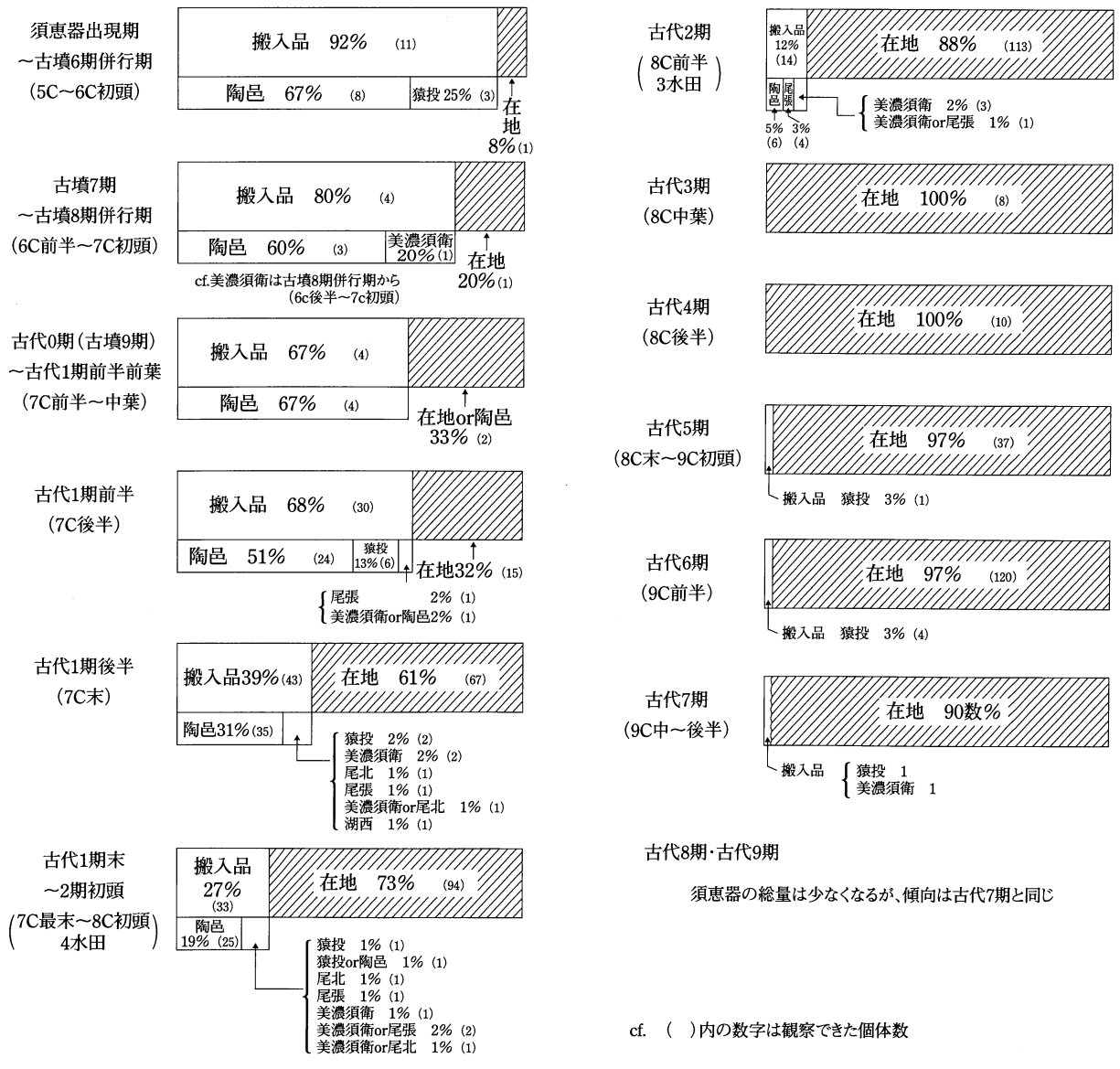


図142 須恵器供給地の時期的変化

- ② 搬入品と在地の割合は、時期がたつごとに在地で製品の割合が増加していく。そして、古代1期後半に在地の割合と搬入品の割合が逆転し、在地の製品が優位をしめるようになる。以後は在地が圧倒的な量をしめるようになる。
- ③ 搬入品は時期がたつごとに少なくなっていくが、最後までごくわずかではあるが供給されている。
- ④ 搬入品で主体をしめる産地は陶邑が圧倒的に多く、古代1期末～2期初頭までは陶邑主体の様相を示している。陶邑は古代2期まで搬入例がみられ、この古代2期をさかいに、尾張(猿投、尾北)や美濃須衛といった東海西部へと主体が入れかわる。以後は陶邑の製品はほとんどなく、東海西部を中心とした地域からごくわずかずつの供給がみられる。
- ⑤ ごくわずかの供給であるが古代1期後半に湖西の製品がみられる(SB67-11)。

胎土分析 ここで在地とされたものの具体的な産地をさぐるために、屋代遺跡群出土須恵器の胎土分析を行った。分析は(株)第四紀地質研究所(所長 井上 巖氏)に委託し、「X線回折試験」と「化学分析」という2通りの方法で行った。「X線回折試験」では「石英(Qt)－斜長石(Pl)」の相関について分析し、「化学分析」では、「 $\text{SiO}_2\text{－Al}_2\text{O}_3$ 」「 $\text{Fe}_2\text{O}_3\text{－MgO}$ 」「 $\text{K}_2\text{O－CaO}$ 」のそれぞれの相関について分析した。産地の比較資料は、(株)第四紀地質研究所の持つ長野県以外の須恵器窯データと、今回独自に資料収集し、同研究所で分析した県内の須恵器窯データによる。分析対象とした資料は、肉眼観察を行った約600点の須恵器の内から時期、器種、胎土、その他の特徴をふまえて選び出した130点である。以下に胎土分析の具体的な内容を述べる。

- ① 県内の産地比較資料に使うためにサンプルを収集した須恵器窯跡名とその位置については、図143に示した。また、それらの窯跡の時期とサンプル数は表89に示すとおりである。1窯跡10サンプルを目標に県内各地のサンプル確保のため鋭意努力したが、資料の散逸等で収集できない場合も多かった。県内の19窯跡群、39窯跡の資料、348点のサンプルを集め分析を行うことができた^(註20)。
- ② ①で収集できたサンプルを分析し、長野県内の各窯跡群の領域図を作成した。その結果をまとめたものが図144～148である。
- ③ 屋代遺跡群出土須恵器の胎土分析結果は図149～152である。図中の番号はサンプル番号を示す。この分析結果を長野県内の各窯跡の領域図、さらに(株)第四紀地質研究所所有の県外の領域図と比較して産地の推定を行った結果は表90に示すとおりである。
- ④ 表90をよりわかりやすくするために、分析した須恵器の図を時期と器種別にまとめたものが図153～155である。なお、胎土分析結果はこの表の中に○印でかこったもので、その下に波線をつけた産地名は渡辺博人氏による肉眼観察の結果である^(註21)。

胎土分析のまとめ (株)第四紀地質研究所から提出された報告書から必要部分を抜粋する。

- ① 屋代遺跡群出土土器のうち陶邑と猿投の土器を除く在地系の土器と今回の長野県窯跡出土土器を対比すると明らかに産地がわかるものと在地でも今回の分析では対比されないものがある。産地がわかるものとしては戸倉(千曲川左岸)古窯跡群の土器、聖高原東麓窯跡の土器が最も多く、髻山古窯跡群と芥子望主山窯跡群の土器は少ない。在地-Aは個体数も多く屋代遺跡群の近隣に所在地があるように思われる。在地-BとCは個体数は少ないが胎土の組成に統一性があり、これらも近隣に所在地があるように見受けられる。不明の土器は個々が1つの所在地を代表するもので、今回の分析では対比されるものはない。
- ② 陶邑系の土器は明らかに陶邑とされるもののみを陶邑とし、類似するものは除外した。類似するもののうち陶邑的と肉眼観察されたものの多くは聖高原東麓窯跡の松ノ山窯跡の土器の成分に近いものが多く、一部は戸倉(千曲川左岸)古窯跡群の土器と近いものもある。猿投とされたもののうち明らか

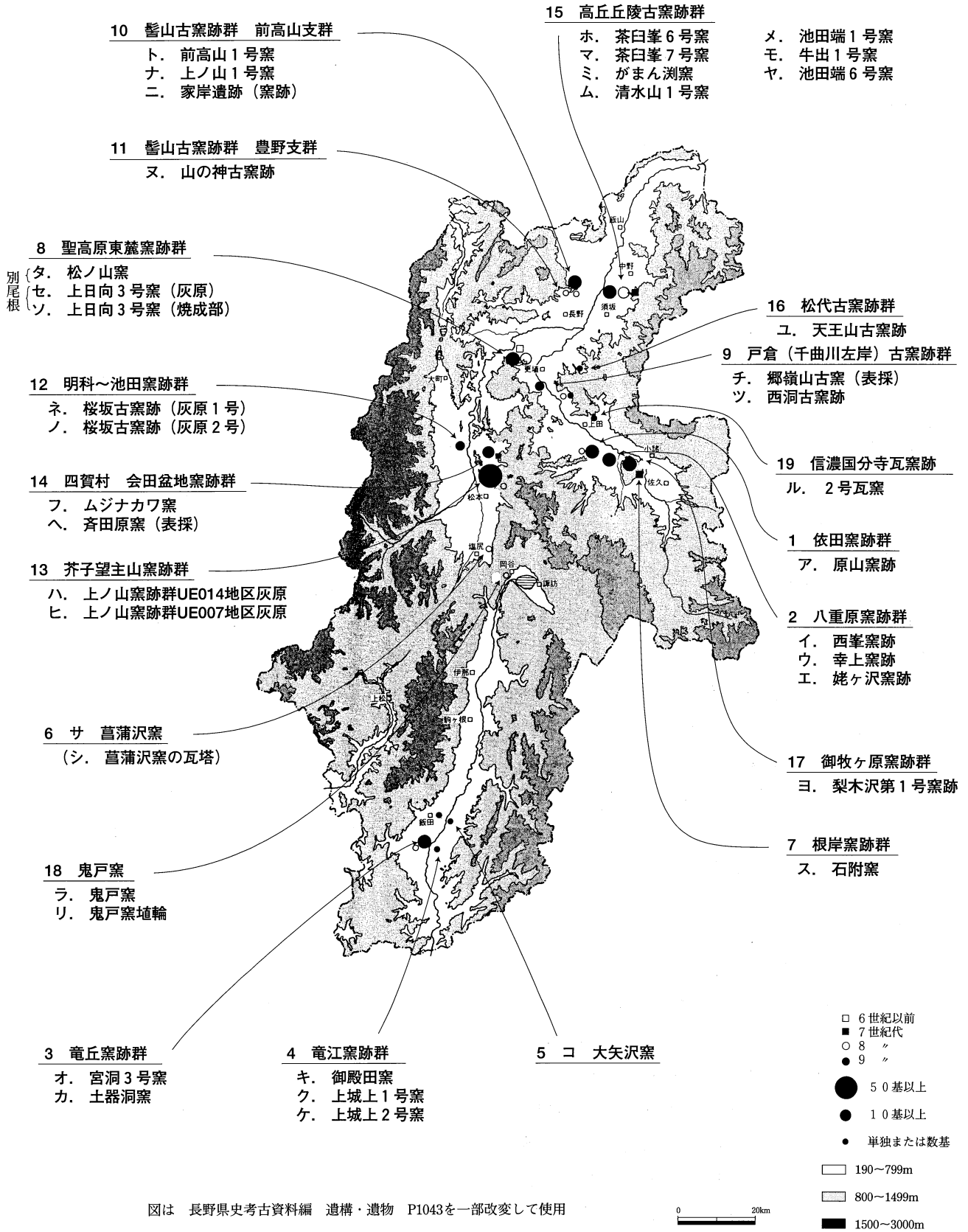


図143 屋代遺跡群出土須恵器の胎土分析 比較用サンプル収集窯跡

図144-3 Fe₂O₃-MgO 図 (長野市周辺)

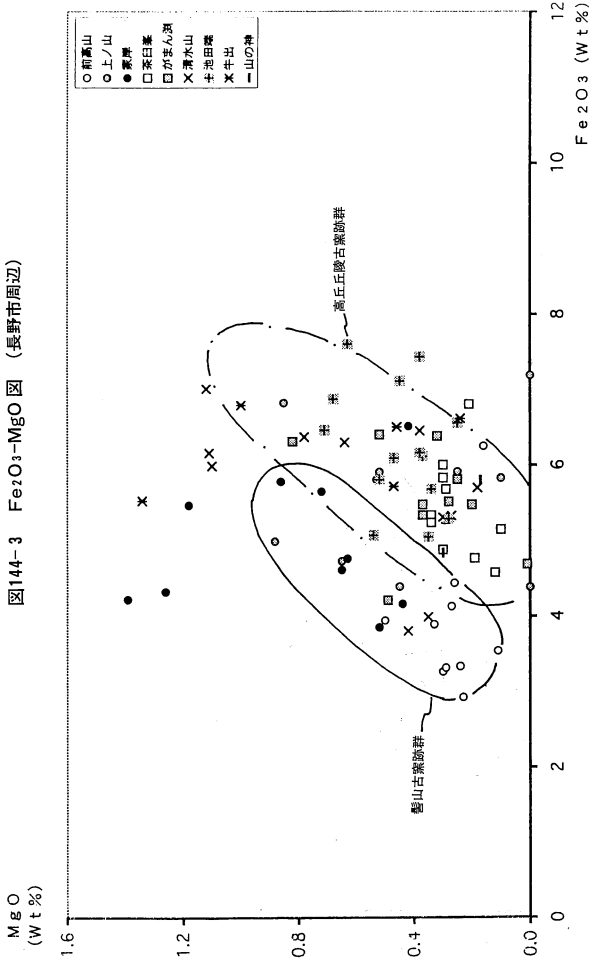


図144-4 CaO-K₂O-CaO 図 (長野市周辺)

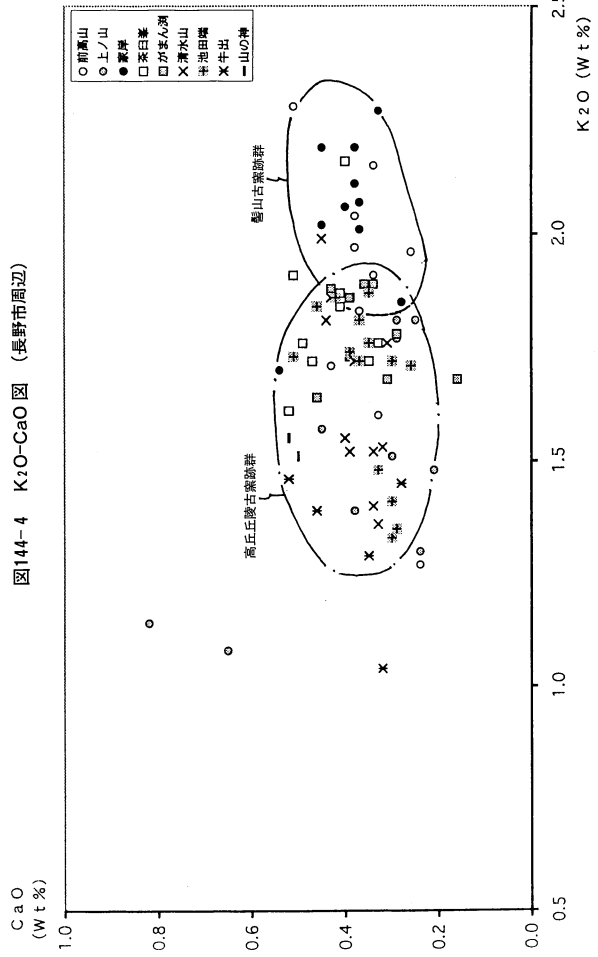


図144-1 Qt-Pt 図 (長野市周辺)

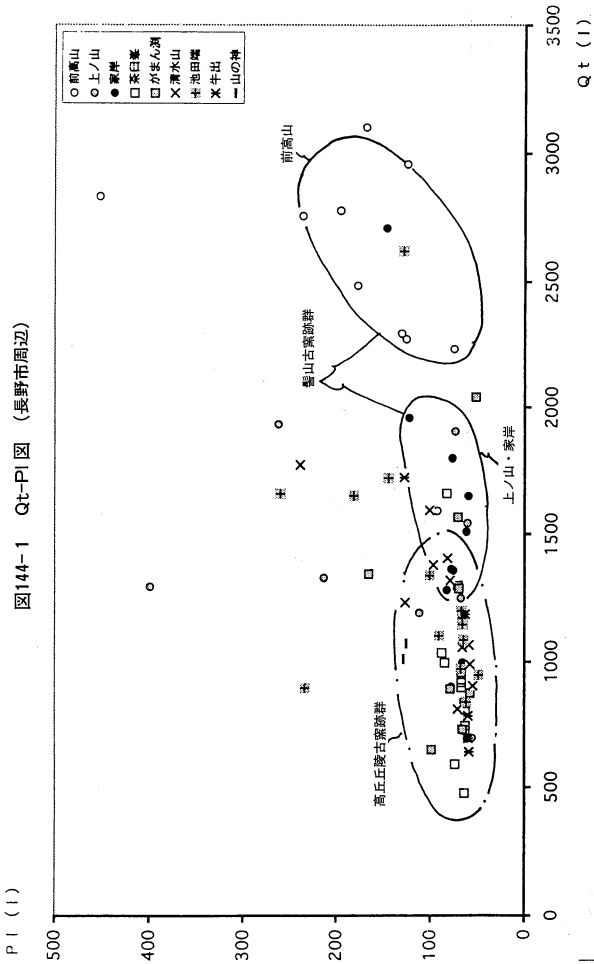


図144-2 SiO₂-Al₂O₃ 図 (長野市周辺)

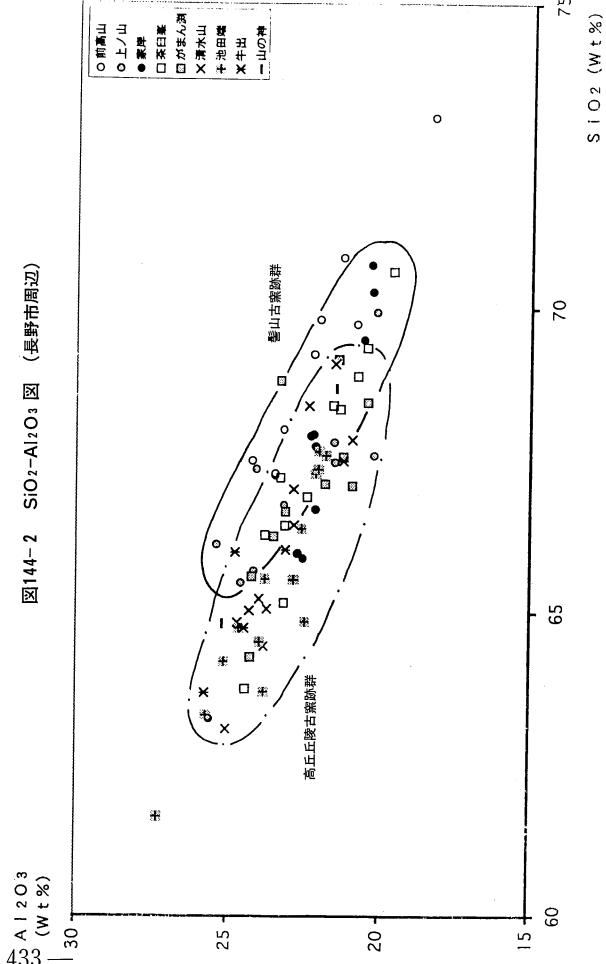


図144 長野市周辺の窯跡領域図

図145-3 Fe₂O₃-MgO 図 (戸倉・更埴)

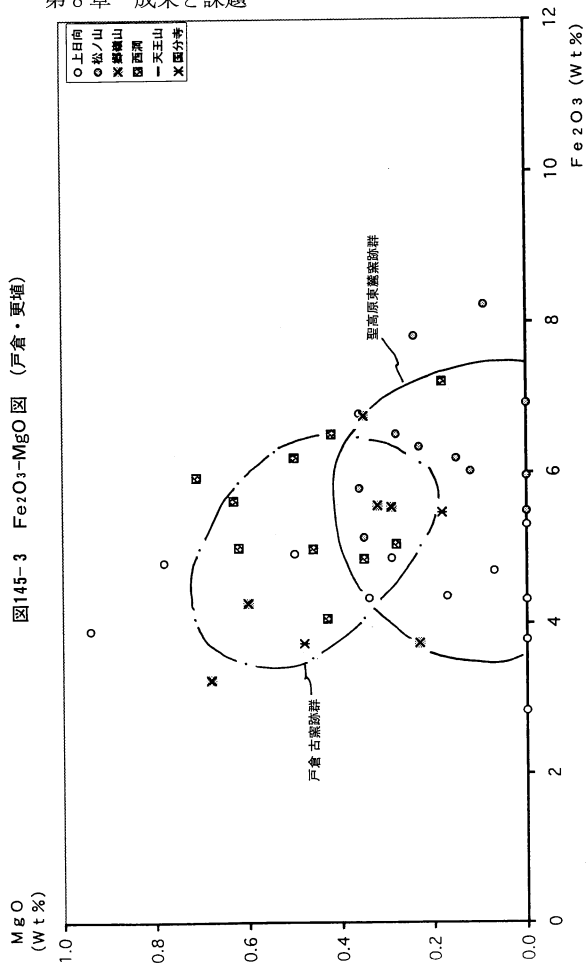


図145-1 Qt-Pl 図 (戸倉・更埴)

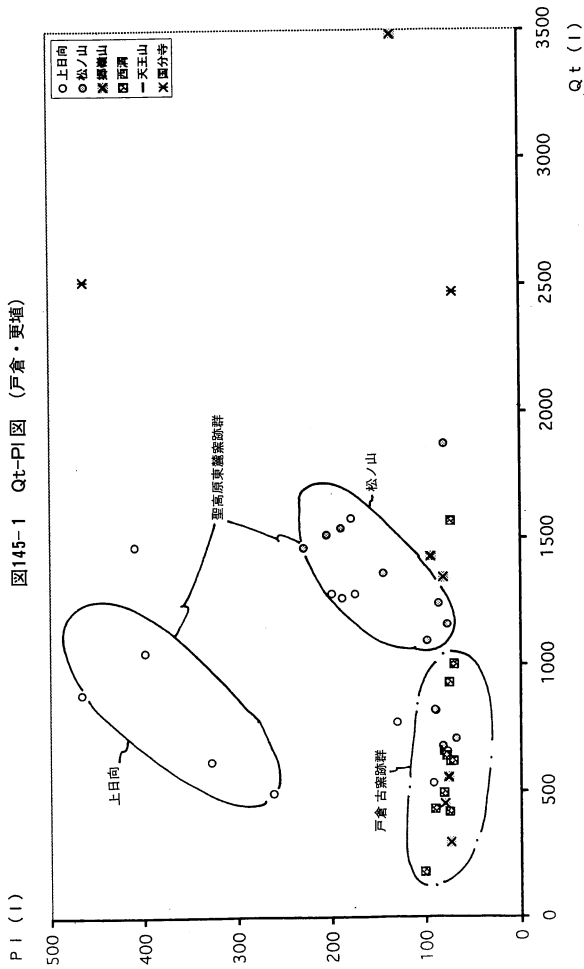


図145-2 SiO₂-Al₂O₃ 図 (戸倉・更埴)

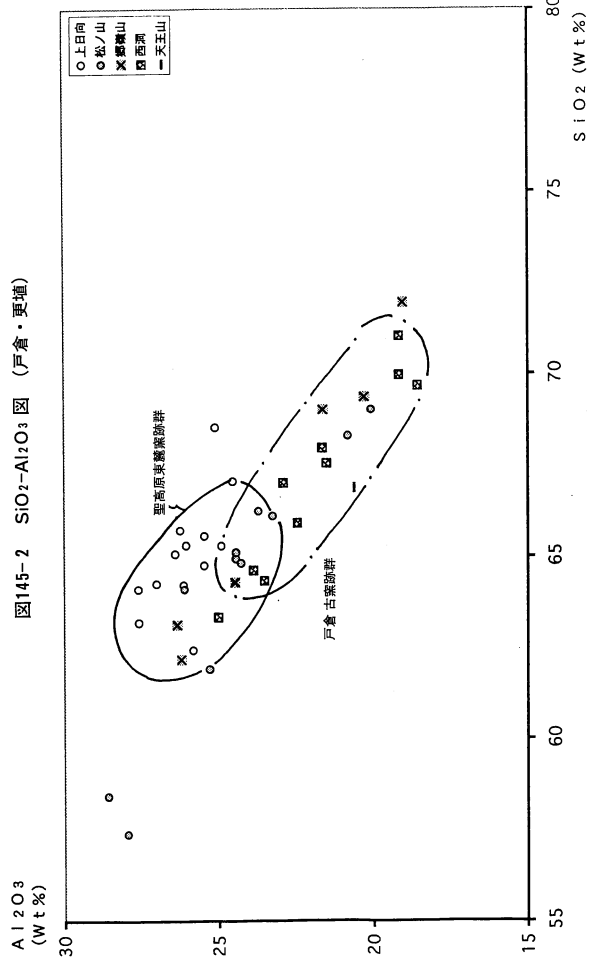


図145-4 K₂O-CaO 図 (戸倉・更埴)

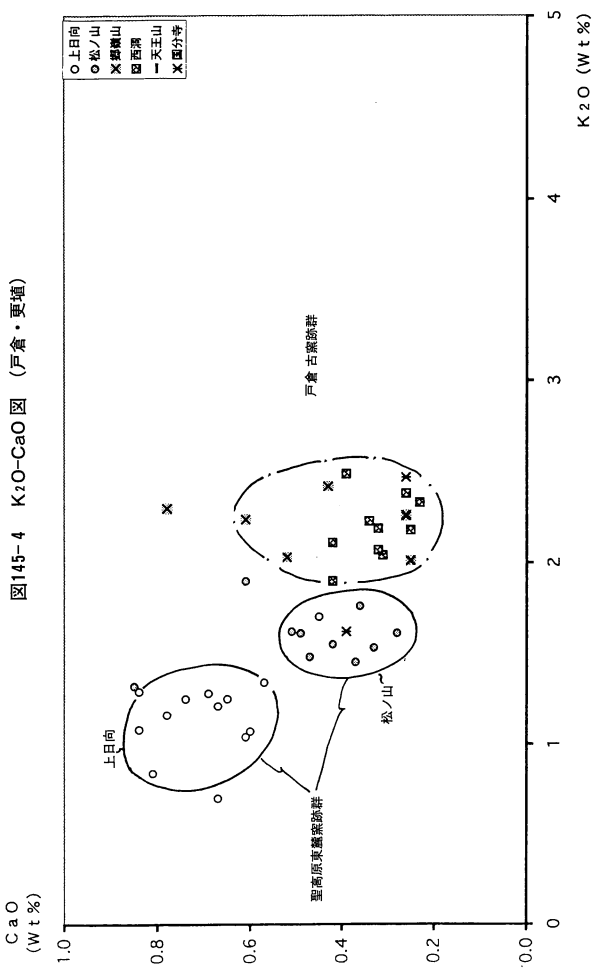


図145 戸倉町・更埴市周辺の窯跡領域図

図146-3 Fe₂O₃-MgO 図 (佐久平周辺)

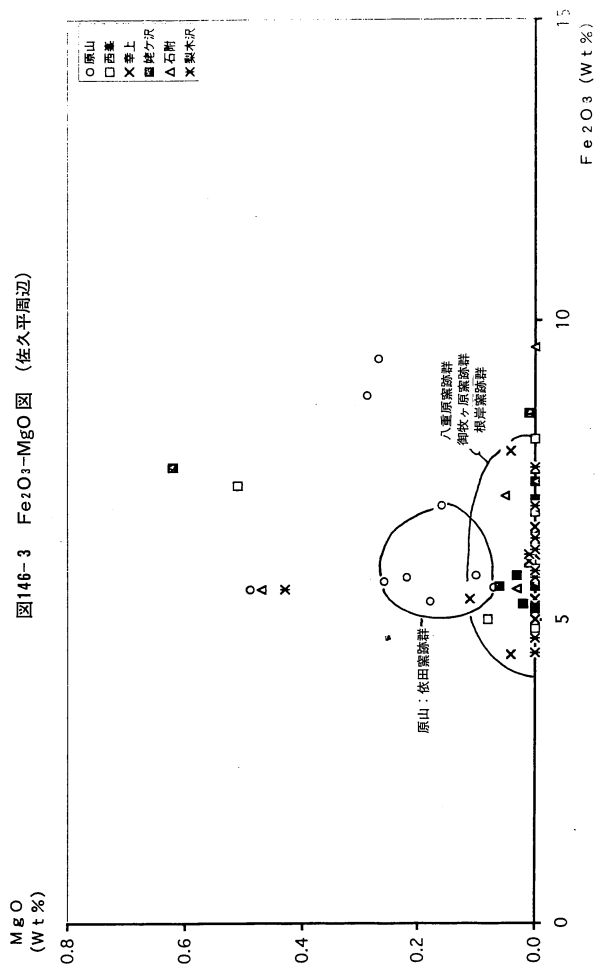


図146-4 K₂O-CaO 図 (佐久平周辺)

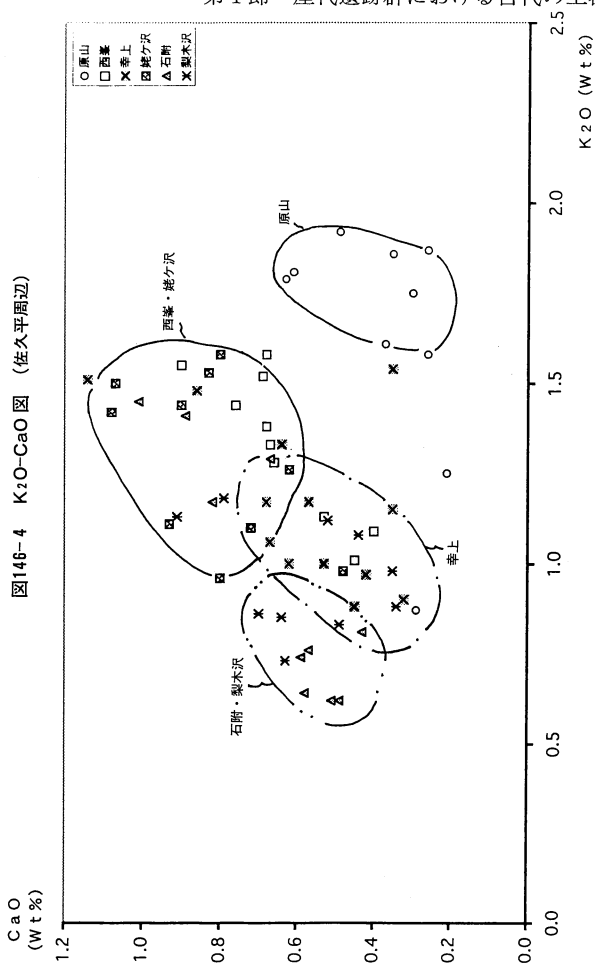


図146-1 Qt-Pt 図 (佐久平周辺)

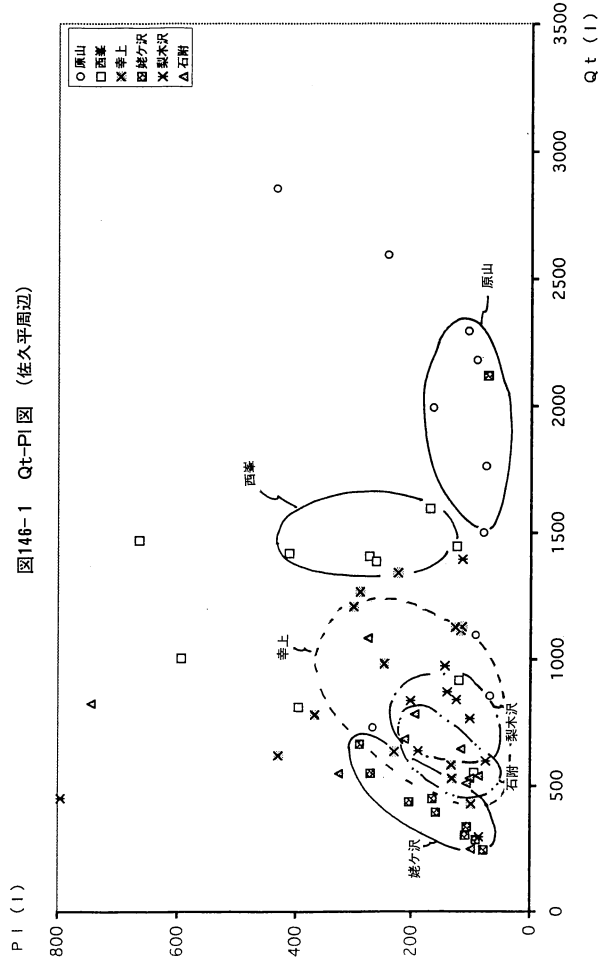


図146-2 SiO₂-Al₂O₃ 図 (佐久平周辺)

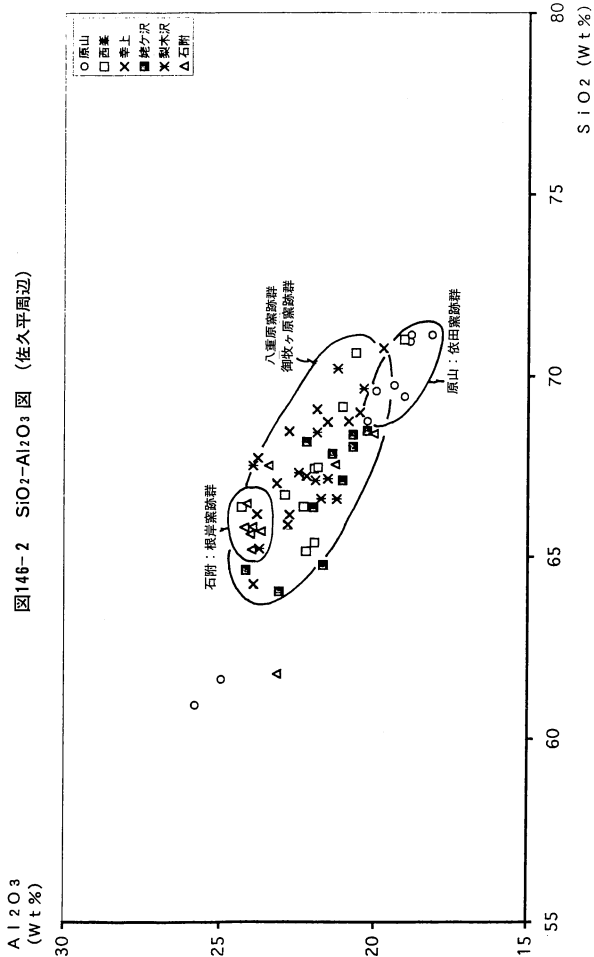


図146 佐久平周辺の窯跡領域図

図147-3 Fe₂O₃-MgO図 (松本平・岡谷)

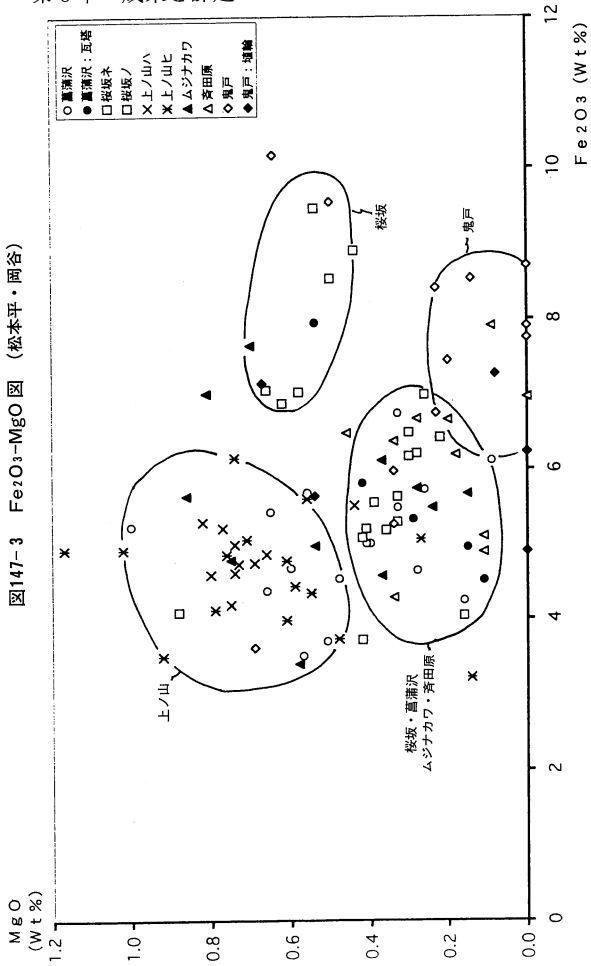


図147-4 CaO-K₂O-CaO図 (松本平・岡谷)

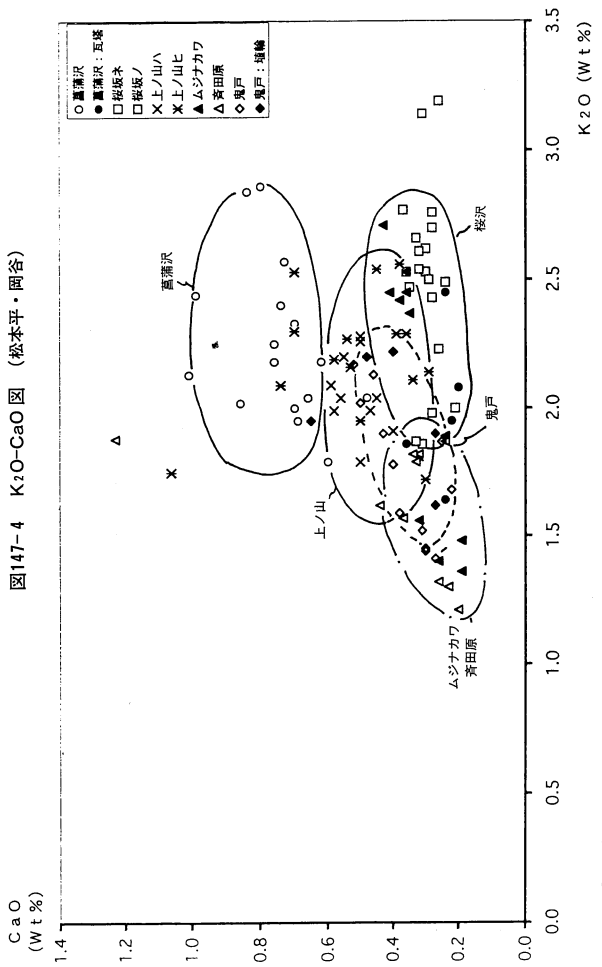


図147-1 Qt-Pl図 (松本平・岡谷)

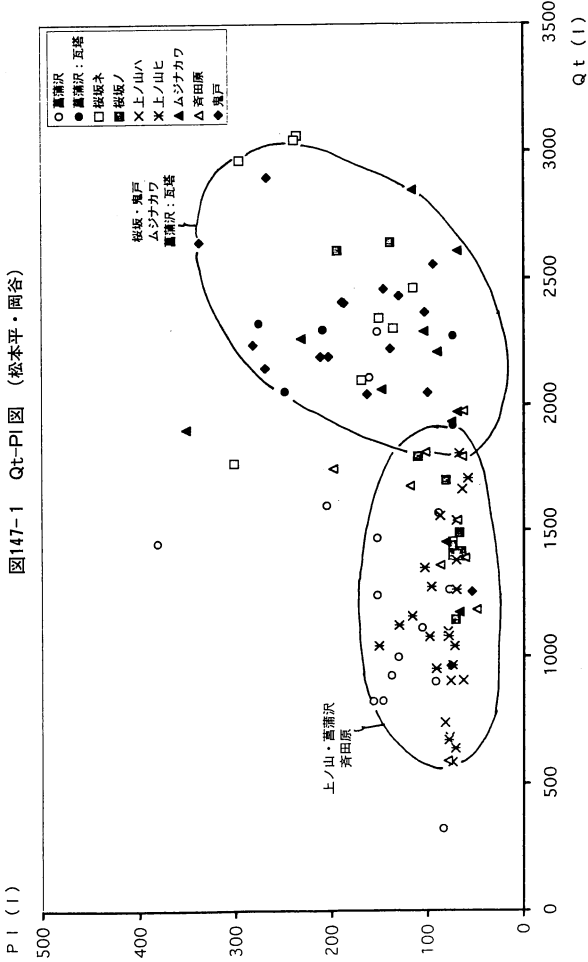


図147-2 SiO₂-Al₂O₃図 (松本平・岡谷)

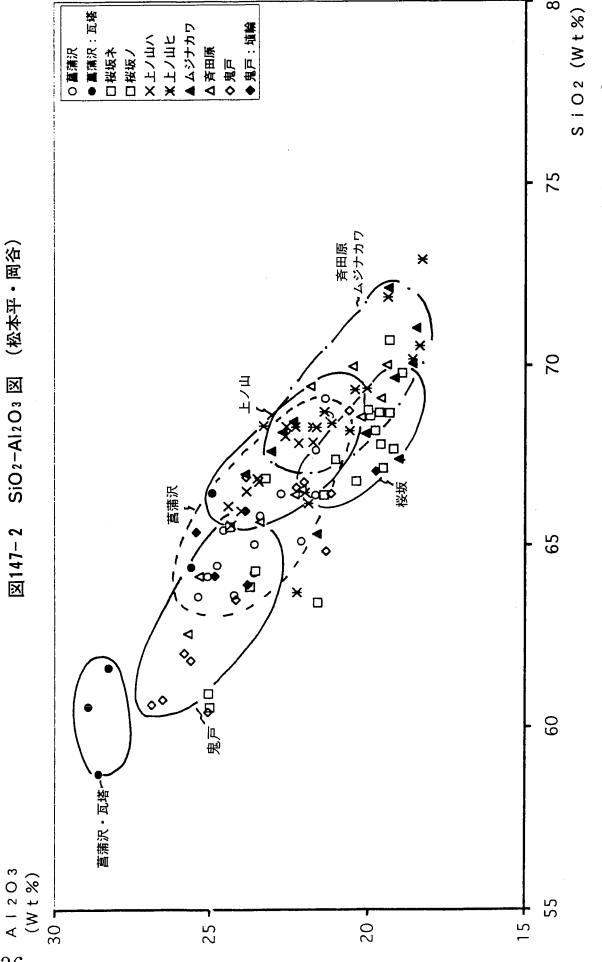


図147 松本平・岡谷市周辺の礫領域図

図148-1 Qt-Pl 図 (飯田市周辺)

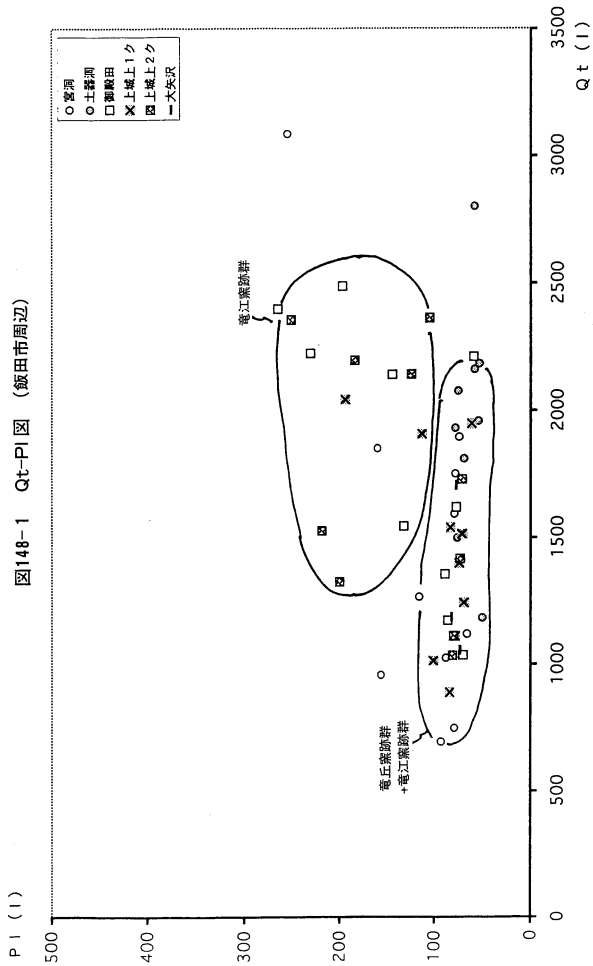


図148-3 Fe₂O₃-MgO 図 (飯田市周辺)

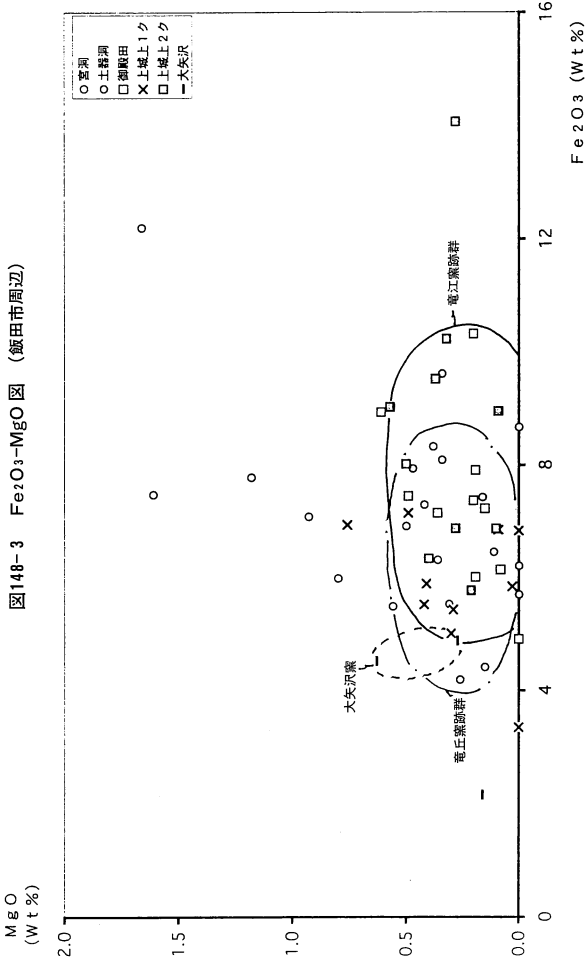


図148-2 SiO₂-Al₂O₃ 図 (飯田市周辺)

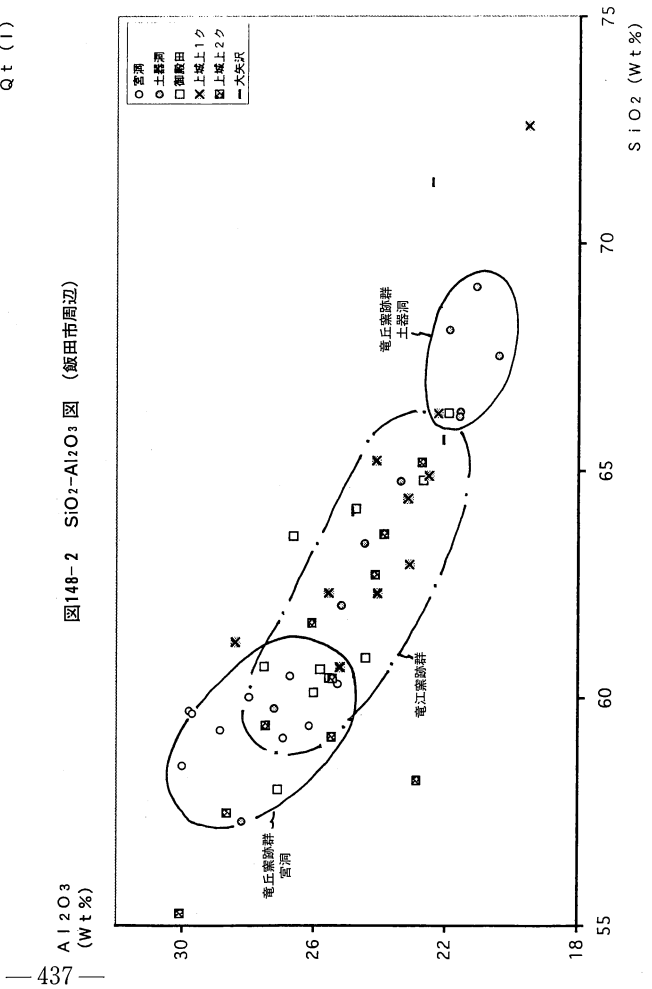


図148-4 K₂O-CaO 図 (飯田市周辺)

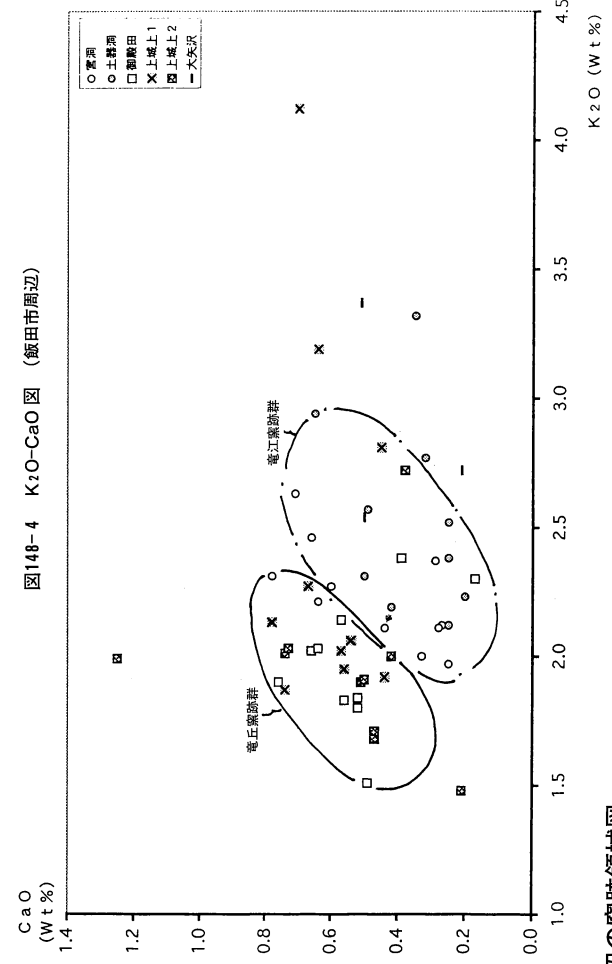
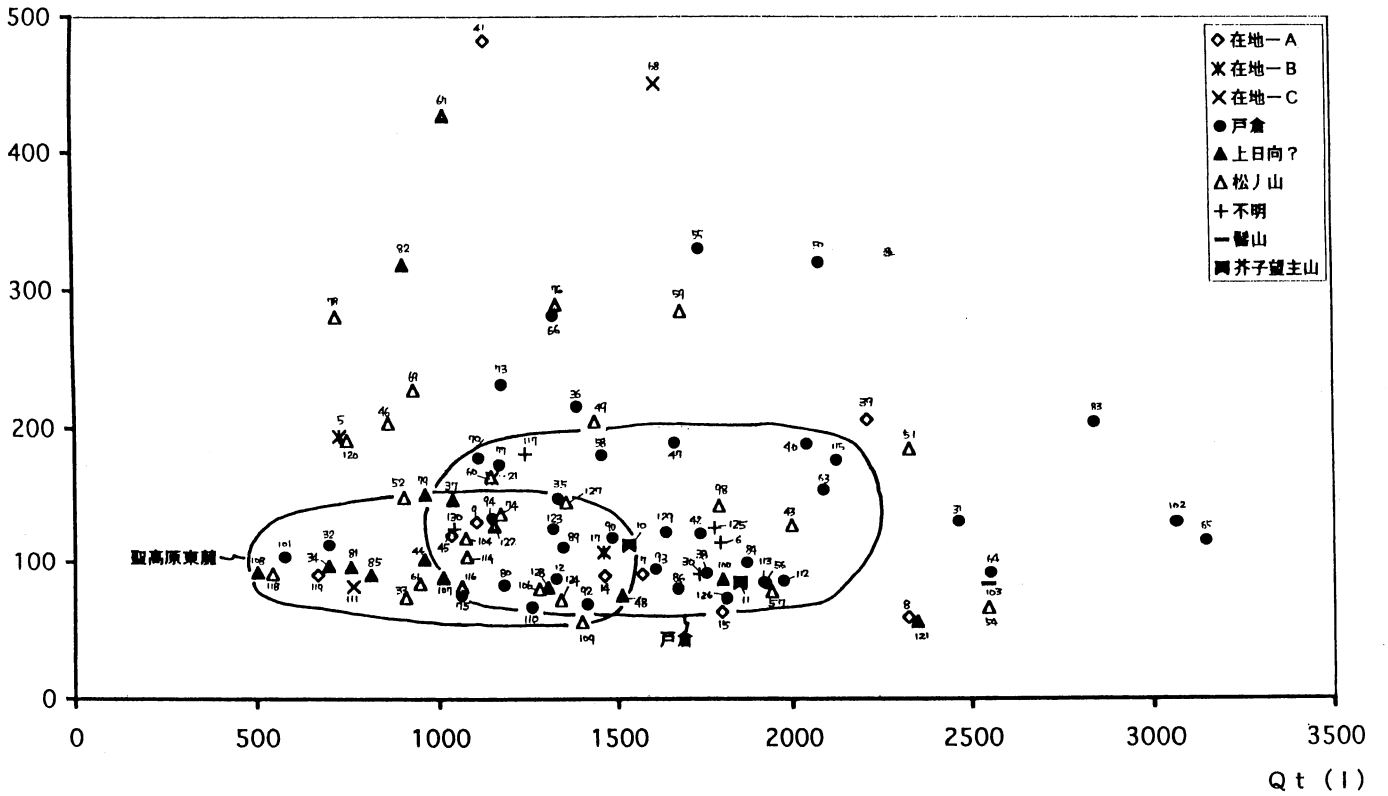


図148 飯田市周辺の窯跡領域図

PI (I)

図149-1 Qt-PI 図 (屋代)



Al₂O₃ (Wt%)

図149-2 SiO₂-Al₂O₃ 図 (屋代)

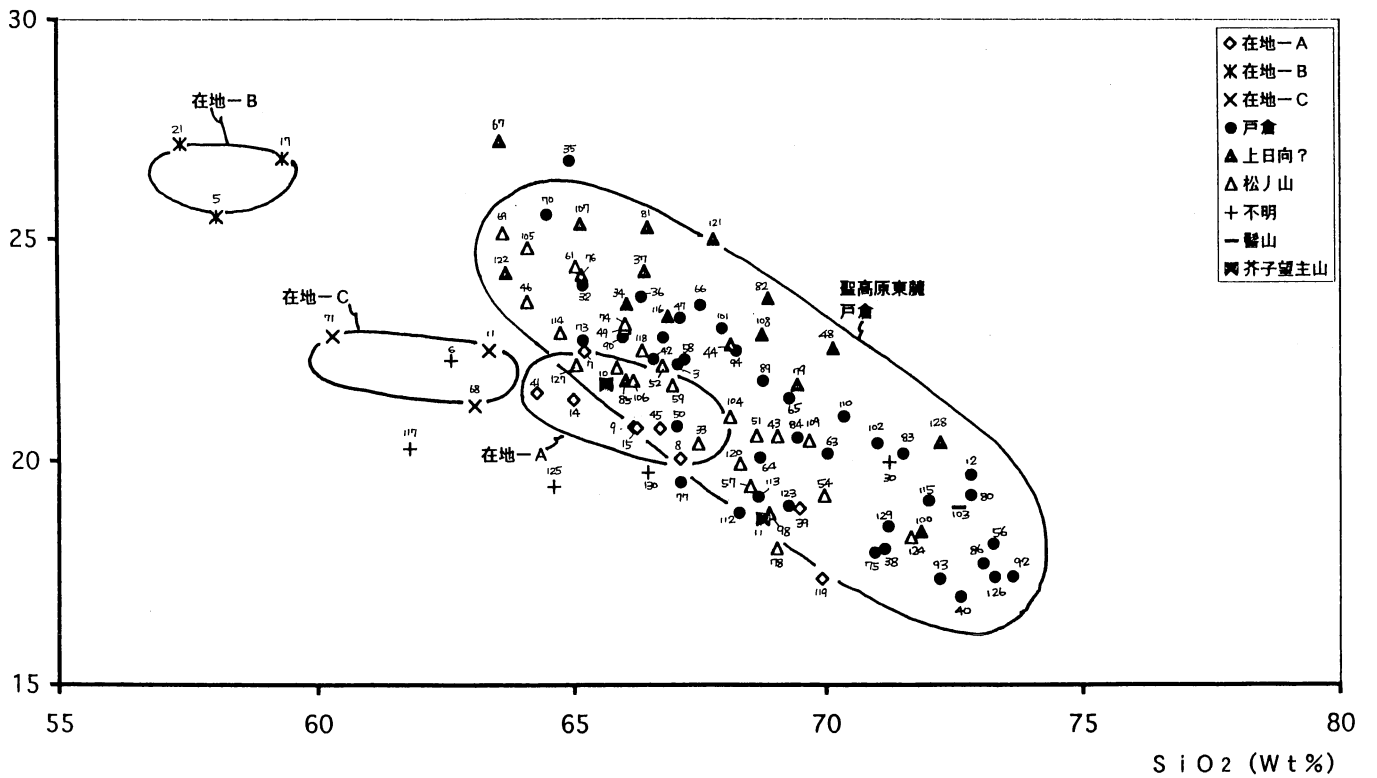


図149 屋代遺跡群出土須恵器 胎土分析結果 その1

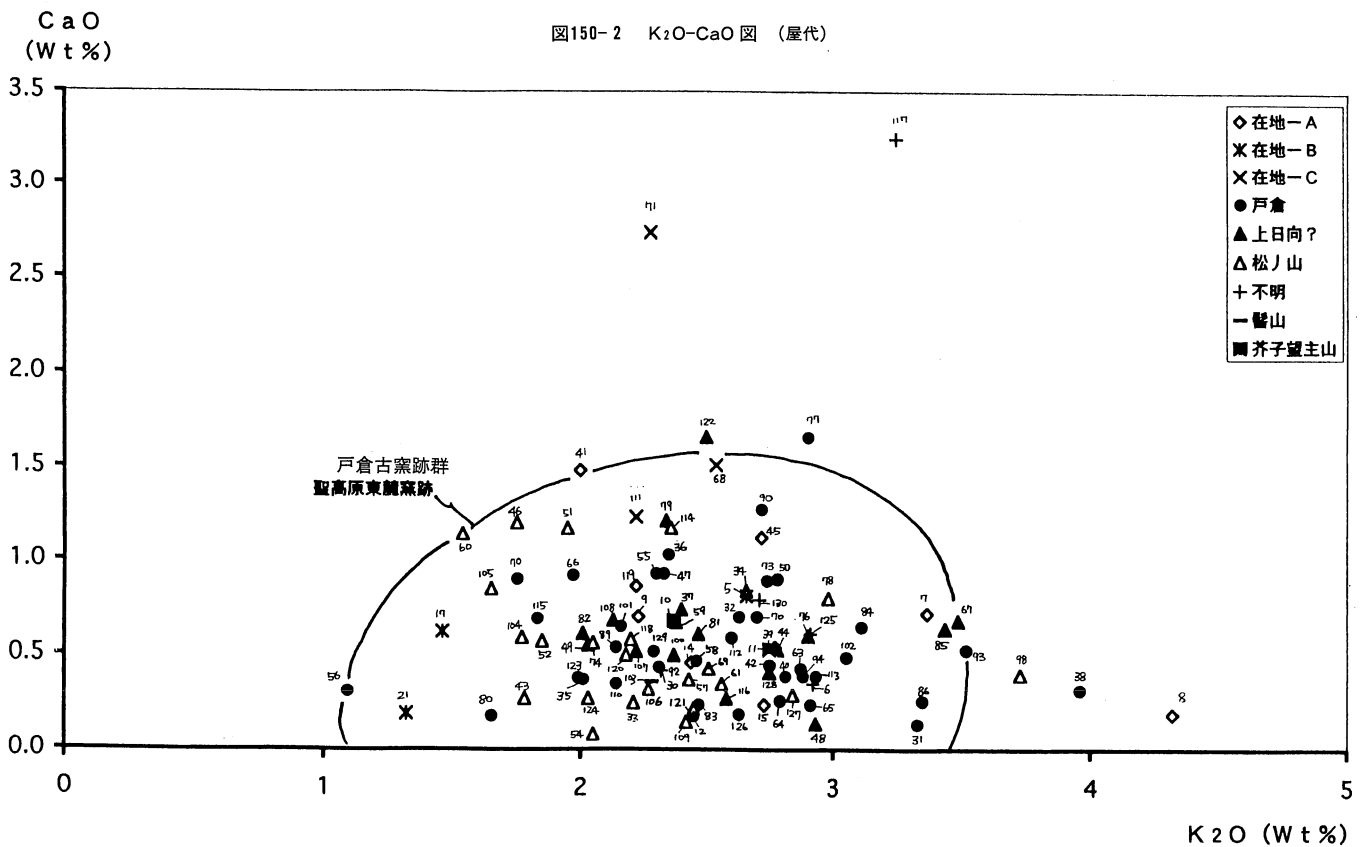
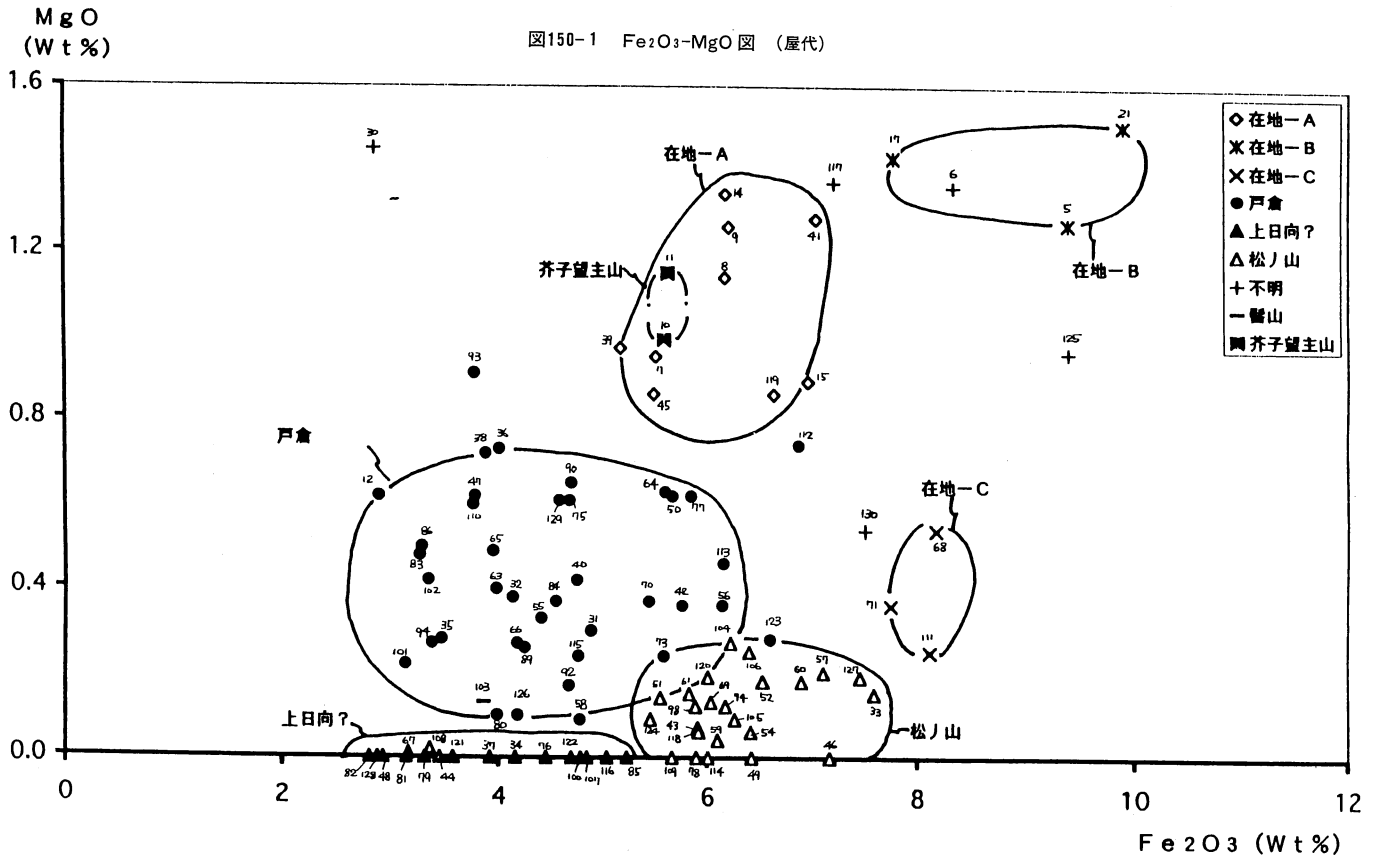
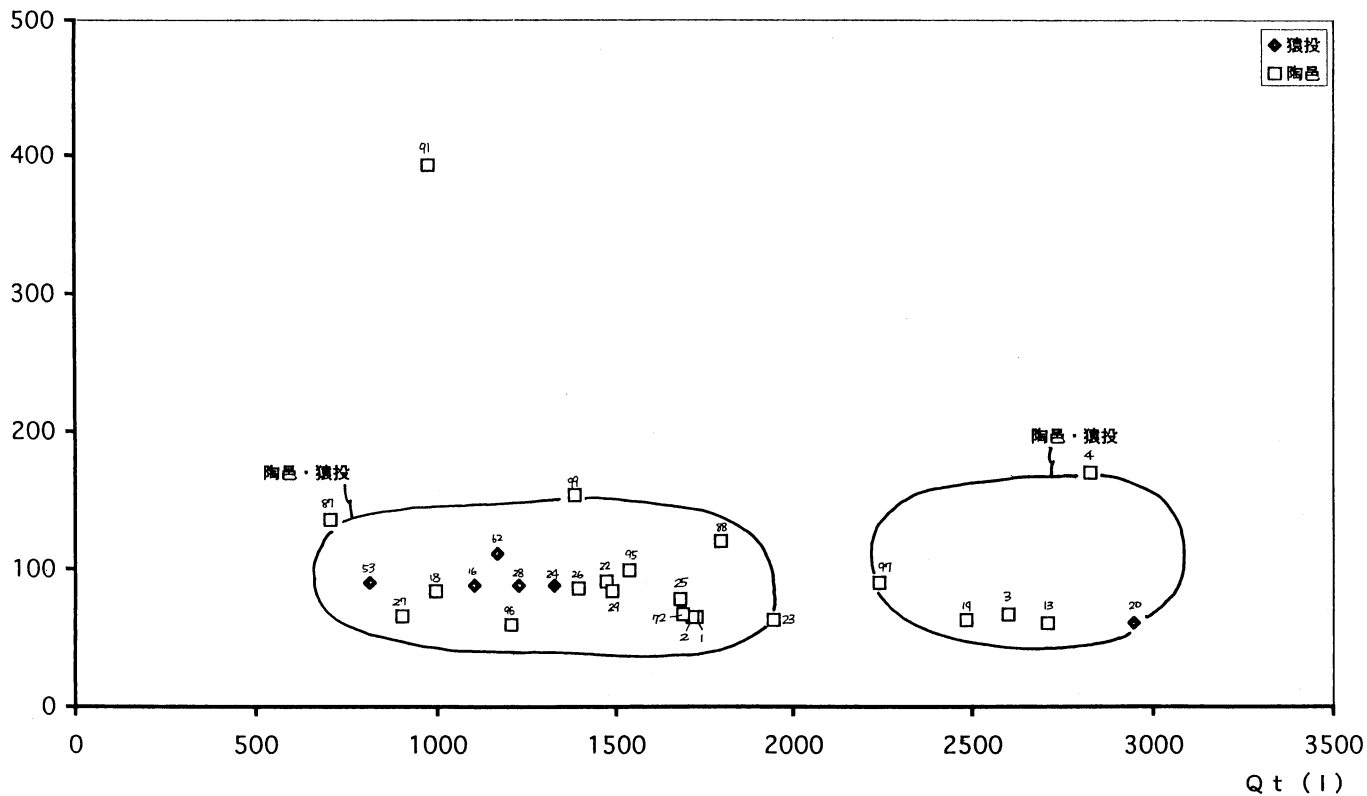


図150 屋代遺跡群出土須恵器 胎土分析結果 その2

PI (I)

図151-1 Qt-PI 図 (屋代)



Al₂O₃ (Wt%)

図151-2 SiO₂-Al₂O₃ 図 (屋代)

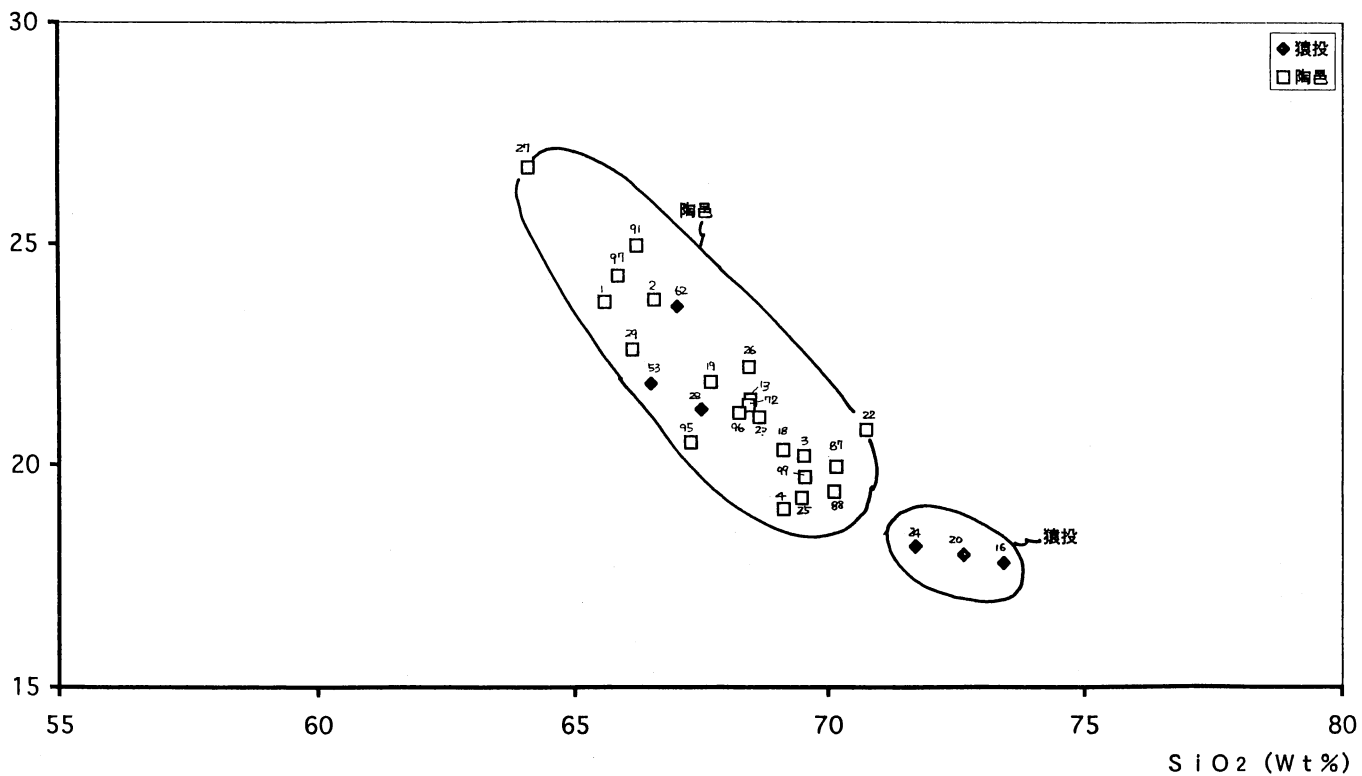


図151 屋代遺跡群出土須恵器 胎土分析結果 その3

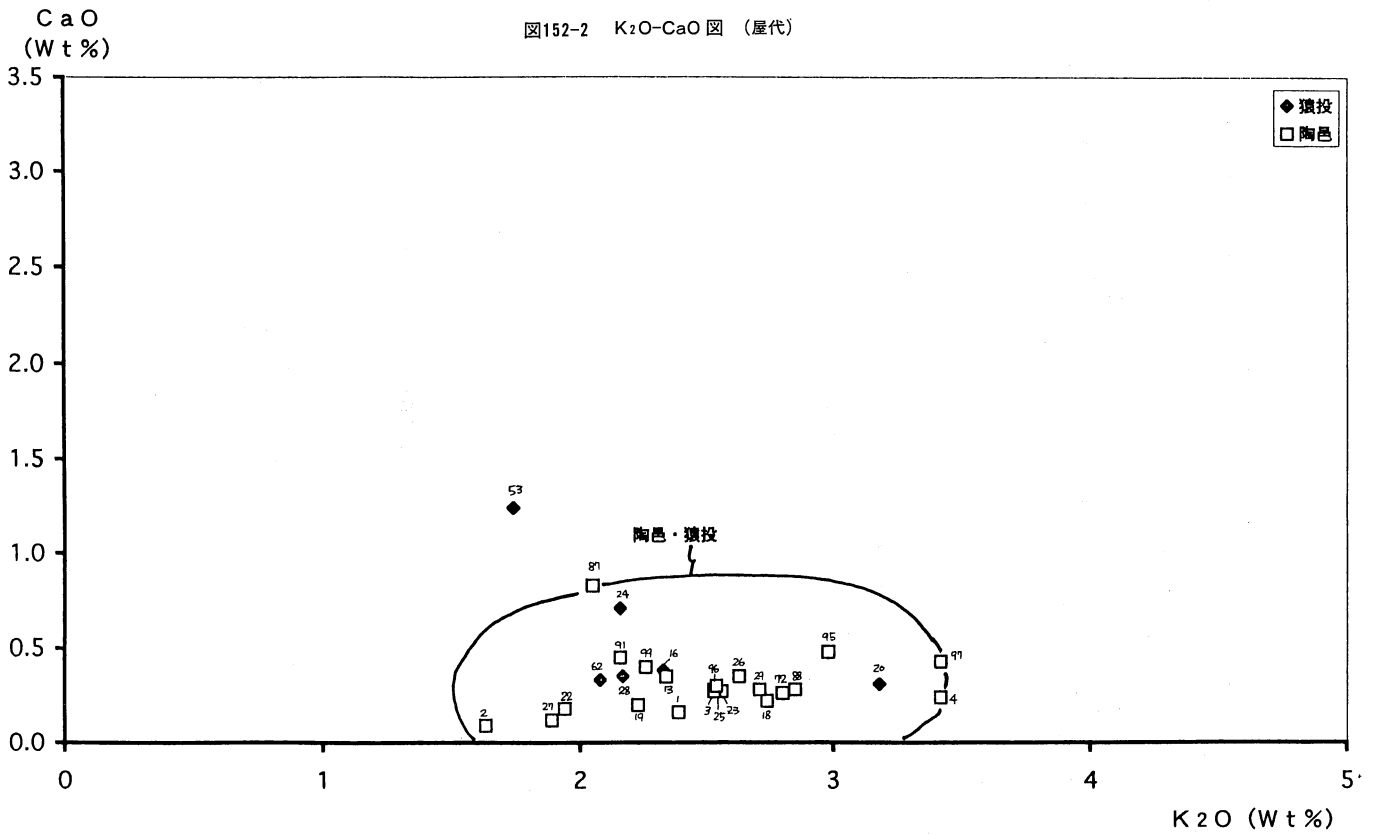
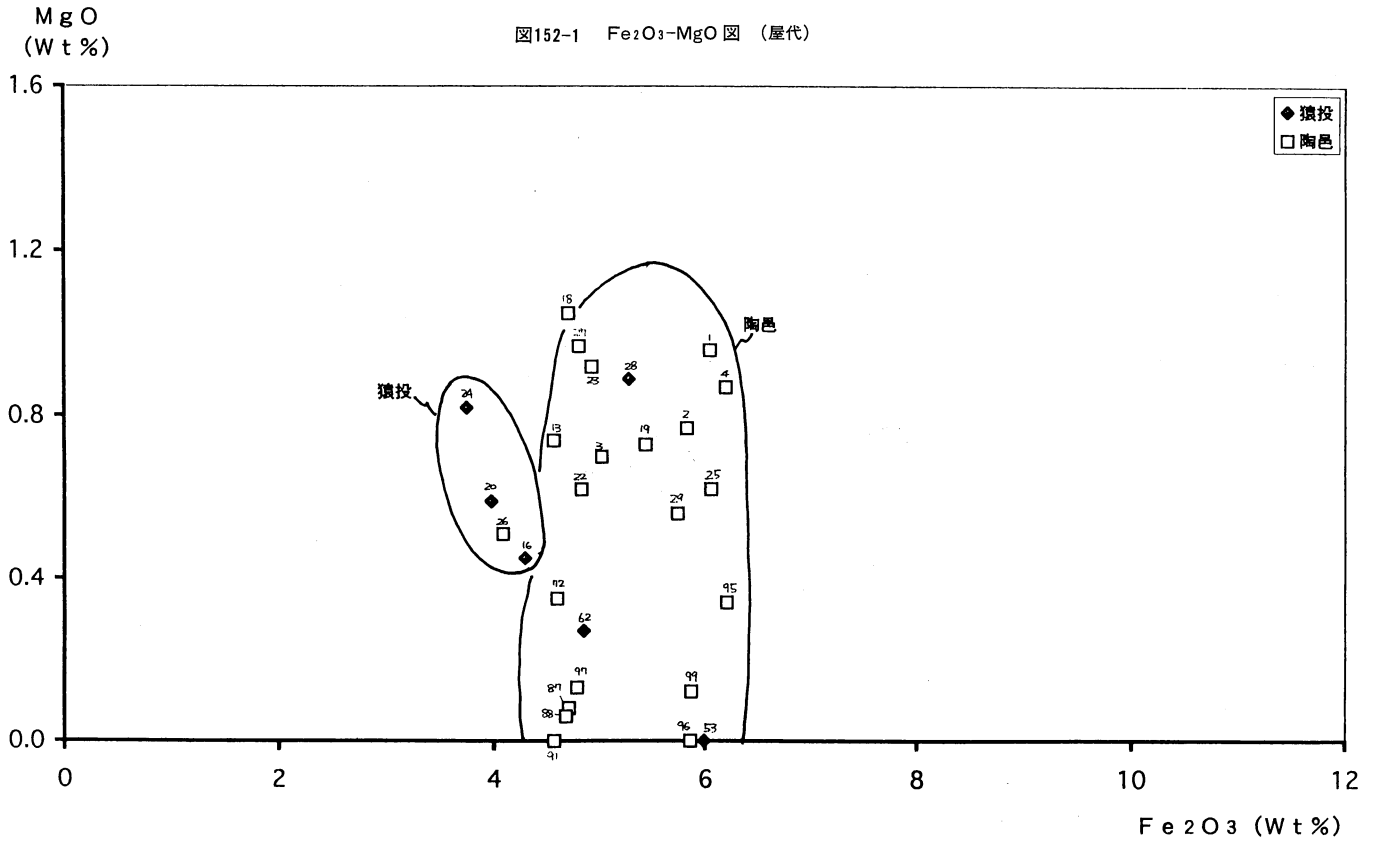



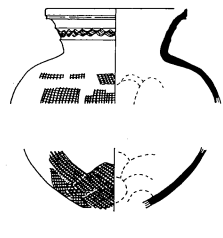
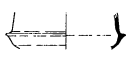
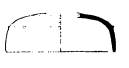
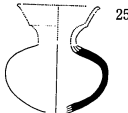
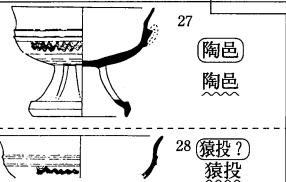


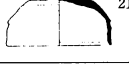


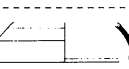
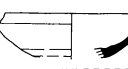
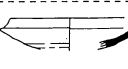
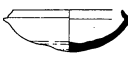

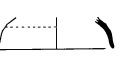
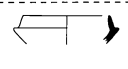
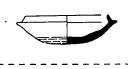
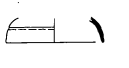

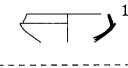
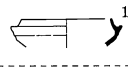
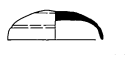
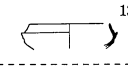
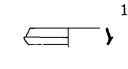
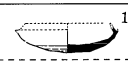
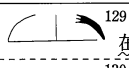
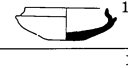
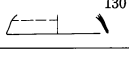
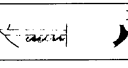


図152 屋代遺跡群出土須恵器 胎土分析結果 その4

	杯 H	杯蓋 H	甕	高杯	甕
TK216	1  陶邑 陶邑 伊勢の可憐性もある。	18  陶邑	24  猿投 猿投		29  陶邑 陶邑
古墳4期 古墳6期併行	TK 208 2  陶邑 陶邑	19  陶邑	25  陶邑 陶邑		 27 陶邑 陶邑 28 猿投? 猿投
	TK 23 TK 47	20  猿投 猿投	26  陶邑 陶邑		
古墳7期併行	MT 15	21  在地B 在地			
	TK 10	22  陶邑 陶邑			
古墳8期	3  陶邑 陶邑	23  陶邑 陶邑			
	4  陶邑 美濃須衛				
	5  在地B 在地?				
古代0期 古代1期前半	6  不明 在地?				
	7  在地-A	126  戸倉 陶邑or 在地			
古代1期前半	8  在地-A 陶邑				
	9  在地-A 陶邑	127  松ノ山			
	10  芥子望子				
	11  芥子望子	在地 猿投の系統			
	12  戸倉 陶邑、土は 猿投	128  上日向?			
	13  陶邑				
古代1期後半	14  在地-A				
	15  在地-A	129  戸倉 在地or陶邑			
	16  猿投 猿投	130  不明 在地			
その他	17  在地B 在地				

分析資料 出土場所

分析番号	屋代	II22-739
1		W018-40
2		SB6024-500
3		SB6070-553
4		" -554
5		SB6003-403
6		SB6111-6
7		SB6027-3
8		SD8049-71
9		SD8049-72
10		SD8049-67
11		SD8044-53
12		SD7065-24
13		SD7065-22
14		SD7046-46
15		SD7056-8
16		ⓐ区-713
17		INa20-718
18		SB6064-717
19		SD7048-735
20		SB5062-141
21		SD7046-737
22		SB5056-715
23		SB6078-561
24		SB5190-375
25		SD7068-613
26		SD8021-734
27		SB6009-414
28		SB5189-340
29		
126		SB6111-5
127		SX7035-1
128		SD8044-26
129		SD7045-3
130		SD7048-10

『弥生・古墳編』にて報告

図153 須恵器胎土分析結果 (産地名に○印) と肉眼観察による産地推定 (産地名の下に〜線) その1 S = 1 : 8

時期	杯 A	杯 B	杯 G	杯蓋 A	杯蓋 B	その他	
古代 1 期前半	31 戸倉 在地 32 戸倉 在地? 33 松ノ山 陶器	72 陶器	86 戸倉 陶器 87 陶器 88 陶器	95 陶器 96 陶器 97 陶器		117 不明 在地	
5	40 戸倉 在地 41 在地A 在地 42 戸倉 在地 43 松ノ山 在地 44 上田向? 在地	73 戸倉 在地 74 松ノ山 在地 75 戸倉 陶器	89 戸倉 90 戸倉 在地 91 陶器 在地	98 松ノ山 陶器 99 陶器	101 戸倉 在地 or 陶器 102 戸倉 在地	5 水 田	
古代 1 期後半	35 美濃須衛 36 戸倉 在地 37 上田向? 在地 38 戸倉 在地 39 在地A 在地?	76 戸倉 陶器 77 戸倉 在地 78 戸倉 在地	92 戸倉 陶器 93 戸倉 陶器 94 戸倉 在地	100 上田向? 在地	103 松ノ山 在地 104 松ノ山 在地 105 松ノ山 在地	118 松ノ山 在地? 119 在地A 在地? 120 松ノ山 在地 121 上田向? 在地 122 上田向? 在地	4 水田 (1 期末) 2 期初頭
4	45 在地A 陶器 46 松ノ山 在地 47 戸倉 在地 (形は美濃須衛) 48 上田向? 陶器	76 戸倉 陶器 77 戸倉 在地 (形は美濃須衛) 78 戸倉 在地	92 戸倉 陶器 93 戸倉 陶器 94 戸倉 在地	100 上田向? 在地	103 松ノ山 在地 104 松ノ山 在地 105 松ノ山 在地	118 松ノ山 在地? 119 在地A 在地? 120 松ノ山 在地 121 上田向? 在地 122 上田向? 在地	4 水田 (1 期末) 2 期初頭
古代 2 期	49 松ノ山 在地 50 戸倉 在地 (形は美濃須衛) 51 松ノ山 在地	77 戸倉 在地 78 戸倉 在地	92 戸倉 陶器 93 戸倉 陶器 94 戸倉 在地	100 上田向? 在地	103 松ノ山 在地 104 松ノ山 在地 105 松ノ山 在地	118 松ノ山 在地? 119 在地A 在地? 120 松ノ山 在地 121 上田向? 在地 122 上田向? 在地	3 水 田
3	52 松ノ山 陶器 53 獵投? or 尾北	77 戸倉 在地 78 戸倉 在地	92 戸倉 陶器 93 戸倉 陶器 94 戸倉 在地	100 上田向? 在地	103 松ノ山 在地 104 松ノ山 在地 105 松ノ山 在地	118 松ノ山 在地? 119 在地A 在地? 120 松ノ山 在地 121 上田向? 在地 122 上田向? 在地	3 水 田
古代 3・4 期	54 松ノ山 在地 55 戸倉 在地	77 戸倉 在地 78 戸倉 在地	92 戸倉 陶器 93 戸倉 陶器 94 戸倉 在地	100 上田向? 在地	103 松ノ山 在地 104 松ノ山 在地 105 松ノ山 在地	118 松ノ山 在地? 119 在地A 在地? 120 松ノ山 在地 121 上田向? 在地 122 上田向? 在地	3 水 田

S = 1 : 8
分析No.117~120のみ S = 1 : 16

図154 須恵器胎土分析結果 (産地名に○印) と肉眼観察による産地推定 (産地名の下に~~~~線) その2







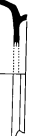







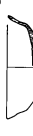

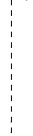


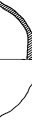





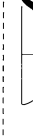














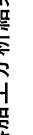




時期	杯 A	杯 B	杯 G	杯蓋 A	杯蓋 B	その他	時期
古代 5 期	58  (戸倉) 在地	79  (上日向) 在地	分析資料 出土場所 分析No.30 SQ5002-1 分析No.78 SD7030-15 31 SD8049-65 79 SB6116-6 32 SD8044上層-28 80 SB6086-8 33 SD7065-3 81 SB6038-7 34 SX7037-28 82 SB9077-14 35 SX7037-27 83 SB3031-12 36 SD7062-5 84 SB3031-13 37 SD7062-3 85 SB3018-5 38 SD7049-3 86 SD8049-16 39 SD7049-11 87 SD8044-24 図版324 40 SD7045-19 88 SD7065-28 41 SD7045-4 89 SD7048-11 42 SD7045-10 90 SD7051-7 43 SD7045-8 91 SB4205-11 44 SD7051-15 92 SD7047-35 45 SD7035-54 93 SD7035-20 46 SD7035-26 94 SD7038-17 47 SD7035-59 95 SD8044下層-51 48 SD7035-21 96 SD7067-39 49 SD8028 5層-29 97 SB5093-3 50 SD8028 5層-35 98 SX7037-19 51 SD8028 5層-30 99 SD7048-8 52 SD7030-4 100 SD7047-7 53 SD7030-37 101 SD7062-17 54 SB4228-1 102 SD7058-7 55 SB5104-2 103 SD7047-5 56 SD6036-1 104 SD7047-6 57 SB6039-3 105 SD8038-27 58 SB6116-3 106 SD7030-25 59 SB6116-5 107 SD7030-61 60 SB6116-2 108 SD7022-4 61 SB6116-1 109 SB6099-1 62 SB9059-25 110 SB6038-1 63 SB9059-14 111 SB6086-2 64 SB9059-15 112 SB6101-1 65 SB9059-8 113 SB9073-1 66 SB4009-13 114 SB9073-2 67 SB4009-10 115 SB3016-1 68 SB4009-4 116 SB4504-1 69 SB4009-6 117 ⑥区 5水田-4 70 SB9067-2 118 SD7038-19 71 SB9067-1 119 ⑥区 4水田-4 72 SD8044-55 120 SD7030-79 73 SD7058-13 121 SD7030-43 74 SD7058-12 122 SD8028-26 75 SD7045-7 123 ③④区 平安水田面-10 76 SD7038-18 124 SB1004 77 SD7030-16 125 SB3022	110  (戸倉) 在地 (形は美濃須戸)	分析No.123~125は 分析No.30のみ 分析No.123~125は S=1:16 分析No.30のみ S=1:24		
	59  (戸倉) 在地	80  (戸倉) 在地					
	60  (戸倉) 在地	81  (上日向) 在地					
	61  (戸倉) 在地	82  (上日向) 在地					
	62  (戸倉) 在地	83  (戸倉) 在地 (形は美濃須戸)					
	63  (戸倉) 在地	84  (戸倉) 在地 (土は美濃須戸に似る)					
	64  (戸倉) 在地	85  (上日向) 在地					
	65  (戸倉) 在地	86  (上日向) 在地					
	66  (戸倉) 在地	87  (上日向) 在地					
	67  (戸倉) 在地	88  (上日向) 在地					
	68  (戸倉) 在地	89  (上日向) 在地					
	69  (戸倉) 在地	90  (上日向) 在地					
	70  (戸倉) 在地	91  (上日向) 在地					
	71  (戸倉) 在地	92  (上日向) 在地					
	72  (戸倉) 在地	93  (上日向) 在地					
	73  (戸倉) 在地	94  (上日向) 在地					
74  (戸倉) 在地	95  (上日向) 在地						
75  (戸倉) 在地	96  (上日向) 在地						
76  (戸倉) 在地	97  (上日向) 在地						
77  (戸倉) 在地	98  (上日向) 在地						
78  (戸倉) 在地	99  (上日向) 在地						
79  (戸倉) 在地	100  (上日向) 在地						
80 (戸倉) 在地	101 (上日向) 在地						
81 (戸倉) 在地	102 (上日向) 在地						
82 (戸倉) 在地	103 (上日向) 在地						
83 (戸倉) 在地	104 (上日向) 在地						
84 (戸倉) 在地	105 (上日向) 在地						
85 (戸倉) 在地	106 (上日向) 在地						
86 (戸倉) 在地	107 (上日向) 在地						
87 (戸倉) 在地	108 (上日向) 在地						
88 (戸倉) 在地	109 (上日向) 在地						
89 (戸倉) 在地	110 (上日向) 在地						
90 (戸倉) 在地	111 (上日向) 在地						
91 (戸倉) 在地	112 (上日向) 在地						
92 (戸倉) 在地	113 (上日向) 在地						
93 (戸倉) 在地	114 (上日向) 在地						
94 (戸倉) 在地	115 (上日向) 在地						
95 (戸倉) 在地	116 (上日向) 在地						
96 (戸倉) 在地	117 (上日向) 在地						
97 (戸倉) 在地	118 (上日向) 在地						
98 (戸倉) 在地	119 (上日向) 在地						
99 (戸倉) 在地	120 (上日向) 在地						
100 (戸倉) 在地	121 (上日向) 在地						
101 (戸倉) 在地	122 (上日向) 在地						
102 (戸倉) 在地	123 (上日向) 在地						
103 (戸倉) 在地	124 (上日向) 在地						
104 (戸倉) 在地	125 (上日向) 在地						
105 (戸倉) 在地	126 (上日向) 在地						
106 (戸倉) 在地	127 (上日向) 在地						
107 (戸倉) 在地	128 (上日向) 在地						
108 (戸倉) 在地	129 (上日向) 在地						
109 (戸倉) 在地	130 (上日向) 在地						
110 (戸倉) 在地	131 (上日向) 在地						
111 (戸倉) 在地	132 (上日向) 在地						
112 (戸倉) 在地	133 (上日向) 在地						
113 (戸倉) 在地	134 (上日向) 在地						
114 (戸倉) 在地	135 (上日向) 在地						
115 (戸倉) 在地	136 (上日向) 在地						
116 (戸倉) 在地	137 (上日向) 在地						
117 (戸倉) 在地	138 (上日向) 在地						
118 (戸倉) 在地	139 (上日向) 在地						
119 (戸倉) 在地	140 (上日向) 在地						
120 (戸倉) 在地	141 (上日向) 在地						
121 (戸倉) 在地	142 (上日向) 在地						
122 (戸倉) 在地	143 (上日向) 在地						
123 (戸倉) 在地	144 (上日向) 在地						
124 (戸倉) 在地	145 (上日向) 在地						
125 (戸倉) 在地	146 (上日向) 在地						
126 (戸倉) 在地	147 (上日向) 在地						
127 (戸倉) 在地	148 (上日向) 在地						
128 (戸倉) 在地	149 (上日向) 在地						
129 (戸倉) 在地	150 (上日向) 在地						
130 (戸倉) 在地	151 (上日向) 在地						
131 (戸倉) 在地	152 (上日向) 在地						
132 (戸倉) 在地	153 (上日向) 在地						
133 (戸倉) 在地	154 (上日向) 在地						
134 (戸倉) 在地	155 (上日向) 在地						
135 (戸倉) 在地	156 (上日向) 在地						
136 (戸倉) 在地	157 (上日向) 在地						
137 (戸倉) 在地	158 (上日向) 在地						
138 (戸倉) 在地	159 (上日向) 在地						
139 (戸倉) 在地	160 (上日向) 在地						
140 (戸倉) 在地	161 (上日向) 在地						
141 (戸倉) 在地	162 (上日向) 在地						
142 (戸倉) 在地	163 (上日向) 在地						
143 (戸倉) 在地	164 (上日向) 在地						
144 (戸倉) 在地	165 (上日向) 在地						
145 (戸倉) 在地	166 (上日向) 在地						
146 (戸倉) 在地	167 (上日向) 在地						
147 (戸倉) 在地	168 (上日向) 在地						
148 (戸倉) 在地	169 (上日向) 在地						
149 (戸倉) 在地	170 (上日向) 在地						
150 (戸倉) 在地	171 (上日向) 在地						
151 (戸倉) 在地	172 (上日向) 在地						
152 (戸倉) 在地	173 (上日向) 在地						
153 (戸倉) 在地	174 (上日向) 在地						
154 (戸倉) 在地	175 (上日向) 在地						
155 (戸倉) 在地	176 (上日向) 在地						
156 (戸倉) 在地	177 (上日向) 在地						
157 (戸倉) 在地	178 (上日向) 在地						
158 (戸倉) 在地	179 (上日向) 在地						
159 (戸倉) 在地	180 (上日向) 在地						
160 (戸倉) 在地	181 (上日向) 在地						
161 (戸倉) 在地	182 (上日向) 在地						
162 (戸倉) 在地	183 (上日向) 在地						
163 (戸倉) 在地	184 (上日向) 在地						
164							

表86 須恵器器種別、産地の変化 略号 美=美濃須衛 北=尾北 湖=湖西 陶=陶邑 猿=猿投 ◎多数

	産地名	杯	杯蓋	杯蓋	杯	杯	杯	杯蓋	高	小型	高	鉢	鉢	聽	フラスコ	長頸	長頸	提	横	平	短頸	短頸	短頸	甗	その他
		H	H	A	G	A	B	B	杯	高杯	盤	A	D		瓶	壺A	壺B	瓶	瓶	瓶	壺A	壺B	壺C	A・B・C・E一括	
須恵器出現期 古墳6期	在地		1																						
	陶邑	2	2						1					2											1
	猿投		1						1					1											
	その他																								
古墳7期併行期	在地																								
	陶邑	1	2																						
	猿投																								
	その他																								
古墳8期併行期	在地	1																							
	陶邑																								
	猿投																								
	その他	美1																							
古代1期前半 古墳9期 古墳10期前半	在地																								
	陶邑	4																							
	猿投																								
	その他																								
古代1期前半	在地		1		3	1			2	1								2		1		2			1
	陶邑	11		3	6	2	1													1					
	猿投		2		1					1				1											
	その他				張1				美or陶																
古代1期後半	在地	2	5	5	26	7	11	1	1	1						1						1		5	
	陶邑	2	1	6	6	3	4	4						1			1	4	2						
	猿投	1					1																		
	その他					美or北	北1							張1	湖1										
古代1期末 2期初頭 (4水田)	在地		2	2	36	17	19	1	1	3	2	2		1										3	
	陶邑		2	3	2	7	6		1										1		1			1	
	猿投																			1					
	その他				美or湖 美or北		美or張1												張1		美or北 美or陶				
古代2期	在地			1	44	23	19			13		2						2				1	1	1	
	陶邑				2	2															1	1			
	猿投																								
	その他		(美1)		美1 張1	張1						美1		張1				張1						美or張1	
古代3期	在地				5		1				1													1	
	陶邑																								
	猿投																								
	その他																								
古代4期	在地				10																				
	陶邑																								
	猿投																								
	その他																								
古代5期	在地				25	6	4														1			1	
	陶邑																								
	猿投					1																			
	その他																								
古代6期	在地				100	6	7							5								1			
	陶邑																								
	猿投					2								2											
	その他																								
古代7期	在地						◎																		
	陶邑																								
	猿投														1										
	その他																							つまみ 美1	
古代8・9期	在地																								
	陶邑																								
	猿投																								
	その他																								

表87 須恵器産地別、供給器種と供給時期の変化 その1

産地名 在 地

時 期	器 種																	C・E一括	甕A・B・	その他						
	杯H	杯蓋H	杯蓋A	杯G	杯A	杯B	杯蓋B	高杯	小型高杯	高盤	鉢A	鉢D	甕	フラスコ瓶	長頸壺A	長頸壺B	提瓶				横瓶	平瓶	短頸壺A	短頸壺B	短頸壺C	
須恵器出現期～古墳6期		1																								
古墳7期併行期																										
古墳8期併行期	1																									
古代0期(古墳9期)～古代1期前半前葉																										
古代1期前半		1		3	1			2	1								2		1		2			1		
古代1期後半		2	5	5	26	7	11	1	1	1					1						1			5		
古代1期末～2期初頭(4水田)			2	2	36	17	19	1	1	3	2	2		1											3	
古代2期				1	44	23	19			13		2						2			1	1		1		
古代3期					5		1				1														1	
古代4期					10																					
古代5期					25	6	4														1				1	
古代6期					100	6	7								5							1				
古代7期																										
古代8・9期																										

ほとんどが在 地

産地名 陶 邑

時 期	器 種																	C・E一括	甕A・B・	その他						
	杯H	杯蓋H	杯蓋A	杯G	杯A	杯B	杯蓋B	高杯	小型高杯	高盤	鉢A	鉢D	甕	フラスコ瓶	長頸壺A	長頸壺B	提瓶				横瓶	平瓶	短頸壺A	短頸壺B	短頸壺C	
須恵器出現期～古墳6期	2	2						1					2												1	
古墳7期併行期	1	2																								
古墳8期併行期																										
古代0期(古墳9期)～古代1期前半前葉	4																									
古代1期前半	11		3	6	2	1														1						
古代1期後半	2	1	6	6	3	4	4					1					1	4	2							
古代1期末～2期初頭(4水田)			2	3	2	7	6	1										1		1					1	
古代2期					2	2														1	1					

産地名 尾 張 (猿投 or 尾北)

時 期	器 種																	C・E一括	甕A・B・	その他						
	杯H	杯蓋H	杯蓋A	杯G	杯A	杯B	杯蓋B	高杯	小型高杯	高盤	鉢A	鉢D	甕	フラスコ瓶	長頸壺A	長頸壺B	提瓶				横瓶	平瓶	短頸壺A	短頸壺B	短頸壺C	
須恵器出現期～古墳6期																										
古墳7期併行期																										
古墳8期併行期																										
古代0期(古墳9期)～古代1期前半前葉																										
古代1期前半				1																						
古代1期後半												1														
古代1期末～2期初頭(4水田)																		1								
古代2期					1	1								1				1								

表88 須恵器産地別、供給器種と供給時期の変化 その2

産地名 猿投

時期	器種																	C A・B・ E一括	その他						
	杯 H	杯 蓋 H	杯 蓋 A	杯 G	杯 A	杯 B	杯 蓋 B	高 杯	小 型 高 杯	高 盤	鉢 A	鉢 D	甕	フ ラ ス コ 瓶	長 頸 壺 A	長 頸 壺 B	提 瓶			横 瓶	平 瓶	短 頸 壺 A	短 頸 壺 B	短 頸 壺 C	
須恵器出現期～古墳6期		1						1					1												
古墳7期併行期																									
古墳8期併行期																									
古代0期(古墳9期) ～古代1期前半前葉																									
古代1期前半		2		1					1				1												
古代1期後半	1							1																	
古代1期末～2期初頭(4水田)																			1						
古代2期																									
古代3期																									
古代4期																									
古代5期						1																			
古代6期						2																			
古代7期															1										

産地名 美濃須衛

時期	器種																	C A・B・ E一括	その他						
	杯 H	杯 蓋 H	杯 蓋 A	杯 G	杯 A	杯 B	杯 蓋 B	高 杯	小 型 高 杯	高 盤	鉢 A	鉢 D	甕	フ ラ ス コ 瓶	長 頸 壺 A	長 頸 壺 B	提 瓶			横 瓶	平 瓶	短 頸 壺 A	短 頸 壺 B	短 頸 壺 C	
須恵器出現期～古墳6期																									
古墳7期併行期																									
古墳8期併行期	1																								
古代0期(古墳9期) ～古代1期前半前葉																									
古代1期前半																									
古代1期後半						2																			
古代1期末～2期初頭(4水田)						1																			
古代2期			1		1							1													
古代3期																									
古代4期																									
古代5期																									
古代6期																									
古代7期																									つまみ 1

産地名 尾北・湖西

時期	器種																	C A・B・ E一括	その他						
	杯 H	杯 蓋 H	杯 蓋 A	杯 G	杯 A	杯 B	杯 蓋 B	高 杯	小 型 高 杯	高 盤	鉢 A	鉢 D	甕	フ ラ ス コ 瓶	長 頸 壺 A	長 頸 壺 B	提 瓶			横 瓶	平 瓶	短 頸 壺 A	短 頸 壺 B	短 頸 壺 C	
須恵器出現期～古墳6期																									
古墳7期併行期																									
古墳8期併行期																									
古代0期(古墳9期) ～古代1期前半前葉																									
古代1期前半																									
古代1期後半																									
古代1期末～2期初頭(4水田)																									

表89 長野県内の須恵器胎土分析用サンプル一覧表

番号	名称	(時期)	(点数)	番号	名称	(時期)	(点数)
1	依田窯跡群			11	髻山古窯跡群豊野支群		
	ア. 原山窯跡……………小県郡丸子町	8 C 中	10点		ヌ. 山の神古窯跡……………上水内郡豊野町	7 C 末	2点
2	八重原窯跡群			12	明科～池田窯跡群		
	イ. 西峯窯跡……………北佐久郡北御牧村	9 C 前	10点		ネ. 桜坂古窯跡(灰原1号) ……東筑摩郡明科町	7 C 後～末	10点
	ウ. 幸上窯跡……………同上	9 C 前～中	13点		ノ. 桜坂古窯跡(灰原2号) ……同上	7 C 後～末	10点
	エ. 姥ヶ沢窯跡……………同上	9 C 中	10点	13	芥子望主山窯跡群		
3	竜丘窯跡群				ハ. 上ノ山窯跡群 UE014地区灰原 ……東筑摩郡豊科町	8 C 中	10点
	オ. 宮洞3号窯……………飯田市竜丘	8 C 中	11点		ヒ. 上ノ山窯跡群 UE007地区灰原 ……同上	9 C 前	16点
	カ. 土器洞窯……………飯田市伊賀良	8 C 末～9 C 前	10点	14	四賀村会田盆地窯跡群		
4	竜江窯跡群				フ. ムジナカワ窯……………東筑摩郡四賀村	9 C 前	11点
	キ. 御殿田窯……………飯田市竜江	9 C 前	10点		ヘ. 斉田原窯(表採) ……同上	8 C 末～9 C 前	10点
	ク. 上城上1号窯 ……同上	9 C 前	10点	15	高丘陵古窯跡群		
	ケ. 上城上2号窯……………同上	9 C 前	10点		ホ. 茶臼峯6号窯……………中野市草間	7 C 後～末	6点
5	コ. 大矢沢窯 ……下伊那郡豊丘村	8 C ?	3点		マ. 茶臼峯7号窯……………同上	7 C 後～末	5点
6	サ. 菖蒲沢窯 ……塩尻市	8 C 後	16点		ミ. がまん淵窯……………同上	7 C 後～末	10点
	(シ. 菖蒲沢窯の瓦塔) 同上	8 C 後	5点		ム. 清水山1号窯……………中野市立ヶ花	8 C 前	11点
7	根岸窯跡群				メ. 池田端1号窯……………中野市草間	8 C 前	5点
	ス. 石附窯……………佐久市	7 C 後～末	10点		モ. 牛出1号窯……………中野市牛出	8 C 後	5点
8	聖高原東麓窯跡群				ヤ. 池田端6号窯……………中野市草間	9 C 前	9点
	セ. 上日向3号窯(灰原) ……更埴市桑原	8 C 中	10点	16	松代古窯群		
	ソ. 上日向3号窯(焼成部) ……同上	8 C 中	3点		参考		
	タ. 松ノ山窯……………長野市信更町	5 C 末～6 C 初	11点		ユ. 天王山古窯跡……………長野市松代	時期は新しい可能性もある	1点
9	戸倉・坂城古窯跡群			17	御牧ヶ原窯跡群		
	チ. 郷嶺山古窯(表採) ……埴科郡戸倉町	不明	6点		ヨ. 梨木沢第1号窯跡…北佐久郡望月町 「8 C～9 C」?	10点	
	ツ. 西洞古窯跡……………同上	不明	10点	18	鬼戸窯……………岡谷市		
10	髻山古窯跡群 前高山支群				ラ. 鬼戸窯……………8 C 前	12点	
	ト. 前高山1号窯……………上水内郡牟礼村	8 C～9 C	10点		リ. 鬼戸窯植輪……………5点		
	ナ. 上ノ山1号窯……………同上	8 C 末～9 C 初	10点	19	信濃国分寺瓦窯跡		
	ニ. 家岸遺跡(窯跡) ……同上	8 C 末～9 C 前	10点		ル. 2号瓦窯(瓦) ……上田市……………2点		

表90 屋代遺跡群 産地別須恵器分類表

分析No.	分析結果	器種	時期	出土遺構
7	在地-A	須恵器杯 H	古代0期~1期前半前葉	SB6111
8	在地-A	須恵器杯 H	古代0期~1期前半前葉	SB6027
9	在地-A	須恵器杯 H	古代1期前半(5水田)	SD8049
14	在地-A	須恵器杯 H	古代1期前半(5水田)	SD7065
15	在地-A	須恵器杯 H	古代1期後半(5水田)	SD7046
39	在地-A	須恵器杯 A	古代1期後半(5水田)	SD7049
41	在地-A	須恵器杯 A	古代1期後半(5水田)	SD7045
45	在地-A	須恵器杯 A	古代1期末~2期初頭(4水田)	SD7035
119	在地-A	須恵器短頸壺 A	古代1期末~2期初頭(4水田)	㊦a区 4水田
5	在地-B	須恵器杯 H	古墳8期	SB6070
17	在地-B	須恵器杯 H	その他(古墳8期併行か?)	㊦a区
21	在地-B	須恵器杯蓋 H	古墳4期~古墳6期併行(TK47)	SB5062
68	在地-C	須恵器杯 A	古代7期前半	SB4009
71	在地-C	須恵器杯 A	古代8期前半	SB9067
111	在地-C	須恵器杯蓋 B	古代5期	SB6086
6	不明	須恵器杯 H	古墳8期	SB6003
30	不明	須恵器甕	古代8期前半	SQ5002
117	不明	須恵器甕 C	古代1期前半~1期後半(5水田)	㊦区 5水田
125	不明	瓦	古代13期への混入	SB3022
130	不明	須恵器杯蓋 H	古代1期後半(5水田)	SD7048
103	磐山	須恵器杯蓋 B	古代1期末~2期初頭(4水田)	SD7047
10	芥子	須恵器杯 H	古代1期前半(5水田)	SD8049
11	芥子	須恵器杯 H	古代1期前半(5水田)	SD8049
12	戸倉	須恵器杯 H	古代1期前半(5水田)	SD8044
31	戸倉	須恵器杯 A	古代1期前半(5水田)	SD8049
32	戸倉	須恵器杯 A	古代1期前半(5水田)	SD8044
35	戸倉	須恵器杯 A	古代1期後半(5水田)	SX7037
36	戸倉	須恵器杯 A	古代1期後半(5水田)	SD7062
38	戸倉	須恵器杯 A	古代1期後半(5水田)	SD7049
40	戸倉	須恵器杯 A	古代1期後半(5水田)	SD7045
42	戸倉	須恵器杯 A	古代1期後半(5水田)	SD7045
47	戸倉	須恵器杯 A	古代1期末~2期初頭(4水田)	SD7035
50	戸倉	須恵器杯 A	古代2期(3水田)	SD8028
55	戸倉	須恵器杯 A	古代4期	SB5104
56	戸倉	須恵器杯 A	古代4期	SB6036
58	戸倉	須恵器杯 A	古代5期	SB6116
63	戸倉	須恵器杯 A	古代6期	SB9059
64	戸倉	須恵器杯 A	古代6期	SB9059
65	戸倉	須恵器杯 A	古代6期	SB9059
66	戸倉	須恵器杯 A	古代7期前半	SB4009
70	戸倉	須恵器杯 A	古代8期前半	SB9067
73	戸倉	須恵器杯 B IV	古代1期後半(5水田)	SD7058
75	戸倉	須恵器杯 B III	古代1期後半(5水田)	SD7045
77	戸倉	須恵器杯 B II	古代2期(3水田)	SD7030
80	戸倉	須恵器杯 B I	古代5期	SB6086
83	戸倉	須恵器杯 B V	古代6期	SB3031
84	戸倉	須恵器杯 B IV	古代6期	SB3031
86	戸倉	須恵器杯 G	古代1期前半(5水田)	SD8049
89	戸倉	須恵器杯 G	古代1期後半(5水田)	SD7048
90	戸倉	須恵器杯 G	古代1期後半(5水田)	SD7051
92	戸倉	須恵器杯 G	古代1期末~2期初頭(4水田)	SD7047
93	戸倉	須恵器杯 G	古代1期末~2期初頭(4水田)	SD7035
94	戸倉	須恵器杯 G	古代1期末~2期初頭(4水田)	SD7038
101	戸倉	須恵器杯蓋 B	古代1期後半(5水田)	SD7062
102	戸倉	須恵器杯蓋 B	古代1期後半(5水田)	SD7058
110	戸倉	須恵器杯蓋 B	古代5期	SB6038
112	戸倉	須恵器杯蓋 B	古代5期	SB6101
113	戸倉	須恵器杯蓋 B	古代6期	SB9073
115	戸倉	須恵器杯蓋 B	古代6期	SB3016
123	戸倉	須恵器甕 D	古代8期前半	㊦a区 1水田直上
126	戸倉	須恵器杯蓋 H	古代0期~1期前半前葉	SB6111
129	戸倉	須恵器杯蓋 H	古代1期後半(5水田)	SD7045

分析No.	分析結果	器種	時期	出土遺構
33	松ノ山	須恵器杯 A	古代1期前半(5水田)	SD7067
43	松ノ山	須恵器杯 A	古代1期後半(5水田)	SD7045
46	松ノ山	須恵器杯 A	古代1期末~2期初頭(4水田)	SD7035
49	松ノ山	須恵器杯 A	古代2期(3水田)	SD8028
51	松ノ山	須恵器杯 A	古代2期(3水田)	SD8028
52	松ノ山	須恵器杯 A	古代2期(3水田)	SD7030
54	松ノ山	須恵器杯 A	古代3期	SB4228
57	松ノ山	須恵器杯 A	古代4期	SB6099
59	松ノ山	須恵器杯 A	古代5期	SB6116
60	松ノ山	須恵器杯 A	古代5期	SB6116
61	松ノ山	須恵器杯 A	古代5期	SB6116
69	松ノ山	須恵器杯 A	古代7期前半	SB4009
74	松ノ山	須恵器杯 B IV	古代1期後半(5水田)	SD7058
78	松ノ山	須恵器杯 B II	古代2期(3水田)	SD7030
98	松ノ山	須恵器杯蓋 A	古代1期後半(5水田)	SX7037
104	松ノ山	須恵器杯蓋 B	古代1期末~2期初頭(4水田)	SD7047
105	松ノ山	須恵器杯蓋 B	古代1期末~2期初頭(4水田)	SD8038
106	松ノ山	須恵器杯蓋 B	古代2期(3水田)	SD7030
109	松ノ山	須恵器杯蓋 B	古代4期	SB6099
114	松ノ山	須恵器杯蓋 B	古代6期	SB9073
118	松ノ山	須恵器三耳壺	古代1期末~2期初頭(4水田)	SD7036
120	松ノ山	須恵器横瓶	古代2期(3水田)	SD7030
124	松ノ山	須恵器甕	古代9期	SB1004
127	松ノ山	須恵器杯蓋 H	古代1期前半(5水田)	SX7035
34	上日向?	須恵器杯 A	古代1期後半(5水田)	SX7037
37	上日向?	須恵器杯 A	古代1期後半(5水田)	SD7062
44	上日向?	須恵器杯 A	古代1期後半(5水田)	SD7051
48	上日向?	須恵器杯 A	古代1期末~2期初頭(4水田)	SD7035
67	上日向?	須恵器杯 A	古代7期前半	SB4009
76	上日向?	須恵器杯 B II	古代1期末~2期初頭(4水田)	SD7038
79	上日向?	須恵器杯 B I	古代5期	SB6116
81	上日向?	須恵器杯 B III	古代5期	SB6038
82	上日向?	須恵器杯 B IV	古代6期	SB9077
85	上日向?	須恵器杯 B IV	古代7期前半	SB3018
100	上日向?	須恵器杯蓋 A	古代1期末~2期初頭(4水田)	SD7047
107	上日向?	須恵器杯蓋 B	古代2期(3水田)	SD7030
108	上日向?	須恵器杯蓋 B	古代2期(3水田)	SD7032
116	上日向?	須恵器杯蓋 B	古代7期前半	SB4504
121	上日向?	須恵器有台鉢	古代2期(3水田)	SD7030
122	上日向?	須恵器有台鉢	古代2期(3水田)	SD8028
128	上日向?	須恵器杯蓋 H	古代1期前半(5水田)	SD8044
16	猿投	須恵器杯 H	古代1期後半(5水田)	SD7056
20	猿投	須恵器杯蓋 H	古墳4期~古墳6期併行(TK23)	SD7048
24	猿投	須恵器甕	TK216	SB6078
28	猿投?	須恵器高杯	古墳4期~古墳6期併行(TK23)	SB6009
53	猿投?	須恵器杯 A	古代2期(3水田)	SD7030
62	猿投?	須恵器杯 A	古代6期	SB9059
1	陶邑	須恵器杯 H	TK216	I区 I22
2	陶邑	須恵器杯 H	古墳4期~古墳6期併行(TK208)	Ⅶ区 O8
3	陶邑	須恵器杯 H	古墳7期併行(TK10)	SB6024
4	陶邑	須恵器杯 H	古墳8期	SB6070
13	陶邑	須恵器杯 H	古代1期前半(5水田)	SD7065
18	陶邑	須恵器杯蓋 H	TK216	I区 NO20
19	陶邑	須恵器杯蓋 H	古墳4期~古墳6期併行(TK208)	SB6064
22	陶邑	須恵器杯蓋 H	古墳7期併行(MT15)	SD7046
23	陶邑	須恵器杯蓋 H	古墳7期併行(MT15)	SB5056
25	陶邑	須恵器甕	古墳4期~古墳6期併行(TK208)	SB5190
26	陶邑	須恵器甕	古墳4期~古墳6期併行(TK23)	SD7068
27	陶邑	須恵器高杯	古墳4期~古墳6期併行(TK23)	SD8021
29	陶邑	須恵器甕	TK216~TK208	SB5189
72	陶邑	須恵器杯 B	古代1期前半(5水田)	SD8044
87	陶邑	須恵器杯 G	古代1期前半(5水田)	SD8044
88	陶邑	須恵器杯 G	古代1期前半(5水田)	SD7065
91	陶邑	須恵器杯 G	古代1期後半(5水田)	SB4205
95	陶邑	須恵器杯蓋 A	古代1期前半(5水田)	SD8044
96	陶邑	須恵器杯蓋 A	古代1期前半(5水田)	SD7067
97	陶邑	須恵器杯蓋 A	古代1期前半(5水田)	SB5093
99	陶邑	須恵器杯蓋 A	古代1期後半(5水田)	SD7048

に猿投と判断されるものは屋代-16、20、24の3個で、屋代-28、53、62の3個はSiO₂が63~72%の陶邑の領域にあり、明らかに猿投とは異質なようなので猿投?とした。猿投?としたものは成分的には上日向?に近い。

- ③ 肉眼観察で美濃須衛窯跡群の土器ではないかとされたもののうち多くは戸倉（千曲川左岸）古窯跡群の土器と類似する成分を示す。」

なお、これらのデータはすべて（財）長野県文化振興事業団が保管している。今回は基礎データの提示に重点をおいたものであり、報告書をまとめる時間とページ数の関係で器種と産地の関係、時期ごとにみた産地の移り変わりの問題、各産地ごとにみられる特徴、さらに今後の課題等十分に考察することができなかった。

E. その他

甲斐型杯の底部小片がSD8027から出土している。外面をていねいに削り、内面はていねいにみがかれている。

(7) 食膳具の変遷

以上、各器種ごとに細部にわたって変化と消長について述べてきたが、それらを整理したのが編年表1である（鉢類については編年表2参照）。それらを参照しながらここでは食膳具全体の各期の特徴を簡単に述べる。また、図156~158に古代各期の食膳具を集成した。

古代0期

食膳具の主体は非ロクロ土師器であって、歴史時代的須恵器（須恵器杯蓋A、杯G、杯A、杯B等で、以後須恵器とのみ呼ぶこともある）は共伴しない。須恵器杯蓋Aや杯Gは都ではすでに出現しているため、まれには出土することも考えられるが、集落からは一般的には出土しない。古墳時代から系譜をひく須恵器（須恵器杯H、杯蓋H等）は出土するが量的には少ない。非ロクロ土師器杯類の主体となる器種は杯C類、杯I類であり、前段階（古墳8期）に主流となっていた杯E3類や杯E4類と明確に異なる。非ロクロ土師器の鉢類が多めにみられるのも特徴である。

古代1期前半

食膳具にしめる非ロクロ土師器と須恵器の量的関係は、遺構によっても多少異なるが、ほぼ五分五分といたところで、前段階から確実に須恵器の量が増えている。歴史時代的須恵器の中でも主体となるのは、杯蓋Aと杯Gで、杯蓋Bは共伴しない。また、杯Aはわずかに、杯Bはごくわずかにみられるといったところである。古墳時代から系譜をひく須恵器杯H、杯蓋Hも法量を減少させながらも一定量の出土がみられる。須恵器小型高杯も出土する。非ロクロ土師器では、杯C類、杯I類、高杯、鉢類が一般的である。前段階まで継続的にみられていた杯A類、杯B類、杯D類、杯E4類はまれに組成に加わる程度である。また、杯L類が新たに登場する。

古代1期後半

須恵器の出土量がさらに増え、食膳具にしめる量は非ロクロ土師器よりも多くなり、主体をしめるようになる。在地の須恵器生産が活発化し、在地の製品が搬入品の量をうわまわる。須恵器では杯蓋Bが登場し、杯蓋Aと共伴する。杯蓋A、杯Gの出土は一定量あり、杯Hもごくわずか残存する。また、杯Aと杯Bは急増し、食膳具の主体をしめるようになる。杯Bはすでに多法量に分化しており、1期末~2期初頭の第4水田対応層のSD7035ではすでに4法量にも分化した例がみられている。器種も増え、中型の須恵器高杯、高盤、鉢D、鉢Aなども見られるようになる。非ロクロ土師器は杯C類、杯I類が主体であるが、おおまかなありかたは1期前半と同様である。杯L類はこの時期までみられる。

古代2期

食膳具の主体は須恵器がほとんどとなる。須恵器では、杯蓋Aはなくなり杯蓋Bのみとなる。杯H、杯蓋Hもすでになく、杯Gは第4水田対応層までは（2期初頭までは）確認できるものの、それ以後はないと考えられる。食膳具の主体は須恵器杯A、杯Bであり、杯Bは第3水田対応層のSD7030でも4法量に分化している。須恵器杯Aの底部切りはなしは、この時期まではすべてへら切り（手持ちへら削り、回転へら削り、へら切り後ナデ等も含む）であり、いまだ糸切りは登場していない。須恵器高杯、高盤、鉢Dも前代からひきつづきみられる。須恵器小型高杯は第4水田対応層までは（2期初頭までは）確認できている。非ロクロ土師器では、杯C類、杯I類、高杯がわずかに出土するが少ない存在である。

古代3期・古代4期

食膳具の主体は須恵器で、須恵器杯Aの底部調整に回転糸切り（以後糸切りと呼ぶ）が登場し、へら切りと共存する。古代3期ではへら切りの方が多い。糸切りの須恵器杯Aの内面底径の平均値は7cm中ごろ～7cm後半以上となり、以後縮小傾向を示す。須恵器高杯は確認例がなく、高盤はこの期までわずかに確認できる。非ロクロ土師器の杯類や高杯は非常に少なくなってしまう。それにかわってロクロ使用の黒色土器A杯Aがこの期には確実に出現する。出現時から大小の2法量に分化している。屋代遺跡群ではその初現は2期末～3期初頭に位置付くSK4622にみられる。古代4期では、須恵器杯Aの底部調整は糸切りの方が多くなる。糸切りの須恵器杯Aの内面底径の平均値は7cm台～8cm台に集中する。須恵器高盤の出土例はなく、鉢Dが1点のみ他遺跡の出土例でみられる。非ロクロ土師器も杯類がみられる場合もあるがごくまれな存在である。黒色土器A杯Aは確実に出土例がみられる。

古代5期

食膳具の主体は依然須恵器だが、黒色土器が増え始め、食膳具にしめる比率は2割前後以下となる。須恵器では杯Aの底部調整にへら切りがなくなり、糸切りのみとなる。須恵器杯Aの内面底径の平均値はやや減少し6cm末～7.5cm前後となる。

古代6期

食膳具における主体は依然須恵器だが、減少に転じ、黒色土器が増大して、その比率が2割前後～4.5割前後になる。須恵器杯Aの内面底径の平均値はさらに減少し5cm後半～6cm後半に集中する。軟質須恵器（須恵器の質Aタイプ、Bタイプ）も一定量みられるようになるが、大半は硬質のDタイプである。灰白色で、さわると粉状のものが手につくあまい胎土の須恵器の質Cタイプは、この期に集中してみられる。この期の大きな特徴は、今までと全く違った器種である高台のついた椀、皿類が登場し、食膳具の器種がより多様なものになることである。具体的には、須恵器では皿B、黒色土器Aでは小椀と椀と皿B、黒色土器Bでも小椀と皿Bが確認されている。灰釉陶器にも高台の付いた猿投の黒笹14号窯式の椀がこの期の中頃からみられはじめる。猿投の黒笹90号窯式の灰釉陶器も、この期の末頃初現がみられている。また、黒色土器A鉢A・鉢Bもこの期から出現する。無台の須恵器皿Aの出現もこの期である。緑釉陶器の搬入も京都洛北系の〇類を主体に始まる。さらに、畿内系の黒色土器や面取り高杯もこの期のみ集中して確認できた。

古代7期

食膳具の主体が須恵器から黒色土器に転換する。この期の初期には黒色土器の比率は4.5割前後くらいだが、終末には8割をこえるところまで増大する。須恵器では杯Aの内面底径の平均値はやや減少し5cm後半～6cm前半に集中する。須恵器杯Aを質の面からみると、胎土と焼きが明らかに悪くなり、須恵器の質A・Bタイプ（軟質須恵器）が硬質のDタイプの量を圧倒するようになる。須恵器杯B、杯蓋Bの出土量は激減する。須恵器皿A、皿Bは少ない。黒色土器Aでは、あらたに盤BIIが出現する。黒色土

器 A 杯 A は非常に多いが、7 期後半からは底部調整に糸切りのものが増え、法量も口径 12.0cm～14.0cm、器高 3.2cm～5.0cm の範囲に集中し定型化したものが増す。灰釉陶器も出土例が増え器種も増す。前半段階では猿投の黒笹 14 号窯式が引き続きみられ、黒笹 90 号窯式も出土例を増す。後半段階からは東濃の光ヶ丘 1 号窯式と尾北の篠岡 4 号窯式が新たに登場する。緑釉陶器は引き続き京都洛北系の 0 類のみが出土する。また、食膳具 II に分類されるが土師器の鉢 A、鉢 B はこの期から出現する。

古代 8 期

食膳具の主体は黒色土器であるが、新たに土師器の食膳具が多様な器種とともに登場する（杯 A、椀、盤 B I、皿 A、皿 B、耳皿）。須恵器はごくわずか残る程度であり、内面底径の平均値は 7 期より大きめなばらついた値を示すようになる。新たな器種として皿 A と盤 B I が黒色土器 A と土師器にみられる。耳皿も出土例が顕著になり、黒色土器 B、土師器、灰釉陶器にみられる。耳皿は高台のあるものないもの両者がみられる。黒色土器 B の椀も 7 期後半～8 期前半に出土例が確認できる。灰釉陶器は、東濃の光ヶ丘 1 号窯式を主流に、尾北の篠岡 4 号窯式、猿投の黒笹 90 号窯式といったハケぬりの技法をもつものが多量に搬入されている。黒笹 14 号窯式もこの期までわずかに確認できる。また、つけかけ技法を特徴の 1 つとする大原 2 号窯式もわずかに確認されはじめる。緑釉陶器は京都洛北系の 0 類のほかに、猿投系の a-1 類を中心に、尾北系 (a-2 類)、猿投系 (b 類) も搬入されはじめ供給地の転換がみられる。

以上、古代 0 期～8 期の食膳具の変遷をみてきたが、3 つの画期を考えることができる。1 つは、1 期前半と後半の境であり、非クロ土師器を主体とした古墳時代的な食膳具のあり方が歴史時代的須恵器を主体とした食膳具のあり方に転換する時期である。県内の須恵器生産の増大と連動した金属器指向型への転換の時期といえよう。2 つ目は、古代 5 期と 6 期の境であり、椀・皿類の登場といった新たな器種の出現と多様な器種（小椀、皿 A、皿 B、耳皿、盤 B I、盤 B II、黒色土器 A 鉢 A・鉢 B）の登場する時期である。緑釉陶器や灰釉陶器も搬入が開始され、それらの器形をまねた黒色土器も出現するなど磁器指向型への転換の時期といえよう。3 つ目は 8 期と 9 期の境になる。食膳具の主体が須恵器や黒色土器から土師器へ転換する時期となるが『中・近世編』の対象となるため、今回の報告にゆずる。

3 煮炊具の変容（編年表 2）

(1) 土師器

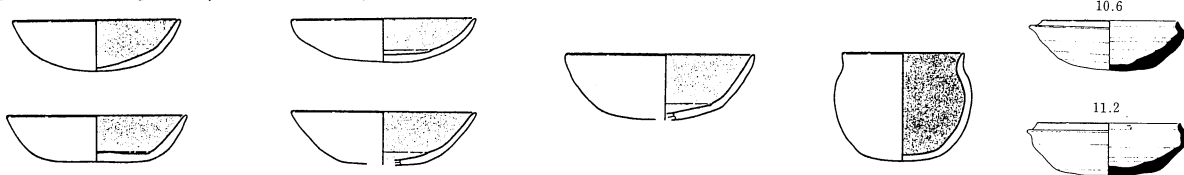
A. 甕 A（ナデ甕）（編年表 2）

輪積み整形後、外面をナデ調整する長胴甕で、古墳 2 期からその系譜をおえる古墳時代以来の伝統的器種である。胴部に最大径をもつ A タイプ、口縁部に最大径をもちつつも胴部にもややふくらみをもつ B タイプ、口縁に最大径をもち底部に向かってほぼ直線的に終息する C タイプの 3 つのタイプに分けられる。A タイプは早めに消滅し、B タイプ、C タイプは古代 2 期までは一般的に出土し、3 期以降みられなくなる。形態変化にとぼしく単品でみた場合、古代 0 期～2 期の間での時期の限定は難しい。

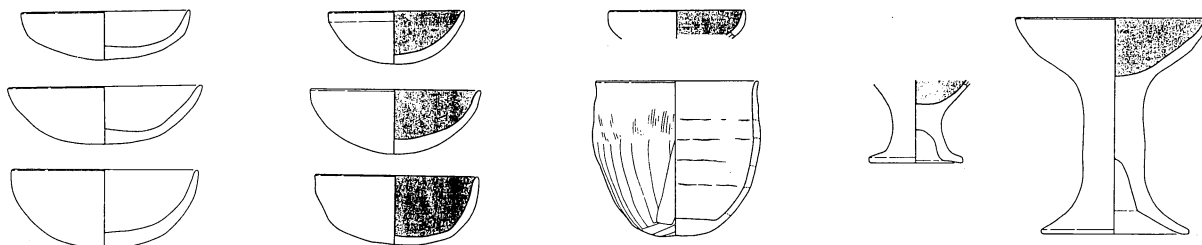
B. 甕 B（ハケ甕）（編年表 2）

輪積み成形後、外面を刷毛目で調整する長胴甕で、古墳 1 期からその系譜がおえる古墳時代以来の伝統的器種である。形態により甕 A と同じように A タイプ、B タイプ、C タイプの 3 つに分けられる。B タイプ、C タイプは古代 2 期までは一般的に出土し、3 期以降みられなくなる。A タイプは 3 期以降もごく少数だが確認でき、古代 9 期まで確認できる。A タイプの形態変化は、松本平地域でみられるハケ調整甕（『総論編』の甕 B）とほぼ同じと考えられる（小平 1990）。また、B タイプ、C タイプの形態変化は甕 A と同じく、変化に乏しく、単品でみた場合、古代 0 期～2 期の間での時期の限定は難しい。

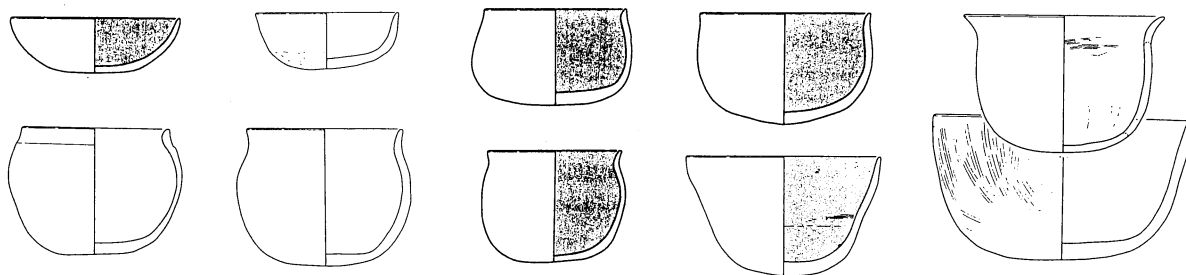
屋地II B29号住 (古墳8期新相) 7c初頭



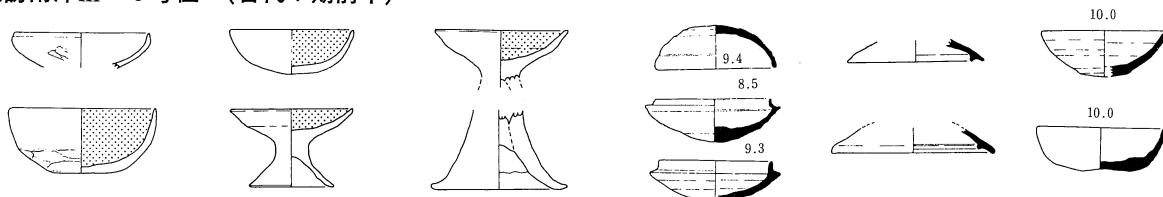
中条 22号住 (古代0期=古墳9期)



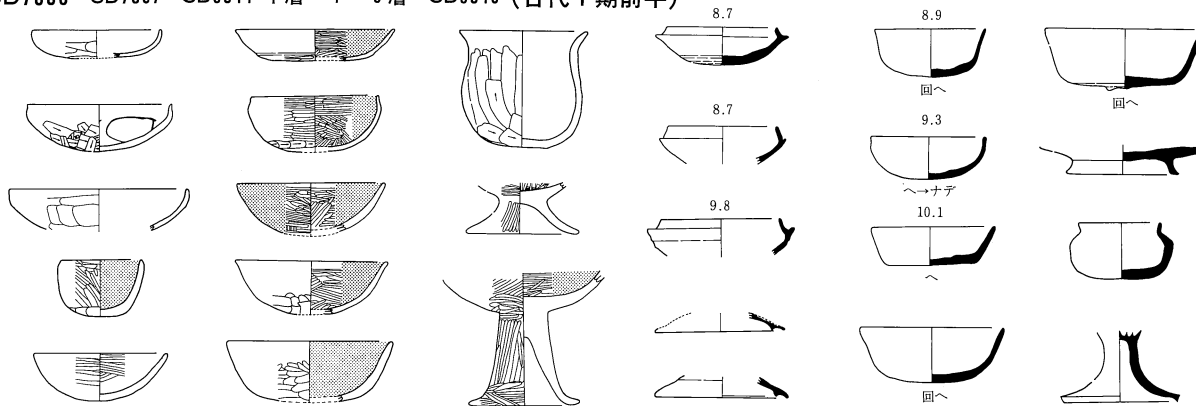
屋地II A15号住 (古代0期=古墳9期)



諏訪南沖III 5号住 (古代1期前半)



SD7065=SD7067=SD8044 下層 4~5層=SD8049 (古代1期前半)



SD7058 (古代1期後半)

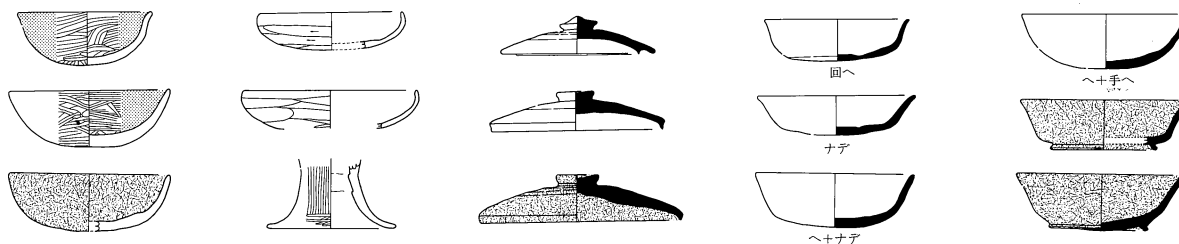
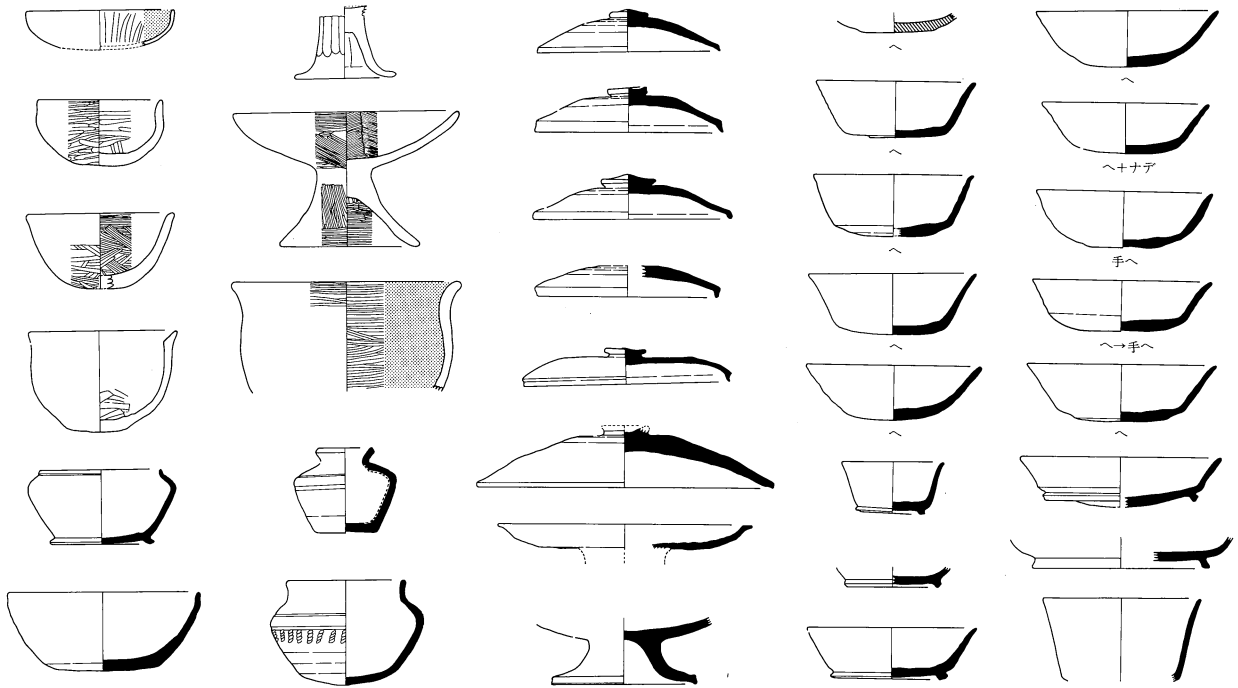
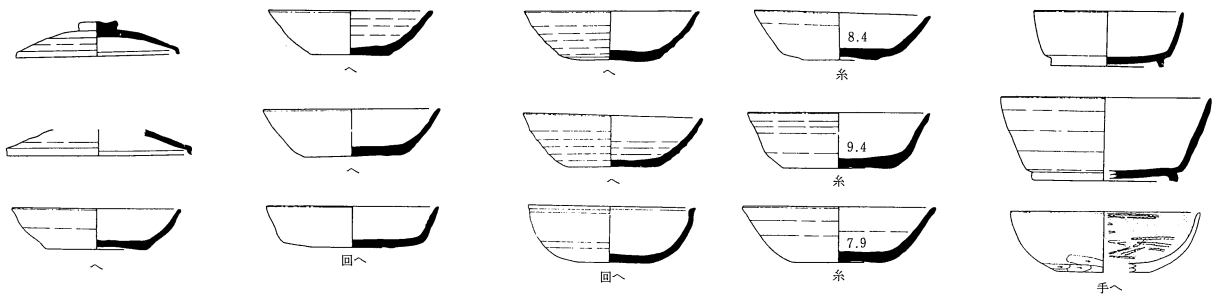


図156 古代各期の食膳具 その1 S=1:6

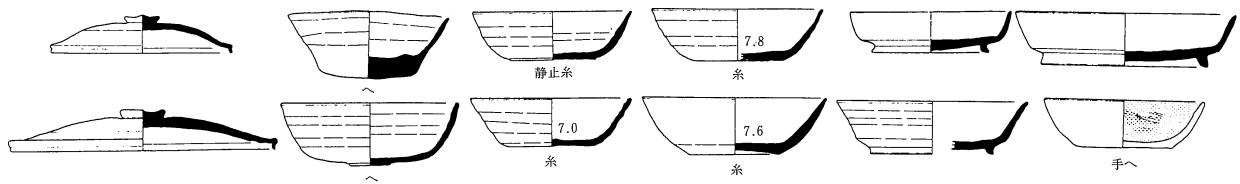
SD7030 (古代2期)



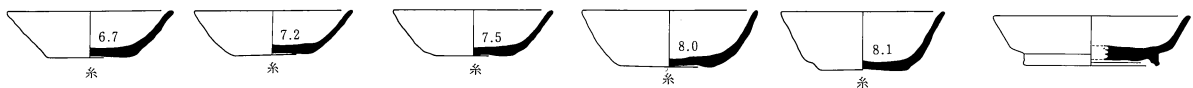
新幹線更埴条里遺跡 SB5054 (古代3期)



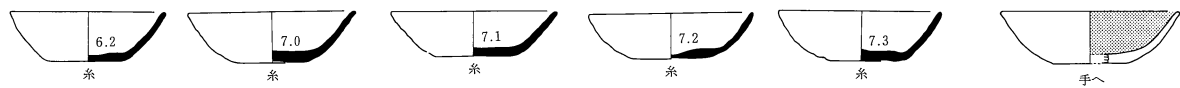
新幹線更埴条里遺跡 SB5016 (古代4期)



SB6116 (古代5期)



SB6104 (古代5期)



SB9073 (古代6期)

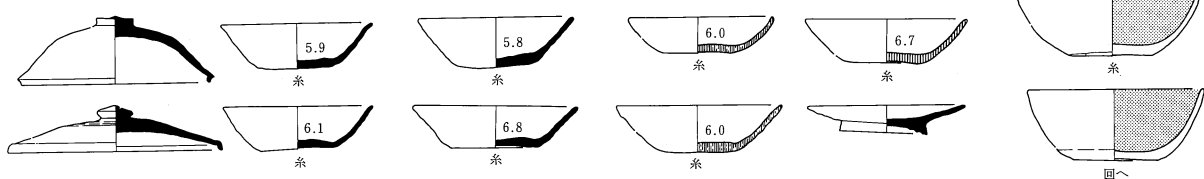
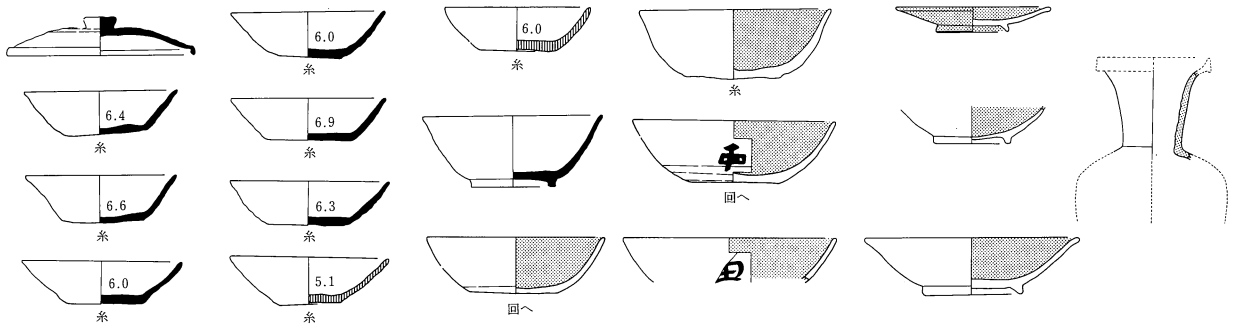
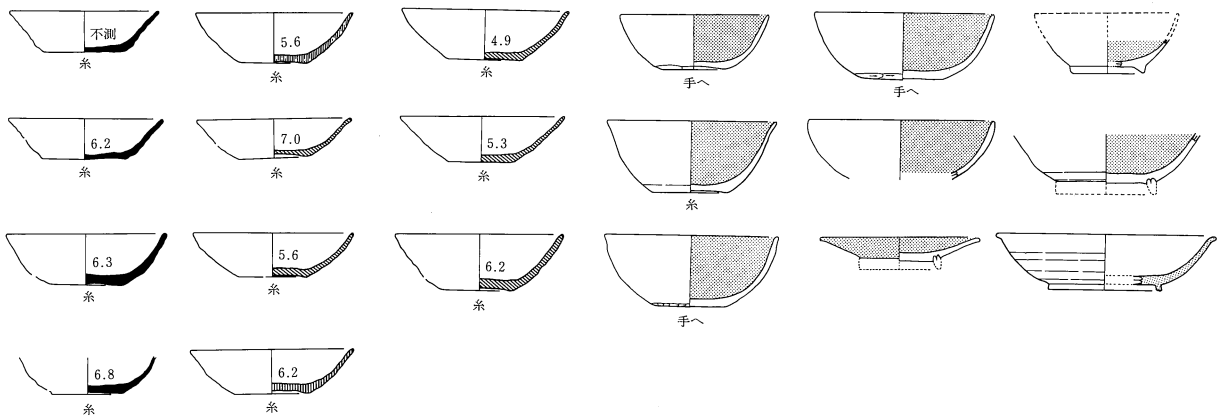


図157 古代各期の食膳具 その2 S=1:6

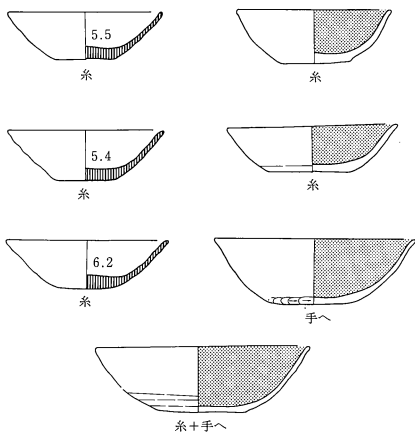
SB3016 (古代6期)



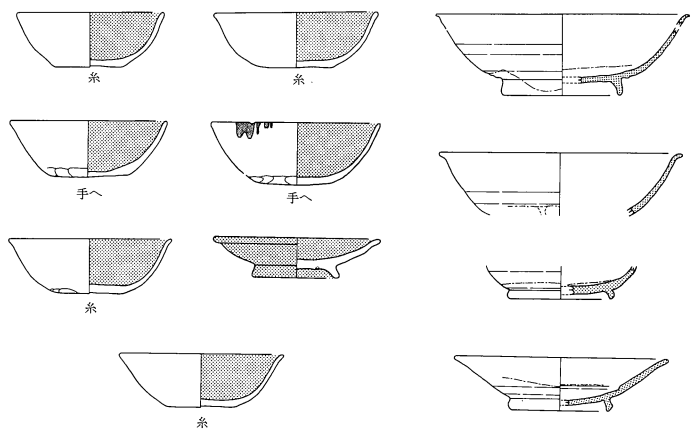
SB9084 (古代7期前半)



SB72 (古代7期後半)



SB51 (古代7期後半)



SB 8 (古代8期前半)

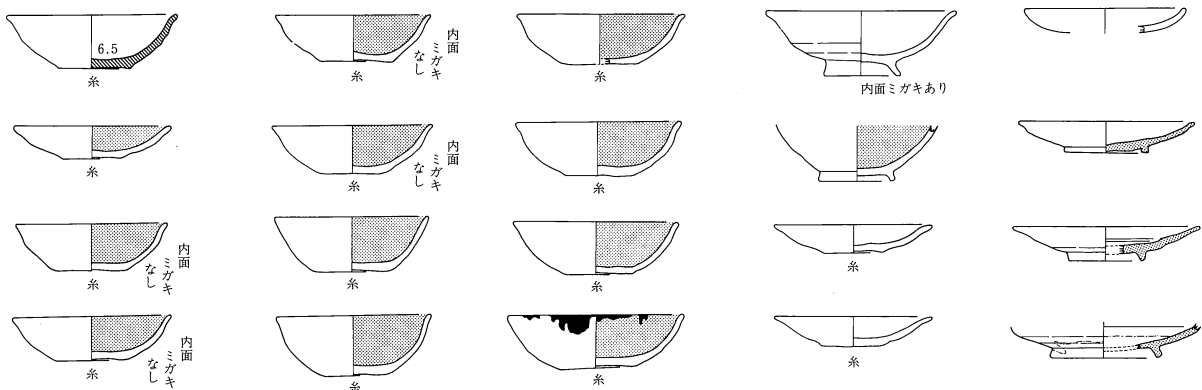


図158 古代各期の食膳具 その3 S=1:6

C. 甕 H (ケズリ甕) (編年表 2)

輪積み成形後、外面を縦方向にケズリ調整する長胴甕で、同じケズリ調整の甕 C に比べ器壁は厚い。古墳 8 期から出土数が増す古墳時代以来の伝統的器種である。形態により甕 A と同じように A タイプ、B タイプ、C タイプの 3 つに分けられる。A タイプは早めに消滅し、B タイプ、C タイプは古代 2 期までは一般的に出土し、3 期以降みられなくなる。形態変化に乏しく、単品でみた場合、古代 0 期～2 期の間での時期の限定は難しい。

D. 甕 F (ミガキ甕) (編年表 2)

輪積み成形後、外面をへら磨き調整する甕で、口径の狭い壺型のものと口径の広い甕型の 2 タイプがある。古墳 2 期からその系譜をおえる古墳時代以来の伝統的器種である。壺型は古墳時代からずっとみられる器種で、甕形は古代 0 期になって一般化する。甕型の初現は古墳 8 期の可能性が高い。ともに古代 2 期までは一般的にみられ、3 期以降出土例がなくなる。この器種も形態変化にとぼしく単品でみた場合、古代 0 期～2 期の間での時期の限定は難しい。煮炊具の項であつかったが貯蔵具の可能性も高い。

E. 甕 C (武蔵甕) (編年表 2)

体部外面をへら削りして薄く仕上げた、いわゆる武蔵型甕とよばれる甕である。武蔵地方に系譜を求めたものではないが、イメージしやすい略称のためこの略称を使うこととする。ケズリ調整する点では甕 H と同じだが、甕 H に比べ器壁は、はるかに薄く、ケズリの方向も底部から胴部は縦方向で同じだが頸部に近くなるほど横方向となり異なる。古代 2 期に出現し 8 期までみられる。口縁部形態が「く」の形になるタイプと「コ」の形になるタイプの 2 種類がみられ、「く」のタイプは 2 期から 6 期まで、「コ」のタイプは 5 期に出現し 8 期までみられる。5 期と 6 期は「く」と「コ」のタイプが共存するが、5 期は「く」の方が多く、6 期は「コ」の方が多くなる。古墳時代からの伝統的な長胴甕 (甕 A・B・H) 消滅後、甕 I と共に煮炊具の主流をなす器種である。

F. 甕 I (砲弾甕) (編年表 2)

ロクロ整形で体部下半を中心にケズリ調整する甕である。ケズリ調整以外にタタキ調整するものや、調整を行わずロクロ調整のみのものもある。底部は丸底のもの、平底のもの両者がみられ、北陸地方に系譜がたどれ、砲弾甕と呼称される甕である。口縁が「く」の字状に外反する A タイプと、口縁端部に面をとる B タイプに分けられる。B タイプでは、下半にケズリやタタキ調整のみられないものもみられる。A タイプ、B タイプともに古代 4 期に出現し、A タイプは 8 期以降にも引き続きみられ、B タイプは 6 期まで確認できる。古墳時代からの伝統的長胴甕の消滅後、甕 C とともに煮炊具の主流をなす器種である。

G. 小型甕 (小甕) (編年表 2)

器高と口径の比が 1 に近い小型の甕を小型甕 (小甕) と呼ぶことにする。調整手法により大型の長胴甕と明確な対応関係がみられ、ナデ調整をもつ甕 A には小甕 A、ハケ調整をもつ甕 B には小甕 B、厚手でケズリ調整をもつ甕 H には小甕 H、薄手でケズリ調整をもつ甕 C には小甕 C、ロクロナデ調整をもつ甕 I には小甕 D がそれぞれ対応する (図 159)。甕、小甕ともに、それぞれ法量の大小をもつため、甕類は多様な法量をもった器種となる。

① **小甕 A (ナデ小甕)、小甕 B (ハケ小甕)、小甕 H (ケズリ小甕)**

これらは古墳時代以来の系譜をひく小型甕であり、古代 2 期まで出土し 3 期以降はみられなくなる。2 期までの小型の煮炊具の主流をしめる器種である。

② **小甕 C (武蔵小甕)**

古代 3 期から出土例がみられる。甕 C と同様に口縁部形態が「く」の形になるタイプと「コ」の形になるタイプの 2 種類がみられ、「く」のタイプは 3 期から 6 期まで、「コ」のタイプは 6 期のみ出土

例がみられている。6期は「く」のタイプと「コ」のタイプが共存することになる。また、まれに台付きの甕となるものもある。

③ 小甕D (ロクロ小甕)

古代4期からわずかであるが出土例がみられる。5期には一定量みられ、6期以降急増し小型の煮炊具の主流をしめる。体部にカキ目を残すタイプとロクロ目のみを残すタイプの2種類がみられる。ロクロ目のみを残すタイプは4期に出現し、8期以降までみられる。カキ目を残すタイプは5期から確認でき8期までみられる。両者の量的関係は、ロクロ目のみを残すタイプのほうが多い傾向にあるが、6期では半々ぐらいの割合である。

H. 鍋 (編年表2)

ロクロ整形で、体部下半を中心にケズリ調整する。調整は甕Iと同じだが、甕Iと比べると口径が広く器高が低い形態をしている。数量的にはわずかであるが、古代5期から出土例がみられ8期まで確認できる。善光寺平最北端の中野市の牛出古窯遺跡 SB02では4期の例で出土が確認できる。甕Iと同様北陸系統の器種と考えると、北陸により近い地域のほうが出現が早い可能性もある。

I. その他 (編年表2)

羽釜と思われる小片が古代8期のSB9067から1点出土している。甑は、古墳時代から系譜をひく単孔、多孔のものが古代2期まで出土している。3期以降も形態は違うが須恵器や土師器でごくわずかの出土がみられる。出土例が少ないため編年表には割愛した。また、これまでに述べてきた以外の甕類も多少みられる。在地というより外来系の可能性を検討する必要もあろう。

(2) 煮炊具の変遷

以上、各器種ごとに、その変化と消長について述べてきた。それらを整理したものが編年表2である。それを参照しながら、ここでは煮炊具全体の変化を簡単に述べる。

古代0期～2期

古墳時代以来の伝統的器種である甕B (ハケ甕)、甕A (ナデ甕)、甕H (ケズリ甕)、甕F (ミガキ甕) が煮炊具の主流として残存する時期である。これらの長胴甕は、法量の小さな小型甕と明確な対応関係を持っており、甕Bは小甕B (ハケ小甕) に、甕Aには小甕A (ナデ小甕) に、甕Hには小甕H (ケズリ小甕) に

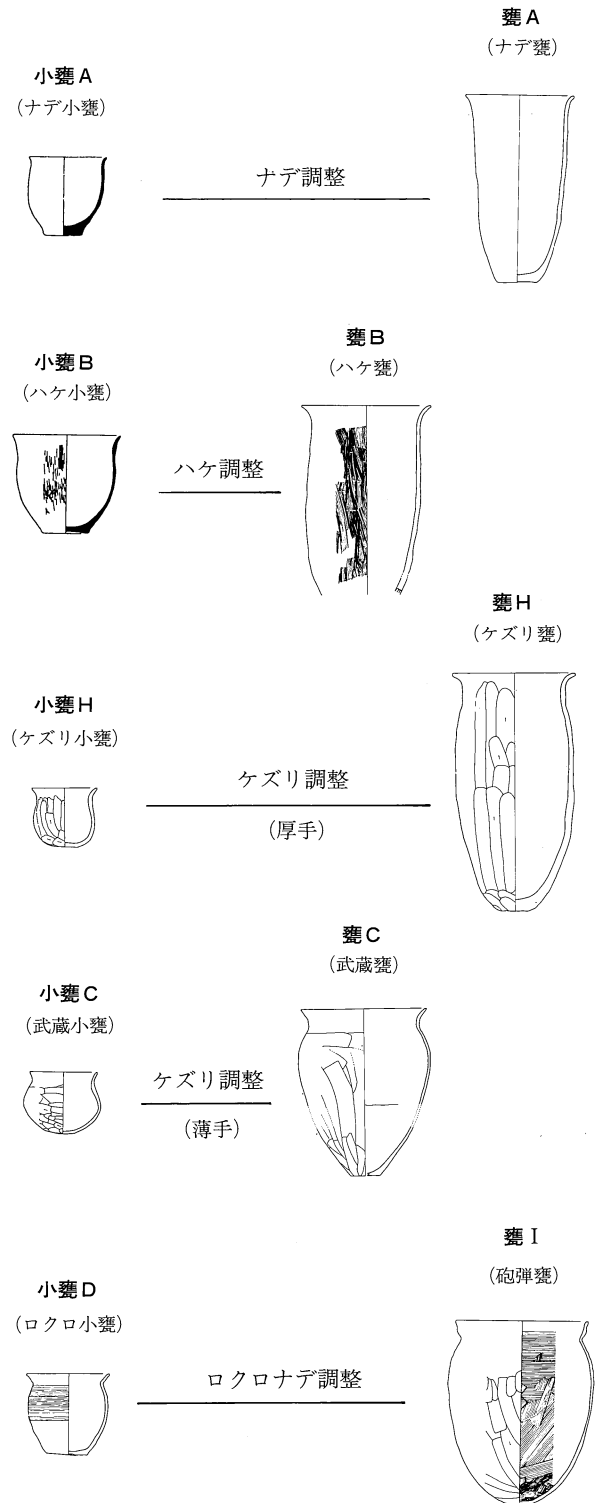


図159 甕・小型甕の調整手法による分類と対応関係

S=1:12

それぞれ対応している。古墳時代以来の系譜をひく甕も2期までみられる。こういった器種は、古代2期までは一般的にみられ、3期以後はほとんどみられなくなってしまうという大きな特徴をもつ。

古代3期

古代2期までみられた古墳時代からの系譜をひく煮炊具が消滅し、古代4期以降主流をしめる新しいタイプの煮炊具が登場するまでのつなぎ的な時期という位置付けになる。煮炊具における大きな転換点といえよう。長胴甕では甕C(武蔵甕)と甕B(ハケ甕)、小型甕では小甕C(武蔵小甕)が確認できる。甕Cは2期から確認される。

古代4期～8期

古代4期は古墳時代からはまったく系譜のたどれない甕I(砲弾甕)と小甕D(ロクロ小甕)という新たな煮炊具が登場する段階である。この甕類の他に甕C、甕B、小甕Cもみられ、複雑に組み合わせられて出土する。甕類の主体をなすのは、長胴甕では甕Iと甕C、小型甕では小甕Dで、小甕Cも6期までは一定量の出土がある。

以上、簡単にみてきたが、煮炊具は3期を境にして大きく前後の2つの時期に分けることができる。1つは古代0期～2期までの時期で、古墳時代以来の伝統的器種によってその主体がしめられる時期である。そして、古代3期を大きな転換点にして、古代4期～8期は、古墳時代からは系譜のたどれない全く新しい器種によって煮炊具が占められる時期になるといえる。

4 貯蔵具の変容(編年表3)

須恵器、土師器、灰釉陶器、黒色土器B等にみられるが主体をしめるのは須恵器である。各期における形態変化は特定の器種をのぞいて非常につかみづらいため、消長にしばって記述する。

(1) 須恵器

A. 甕類(編年表3)

体部外面にタタキ整形をもつ大型の貯蔵具を甕類として甕A、甕C、甕D、甕Eの4つに分類した。甕Aと甕Cは頸部の長さにより長いものが甕A、短いものが甕Cとして分類される。ともに古墳時代から系譜のおえるもので^(註22)、古代8期までみられる。甕Aは9期までわずかに確認できる。甕Dはいわゆる凸帯付四耳壺と呼ばれるもので、更埴市上ノ田遺跡で古代3期のSD15から出土がみられるのが初現で、8期までみられる。特に7期と8期の出土量は非常に多い。甕Eは形態的には須恵器鉢Aと似るが、タタキ調整をもつことにより、ロクロナデ調整の須恵器鉢Aと区別される。この器種も甕A、甕Cと同様に古墳時代から系譜がたどれ^(註23)8期まで確認できる。

B. 横瓶、平瓶、甗(編年表3)

出土例が少ないため明確につかみづらいが、集落遺跡においては横瓶は古代1期後半から8期まで、平瓶と甗は古墳時代から系譜がおえ^(註24)平瓶は1期前半から3期まで、甗は1期後半と2期に出土例がみられる。古墳時代以来の伝統的器種であるため、今後さらに時代的にさかのぼる出土例は確認されるであろう。平瓶については、2期から有台で把手のつくタイプがみられている。甗は1期後半から有台のものがみられる^(註17)。

C. 長頸壺(編年表3)

AとBの2タイプがみられる。長頸壺Bは肩部に屈曲をもち、ラッパ状に開く口縁部をもつもので、古代1期後半から2期まで確認できた。長頸壺Aは体部が球状になるもので、頸部は直立気味にのび、口縁部に口縁帯をもつ。4期には確実に出現し、8期以降もわずかにみられる。完形の出土例がないため、

似た口縁部形態をもつものが古代1期前半から3期まで確認できるが、これらはフラスコ瓶の可能性が高い。長頸壺Aは同一形態で大中小の相似器形がみられ6期から明瞭に法量分化する。大形の器形には把手をもつものもみられる。出土量は6期から8期にかけてが最も多く大中小の中では中型が一番多い。中型は頸部が細いものから太いものへという方向で、また、高台は外にふんばるものから直立するものへという方向で変化する。9期にはごくわずか出土例がみられる程度となる。

D. 短頸壺（編年表3）

A、B、Dの3つのタイプに分類される。短頸壺Aと短頸壺Dは口縁部形態によって分類され、口縁部が直立、内傾、外傾しながら短くたちあがるものがA、強く外反し口縁帯をつくるものがDである。短頸壺Aは古墳時代から系譜がおえ^(註25)、古代8期以降もわずかみられる。松本平『総論編』（小平1990）で分類された短頸壺Cもこの中に入れて分類している。短頸壺Dは2期から8期まで確認できた。短頸壺Bは小型のものを一括して分類したが、大きく以下の3つのタイプに分けられる。①胴径に比して口径が大きいもの（タイプ①）。②胴径に比して口径が小さい壺形のもの（タイプ②）。③口径10cm前後で外反する口縁をもつ壺形のもの（タイプ③）。出土数が多くないので概略のみ述べると、タイプ①とタイプ③は古墳時代から系譜がたどれ^(註26)、タイプ①は6期まで、タイプ③は8期まで確認できる。タイプ②は2期から7期まで確認できた。今回の編年では古墳出土のものは除外してあるが、短頸壺Bは特に、2期にいろいろなバリエーションのものが確認でき、古墳出土のものも加えるとその傾向はさらに大きくなる。

(2) 灰釉陶器（編年表3）

灰釉陶器の貯蔵具は平瓶、長頸壺、小瓶、短頸壺、瓶類等がみられる。古代6期から出現するが、屋代遺跡群で確認できるのは平瓶（K14）、長頸壺（K90）、短頸壺の蓋（K14又はK90）といった器種である。黒笹14号窯式が一番早くに出現し、6期末に黒笹90号窯式が出現する。7期にもそれらは継続され、7期後半の光ヶ丘1号窯式の出現に伴って量的にも増える。小瓶が7期後半から新たに確認できる。把手のついた無台の瓶類も7期に確認例がある。8期はこれまで述べてきたすべての器種がみられ、灰釉陶器の器種が最もバラエティーにとんだ時期といえよう。光ヶ丘1号窯式に加え尾北窯の篠岡4号窯式の小瓶（SB3008-7）も出土している。黒笹90号窯式もひきつづき出土している。9期以降は減少しつつも特定器種が細々と残るが、詳細は『中・近世編』に譲る^(註27)。また、1点のみ7期前半のSB67に静岡県静ヶ谷窯の短頸壺（図版252-11）が出土している。

(3) 黒色土器B（編年表3）

出土量は少ない。小壺状の瓶類が主な器種である。有台、無台の両者がみられ、古代6期から8期まで確認できる。

(4) 貯蔵具の変遷

以上、各器種ごとにその変化と消長について述べてきた。それを整理したのが編年表3である。貯蔵具は、古墳時代から系譜をひく器種が多く存在し、古代0期から8期の中でどこに画期を求めるかが難しい。しいていうならば在地の須恵器生産が活発化する1期後半は出土量も増すため一つの注目すべき時期となるかもしれないが、やはり古墳時代以来の器種が多数をしめている現状からは、大きな画期とはなりづらい。また灰釉陶器が出現し多様な器種構成をもつ7期も注目すべき時期とは思われるが、灰釉陶器自体が量的に多くなく、やはり主体は須恵器で古墳時代以来の伝統的な器種がしめているため、大きな画期としては考えづらい。『中・近世編』の対象となる古代9期以降の変化も考えると、0期から8期までは一つの

大きなまとまりととらえられ、古墳時代以来の伝統的器種が使われる時期と考えることが妥当のように思える。そういった大きなとらえの中において、フラスコ瓶、長頸壺 B、平瓶、甗といった古墳の中に副葬されることの多かった器種が、集落の中においても 2 期～3 期といった時期に消滅し、かわって信濃の貯蔵具を代表する甗 D (凸帯付四耳壺) が 3 期から^(註28)、長頸壺 A が 4 期前後から出現する点はしっかり押さえておきたい。6 期には長頸壺 A が法量分化し、7 期には甗 D の出土量が増しさらに灰釉陶器も加わるなど多様な器種が 8 期にかけて展開する。そして、9 期以降は極端に出土量が減少し須恵器に替わって灰釉陶器がほぼそと貯蔵具の役割をになうようになる。

5 実年代の比定

屋代遺跡群における古代の土器編年で設定した時期区分に実年代を想定すると図160、編年表4のようになる。以下にその根拠としたものを記す。

根拠 1 (古代 0 期 = 古墳 9 期の開始時期) 須恵器杯 H の口径は時代が新しくなるとともに縮小傾向をもつということを前提としている。都の須恵器と対比することになるが、対比することの妥当性は、屋代遺跡群の 7 世紀代の須恵器が、胎土分析と肉眼観察の結果、都と共通の産地と考えられる陶邑産のものが多いということによる。これらの前提は根拠 2、根拠 3 でも同様である。

具体的には、古代 0 期の直前の段階である古墳 8 期新相の屋地 II B29号住の杯 H の口径は 10.6cm と 11.2cm である。これと似た法量をもつものとして、法隆寺の旧河道 SD2140 最下層出土の杯 H は口径 11.0cm であり、これと同型式のものが小墾田宮推定地の溝 SD050 上層から出土している。また、法隆寺の旧河道 SD2140 上層からは口径 10.3cm の杯 H が出土しており、これと同型式の杯 H が小墾田宮推定地の前記の溝 SD050 を覆う包含層から出土している (西1983)。小墾田宮は推古天皇が 603 年に豊浦宮から移り、628 年まで営んだ宮であり、この SD050 の資料は 7 世紀初頭の飛鳥 I の基準資料ともされている。したがって、古墳 8 期新相の屋地 II B29号住の須恵器杯 H と、今述べてきた法隆寺出土と小墾田宮出土の須恵器杯 H の法量はほぼ同じであることから、古墳 8 期新相は 603～628 年の中にとらえられ (7 世紀初頭)、土器様相から次の段階と考えられる古代 0 期 (古墳 9 期) の開始は (603～628年) + α と考えられる。

根拠 2 (古代 1 期前半の開始時期) 660 年前後に推定されている飛鳥の水落遺跡の杯 H の口径は 7.6cm ととても小さい。また、屋代遺跡群で編年された古代 1 期前半の杯 H の口径は、8.4cm～10.5cm の範囲に分布しており、水落遺跡のものよりやや大きめである。このことから古代 1 期前半の開始は、660 年よりもやや古いことが考えられ、想定ではあるが、650 年前後とおきえておきたい。

根拠 3 (古代 1 期後半の開始時期) 古代 1 期後半の特徴の 1 つに須恵器杯蓋 B の出現があげられる。都で杯蓋 B が出現するのは飛鳥 IV からとされ、その代表遺構として藤原宮下層 SD1901A 出土土器が知られる。この遺構からは 682～684 年の木簡が出土しており、この年代にはすでに古代 1 期後半は開始されていたと考えることができる。したがって、古代 1 期後半の開始年代は (682～684年) - α となる。

根拠 4 (古代 2 期の開始時期) 古代 1 期末～2 期初頭の第 4 水田対応層に属する SD7035 の 16 層からは「戊戌年」(698 年) の紀年銘木簡が出土している。SD7035 の最下層近辺からは須恵器杯蓋 A が複数みられ、あきらかに 1 期末の様相を呈する。そして、この紀年銘木簡が出土した 16 層は断面図でみると最下層よりもはるかに上層に位置し、上層部分からの須恵器杯蓋 A の出土はみられない。したがって 16 層は 2 期初頭の可能性が考えられ、698 年の木簡がすてられた時期にはすでに古代 2 期は開始されていたと考えたい。このことから古代 2 期の開始時期は 698 年 - α の年代があたえられる。

根拠 5 (古代 3 期の開始時期) 古代 2 期の実年代を特定する紀年銘木簡は 5 点の出土がみられる。第 4 水田対応層に属する SD7039 = SD8040 からは「七年」(「和銅七年」714 年と想定) の木簡が出土している。こ

の遺構は第4水田対応層の中でも切り合い関係から新しい時期のものであり、第4水田対応層の時期を1期末～2期初頭という範囲でとらえるなら2期の中にはいる遺構と考えられる。したがってこの木簡は古代2期の中に、714年が含まれるといえる資料となる。また、純粹に古代2期の第3水田対応層に属するSD8028 3層からは「養老七年」(723年)の木簡が2本、さらに第3水田対応層のSD7030 8層からは「神亀(三)」(726年)の木簡が1本出土しており、古代2期は723年と726年をも含んだ時期ということが知られる。そして、第4水田対応層の遺構からは里制下(701～715年)の木簡がみられること、第3水田対応溝からは郷里制下(715～740年)の木簡が多くみられること等をも考え合わせると、古代2期の終わりとして3期の開始時期は、まだ郷里制が終わりきらない時期の735年前後くらいにみておくのが妥当のように思われる。

根拠6 (古代5期の開始時期) 屋代遺跡群出土資料からは、この年代観を示せる資料はない。ただし、古代4期に併行すると考えられる松本平地域の、県埋文センター調査分南栗遺跡SB175から出土している甲斐型杯と似たものが、平城京のSE53、SE57から出土している。この遺構で出土した甲斐型杯は、木簡等で実年代を推定しえる近畿地方産の土器類と共伴して出土した。これらの土器類は平城宮土器VIに相当するとされ、実年代は都が平城京から長岡京へ移った時期とされる784～794年の年代が与えられている(三好1992)。これを参考にすれば、古代4期の終わり＝古代5期の開始時期を平城京遷都の794年前後くらいに想定することも可能となろう(註29)。

根拠7 (古代6期の開始時期) 古代6期の後半で黒笹14号窯式(K14)の灰釉陶器が出土しはじめることは、複数の出土例から明確である。K14の出現は820年ごろと想定されており(註30)、古代6期に820年が含まれると考えることは妥当である。また、古代5期は屋代遺跡群近辺の出土例をつぶさに検討していくと、遺構数が少なく、時期的に短期間であった可能性が考えられる。この2点から、古代4期の終わりを794年前後と考えた場合、あまり存続期間が長くなり、さらに、820年をこえない時期の中で古代5期の終わりを想定することが可能であり、古代5期の終わり＝古代6期の開始時期は、810年前後が妥当といえることとなろう。

根拠8 (古代7期の開始時期) 黒笹90号窯式(K90)の灰釉陶器は古代6期末のSB3016が初現で、7期前半で出土量が増す。K90の出現は840年ごろに想定されているため、7期前半の開始時期には840年+αが含まれるといえる。また、高速道篠ノ井遺跡SB7404は835年初鑄の皇朝十二銭である承和昌寶が出土

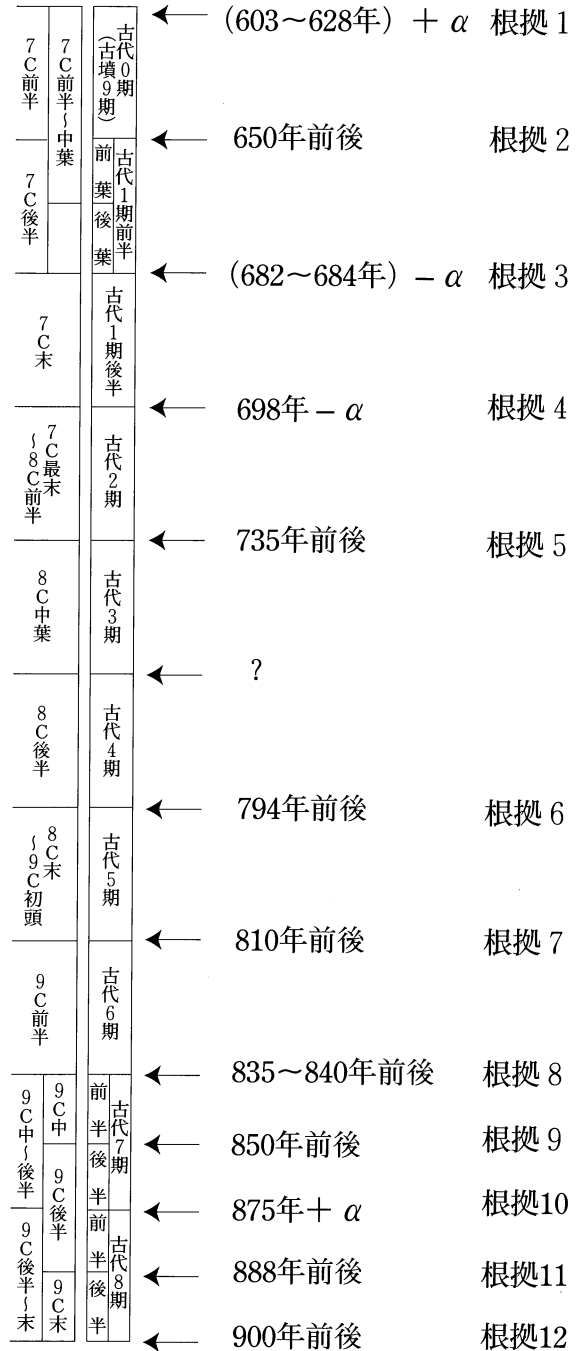


図160 実年代の比定

し、さらに、住居の埋土が大地震によってできる墳砂によって切られている。この地震跡は、文献記録にみられる841年頃のものとして想定されている（西山1997）。従って、この住居は835～841年頃のものということが出来る。この住居の土器様相をみると、個体数比では須恵器：黒色土器＝43：52と黒色土器の比率がやや高く、糸切りの須恵器杯Aの内面底径の平均も図中から測った結果ではあるが5.3cmとなり古代7期前半に相当する。これら2つの例から7期前半には840年+ α と835～841年が含まれることとなる。また、古代6期は遺構数も多く、古代5期よりは存続年数が長いであろうことを考えあわせると、古代7期の始まりは835～840年前後と想定される。

根拠9（古代7期後半の開始時期） 根拠10（古代7期の終末時期） 東濃の光ヶ丘1号窯式と尾北の篠岡4号窯式は7期後半から出土し、食膳具にしめる黒色土器が8割前後の頃から出土例が増すため、7期後半でもその終末に近い頃から出土すると考えてよさそうである。また、光ヶ丘1号窯式で「元慶」（877～885）の墨書銘をもつ椀が平安京民部省跡から出土しており、さらに、内外面ハケぬりて一部底面見込部にもハケぬりをもつ尾北窯の篠岡4号窯式の灰釉陶器には、貞観15年（873年）銘告知札木簡と寛平大寶（890初鑄）が共伴するという。これらのことをみると、光ヶ丘1号窯式と篠岡4号窯式は9世紀第4四半期に出土例が多いということがわかる。したがって、光ヶ丘1号窯式と篠岡4号窯式の出現は7期終末ということをお互い合わせ考えると、古代7期の終末は875年+ α ということになる。また、7期を前半と後半に分けた場合、後半の遺構数が前半のものより多く、後半の方が時期幅が長いと考えられる。このことと、7期前半の始まりを835～840年前後と想定したことを合わせて考えると、7期後半の始まりは850年前後と想定するのが妥当となろう。

根拠11（大洪水の時期） 遺跡を広く覆う洪水砂を遺構へのたまり具合からみると次のようになる。

SB41・SB9067→SB9050→SB8→「A」→SB861・SB848

SB41とSB9067は覆土に洪水砂をもたず、洪水砂をはぎ取った段階で検出できた遺構である。次のSB9050とSB8は覆土に洪水砂をもつ遺構である。SB8の方が洪水砂のたまり方が多い。また、『中・近世編』の対象となるがSB861とSB848は遺跡全体にたまった洪水砂を掘りこんで作った住居である。したがって、洪水は「A」の位置で起こったことになる。これらの遺構には、必ず食膳具に土師器を持つという特徴があり、それらの割合を重量比で記載すると下のようになる。

SB41(3%)・SB9067(9%)→SB9050(25%)→SB8(14%)→「洪水」→SB861(30%)・SB848(48%)

つまり、出土量が豊富な遺構の場合、洪水時の食膳具構成には1割～3割程度の土師器が伴うということが明瞭であり、このような遺構には、光ヶ丘1号窯式や篠岡4号窯式が伴う例が屋代遺跡群では多くみられる。また、近隣の遺跡でも、この洪水砂の中から同様の灰釉陶器が出土する例が多い。

光ヶ丘1号窯式と篠岡4号窯式の年代観は根拠9、根拠10で述べたように9世紀第4四半期に出土例が多いため、この洪水は文献上にみられる仁和の洪水（888年）の可能性が非常に高い。ただし、更埴条里遺跡ではI区に洪水砂の中に複数の生活面が確認されているので^(註31)、洪水の時期は888年前後ととらえることが妥当といえよう^(註32)。

根拠12（古代8期の終末時期） 食膳具にしめる土師器の量が黒色土器を上回るようになった頃に（古代9期、詳細は『中・近世編』）、大原2号窯式の灰釉陶器が安定的に出土しはじめる。但し、古代8期の段階にも大原2号窯式は数例出土例がみられるが、古代9期からはより安定的な出土となる。大原2号窯式は10世紀第1四半期に実年代を比定できる資料が多く、その開始は900年頃とされているため、古代8期の終末は、その年代観を参考にして900年前後と考えている。しかし、古代8期に大原2号窯式が出土し始めることも考え、この時期の根拠は今後再検討の余地をもっているといえる。

- 註1 10世紀前半～11世紀の土器編年については、H11年度刊行予定の『中・近世編』で論ずる。論の進め方の関係で10世紀前半（古代9期）以降についても部分的にふれているところもある。10世紀前半～11世紀は古代9期～古代15期にわけている。また、古代0期より前の古墳時代の土器の編年観は『弥生・古墳編』（鳥羽1998）に従う。
- 2 須恵器杯Aの外傾指数は $\frac{(\text{口径}-\text{底径})}{2} \div \text{器高} \times 100$ で求める。
- 3 食膳具の組成比の計算は、食膳具1としたものを検討の対象とした。食膳具2としたものを除外した理由は、食膳具2としたものが大きいため、小さい破片でも杯A何個分にも及ぶ重量を持つものがみられ、組成比のバランスをみだし時代性が反映されづらいと考えたためである。また、明らかに外来系と判断できたもの（畿内系黒色土器なども）同じ理由から食膳具2として集計からは除外した。黒色土器としたものは黒色土器Aと黒色土器Bの両方を集計したものである。
- 4 最近の須恵器杯Aの形態変化をつかむ方法は、外傾指数（小平1990等）のほかに外面の底径によって分析を試みる方法がとられている（中島1997 広田1997等）、これらの方法でも大きな流れを捉えることは可能であるが内面の底径（以後内面底径または内径とよぶ）を計測し、データ化するほうがより形態変化を捉えやすいと判断している。その理由は須恵器杯Aの変化は内容量の減少方向への変化と通じるものがあると捉えているためである。内容量の変化を観察する時、外面の径よりも内面の径の方がより大きな数値となってその変化があらわれてくる。また、外面の径は、どこからどこまでなのかがわかりづらい場合もあり、一部の例外を除いて、外面の径より内面の径の方がより測りやすいことにもよる。また、形態変化を考えるにあたってその他の属性を考えに入れなかったことは、口径がほぼ12cm～14cmと一定しており、器高にはややばらつきはあるものの、口径や高さといった属性を考えに入れなくても、よりシンプルな指標で十分形態変化が捉えうると考えたためである。なお、内面の径の測り方は内面の平坦面から著しく屈曲がかわる転換点をデパイタで計測した。実測図から測ることも可能ではあるが、実測図から測った場合のほうが実物を見て測った場合より、小さめの数値が出る傾向にある。基本的には実物から測ることが望ましい。また、この分析は糸切りの須恵器杯Aのみに適用できることであってへら切りの須恵器杯Aには適用できないことをつけ加えておく。
- 5 軟質須恵器杯Aの登場はこれまでも注目されてきたが（小平1990）、今回、定義をより明確にし、須恵器・軟質須恵器をA、B、C、Dと4タイプに分類することにより、明確な編年上の指標とした。詳しくはP149参照。小平の定義とは、内面のおさえのとりあつかいなど異なる点が多いので注意のこと。
- 6 遺物の出土量が少ない場合、次の古代1期前半のメルクマールとなる歴史時代的須恵器が存在する時代であるにもかかわらず、廃棄された資料群の中に、たまたまそれが存在しないといったことは十分に想定される。目安として主観的ではあるが、図化出来そうな非ロクロ土師器の食膳具が覆土内に10点弱あって（多いと感じるくらいあって）さらに、1片も歴史時代的須恵器が出土しないような場合は、明確に0期と位置付けていだろう。屋代遺跡群の場合、切り合いが多く、遺物出土量が十分でないため明確に0期と位置付くものはなく、非ロクロ土師器の食膳具が0期の一応の目安とした10点弱に近いかわりにかによって「0期～1期前半前葉」「0期～1期前半」「0期～1期」等といった幅を持った捉えになっている。「0期～1期前半前葉」とする例が多いが、これは非ロクロ土師器の食膳具が10点弱までではないが、かなり多めで、さらに歴史時代的須恵器が無い場合に使っている。また、「0期～1期前半」とする場合は、歴史時代的須恵器は伴わないが非ロクロ土師器が少なめの場合をさす。古代0期は土器様相から見ると古墳時代からの延長線上で考えられるため、前時代からの継続で古墳9期と呼ぶこともある。
- 7 以前の報告（鳥羽1996）で5水田古段階としたものは1期前半に相当し、5水田新段階としたものと、第4水田対応層出土土器の一部は1期後半に相当する。第4水田対応層出土土器の位置付けは1期末～2期初頭となる。土器のみをみた場合1期末と1期後半の区別は第4水田を覆う洪水砂がない限り分離できない。2期初頭と2期の区別も同様であり、1期末、2期初頭という分離のしかたは屋代遺跡群のみで可能なものである（編年表4を参照）。須恵器杯蓋Bのあるなしが前半、後半の指標となるため遺物量の少ない遺構では杯蓋Aのみしか出土がない場合でも杯蓋Bが存在する可能性もあるため1期前半と限定せずに1期という大きな枠組みで捉えることが肝心である。
- 8 以前の報告（鳥羽1996）で第4水田対応層出土土器としたものの一部と第3水田対応層出土土器としたものが相当する。
- 9 屋代遺跡群には、古代3期、4期の遺構はあるものの切り合い等により遺物量が十分でないものが多いため、近隣の資料を多く引用した。
- 10 須恵器の質A、B、C、Dの具体例の説明については、「第4章 遺物」の項と巻頭図版3のカラー写真を参照。
- 11 大洪水による洪水砂が遺跡の広範囲に残っている場合が多く、発掘所見から8期前半と8期後半に分ける場合が多い。土器か

第8章 成果と課題

らの所見では、洪水時の食膳具における土師器の比率は「1割～3割」前後であり一つの目安にはなるが、遺物量の多い場合でも、8期を前半、後半に分ける事は慎重さが要求される。また遺物量が普通かそれ以下の場合で食膳具に黒色土器が圧倒的な量を占める例が多くみられるが、8期の指標を食膳具の土師器の登場におくため、土師器がある時期であるのに廃棄された資料の中にたまたま土師器が無かったという場合も当然想定される。従って出土量が普通かそれ以下で、食膳具に黒色土器が圧倒的な量を占める遺構の年代は「7期後半～8期前半」として捉え、おおむね9世紀後半という範疇で把握することが妥当と思える。また、本報告では、凶化できないが土師器の食膳具と思える小片が一片であれば8期として捉えている。

- 12 『新版 標準土色帳』 1992年版
- 13 各務原市教委の渡辺博人氏によると須恵器杯H形態bは、一般的な形ではなく儀器から転じたものではないかとの事であった。
- 14 坂城町の古墳8期新相の青木下遺跡は未発表であるが、文化庁の『発掘された日本列島 98 新発見考古速報』に掲載されている遺物の写真説明から表化した。口径9.3cmという1点のみが資料として使えるが、坂城町教委の助川朋広氏に他の資料も実見させていただいたところ、もう少し大きい口径の須恵器杯Hも数点みられた。正式な報告をまちたい。
- 15 図120の出土遺構は以下に示すとおりである。

表91 図120掲載遺物の出土遺構一覧表

1	SD8044	21	SD7058	41	上日向窯	61	更埴条里 SB5042	81	SB9054
2	SD7047	22	SD7030	42	上ノ田 SD15	62	屋地II A2号集石	82	SB9077
3	SD7046	23	SD8028	43	更埴代 SB6052	63	屋地II A2号集石	83	SB3031
4	SD7042	24	SD7030	44	更埴条里 SB5052	64	屋地II A2号集石	84	SB63
5	SX7037	25	SD8028	45	更埴条里 SB5054	65	更埴代 SB5016	85	SB87掘方
6	SX7037	26	SD8040	46	上日向窯	66	SB6086	86	SB4818
7	SD7046	27	SD7030	47	更埴条里 SB5055	67	SB6101	87	SB3031
8	SD7058	28	SD7030	48	更埴条里 SB5055	68	SB6116	88	SB3031
9	SD7047	29	SD8040	49	更埴代 SB6052	69	SB6087	89	SB9077
10	SD7051	30	SD8040	50	更埴条里 SB5054	70	SB5033	90	SD3262
11	SD7042	31	SD8028	51	更埴条里 SB5054	71	SB6038	91	SB9077
12	SD7048	32	SD7030	52	更埴条里 SB5052	72	SB5037	92	SB3031
13	SD7062	33	SD7032	53	更埴代 SB6064	73	SB6116	93	SB87掘方
14	SD7047	34	SD7030	54	更埴条里 SB5042	74	SK9435	94	SB3031
15	SX7037	35	SD8028	55	更埴条里 SB5049	75	SD6086	95	SB4008・4030
16	SD7046	36	SD8040	56	屋地II A2号集石	76	SB6101	96	SB3018
17	SD7035	37	SD7030	57	屋地II A2号集石	77	SB6116	97	SB3018
18	SD7048	38	SD8040	58	屋地II A2号集石	78	SB6087	98	SB3018
19	SD7046・7048	39	更埴条里 SB5054	59	更埴条里 SB5016	79	SB9060		
20	SD7051	40	更埴代 SB6052	60	更埴条里 SB5016	80	SB73		

- 16 佐久地方では、2期に併行する時期にもリング状のつまみをもった蓋でかえりをもつものが確実に存在するが、善光寺平南縁部では、そのような形態のものは一般的でなく、杯蓋Aは2期にはすでに消滅しているととらえておく。
- 17 文化庁による98年発掘速報展の展示によると、古墳8期新相に位置付く坂城町青木下遺跡の出土例の中に須恵器の小型高杯がふくまれている。また、この遺構では、注口部が飛び出した甕も出土しており、これらは一般的なこれまでの編年観では、古代1期以降のものというとなってしまう。この遺跡が特別な祭祀遺跡であるという特殊性はあるにせよ、いままでの編年観では考えづらい遺物の出土状況である。とりえず現段階では須恵器小型高杯は青木下遺跡例があるため、編年表では古墳8期と古代0期を点線でむすんでおく。注口のつぎ出した形態の甕も初現は古墳8期新相までさかのぼる可能性が強いことを指摘しておく。
- 18 灰釉陶器の鑑定は齋藤孝正氏に御指導いただいた。
- 19 市川隆之氏の御教示による。
- 20 サンプル資料収集にあたってお忙しい中、以下の方々に御協力をたまわった。記して謝意を表したい。順不同
横山かよ子、笹沢 浩、佐藤信之、山口 明、大澤 哲、山田真一、宮沢恒之、渋谷恵美子、会田 進、小林康男、小口達志、林 幸彦、福島邦男、大塚文人、滝沢敬一、倉沢正幸、助川朋広、矢島宏雄、翠川泰弘、鶴田典昭、増田宗彦、塩原俊文
- 21 紙数の関係で渡辺氏に観察していただいた結果の報告はここでの130点分のみとした。
- 22 古墳時代から系譜のおえる例として一例をあげると、甕Aでは屋代遺跡群のSB5184出土資料が5世紀代に位置付くものであり、甕Cとしては、森將軍塚古墳2号須恵器埋設遺構出土資料が6世紀末～7世紀のものとされる。
- 23 屋代遺跡群の古墳8期のSB6003に初現形態のものがみられる。
- 24 未発表であるが小野紀男氏に実現させていただいた更埴市の湯屋遺跡では、7世紀代でも古手と思われる平瓶をとまう良好

な資料が出土している。甕は出土量も多く5世紀代から一定量みられる。屋代遺跡でも良好な出土例が複数みられる（『弥生・古墳編』参照）。

- 25 古墳8期の森將軍塚古墳群7号墳に類例がみられる。
- 26 タイプ①は6世紀前半の松ノ山窯に類例がみられ、タイプ③は古墳8期の長野市中俣Ⅱ1号住に類例がある。
- 27 『古代1編』の対象は古代8期前半までであるが、編年表作成にあたって8期は8期後半の遺物も編年表のみに掲載してある。具体的には編年表3の139と143である。
- 29 甲斐型杯に関する資料については宇賀神誠司氏から御教示をいただいた。
- 30 これ以後とりあげる灰釉陶器の実年代については前川1984、齋藤1994を参考にしている。
- 31 高橋 学氏の御教示による。
- 32 SB9043は床まで洪水砂で埋まった住居である。ただし、発掘所見からは、この洪水砂が遺跡全体を覆う洪水砂と同一のものであるか否かは判断できなかった。また、多量に出土したこの住居の遺物の土師器の組成比をみると12%であり、洪水時の組成比と非常に近い。さらに光ヶ丘1号窯式の灰釉陶器を多く出土しており、これも洪水時の組成と近い。この覆土内の砂が遺跡全体を覆う洪水砂と同一であるということは断定できないが、土器の所見からは非常に洪水砂に近いということが指摘できる。こういった点にたって編年表4には参考扱いであるが「洪水」の位置にこの遺構を位置付けて掲載している。

引用・参考文献

- 岡田正彦 1970 「長野県更埴市屋代大塚遺跡調査報告」『信濃』Ⅲ-22-4
- 小平和夫 1990 「古代の土器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4 総論編』（財）長野県埋蔵文化財センター
- 小平和夫 1990 「(エ) 緑釉陶器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4 総論編』（財）長野県埋蔵文化財センター
- 齋藤孝正 1994 「東海地方の施釉陶器生産—猿投窯を中心に—」『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東3 施釉陶器—』古代の土器研究会第3回シンポジウム
- 堤 隆 1988 「十二遺跡における土器様相」『十二遺跡』
- 寺島俊郎 1991 「古墳時代末から平安時代の遺物」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2』（財）長野県埋蔵文化財センター
- 鳥羽英継 1996 「第二節 各水田面対応層出土土器」『長野県屋代遺跡群出土木簡』（財）長野県埋蔵文化財センター
- 鳥羽英継 1998 「古墳時代の土器編年」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書25 更埴条里遺跡・屋代遺跡群 弥生・古墳編』（財）長野県埋蔵文化財センター
- 中島英子 1997 「第3節 高丘陵陵古窯跡群の須恵器生産について」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書13』（財）長野県埋蔵文化財センター
- 西 弘海 1983 「法隆寺出土の七世紀の土器」（法隆寺『法隆寺昭和資財帳調査秘宝展』パンフレット）
- 西山克己 1997 「4 古代の土器と時期区分」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書16 篠ノ井遺跡群 遺物編』（財）長野県埋蔵文化財センター
- 原 明芳 1989 「吉田川西遺跡における食器の変容」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3 吉田川西遺跡』（財）長野県埋蔵文化財センター
- 原 明芳 1989 「(2) 緑釉陶器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3 吉田川西遺跡』（財）長野県埋蔵文化財センター
- 広田和穂 1997 「松本平における須恵器生産の変遷」『長野県考古学会誌 81』
- 三好美穂 1992 「平城京出土の甲斐型土器」『山梨県考古学協会誌』第5号
- 前川 要 1984 「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相」『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要Ⅲ』
- 前川 要 1987 「平安時代における東海系緑釉陶器の使用形態について」『中近世土器の基礎研究Ⅲ』日本中世土器研究会
- 更埴市教育委員会 1983 『長野県更埴市横沢遺跡群Ⅰ—横沢地区ほ場整備に伴う発掘調査報告書—』
- 更埴市教育委員会 1984 『長野県更埴市横沢遺跡群Ⅱ—横沢地区ほ場整備に伴う発掘調査報告書—』
- 更埴市教育委員会 1985 『長野県更埴市横沢遺跡群Ⅲ—横沢地区ほ場整備に伴う発掘調査報告書—』
- 更埴市教育委員会 1985 『更埴市粟佐遺跡群五輪堂遺跡Ⅲ—長野県屋代南高等学校改築に伴う発掘調査報告書—』
- 更埴市教育委員会 1987 『更埴市粟佐遺跡群五輪堂遺跡Ⅳ—長野県屋代南高等学校特別教室棟建設に伴う発掘調査報告書—』
- 更埴市教育委員会 1987 『屋代遺跡群馬口遺跡Ⅱ—長野県屋代高等学校体育館建設に伴う発掘調査—』

第8章 成果と課題

- 更埴市教育委員会 1988 『五輪堂V』
- 更埴市教育委員会 1990 『平成元年度 更埴市埋蔵文化財調査報告書』
- 更埴市教育委員会 1991 『南沖遺跡Ⅲ・五輪堂遺跡Ⅵ』
- 更埴市教育委員会 1992 『史跡 森將軍塚古墳—保存整備事業発掘調査報告書—』
- 更埴市教育委員会 1996 『諏訪南沖遺跡Ⅲ』
- 更埴市史編纂委員会 1994 『更埴市史 第1巻 古代・中世編』
- 長野市教育委員会 1978 『塩崎遺跡群—塩崎小学校地点遺跡 第1次調査報告—』
- 長野市教育委員会 1978 『田中沖遺跡 第1次発掘調査概報』
- 長野市教育委員会 1980 『篠ノ井遺跡群—大規模自転車道地点遺跡の調査報告—』
- 長野市教育委員会 1986 『浅川扇状地遺跡群 牟礼バイパス B・C・D 地点』
- 長野市教育委員会 1986 『塩崎遺跡 IV—市道松節—小田井神社地点遺跡—』
- 長野市教育委員会 1988 『小島・柳原遺跡群 南川向遺跡』
- 長野市教育委員会 1989 『中条遺跡—長野県松代高等学校体育館建設事業地点—』
- 長野市教育委員会 1990 『屋地遺跡Ⅱ—国補中小河川蛭川改修事業地点』
- 長野市教育委員会 1991 『塩崎遺跡群 (6) —塩崎遺跡群市道篠ノ井南253号線地点— 石川条里遺跡 (5) —石川条里遺跡消防塩崎分署地点—』
- 長野市教育委員会 1991 『田中沖遺跡Ⅱ 長野市神明広田区画整備事業地点』
- 長野市教育委員会 1991 『松原遺跡 長野南農業共同組合集荷場施設建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 長野市教育委員会 1991 『小島・柳原遺跡群 中俣遺跡』
- 長野市教育委員会 1992 『篠ノ井遺跡群 (4) —聖川堤防地点—』
- 長野市教育委員会 1992 『小島・柳原遺跡群 中俣遺跡Ⅱ』
- 長野市教育委員会 1993 『浅川扇状地遺跡群 駒沢新町遺跡Ⅱ』
- 長野市教育委員会 1993 『松原遺跡Ⅱ—市道松代東111号線地点』
- 長野市教育委員会 1993 『松原遺跡Ⅲ 主要地方道中野更埴線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 長野市教育委員会 1993 『田牧居婦遺跡—長野県住宅供給公社稲里住宅団地造成地地点—』
- (財)長野県埋蔵文化財センター 1990 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書7 南栗遺跡』
- (財)長野県埋蔵文化財センター 1997 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書16 長野市内 その4 篠ノ井遺跡群』
- (財)長野県埋蔵文化財センター 1997 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書15 長野市内 その3 石川更埴条里遺跡』
- (財)長野県埋蔵文化財センター 1998 『北陸新幹線 埋蔵文化財発掘調査報告書3 更埴市内 更埴条里遺跡 屋代遺跡群』

第2節 古代の土器 重要遺物のまとめ

1 灯明具 (表92 図161~165)

灯明用に使用されたとされる痕跡を残す土器が、多数出土している (表92)。以下の基準にそいながら分類した (図161)。

- ・灯明具 1 ……口縁部に灯芯状のこびりつきがあるもの。
- ・灯明具 2 ……口縁部に灯芯状のこびりつきはないが、すす又はこびりつきが付着しているもの。以下の3つに細分する場合もある。
 - ・灯明具 2-1 ……口縁部に小さな割れ口があり、その部分にすす又はこびりつきが付着しているもの。
 - ・灯明具 2-2 ……口縁部に小さな割れ口があり、そこから外面にすす又はこびりつきが流れおちるようについているもの。
 - ・灯明具 2-3 ……灯芯状のこびりつきでなく、灯芯状にすすが残っているもの。
- ・すす付着土器 ……土器の内側または外側または両方にすすが付着しているもの。

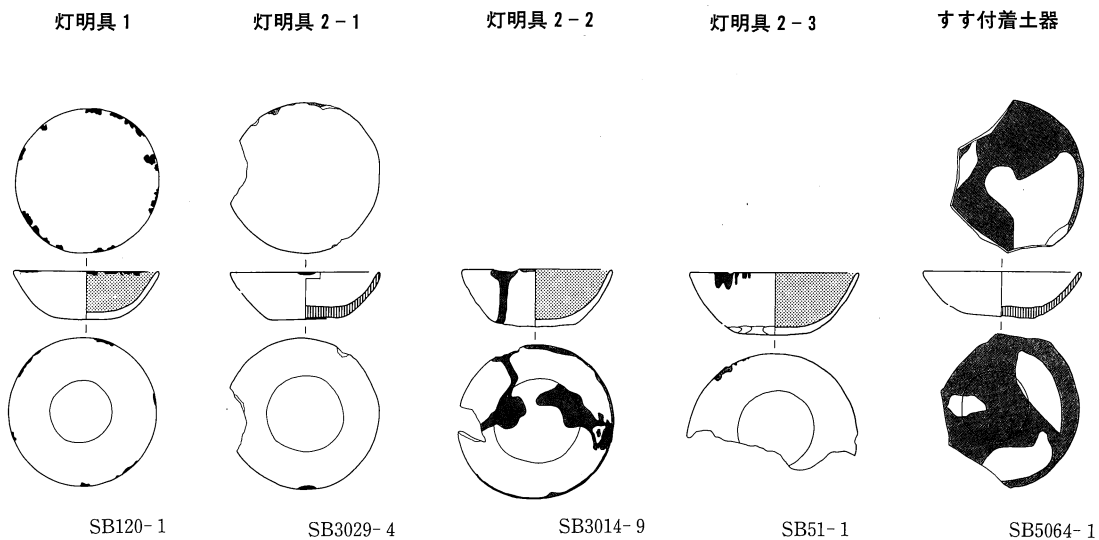


図161 灯明具の分類 S=1:6

灯明具 1 は、口縁部に灯芯状のこびりつきがあることから、灯明用に使われたとみてさしつかえないと思われる。灯明具 2 としたものは、灯芯状のこびりつきはないものの特異なすすやこびりつきのあり方から、灯明用に使われた可能性が指摘できる。これらは、古代 1 期末～2 期初頭の SD8037 (第 4 水田対応層) からみられるが、非常に少なく、6 期になって急増する (図162)。使われる器は、食膳具の転用例が多い。まれに小さな灯明専用器もみられる。転用例は黒色土器 A、須恵器、軟質須恵器が多く、器種別では杯 A が非常に多い (図162)。専用器は口径が小さく、器高も浅めで、灯明皿を思わせる形状につくられている。油を吸いやすくするためであろう (図163)。灯芯のつき方は、口縁部内面または外面に灯心状のこびりつきがみられるものが多く、口縁の一部につく場合と、口縁を一周して多方向につく場合とがある。口縁部の小さい割れ口に灯芯状のこびりつきや、すすがつく例もみられる。すすが付着している土器は、すす付着土器としたが多数みられ、特に目をひいたもののみ図化し分類した。すすのつき方は多様である。灯明具として使われたかどうかは判断しづらいが、外面にすすが流れおちるようについているものは灯明

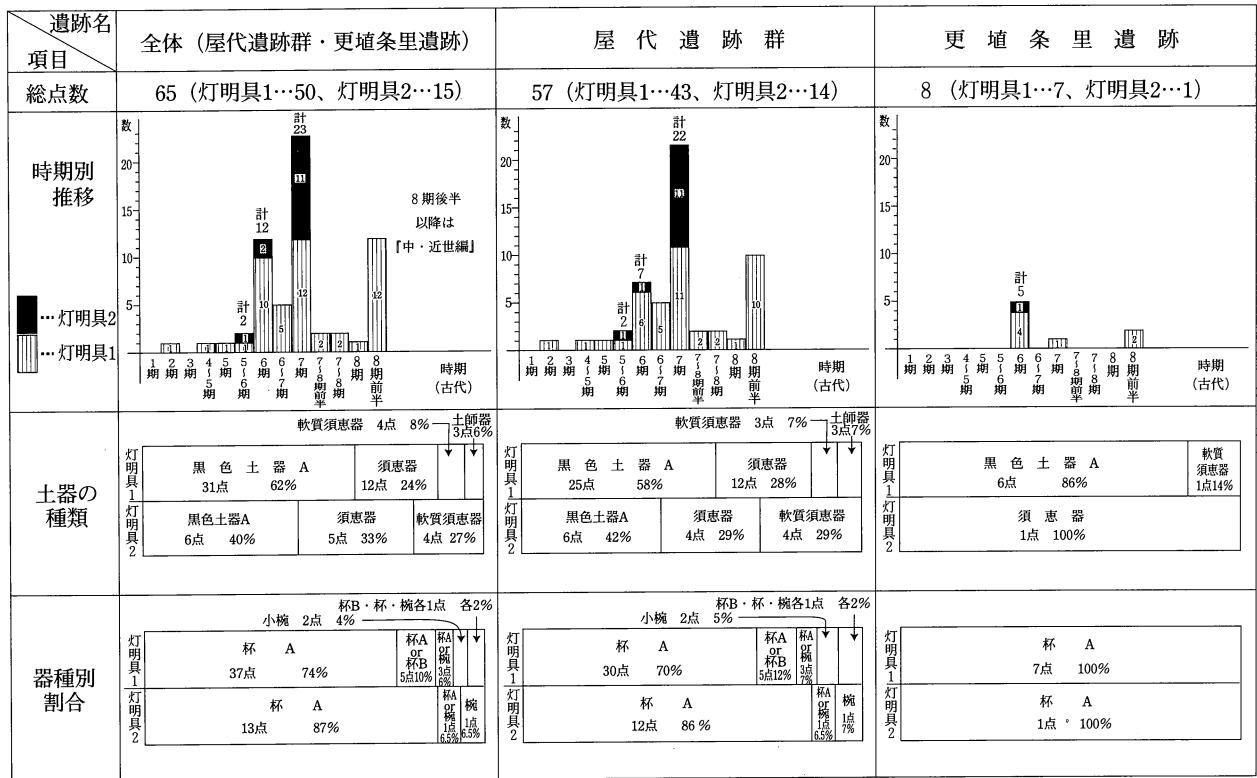


図162 灯明具の諸特徴の分析 対象は8期前半まで

具の可能性が高い。また、すすのつき方が器の全面につくのではなく、すすのつく部分とつかない部分がかかっている例がみられる。特異なすすのつき方から、上皿と下皿の組み合わせの時につく場合を想定し、灯明具の可能性のあるものと考えておきたい。住居内で出土地点が確認できる例では、カマドの近辺に出土する例が多めにみられた。土器器面の小孔と灯明具との関係は定かでないが、口縁部付近に小さな穴のあいた例が2例、また底部に穴のあいた例が1例みられる (図164)。SK4183-1は、口縁部に意識的に割れ口を作っており、灯芯をセットするには最適と思われる。内外面が磨耗しており、すすや灯芯の付着はなく積極的に灯明具とは断定できないが、可能性は指摘できる (図165)。

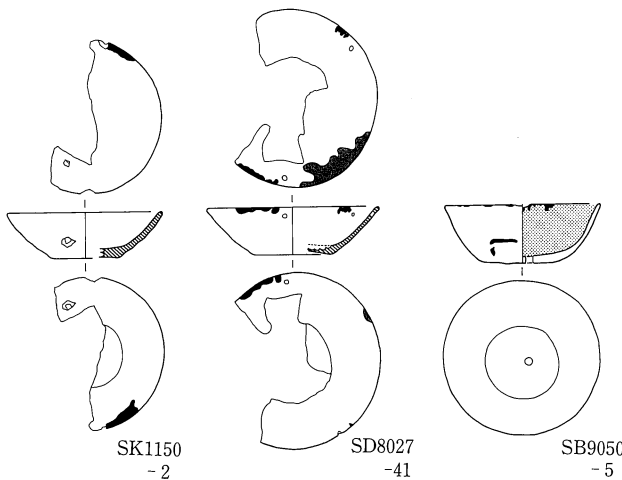


図164 小さな孔をともなう灯明具 S=1:6

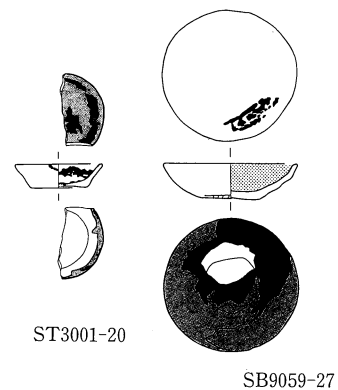


図163 灯明専用器 S=1:6

図165 口縁部に意図的に割れ口をもつ土器 S=1:6

表92 灯明具一覧表

No	図版No	掲載No	遺物名	遺跡名	出土遺構・層位	時期	土器の種類・器種	PL	備考
1	231	6	灯明具1	更埴条里	SB9003 掘方・覆土中層	7期後半	黒色土器A杯AⅡ		小さな割れ口に灯芯がこびりついている
2	234	9	灯明具1	更埴条里	SB9036 床	6期	軟質須恵器杯A		小さな割れ口あり
3	234	1	灯明具1	更埴条里	SB9043 床	8期前半	黒色土器A杯AⅡ	42-9	小さな割れ口3 口縁から流れるようにすず付着
4	235	5	灯明具1	更埴条里	SB9050 覆土中層	8期前半	黒色土器A杯AⅡ	43-1	底部中央に小孔あり、小さな割れ口に灯芯伴う例
5	235	26	すず付着土器	更埴条里	SB9050 覆土下層	8期前半	土師器椀		小さな割れ口1
6	236	27	灯明具1	更埴条里	SB9059 カマド脇	6期	黒色土器A杯AⅢ	43-3	灯明専用器の可能性大
7	237	1	灯明具2	更埴条里	SB9062 床	6期	須恵器杯A		灯明具2-(1)
8	237	3	すず付着土器	更埴条里	SB9062 床	6期	須恵器杯A		
9	237	2	すず付着土器	更埴条里	SB9062	6期	須恵器杯A		小さな割れ口あり
10	242	9	灯明具1	更埴条里	SB9081 カマド脇	6期	黒色土器A杯AⅡ		口縁の一方に灯芯が付くタイプ
11	243	13	灯明具1	更埴条里	SB9084 カマド脇	6期	黒色土器A杯AⅡ		口縁全周を灯明用に使うタイプ
12	244	2	灯明具1	屋代	SB08 覆土下層	8期前半	黒色土器A杯AⅡ		
13	245	6	すず付着土器	屋代	SB41 カマド周辺	8期前半	黒色土器A杯AⅡ		すずの真ん中にV字状の割れ口あり
14	246	1	すず付着土器	屋代	SB44 覆土上層	8期前半	須恵器杯A		
15	246	3	すず付着土器	屋代	SB44 1~2層	8期前半	須恵器皿		
16	247	1	灯明具2	屋代	SB51 床	7期後半	黒色土器杯AⅡ		灯明具2-(3)
17	251	2	灯明具2	屋代	SB65 カマド内	6期	須恵器杯A		灯明具2-(1)
18	252	2	すず付着土器	屋代	SB66	6~7期	須恵器杯A		小さな割れ口あり
19	252	3	すず付着土器	屋代	SB67 カマド内	7期後半	須恵器杯A		小さな割れ口あり
20	253	3	すず付着土器	屋代	SB72 カマド脇	7期後半	須恵器杯A		小さな割れ口3あり
21	254	3	灯明具2	屋代	SB119 覆土下層	7期	黒色土器A杯AⅡ		灯明具2-(2)
22	255	1	灯明具1	屋代	SB120 覆土下層	7期後半	黒色土器A杯AⅡ	44-3	口縁全周を灯明に使うタイプ
23	258	14	すず付着土器	屋代	SB3014	7期後半	須恵器杯A		
24	257	9	灯明具2	屋代	SB3014 覆土下層	7期後半	黒色土器A杯AⅡ	44-4	灯明具2-(2)
25	257	11	すず付着土器	屋代	SB3014 覆土下層	7期後半	黒色土器A杯AⅡ		墨書あり、体部外面、正位、[由]
26	258	13	灯明具2	屋代	SB3014 覆土中層	7期後半	黒色土器A杯AⅡ		灯明具2-(3)
27	258	1	灯明具1	屋代	SB3015 第3カマド	8期前半	須恵器杯A	44-5	
28	260	5	灯明具1	屋代	SB3019	7期後半	黒色土器A杯AⅡ		小さな割れ口に灯芯を伴う例
29	260	6	灯明具1	屋代	SB3019	7期後半	黒色土器A杯AⅡ		小さな割れ口
30	259	1	灯明具1	屋代	SB3019 覆土上層	7期後半	黒色土器A杯AⅡ		
31	260	4	灯明具2	屋代	SB3029 覆土下層	7期前半	須恵器杯A		灯明具2-(1)
32	262	1	灯明具1	屋代	SB4009 2層・3層	7期前半	軟質須恵器杯A		内面のみすすけている、下皿?
33	262	3	灯明具2	屋代	SB4009 1~3層	7期前半	軟質須恵器杯A		灯明具2-(2)
34	264	5	灯明具1	屋代	SB4030 カマド脇	8期前半	黒色土器A杯AⅡ		口縁より流れるようにすずが付着
35	267	8	灯明具1	屋代	SB4208 2床	5期~6期	須恵器杯Aor椀		
36	268	3	灯明具2	屋代	SB4504 カマド周辺	7期前半	軟質須恵器杯A		灯明具2-(3)
37	268	15	灯明具1	屋代	SB4504 覆土下層	7期前半	黒色土器A杯AⅡ		
38	270	1	灯明具2	屋代	SB4516 カマド内	切合から7期後半	軟質須恵器杯A		灯明具2-(1)
39	270	1	灯明具1	屋代	SB4803 覆土上層	6~7期前半	黒色土器A杯AⅡ		
40			灯明具1	屋代	SB4805 炭層上面	6期	黒色土器A杯AⅡ		
41	271	4	灯明具1	屋代	SB4819	6期	黒色土器A杯AⅡ		小さな割れ口
42	271	6	灯明具1	屋代	SB4819 カマド脇	6期	黒色土器A小椀		小さな割れ口
43	272	3	灯明具1	屋代	SB5005 床	7期前半	須恵器杯Aor杯B		
44	273	2	灯明具1	屋代	SB5021 床	8期前半	黒色土器A杯AⅡ		
45	273	14	すず付着土器	屋代	SB5021 床	8期前半	黒色土器A杯AⅡ		高台の割れ口部分にもすず付着
46	276	1	灯明具2	屋代	SB5053	7期前半	軟質須恵器杯A		灯明具2-(1)
47	277	6	すず付着土器	屋代	SB5053 P1	7期前半	軟質須恵器杯A		
48	278	1	すず付着土器	屋代	SB5064	7期前半	須恵器杯A	45-8	特徴的なすずの付き方をしている
49	278	4	灯明具1	屋代	SB5068 1層	6期	須恵器杯A		
50	283	1	灯明具1	屋代	SB5175	6期	須恵器杯A		
51	289	7	灯明具1	屋代	SB6074 カマド脇	7期	黒色土器A杯AⅡ		
52	289	4	灯明具1	屋代	SB6074	7期	黒色土器A小椀		
53	290	7	灯明具1	屋代	SB6085	8期前半	土師器杯Aor椀		
54	290	1	灯明具1	屋代	SB6086 カマド脇	5期	黒色土器A杯AⅠ		口縁の一方に灯芯が付くタイプ
55	293	1	灯明具1	屋代	SB6118 カマド脇	7期	軟質須恵器杯A		
56	293	6	灯明具2	屋代	SB6118 カマド脇	7期	黒色土器A杯AⅡ		灯明具2-(2)
57	294	1	灯明具1	屋代	SC2 VI区 A6	6~8期	須恵器杯A		
58	295	3	灯明具1	屋代	SC141 V区 TC8	7~8期前半	黒色土器A杯AⅡ		
59			灯明具1	屋代	SC3115 IV区 P20	8期	土師器杯AⅡ		小片のため実測不能
60	296	1	灯明具2	屋代	SC3122 IV区 L20	7期	須恵器杯A		灯明具2-(1)
61	298	3	灯明具1	屋代	SD22 上層	8期前半	黒色土器A杯AⅡ		
62	300	3	灯明具1	屋代	SD273 VIII区 P1・2 2層	7期後半~8期前半	黒色土器A杯AⅡ		小さな割れ口に灯芯が伴う例
63	300	7	灯明具1	屋代	SD287-2 下層 (スミソウ下)	7~8期	黒色土器A杯AⅡ		
64	300	1	灯明具1	屋代	SD2388	7~8期	黒色土器A杯Aor椀		小片
65	305	4	灯明具1	屋代	SD5007 下層	6~7期	黒色土器A杯AⅡ		
66			灯明具1	屋代	SD8023	4~6期 (中心は5期)	須恵器杯Aor杯B		小片のため混入の可能性もある。実測不能
67	307	47	灯明具1	屋代	SD8027 4層	6~7期	黒色土器A杯AⅡ	53-2	口縁の一方に灯芯が付くタイプ
68	307	46	灯明具1	屋代	SD8027 4層	6~7期	須恵器杯A		口縁部に小孔を持つ
69	307	41	灯明具1	屋代	SD8027 4層	6~7期	須恵器杯A	48-2	口縁部に1孔あり
70	330	2	灯明具1	屋代	SD8037	2期	須恵器杯B V		初現期のもの
71	334	2	灯明具1	屋代	SK1150・SK1149	8期前半	軟質須恵器杯A	53-14	口縁に小孔を持つ
72	334	1	その他	屋代	SK4183	7~8期	黒色土器A杯AⅡ	53-15	口縁部に意識的に割れ口を作る、参考資料
73	336	2	灯明具1	屋代	SK5208	4~5期	須恵器杯Aor杯B		小片のため混入の可能性もある
74	338	1	灯明具2	屋代	SK6462	5~6期	須恵器杯A		灯明具2-(3)、朱墨も兼ねる
75	340	20	灯明具1	屋代	ST3001 盛土	8期前半	土師器杯	54-1	灯明専用器
76	340	24	灯明具1	屋代	ST3001 南溝	8期前半	黒色土器A杯AⅡ		
77	341	20	灯明具1	屋代	ST3002 SD2	8期前半	黒色土器A杯Aor椀		
78			灯明具2	屋代	VII区 TR16 III-2層	5期後半~8期	黒色土器A杯Aor椀		灯明具2-(2) 実測図なし

2 カマジルシ (表93 図166~167)

カマジルシをもつ土器は78点の出土がみられ表93に示した(屋代遺跡群77点、更埴条里遺跡1点)。古代9期以降の遺構に混入したのも多少みられるが、すべてが今回報告の古代0期~8期の範囲内で考えられる土器群である。表93で時期が限定できる資料をもとに統計処理したものが図166である。更埴条里遺跡は1点のみの出土のため屋代遺跡群の中に入れて処理した。

図166をもとに考察すると、カマジルシの初現は古代0期~1期前半に位置づけられるSD4211にみられる(SD4211-4)。これは須恵器杯Aで、古墳時代から系譜をひく須恵器(杯H、杯蓋H等)にはみられず、歴史時代的須恵器のみにみられる。1期後半から2期にかけて出土量が非常に多く、以後8期前半まで一定量の出土がみられる。土器の種類は須恵器が最も多く80%をしめ、続いて軟質須恵器(17%)、灰釉陶器(3%)の順になる。軟質須恵器では須恵器の質BタイプのものがAタイプよりはるかに多いのも特徴といえる。器種別割合では杯Aが最も多く、次に杯Bとつづく。カマジルシの内容は「×」と「一」が一般的にみられ、「×」が最も多く38%、ついで「一」が24%をしめ、2つ合わせると62%となる。

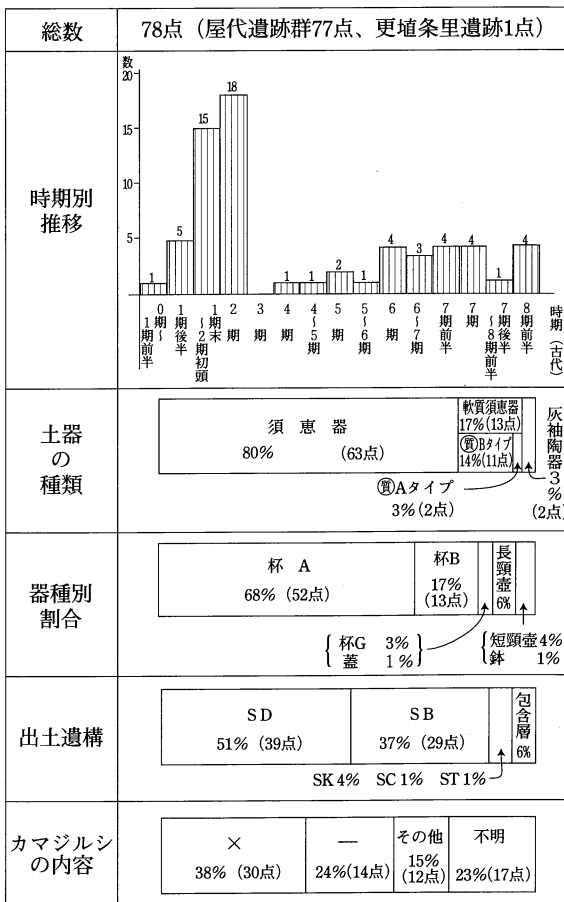


図166 カマジルシの諸特徴の分析

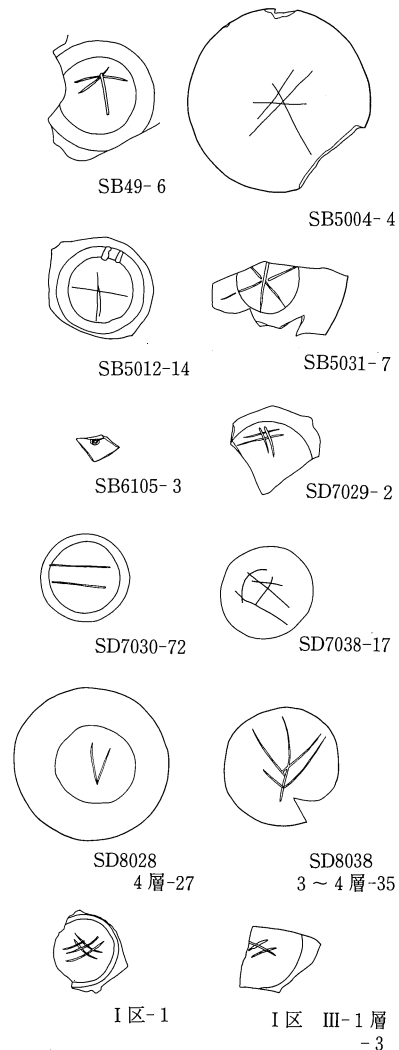


図167 「その他」のカマジルシの具体例 S=1:6

「×」と「-」は各時代を通してみられ、同一遺構から両方出土する例も多い。その他のカマジルシの内容は図167に集成した。底部外面にみられるのが一般的だが、SB5004は須恵器杯B IIの見込部にみられる。

表93 カマジルシ一覧表

No	図版No	掲載No	遺跡名	出土遺構・層位	時 期	土器の種類・器種	内容
1	238	24	更埴奈里	SB9067	8期前半	須恵器長頸壺?	「×」
2	247	6	屋代	SB49	8期前半	灰釉陶器長頸壺	その他
3	252	2	屋代	SB66	6～7期	須恵器杯A	「-」
4	252	6	屋代	SB66	6～7期	須恵器杯A	「×」
5	255	4	屋代	SB124	7期前半	須恵器杯A	「-」
6	259	5	屋代	SB3016	6期	須恵器杯A	「-」
7	260	3	屋代	SB3029	7期前半	須恵器杯A	「-」
8	261	2	屋代	SB3034	6期	須恵器杯A	「-」
9	261	4	屋代	SB3034	6期	須恵器杯A	不明
10	265	1	屋代	SB4032	7期	須恵器杯A	「×」
11	265	7	屋代	SB4204	5期～6期	須恵器杯A (ヘラキリ)	不明
12	266	13	屋代	SB4205	1期後半	須恵器杯A	「×」
13	266	6	屋代	SB4205	1期後半	須恵器杯A	「-」
14			屋代	SB4503	13期～14期への混入	須恵器杯A	不明
15	269	4	屋代	SB4509	5期 2期の混入の可能性もある	須恵器杯B III	「×」
16	270	4	屋代	SB4518	切り合いから7期	須恵器杯A	「-」
17	271	4	屋代	SB4811	2期 (5期後半～8期の混入)	須恵器杯A	「-」
18	272	4	屋代	SB5004	1期後半	須恵器杯B II	その他
19	272	5	屋代	SB5004	1期後半	須恵器杯B II	不明
20	272	9	屋代	SB5005	7期前半	須恵器杯A	「×」
21	272	14	屋代	SB5012	7期前半	須恵器長頸壺A	その他
22	273	1	屋代	SB5017	5期	須恵器杯B IV	不明
23	274	2	屋代	SB5026	6期	須恵器杯B	「×」
24	275	7	屋代	SB5031	2期	須恵器杯A	その他
25	276	3	屋代	SB5036	切から5期前後 (7期の混入)	須恵器杯A	不明
26	278	2	屋代	SB5079	2期	須恵器杯A	「×」
27	282	3	屋代	SB5163	4～5期	須恵器杯A	「×」
28	288	3	屋代	SB6064	2期	須恵器杯A	「-」
29	292	3	屋代	SB6105	4期 5期後半～8期の混入の可能性あり	須恵器杯Aor杯B	その他
30	295	3	屋代	SC146	7期	軟質須恵器杯A	「×」
31	300	6	屋代	SD287 上層	8期前半	須恵器短頸壺	「×」
32	301	4	屋代	SD3032	8期前半	須恵器杯A	不明
33	302	3	屋代	SD3096	4期 or 7期前後	須恵器杯A	「-」
34	304	1	屋代	SD4209	2～8期	須恵器杯A	「-」
35	304	4	屋代	SD4211	0期～1期前半	須恵器杯A	不明
36	304	1	屋代	SD4517	7期後半～8期前半 (2期初頭～5期の混入)	須恵器杯A	「×」
37	306	6	屋代	SD7020	6期～7期 (6期中心)	須恵器杯蓋	「×」
38	307	2	屋代	SD7029 3層 下層	2期	須恵器杯A	その他
39	308	36	屋代	SD7030 下層	2期 (3水田)	須恵器杯A	不明
40	309	72	屋代	SD7030 最下層	2期 (3水田)	須恵器杯B V	その他
41	308	30	屋代	SD7030	2期 (3水田)	須恵器杯A	「×」
42	308	23	屋代	SD7030	2期 (3水田)	須恵器杯A	「×」
43	308	7	屋代	SD7030	2期 (3水田)	須恵器杯B V	「×」
44	314	47	屋代	SD7035 最下層	1期後半 (1期末、4水田)	須恵器杯A	不明
45	314	66	屋代	SD7035 最下層	1期後半 (1期末、4水田)	須恵器杯A	不明
46	314	67	屋代	SD7035 最下層	1期後半 (1期末、4水田)	須恵器杯B II	「-」
47	315	11	屋代	SD7036	1期末～2期初頭 (4水田)	須恵器杯A	「×」
48	316	15	屋代	SD7038	1期末～2期初頭 (4水田)	須恵器杯A	「×」
49	316	17	屋代	SD7038	1期末～2期初頭 (4水田)	須恵器杯G	「×」
50	316	18	屋代	SD7038	1期末～2期初頭 (4水田)	須恵器杯B II	その他
51	319	34	屋代	SD7047 上層砂層	1期後半 (1期末、4水田)	須恵器杯A	「×」
52	319	30	屋代	SD7047	1期後半 (1期末、4水田)	須恵器杯A	「×」
53	323	13	屋代	SD7048	1期後半 (5水田)	須恵器杯A	「-」
54	329	8	屋代	SD8021	4～7期 (4～5期中心)	須恵器杯A	「×」
55	329	11	屋代	SD8021	4～7期 (4～5期中心)	須恵器杯A	「×」
56	311	12	屋代	SD8028 3層	2期 (3水田)	須恵器杯A	「×」
57	311	10	屋代	SD8028 3層	2期 (3水田)	須恵器杯B II	「-」
58	311	22	屋代	SD8028 4層	2期 (3水田)	須恵器杯A	不明
59	311	27	屋代	SD8028 4層	2期 (3水田)	須恵器短頸壺C	「×」
60	311	30	屋代	SD8028 5層	2期 (3水田)	須恵器杯A	その他
61	311	32	屋代	SD8028 5層	2期 (3水田)	須恵器杯A	「-」
62	311	36	屋代	SD8028 5層	2期 (3水田)	須恵器杯B II	「×」
63	311	34	屋代	SD8028 5層	2期 (3水田)	須恵器杯A	「-」
64	320	26	屋代	SD8032 M4～2層	1期末～2期	須恵器杯A	「×」
65	320	32	屋代	SD8032 M6～1層	1期末～2期	須恵器杯A	「-」
66	315	34	屋代	SD8038 3～4層	1期末～2期初頭 (4水田)	須恵器杯A	「×」
67	315	35	屋代	SD8038 3～4層	1期末～2期初頭 (4水田)	須恵器長頸壺	「×」
68	315	25	屋代	SD8038	1期末～2期初頭 (4水田)	須恵器杯A	その他
69			屋代	SD8048	古墳8期新相への混入	須恵器杯A	不明
70	334	5	屋代	SK3067	7期後半～8期前半	灰釉陶器長頸壺	「×」
71			屋代	SK4042	検出面から中世への混入	須恵器杯A	不明
72	335	12	屋代	SK4622	2期	須恵器杯B IV	「-」
73	339	1	屋代	ST8古	7期	軟質須恵器杯A	「-」
74	347	1	屋代	I区		須恵器杯B VI	その他
75	347	1	屋代	I区 III-1層	不明	須恵器鉢	不明
76	347	3	屋代	I区 III-1層	5期後半～8期	須恵器杯A	その他
77	347	1	屋代	I区 III-2層	5期後半～8期?	須恵器長頸壺	不明
78	345	3	屋代	⑥区 第4水田	1期末～2期前半	須恵器杯G	不明

3 穿孔土器 (表94 図168)

土器の一部に穿孔されるものがわずかにみられる。ここでは、その一覧表を時期順に並べて提示する(表94)。また、図168に集成図を掲載した。

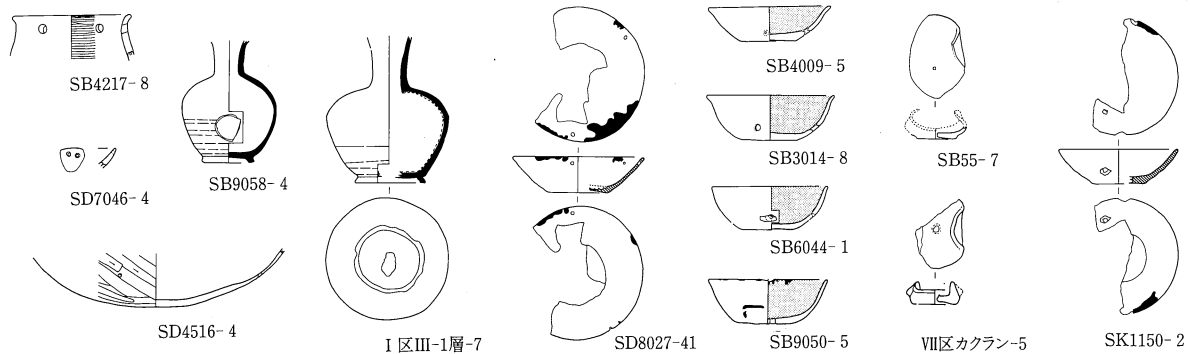


図168 更埴条里遺跡・屋代遺跡群出土の穿孔土器

S = 1 : 8

表94 穿孔土器一覧表

No.	図版No.	掲載No.	遺物名	遺跡名	出土遺構・層位	時期	土器の種類・器種	PL	備考・特徴
1	267	8	口縁部穿孔土器	屋代	SB4217	1期前半	土師器甕F		対に2孔
2	322	4	口縁部穿孔土器	屋代	SD7046	1期後半(5水田)	非ロクロ土師器杯		口縁部に2孔、補修孔ではない
3	236	4	体部穿孔土器	更埴条里	SB9058 床	6期	須恵器ミニチュア長頸壺A	43-2	
4	307	41	体部穿孔土器	屋代	SD8027 4層	6~7期	須恵器杯A	48-2	灯明具1も兼ねる
5	262	5	体部穿孔土器	屋代	SB4009 床	7期前半	黒色土器A杯A II		
6	257	8	体部穿孔土器	屋代	SB3014	7期後半	黒色土器A杯A II		
7	287	1	体部穿孔土器	屋代	SB6044 覆土上層	7期後半	黒色土器A杯A II		焼成後体部外面から1孔穿孔
8	304	5	体部穿孔土器	屋代	SD4516	8期前半	土師器甕C		体部一孔 外から穿孔
9	334	2	体部穿孔土器	屋代	SK1150	8期前半	軟質須恵器杯A	53-14	灯明具も兼ねる
10	347	7	底部穿孔土器	屋代	I区 III-1層	2期初頭~8期	須恵器長頸壺A	54-6	
11	235	5	底部穿孔土器	更埴条里	SB9050 覆土中層	8期前半	黒色土器A杯A II		灯明具も兼ねる、底部1孔焼成前に穿孔
12	249	7	底部穿孔土器	屋代	SB55 覆土中層	8期前半	土師器耳皿A		
13	346	5	底部穿孔土器	屋代	VIII区 カクラン	8期以降	土師器耳皿A		

4 底部縁辺加工土器 (表95 図169)

杯A又は椀・皿の底部周辺を意識的に打ち欠いた土器がわずかにみられる。古代6期に初現がみられ、古代8期に出土例が多い(『中・近世編』関係のものも数例あるがここでは除外)。土器の種類は須恵器、黒色土器、灰釉陶器、緑釉陶器等多様なものにみられるが灰釉陶器に多い。表95と図169に出土例をまとめた。

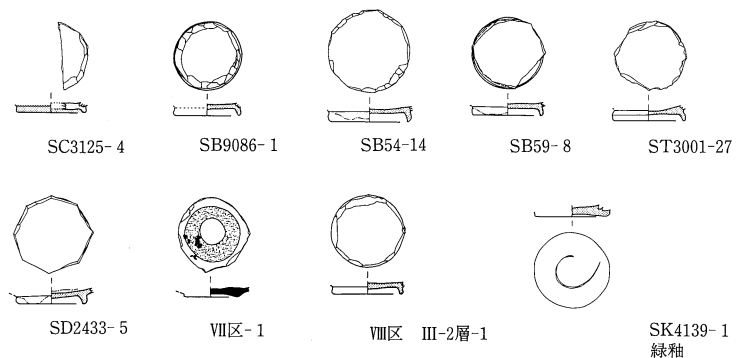


図169 更埴条里遺跡・屋代遺跡群出土の底部縁辺加工土器

S = 1 : 8

表95 底部縁辺加工土器一覧表

No.	図版No.	掲載No.	遺跡名	出土遺構・層位	時期	土器の種類・器種	PL	備考・特徴
1	296	4	屋代	SC3125	6期	黒色土器B椀or皿		
2	243	1	更埴条里	SB9086	7~8期	灰釉陶器椀Aor皿		
3	249	14	屋代	SB54	8期前半	灰釉陶器椀		
4	250	8	屋代	SB59	8期前半	灰釉陶器椀		
5	340	27	屋代	ST3001 北溝	8期前半	灰釉陶器椀A		
6	301	5	屋代	SD2433	8期前半	灰釉陶器椀or皿	48-3	
7	334	1	屋代	SK4139	5期後半~8期	緑釉陶器		底部外面被熱(変色、剥落)
8	346	1	屋代	VIII区	5期後半~8期	須恵器杯A	54-5	転用硯も兼ねる
9	346	1	屋代	VIII区 III-2層	5期後半~13期前半	灰釉陶器椀or皿		

5 模倣土器 (表96 図170)

明らかに他の器種を模倣したと思われる例が散見される。表96と図170にそれらをまとめた。

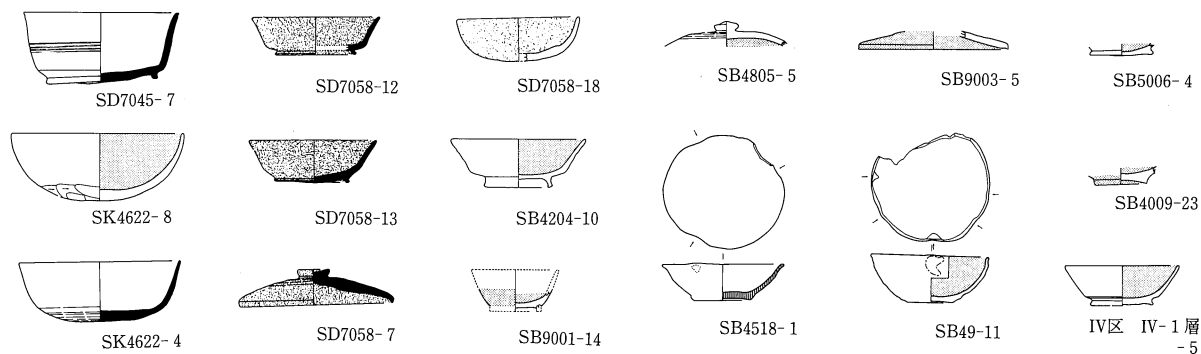


図170 更埴条里遺跡・屋代遺跡群出土の模倣土器

S = 1 : 8

表96 模倣土器一覧表

No.	図版No.	掲載No.	遺物名	遺跡名	出土遺構・層位	時期	土器の種類・器種	PL	備考・特徴
1	320	7	金属器模倣	屋代	SD7045 上層	1期後半 (5水田)	須恵器杯 B III	51-3	SD7048, 7058, 7061と接合、体部に沈線あり
2	335	8	金属器模倣	屋代	SK4622	2期	黒色土器 A 杯 A I		
3	335	4	金属器模倣	屋代	SK4622	2期	須恵器無台椀		
4	325	13	黒色塗彩土器 (金属器模倣)	屋代	SD7058	1期後半 (5水田)	須恵器杯 B IV		内外面塗彩
5	325	12	黒色塗彩土器 (金属器模倣)	屋代	SD7058	1期後半 (5水田)	須恵器杯 B IV		内外面塗彩
6	325	7	黒色塗彩土器 (金属器模倣)	屋代	SD7058	1期後半 (5水田)	須恵器杯蓋 B		内外面塗彩、すすのようにも見える
7	325	18	黒色塗彩土器 (金属器模倣)	屋代	SD7058 水門周辺	1期後半 (5水田)	非クロロ土器器 C 類		内外面塗彩
8	265	10	須恵器杯 B 模倣	屋代	SB4204	5期～6期	黒色土器 A 杯 B II		見込も横方向に磨いている
9	230	14	須恵器杯 B 模倣	更埴条里	SB9001 カマド脇	6期	黒色土器 B 杯 B VI		
10	270	5	須恵器杯蓋模倣	屋代	SB4805 カマド脇	6期	黒色土器 A 杯蓋		
11	231	5	須恵器杯蓋模倣	更埴条里	SB9003 カマド周辺	7期後半	黒色土器 B 杯蓋 B		
12	272	4	緑釉模倣	屋代	SB5006	6期	黒色土器 A 椀		緑釉の高台を模倣している
13	263	23	緑釉模倣	屋代	SB4009	7期前半	黒色土器 B 椀		
14	346	5	緑釉模倣	屋代	IV区 IV-1層	5期後半～8期	黒色土器 A 椀		
15	270	1	輪花模倣	屋代	SB4518 カマド脇	切り合いから7期	須恵器杯 A		3ヶ所つまみ
16	247	11	輪花模倣	屋代	SB49 P1	8期前半	黒色土器杯 A II		

6 奈良三彩 (二彩) (巻頭図版3)

屋代①区(Ⅲ-2層)と②区(Ⅳ層)から一片ずつ出土している。灰白色軟質の胎土に緑釉と白釉が施されている。大形の瓶類の頸の部分と思われ、同一個体の可能性が高い。断面の周囲はローリングをうけ磨滅している。

第3節 木製祭祀具の変遷

はじめに

屋代遺跡群⑥区で出土した遺物は第2章第5節で示したように、第5水田対応層～第2水田対応層という明確な層位の中で捉えることができる。さらに紀年銘や、ある程度年代をしばれる記載内容をもつ木簡の存在は、同層位で出土した遺物に対して同様の年代観を与えることを可能にした。これに基づいて本節では、各層位で多量に出土した、祭祀具と考えられる木製品「木形」についてその変遷を示す。対象とするのは報告中でほぼ全容を網羅できた、人形、馬形、鳥形（不明な木形を含む）、蛇形とする。なお変遷図に掲載したのは、全体の形状をつかめるもの、特徴的な部分が残るものを主とする。なお特に出土量の多い馬形A-①-1類については、同様の形状をもつものを割愛した。また、集中廃棄（SQ）に属するものについてはその番号を付加した。

なお屋代遺跡群の祭祀具の変遷を全国の中に位置づけて比較するため、図175を作成した。対象としたのは人形と馬形で、都城関係の遺跡で出土したものと、それ以外で出土したものに分ける。遺跡名と遺物の年代及び図を引用した文献は表97に示した通りである。年代がある程度特定されているものを抽出したので、都城関係の人形や地方出土の馬形は、その形状や量の網羅はできていない。扱う年代の下限は屋代遺跡群に合わせて86を除いて9世紀前半までとした。

1 人形の変遷（図172）

最古の人形 層位的に最も古い人形は941（SD8041、4層）である。この層位より下は土器の出土が少量なため年代はしばれず、古代0期～1期前半（7世紀代）の枠の中に入る。この1点のみ足の表現がなく齋串のように剣先状となる。また顔の表現もない。同じく第5水田対応層古段階の883はSD7065の出土で、土器編年では1期前半（7世紀後半）に属する。883以降、下半身が残存するものには全て足の表現があり、切り込みによる顔の表現もみられようになる。

人形の画期 第4水田対応層で急激に出土量が増加する。集中廃棄（SQ）に伴うものも出現し、この段階が人形にとっての画期であることを示している。SD7035の16層から「戊戌年（698年）」の紀年銘がある13号木簡が出土しており、大宝律令制定以前の時期を含む可能性が高い。これ以後第3水田対応層（SD8028 3層段階まで）の間が人形出土のピークとなる。第3水田対応層上層および第2水田対応層では人形が減少し、SQを構成することもなくなる。

人形の形状 形状の特徴は第5章第7節で示し、図172も頭部と肩の形状を主として配列した。全体的な傾向として、頭部の形状では山形（圭頭）になるものの割合が各層位ともに高く、第3水田対応層では丸型となるものが増加する点と、肩の表現では第4水田対応層は撫肩となるものが圧倒的で、第3水田対応層では怒肩のものが目立つようになる点が指摘できる。

その他の特徴として、第2水田対応層で1点顔を墨書するもの（15）が認められる。

人形は特に肩、手、腰といった部位の形状をもとに型式分類を行い、編年が試みられている（大平茂1993・95 金子裕之1980）。しかし屋代遺跡群の人形は図175で示した時代の比較からもわかるように、藤原京期～平城京期前半に対応する時期に集中している。年数で約40年ほどの中に各型式分類で示された諸要素（図171）がみられることから、これらの編年にあてはめて考えることはできない。地方の遺跡での出土例が少ない時期なので、今後の類例の増加を待ちたい。

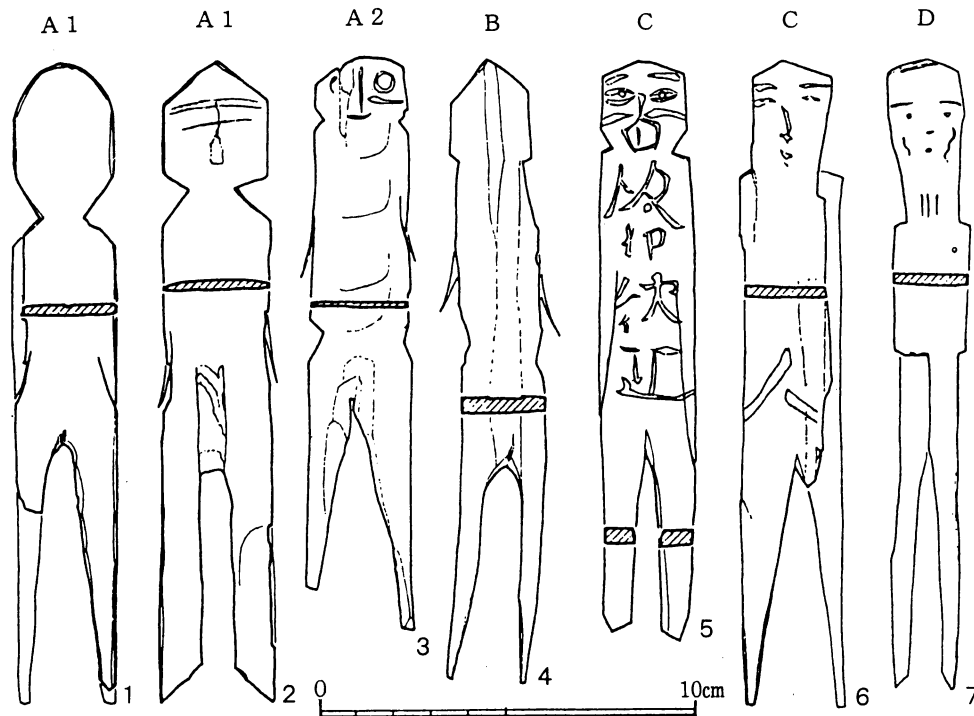


図171 金子裕之氏による人形の分類

2 馬形の変遷 (図173・174)

A類とB類 馬形はA類(鞍のあるもの)とB類(鞍のないもの)を大きな基準として変遷を示した。層位で厳密に分けるとB類が先行する。942・943は、人形941の出土層にほぼ対応する(SD8041 3~4層)。A類は人形883に対応する段階で登場しSQを構成する。第5水田対応層新段階で量が増加するが、ここではB類が主である。第4水田対応層ではA類とB類が共存し、SQ8016のように同一の集中内に存在する。第4水田対応層上層で以後のA類に似た形状のものが出現する。A類が圧倒的に増加する第3水田対応層で、B類はほぼその姿を消す。第2水田対応層はA類のみで、数も減少し小型化する。

串の装着 串の装着法は腹部下方から1本(あるいは2本)差し込む1類と両脇に2本ずつ装着する2類に分けて示した。第3水田対応層までは両者がみられ、特にA類とB類による区別はみられない。また、349・351といった大型のものが1類であるのに対し、173・830のように小型のものが2類であることから、大きさに対応する装着法ではないようだ。2類は第2水田対応層ではみられなくなる。

馬形の画期 以上で特に注目されるのは第4水田対応層と第3水田対応層を境(8世紀初頭)とするB類の減少→消滅化とA類の増加という現象である。これをどのように捉えたらよいのだろうか。出現はB類が先行するが、A類はすでに第5水田面古段階からみられ、第4水田対応層では同一のSQ内で両者は共伴している。屋代遺跡群以外の馬形でも例えば図175の平城宮出土の55は木簡を転用したもので、鞍の表現がみられる。「養老四年」の記載があるのでほぼその時代のもと考えられるが、都城ではこれ以後も鞍なしのものが存在する。また、俵田遺跡の81・82は同一遺構(SM60)での共伴で、同じ形状でありながら鞍の有無がある。この点は屋代遺跡群の馬形74の存在と関わりがありそうだ。以上のことから、この現象はB類の馬形に鞍の表現が付加されてA類が発生した結果としては捉えられず、むしろ8世紀に入った段階に何らかの理由で、祭祀具の使用(選択)に変化が起こったと考えるべきだろう。この段階が馬形にとってひとつの画期となるが、なぜこのような現象が起こったのかについては、B類が出現当初から鞍をもたない馬を象った祭祀具であったのかどうかという疑問を含めて検討する必要がある。

3 鳥形の変遷 (図174)

鳥形とした中で、確実に鳥をかたどっているという根拠をもつものは少ない。分類した基準は第5章第7節に示した。第5水田対応層新段階以降から認められるが、形状はそれぞれが独自であり、馬形のように系譜を追うことは難しい。755・756のみSQを構成する要素となり、人形、馬形A・B類、斎串と共伴している。しかしそれ以外は単体の出土である。このように鳥形は特に馬形、人形の変遷に対応する様子は認められない。

4 蛇形の変遷 (図174)

A類とB類 第5水田対応層古段階で確認され、SQを構成する。出現期は人形883、馬形A類と同じである。第4水田対応層まではA類(切り欠きを施すもの)が主であるが、すでに第5水田対応層新段階でB類(曲線状に削るもの)も認められる。B類は第4水田対応層の上層段階から主となり、SQを構成するようになる。第2水田対応層では1点確認されるのみで、第3水田対応層までが蛇形を使用する祭祀の最盛期であったことが窺える。蛇形を含むSQは数多くあるが、人形、馬形A類、鳥形と伴うことはない。

馬形の画期との連動 蛇形A類とB類は共存してはいるが、同一のSQで共伴する例はみられない。この点から、両者にはある種の相違点があったことが窺える。これを造形上の選択の相違とみるべきか、象る対象の相違とみるべきかについては今後の検討課題である。ただ、注目されるのは蛇形A類の減少→B類の主流化という流れが、馬形B類の減少・消滅→A類の主流化という動きと時期をほぼ同じにする点である。そして蛇形B類が主流となった8世紀前半の段階で、ほぼ最後の馬形B類となる136がSQ8039で蛇形と共伴する。この事実は馬形B類と蛇形に密接な関係があったことを示唆する。「馬形」という表現を使うと「馬を象った」ことになるが、実際馬形B類の場合はそのように判断する根拠に乏しい。この造形が馬にも似るが、蛇に近い点もあることは指摘した。あるいは信仰上複数の要素が加味されていたものかもしれない。馬形B類の消滅は、その要素のひとつが蛇形に転嫁された結果のようにも思われる。

5 祭祀具の変遷から得られる課題

木製祭祀具の伝播に関わって 天武・持統朝に体系化され、大宝律令をもって国家的な祭祀が規定される。このいわゆる律令的祭祀の開始にあたり、新たな祭祀具を中国などから導入すると同時に、古墳時代の祭祀具の一部を律令的祭祀の体系にとりこみ再編成した。これが人形、馬形、鳥形等の各種木製祭祀具(模造品)であるといわれる(金子1980)。この説に従うと、都城(藤原京)において祭祀具の形状が体系化され、ここを起点として各地方に律令祭祀の祭祀具として人形、馬形が伝播されたことになる。これに従い中央の祭祀具の形状の変化を基準とした編年も試みられてきた。しかし図172~175で示したように都城で体系化されたとする時期、地方でもすでに人形、馬形が存在している。これらが中央から伝播したものとする点に矛盾がある。神明原・元宮川遺跡、石本遺跡は6世紀後半~7世紀前半の年代観をもって報告されているが、木製祭祀具についてはその形態分類から疑問がなげかけられている(金子1988)。しかし屋代遺跡群の人形941は図175の43と近い造形であり、馬形B類の形状は65~70の流れの中に位置づけても矛盾はない。藤原宮の馬形53もこれらと類似した形状をしており、これを都城で発生、伝播した馬形の初現と捉えるより、この流れの中に位置づけた方が自然である。

確かに人形は、藤原宮期以降平安期にかけて都城で積極的に用いられ、ひとつの流れを形成している。

この期間の地方の人形もそれとよく似た形状を持ち、屋代遺跡群の7世紀末以降にみられる馬形人形の画期もおそらくこれに呼応するものと思われる。しかし、7世紀後半以前の人形を都城で体系化されたものの中に求めるのは現在のところ難しい。同様に、7世紀後半以前に出現する馬形(B類)は都城以外で多量に出土している^(註1)、9世紀以降を中心としてみられる馬形A類も地方での出土が主である。これに対し都城での馬形の出土数は少なく、長岡京では現在のところ出土例がない。人形とは異なり都城において馬形が積極的に取り入れられた様子は窺えない^(註2)。

以上のように、人形による祭祀が都城で取り入れられ体系化される以前、人形という祭祀具がどこからどのように伝播したのか。馬形という木製祭祀具は実際に律令的祭祀の中で体系化され、地方に伝わったものなのか。それに屋代で蛇形と捉えた独特な祭祀具の存在や祭祀具の形状の変遷も含めて、これらの点を再検討していく必要があると思われる。

遺跡の性格に関わって 屋代遺跡群の最古の木簡(1・2号)はSD8041の3層の出土で、人形・馬形の出現とほぼ期を一にする。このことは7世紀後半の段階ですでに、屋代遺跡群近辺に文書の授受に関わる官衙的施設が存在したことを示す(長野県埋蔵文化財センター1996)。7世紀末以降、木簡の量が増加しその内容も豊富になる。祭祀具の量も増加し、より体系化された状況を示す。木簡の出土量が最大となる8世紀前半、祭祀具の量もまた最大となる。ところが時期を隔て9世紀代になると文書、荷札といった木簡は姿を消し、祭祀具も激減して小型化する。以上のように木簡と祭祀具はその出現、拡大、衰退を同じくしている。このことは存在が予想される官衙的施設の動向に深く関わりそうである。特に7世紀末の人形の急増とその祭祀の体系化。8世紀前半の馬形B類の消滅とA類の主流化、蛇形A類の減少とB類の増加。9世紀前半の祭祀具の減少と小型化、蛇形による祭祀の衰退、という祭祀具の変遷にみられた画期は祭祀だけでなく、官衙施設を含めた遺跡全体の動きの中でのある種の画期を反映している可能性がある。

註1 群馬県長根羽田倉遺跡では7世紀前半には馬形B類と似た形状をもつ石製馬形が出現している。

2 この点について、都城で多量に出土する土馬との関連で考察する必要がある。

引用文献

大平 茂1993「木製人形年代考(上)」『古文化談叢 第30集(中)』

1995「木製人形年代考(下)」『古文化談叢 第35集』

金子裕之1980「古代の木製模造品」『奈良国立文化財研究所論集VI』なお挿図はこれより引用した。

1988『律令期祭祀遺物集成』

長野県埋蔵文化財センター1996『長野県屋代遺跡群出土木簡』

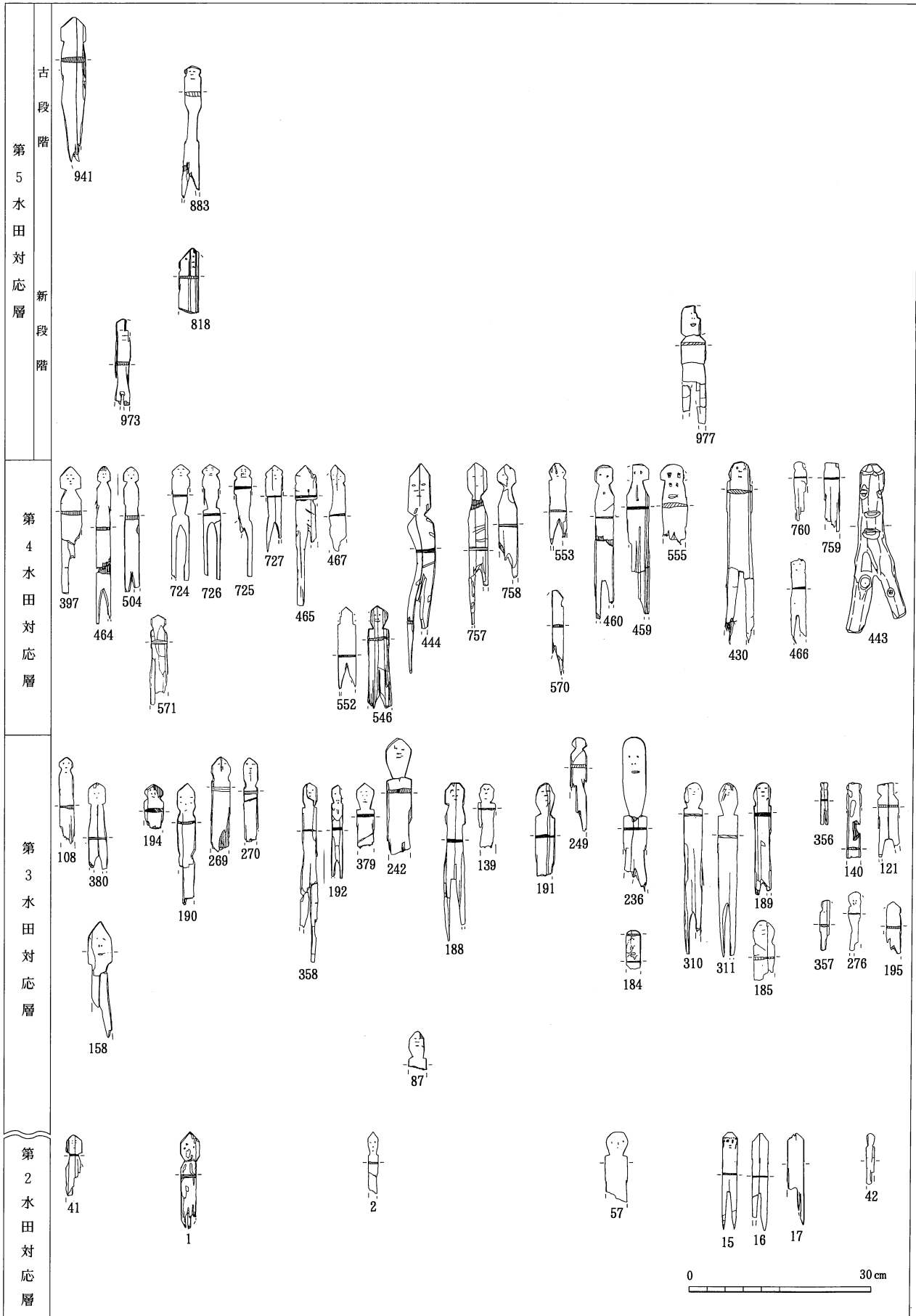


図172 屋代遺跡群における人形の変遷

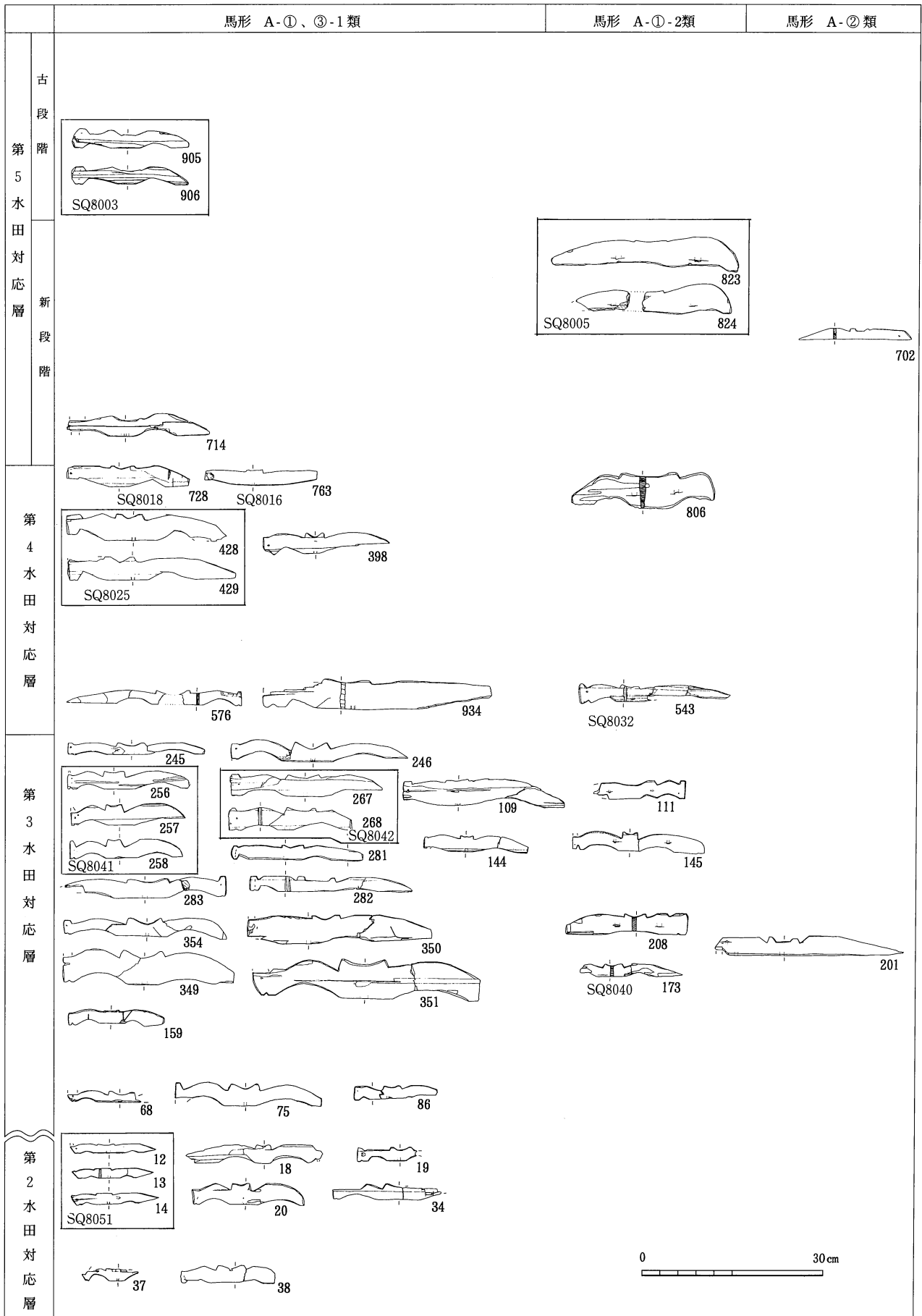


図173 屋代遺跡群における馬形A類の変遷

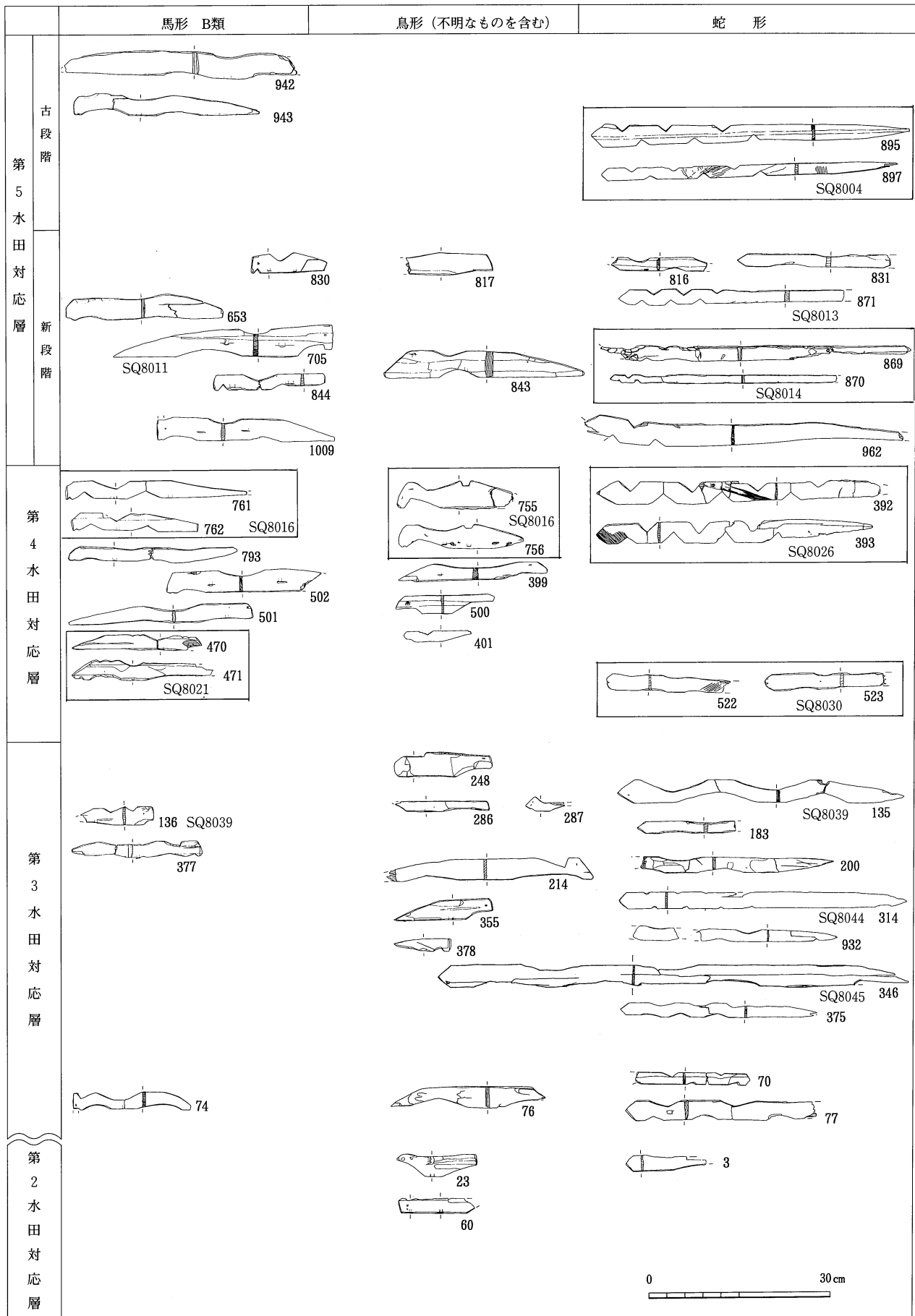


図174 屋代遺跡群における馬形B類・鳥形・蛇形の変遷

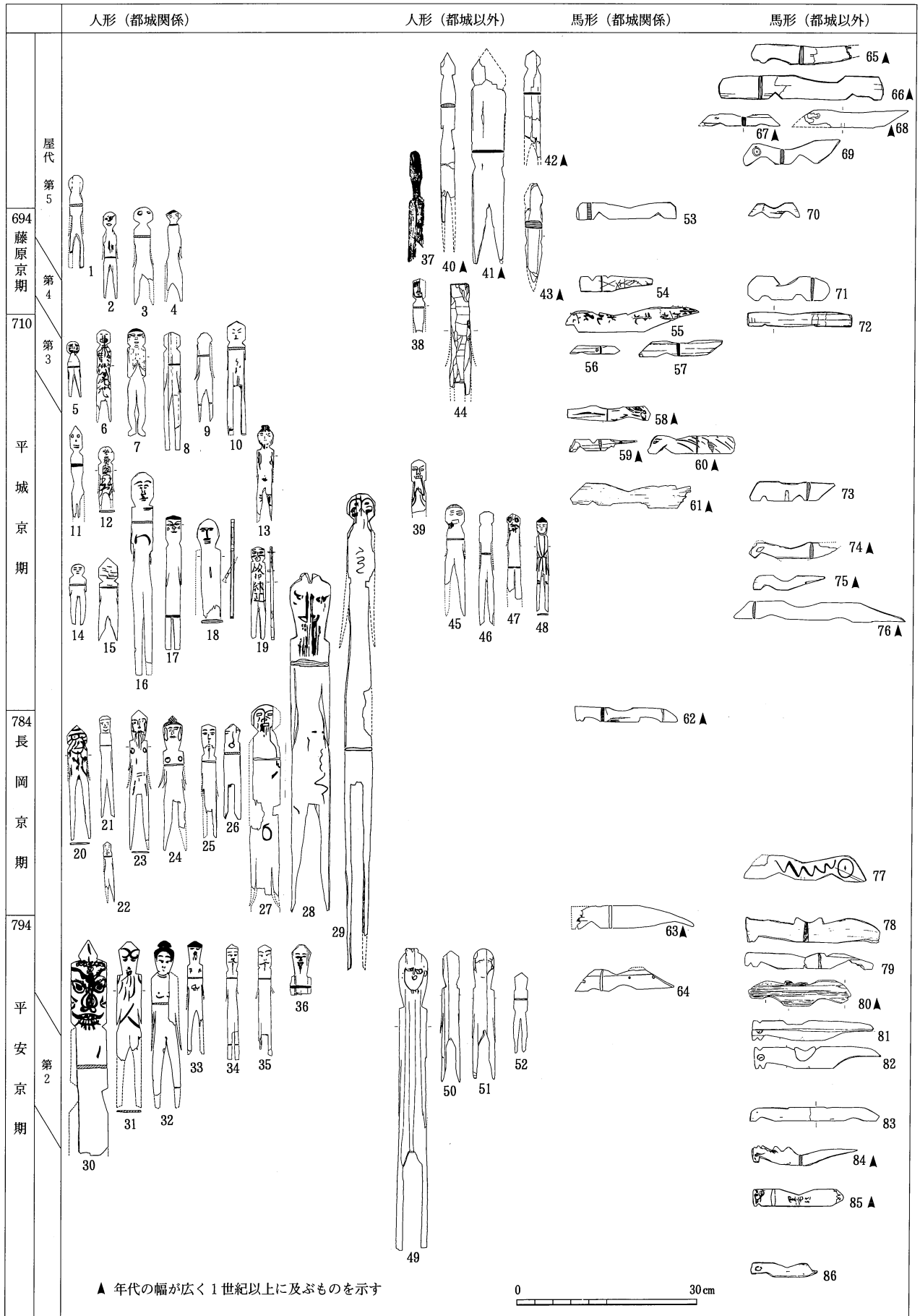


図175 都城および地方における人形・馬形の変遷

表97 図175掲載木製品出土遺跡一覧表

遺跡	NO	時代	文献
藤原宮跡	1, 53	7世紀後半(694年以前)	1
	2~4, 54	694~709年	1
平城宮跡	5~7	730年頃	1
	8	737~739年	2
	13	753年頃	1
	9	8世紀前葉	1
	12	8世紀中葉	1
	14, 15	8世紀後葉	1
	16~19	8世紀後半	1
	55	木簡(養老4年)転用	3
	58~60	8世紀	1
平城京跡	10, 56, 57	723年頃	1
	11	8世紀中葉	1
稗田遺跡(奈良)	61	8世紀	4
長岡京跡	20~29	784~794年	1
平安京跡	30~33	9世紀前半	5
中久世遺跡(京都)	34~36	9世紀前半	5
大藪遺跡(京都)	63	8世紀後半~9世紀	1
	64	9世紀前半	1
伊場遺跡(静岡)	37, 70	7世紀後半	6, 16
	38	7世紀末~8世紀前半	3, 6
	39, 73	8世紀中葉~後半	3, 6, 16
	69	7世紀中葉	6, 16
	71	7世紀末~8世紀後半	6, 16
	74~76	7世紀末~9世紀初頭	6, 16
神明原・元宮川遺跡(静岡)	40~43, 67, 68	6世紀中葉~7世紀中葉	7
	44, 72	7世紀末~8世紀前半	8
服部遺跡(滋賀)	45	8世紀後葉	1
大蔵司遺跡(大阪)	46~48	8世紀後半	1
俵田遺跡(山形)	49~51, 81, 82	9世紀前半~中葉	9
野田地区遺跡(和歌山)	52	9世紀前葉	1
石本遺跡(京都)	65, 66	6世紀後半~7世紀初頭	10
小犬丸遺跡(兵庫)	78, 79	8世紀末~9世紀前半	11
上品野遺跡(愛知)	80	8世紀~おそくとも9世紀前半	12
石川条里遺跡(長野)	83	9世紀中葉	13
じょうべのま遺跡(富山)	84	平安前期	14
尾上遺跡(滋賀)	85	9世紀	15
御山千軒遺跡(福島)	86	9世紀後半	16

文献

- 1 奈良国立文化財研究所1984『木器集成図録—近畿古代編—』
- 2 奈良国立文化財研究所1992『1991年度 平城宮発掘調査部発掘調査概報』
- 3 金子裕之1988『律令期祭祀遺物集成』
- 4 奈良県立橿原考古学研究所1977『奈良県遺跡調査概報 1976年度』
- 5 (財)京都市埋蔵文化財研究所1986『平安京跡発掘資料選(二)』
- 6 浜松市教育委員会1977『伊場遺跡 遺物編I』
- 7 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所1988『大谷川III(遺物編)本文編』
- 8 兵庫県教育委員会1990『山垣遺跡—「里長」関連遺構の調査—発掘調査報告書』
- 9 山形県教育委員会1984『俵田遺跡第2次発掘調査報告書』
- 10 (財)京都府埋蔵文化財調査センター1987『京都府遺跡調査報告書第8冊 石本遺跡』
- 11 兵庫県教育委員会1989『小犬丸遺跡II』
- 12 瀬戸市教育委員会1990『上品野遺跡』
- 13 (財)長野県埋蔵文化財センター1997『石川条里遺跡 第3分冊』
- 14 入善町教育委員会1975『入善町じょうべのま遺跡発掘調査概要(3)』
- 15 (財)滋賀県文化財保護協会1985『尾上遺跡発掘調査報告書』
- 16 福島県教育委員会1983『東北新幹線関連遺跡発掘調査報告書VI 御山千軒遺跡』

第4節 考古資料としての削屑

はじめに

屋代遺跡群⑥区で大量に出土した木質遺物の中の屑（削屑、切屑）は、木材の加工および木製品の製作に関わる作業が付近で行われていたことを物語る。屋代遺跡群の性格を知る上でのひとつの重要な資料となるだろう。さらに、古代の木材加工技術を探る上でも役立つ可能性をもつ。今までは、製品および材に残る加工痕の観察、工具の分類などに基づき研究が進められてきたが、ここに、加工過程で発生した削屑や切屑が資料として加わることによって、さらに研究の幅が広がるものと思われる。

しかし今までのところ、屑を考古資料として活用するための分類や分析の方法は確立されていない。よって現段階では比較の対象となるものがなく、大量に存在する屑をどのように資料化するかについては全く手探りの状態である。そこで本節では、今後も出土する可能性をもつ屑の中で比較的傾向をつかみやすいと思われる削屑を取り上げ、簡単な資料化を試みたい。

1 資料化の方法

対象とするのは削屑1類・2類とする。資料数は1類734点、2類604点の計1,338点である。分析の方法は多様であるが、ここでは長さとの幅の相関関係と厚さの割合をグラフ化した。長さとの幅の相関グラフは、1類、2類についてそれぞれ材精度別、出土した各水田対応層別に作成した（図176~179）。厚さの割合は、各分類の精度別にして層位で対比できるグラフを作成した（図180）。なお、材精度Aは資料数が少なく、前述のように平滑な面をもつBとの比較が難しいため、精度の高い材として一括した。また、2類は2-A類と2-B類に分けられるが、図63で示したように長幅関係においてはほぼ同じ傾向を示すため、同様に複数の加撃による削屑として本節では一括した。

木材加工を考える上で材の樹種は欠かせない資料であるが、全点の樹種同定が行えていないため、樹種別の資料は提示できなかった。作成資料の有効性、資料から得られる傾向の見方など、今後の検討の対象にしていきたい。

2 資料の検討

ここでは、作成したグラフから得られる傾向の中で特徴的な部分について触れることとする。

(1) 層位での比較

長幅相関グラフでみた場合、第4水田対応層と第2水田対応層に目立った特徴がみられる。

第4水田対応層の特徴 長さ2cm以下、幅2cm以下の削屑が集中する（図177）。特に1類-材精度A・BとCに顕著で、2類-材精度A・BとCにもみられる。これは他の層位の同じ分類にはない際だった特徴といえる。また、この範囲の中には長さ0.5cm・幅1cm、長さ1cm・幅2cmのように、幅と長さの比率が逆転するものが認められる。

これらの削屑の厚さは、図180の厚さ割合の中の0.3cm以下の集中に該当し、非常に細かく薄く削る作業によって生じた削屑であることがわかる。全て刃物を斜めに打ち込んだ痕跡が確認でき、形は正方形あるいは長方形が主である。このことから、木簡の削屑のように刀子で板の表面を削る作業によって生じた

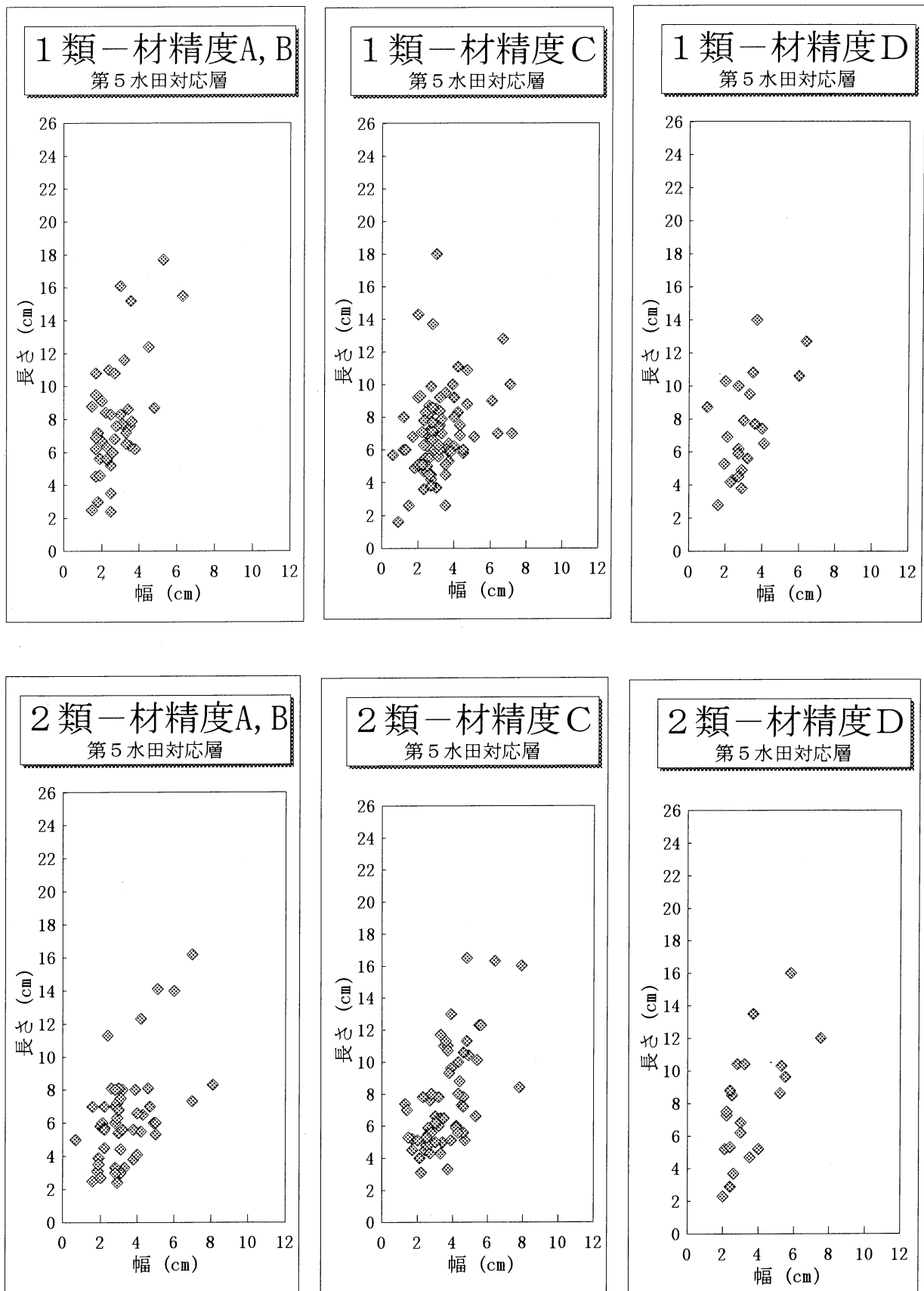


図176 第5水田対応層出土削屑 長さ、幅の相関

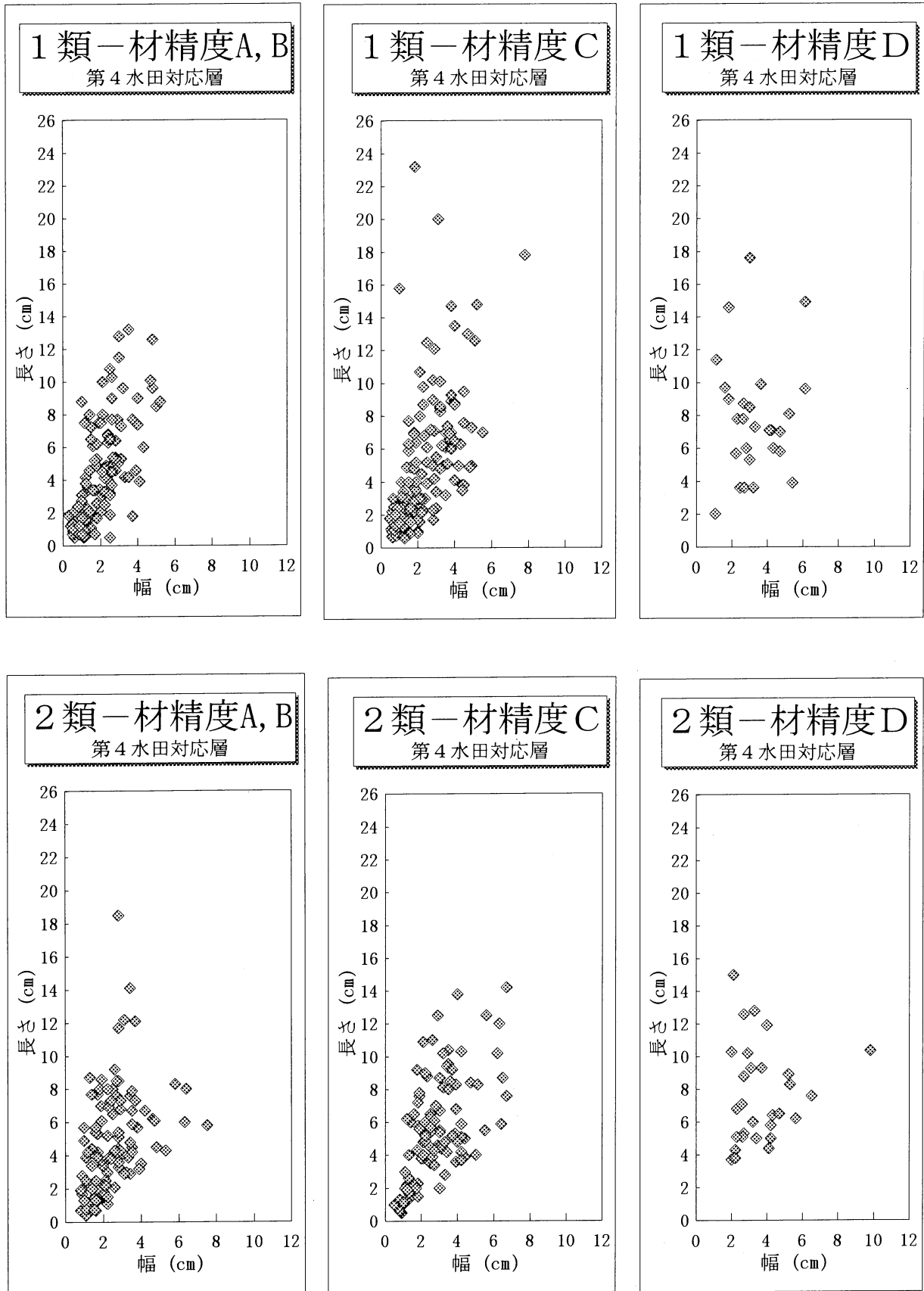


図177 第4水田対応層出土削屑 長さ、幅の相関

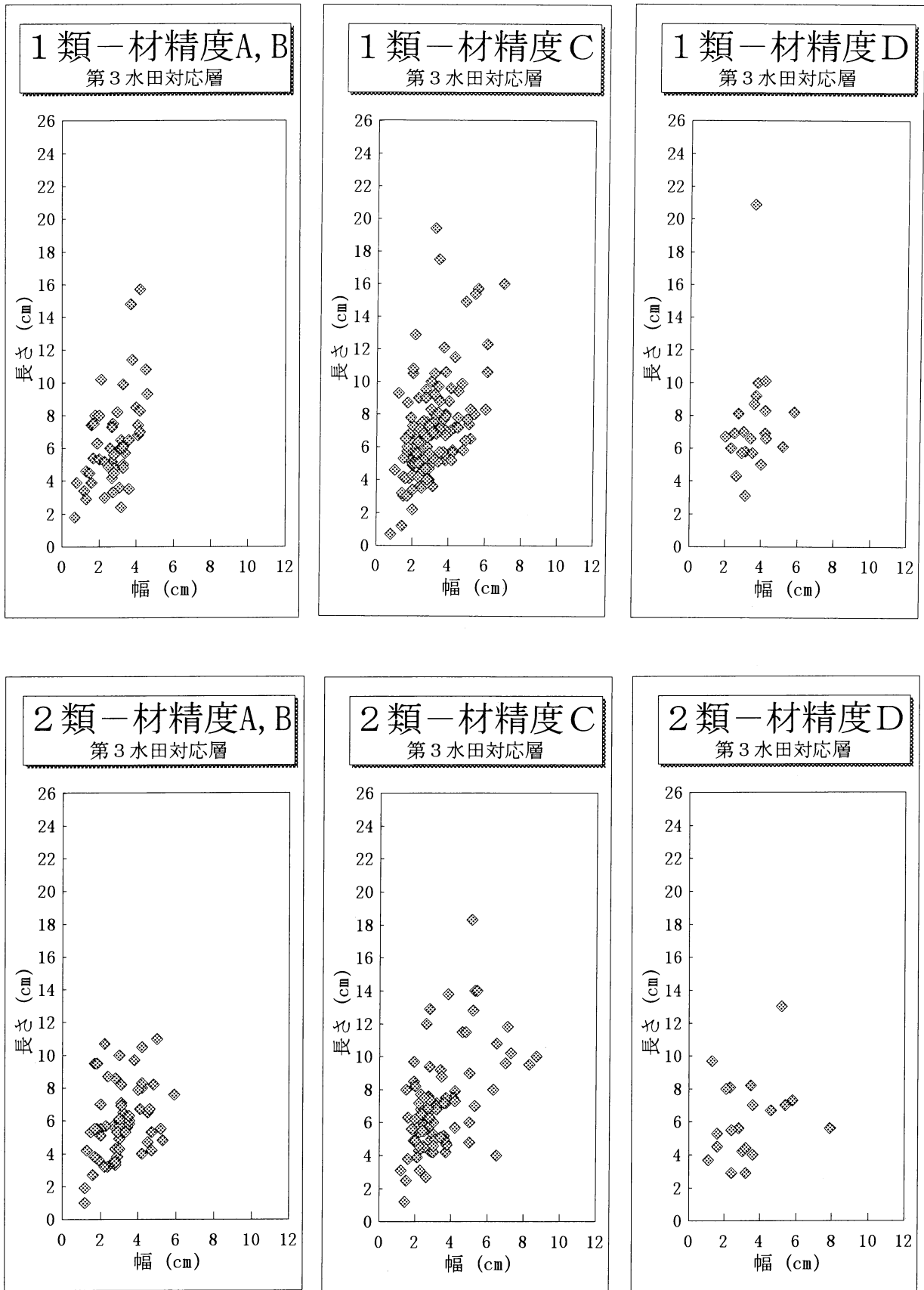


図178 第3水田対応層出土削屑 長さ、幅の相関

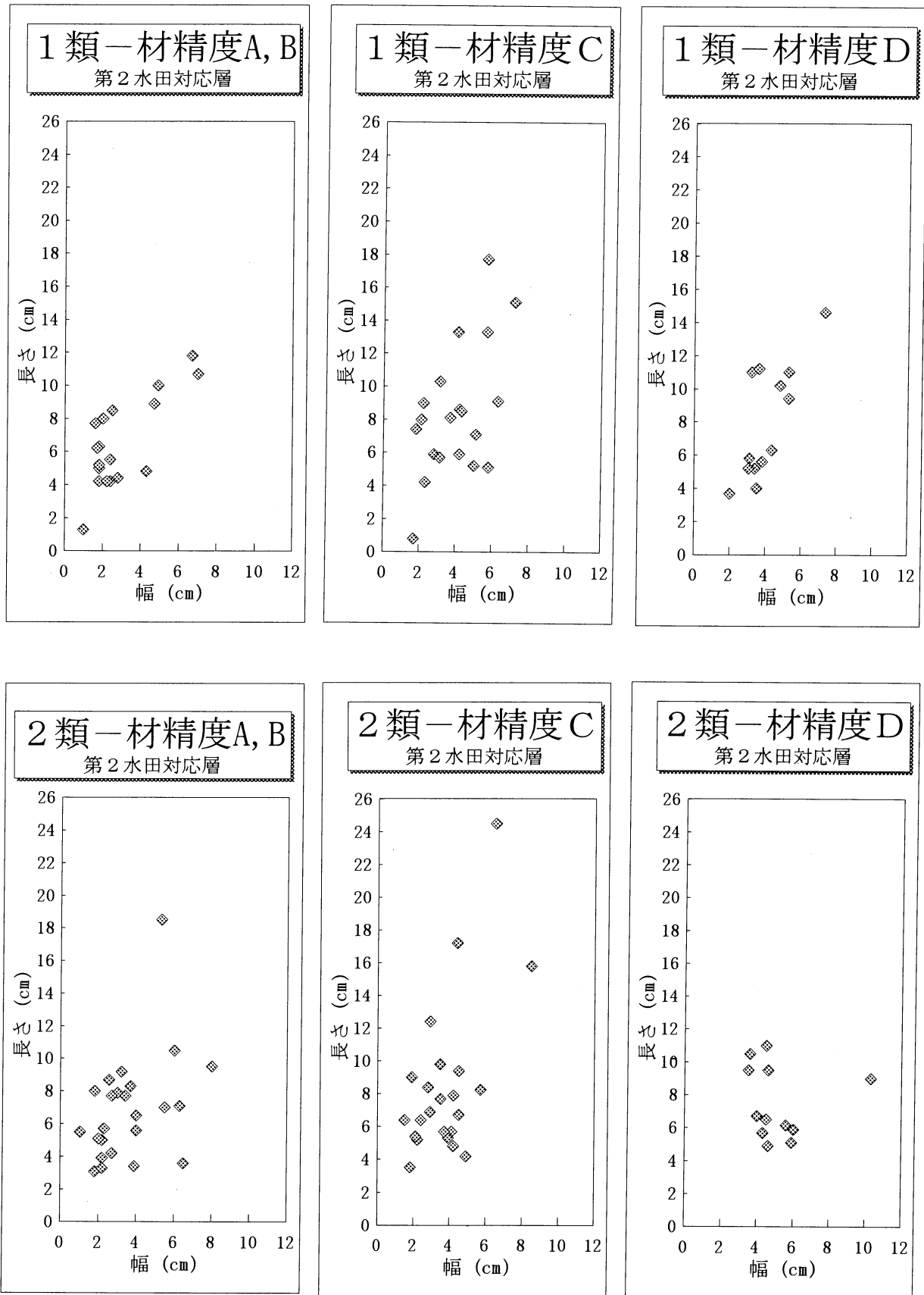


図179 第2水田対応層出土削屑 長さ、幅の相関

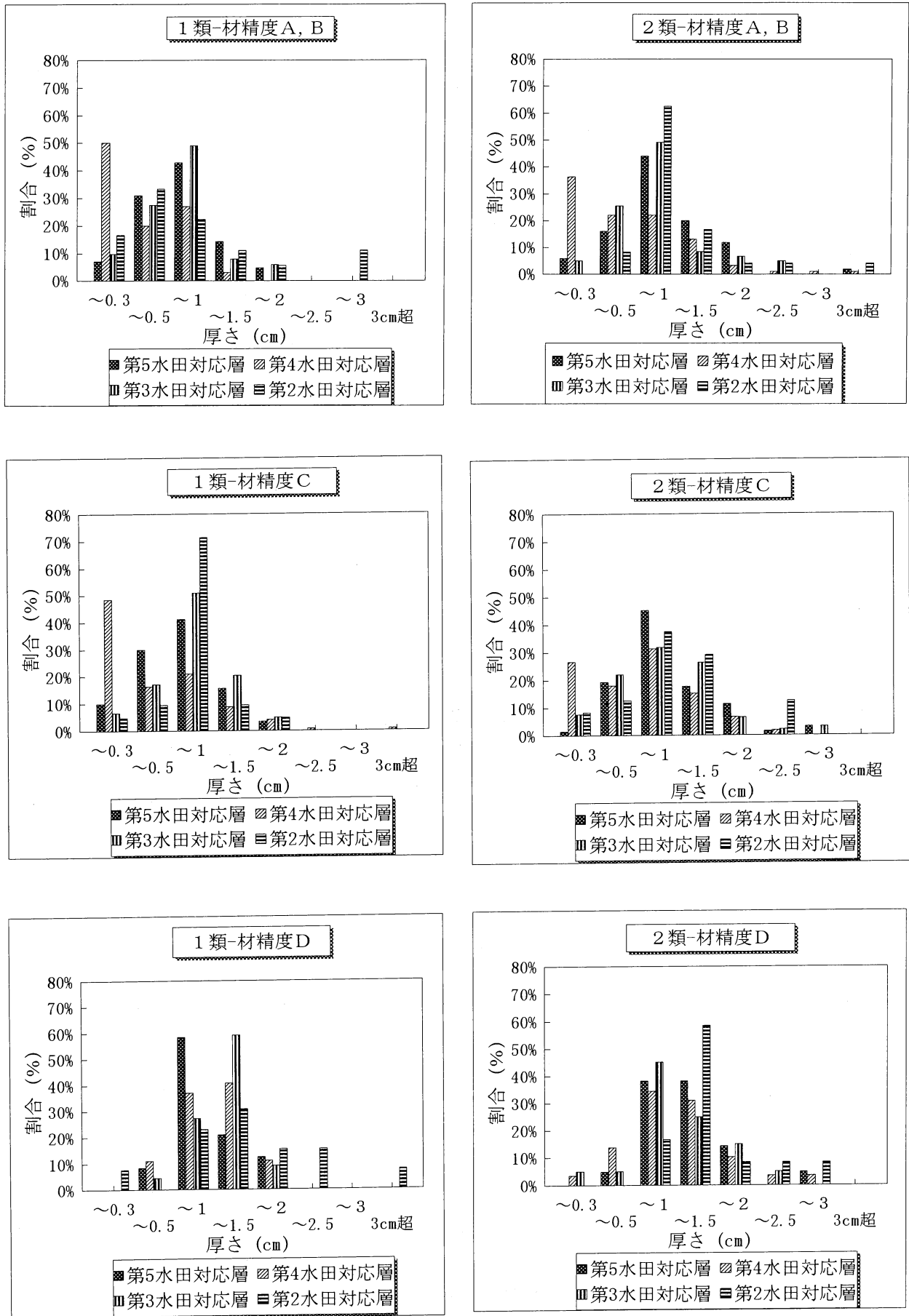


図180 削屑 分類別、材精度別厚さの割合

ものとは考えられない。定かではないが例えば、大きな材（建築材等）の丁寧な面調整や、細かな柄孔あけ、柄の加工といった作業が想定される。

この細かな削屑は湧水溝 SD7035で出土したものである。溝の堆積層には削屑が多量に含まれる廃棄物層があり、おそらく短期間にまとめて廃棄されたものと思われる。樹種の同定は行えていないが、木目の状況からみて針葉樹のようだ。時期はおよそ7世紀末～8世紀初頭にあたり、この段階で屋代遺跡群周辺で生じた木材加工に対する需要の一端を示す資料といえる。

第2 水田対応層の特徴 第4水田対応層とは対称的に、細かな削屑が皆無に近い（図179）。第5・第3水田対応層と比較しても、各分類ともに長さの下限が高い傾向にある。また1類－材精度A・Bにはそれまでみられなかった幅6cmを超えるものが確認できる。

第3水田対応層までは、削屑の多くが湧水溝の埋没過程で廃棄されたものである。しかし第2水田対応層では湧水溝の掘削が行われず、出土は自然流路にほぼ限られる。よって、まとめて多量に廃棄された状況はなく、資料数も少ない。この段階では削屑に限らず、木製品の出土量も減少する。特に第3水田対応層まで目立って出土した祭祀具（木形）、木簡の減少が目立つ。廃棄場所となる窪地が存在せず、他へ廃棄された可能性もあるが、それまで多かった、長さ・幅ともに4cm以内の細かな削屑がほとんどみられない点から、木材加工の需要に変化が起きた可能性も指摘できる。

(2) 材精度および分類にみられる傾向

材精度D 図180で厚さの割合をみると、1類、2類ともに材精度A・BおよびCとDの間には大きな相違が認められる。材精度A・BとCは第4水田対応層の細かい削屑を除いて、0.51～1cmをピークとした山形を呈する。これに対し材精度Dは0.51～1cmと1.01～1.5cmの2カ所にピークがみられる。また0.5cm以下のものが少ない傾向がある。1.5cmを超えるものが多いが、2類については前述の通り2-B類の特徴といえるだろう。しかし、1類でもこの部分の割合が比較的高いのが特徴的である。幅はほぼ2～6cmで他の精度のものと大きな相違はない。しかし長さの下限が3～4cmと比較的高く、逆に上限が低い傾向がみられる。このように0.5～1.5cmと比較的厚く削る作業が、精度の低い材に対してなされていたことがわかる。

材精度C 1類、2類ともに幅の範囲が広い。幅4cmを境としてみると、それ以上の削屑は長さの下限が4cm以上となる傾向がある。この点は材精度Dも同様である。表98によると、幅4cm以上の削屑の厚さの平均値は1類、2類ともにそれ未満のものを大きく上回り、材精度Dの厚さのピークと一致する。逆に幅4cm未満の削屑の厚さは1類－材精度A・Bに近い数値を示す。このように精度Cの材に対しては大

表98 削屑 厚さの平均比較

	1類－材精度A, B		1類－材精度C		2類－材精度A, B			2類－材精度C		
	全体	全体	幅4cm未満	幅4cm以上	全体	幅4cm未満	幅4cm以上	全体	幅4cm未満	幅4cm以上
第5水田対応層	0.75	0.69	0.6	1.04	0.97	0.86	1.24	0.98	0.75	1.42
第4水田対応層	0.41	0.53	0.47	1.07	0.68	0.61	1.34	0.73	0.61	1.26
第3水田対応層	0.69	0.81	0.71	1.16	0.82	0.67	1.19	0.96	0.74	1.67

単位cm

きく分けて、幅広く厚い削りと、幅狭く薄い削りの2種が顕著に認められる。

1類・2類の相違点 材精度A・Bの削屑は1類と2類で相違点がみられる。まず、幅4cm以上のものの数が1類に少なく、2類に多い点である。2類の幅4cm以上の厚さは1.2~1.3cmと厚めであり(表98)、長さの下限も材精度CおよびDと同じ傾向がみられる。このように、精度の高い材に対しても幅狭く薄い削りと幅広く厚い削りの2種が認められる。しかし、後者は複数回の加撃による削り(2類)にはほぼ限定される。ここに1類の削屑が生じる作業と2類の削屑が生じる作業の違いが現れていそうである。

表98で厚さの平均を厳密にみると、2類はA・BとCともに1類-材精度Cを上回る。複数回の加撃による削りは、1度の加撃による削りと比較し、厚く削りとする作業であることがわかる。その中でも特に2-B類は特に厚く取られた削屑といえる。しかし、長さ・幅・厚さともに同じ範囲に入る1類と2類が存在する。これらは全く異なる作業の結果生じたものとは考えにくい。材精度のどの段階においても認められることから、1類的な削りと2類的な削りは併用される場面が多かったものと思われる。

(3) 工具について

以上の削屑はどのような工具の使用によって生じたものだろうか。削屑あるいは製品に残る加工痕から使用された工具を類推する場合、重要な資料となるのはその幅である。幅は使用された工具の刃幅をある程度反映するものと思われる。ただ、使用法によって刃幅より狭い削屑の発生は当然考えられる。また、刃先の形状が直線的であるか、曲線的であるかによっても変わってくるだろう。よって3cm幅の削屑=3cmの刃幅の工具と捉えることはできない。しかし刃幅を大きく越える削屑の存在、また大きな刃幅の工具によって細かく削る作業は考えにくい。そこである程度幅の範囲に広がりをもたせて類推してみたい。

刃幅による工具の分類 工具を類推する上で参考になるのは、古瀬清秀氏の分類(古瀬1991)である。古瀬氏は古墳出土の工具についてその法量と形状による分類を行っている。その中で特に有袋鉄斧と鑿は古代の遺跡でも出土することから考えて、屋代遺跡群でも使用された可能性が高い。

有袋鉄斧 A 類 (有肩鉄斧)

A1類……刃部幅4~8cm・全長6~13cm

A2類……刃部幅8~11cm・全長14~16cm

A3類……刃部幅7~11cm・全長8~12cm

有袋鉄斧 B 類 (無肩鉄斧)

B1類……刃部幅2~4cm・全長6~7cm

B2類……刃部幅3~6cm・全長7~14cm

B3類……刃部幅5~8cm・全長15~20cm

これを参考に長野県内遺跡で出土した鉄斧について示したのが表99である^(註)。刃幅は3~6cmに入るものが多く、B2類に該当する鉄斧が主である。その中で6~11(刃幅3.6cm)、24~27(刃幅4.5cm)、35~38(刃幅5.7cm)のように同じ刃幅のものが複数存在する。また、13~20の刃幅は3.9~4.05cmと非常に近い。屋代遺跡群では1点鉄斧が出土しているが、欠損のため刃幅を捉えることができない。ただ、切屑1095と1106にみられる左右が残る刃端痕(4.2cm、4.1cm)は、その刃幅の工具が使用されたことを示す。鉄斧の刃幅と比較するとやはり、A1類、B2類に該当しそうである。

削屑との比較 屋代遺跡群の削屑には幅8cmを超えるものがわずかに認められる。これらはおそらくA2類、A3類、B3類のような大きめの鉄斧を使用したものと思われる。県内でも刃幅が8cmを超えるものが出土している(表99-42・43)。しかし他のほとんどは幅6cm以下であり、特に4cm以下に集中する。刃幅で見るとB2類、B1類の範囲に入りそうだ。しかし、第4水田対応層にみられる幅2cm以下の削屑に対応する刃幅のものは分類にはみられない。やはりこのような細かな削屑に対しては鑿が想定できそうである。

古瀬氏の鑿の分類は次の通りである。

鑿 I 類 (有肩式)

I A 類 (作りが厚手で頑丈なもの。有袋式、莖式)……刃部幅1.3~3cm・全長10~20cm

I B 類 (薄手の作りのもの。ほとんど莖式)……刃部幅2.7cm・全長11cm (岡山金蔵山古墳)

鑿II類 (無肩式)

II A 類 (作りが厚手で頑丈なもの。有袋式、莖式)……刃部幅1~2cm・全長10~25cm

II B 類 (薄手の作りのもの。)……刃部幅0.3~1.5cm・全長10~20cm

この分類と対比すると、第4水田対応層の細かな削屑は特にII A 類、II B 類の刃幅に該当しそうだ。しかし刃幅でみると、鑿I類と斧B1類は重なる部分がある。削屑の幅2~3cmのものは斧と鑿両方の工具の想定が可能である。ただこれは幅からだけの類推であり、実際どのように工具を使用したかが重要になる。

長さからみた工具の使用法 削屑の長さをみると、同じ幅でも長さに違いがある。例えば幅2cm以下の削屑には長さ1cm以下のものがあるのに対し、8cmを超えるものも存在する。これは刃幅が同じであってもその工具の使用法が異なることを示す。鑿でいえば、短いものが叩き鑿、長いものが突き鑿といった違いが想定できる。後者の場合3類のような薄く長い削屑も発生しそうである。しかし現段階では叩き鑿と突き鑿の区別をする長さの尺度がないため、今後の課題となる。

それでは前記(2)で触れたように、幅4cmを超える削屑の長さがほとんど4cm以上である点は工具とどのように関わるのだろうか。長さの下限がほぼ4cmということは、加撃することによって最低4cmは削りとれるような工具を使用したものと考えられる。幅の上限がほぼ8cmであることから、斧の刃幅と比較するとA1類、B2類、B3類が該当する。斧の使用法を類推すると、1度の加撃によって削りとられる1類の削屑の場合は、横斧での削り

を考えやすいが、加撃が複数回となる2類の場合は難しい。特に2-B類は加撃の方向が180度変わってしまうものもあるため、横斧による削りでは困難である。もし斧とすれば縦斧状に使用するか、あるいは直柄を装着して、鑿状に使用した場合もあったと考えられる。

3 今後の課題

(1) 大量の削屑の存在に関わって

削屑が湧水溝などに一括廃棄された状況は、多量の削屑を排出する工房の存在を想起させる。このことは、木簡から指摘された布織の作業場が存在した可能性(長野県埋蔵文化財センター1996)、ガラス玉鋳型の出土から類推される工房の存在の可能性と合わせて考える必要があるだろう。また、工房の運営主体がどのようなものであったかも大きな課題である。遺構が確認されていない現在では類推の範囲を出ない。今後の発掘調査に期待したいが、それとともに類似した性格をもつ他の遺跡での同様な遺物について調査していく必要があると考える。

表99 長野県内出土鉄斧一覧

NO	遺跡	市町村	刃部幅 (cm)	全長 (cm)	分類	文献
1	紫岩古墳	中野市	2.4	7.8	B1, B2	1
2	紫岩古墳	中野市	3	7.8	B2	1
3	南栗遺跡	松本市	3.2	7.2	B2	2
4	金鑑山古墳	中野市	3.3	7.5	B2	1
5	南栗遺跡	松本市	3.4	6.4	B1	2
6	栗毛坂遺跡群	佐久市	3.6	9	B2	3
7	御猿堂古墳	飯田市	3.6	9.9	B2	1
8	吉田向井遺跡	塩尻市	3.6	8.1	B2	1
9	屋地遺跡	長野市	3.6	7.2	B2	1
10	森6号古墳	更埴市	3.6	10.8	A	1
11	池尻遺跡	更埴市	3.6	8.4	B2	1
12	油田遺跡	東部町	3.75	10.8	B2	1
13	中道遺跡	箕輪町	3.9	8.1	B2	1
14	妙前大塚古墳	飯田市	3.9	7.2	A1	1
15	栗林遺跡	中野市	4	10.5	B2	4
16	篠ノ井遺跡群	長野市	4	9	B2	5
17	国分寺周辺遺跡群	上田市	4	8.7	A1	6
18	原垣外遺跡	駒ヶ根市	4.05	8.4	B2	1
19	森3号古墳	更埴市	4.05	9.6	B2	1
20	伊那福島遺跡	伊那市	4.05	8.4	B2	1
21	北栗遺跡	松本市	4.2		B2	7
22	栗毛坂遺跡群	佐久市	4.2	10.5	B2	1
23	フネ古墳	諏訪市	4.2	11.7	A1?	1
24	中原古墳	飯田市	4.5	9.3	B2	2
25	石川糸里遺跡	長野市	4.5	10.9	A1	8
26	三の宮遺跡	松本市	4.5	9.2	B2	9
27	鳥羽山洞窟跡	丸子町	4.5	6	B2	2
28	杉ノ木平遺跡	阿智村	4.65	10.5	B2	2
29	中上遺跡	宮田村	4.8	8.4	B2	2
30	宮の平1号墳	飯田市	4.8	9.3	B2	2
31	栗毛坂遺跡群	佐久市	5	8.1	B2	3
32	山の神古墳	中野市	5.1	15.9	B3	1
33	弘法山古墳	松本市	5.1	12.3	B2	1
34	田村原遺跡	豊丘村	5.4	13.8	B2	1
35	神坂峠	阿智村	5.7	欠	B2	1
36	伊那福島遺跡	伊那市	5.7	13.5	B2	1
37	今洞5号墳	飯田市	5.7	16.2	B3	1
38	山の神古墳	中野市	5.7	8.7	A1	1
39	如来堂古墳	伊那市	6	8.7	A1	1
40	吉田川西遺跡	塩尻市	6.1	15.5	B3	10
41	中原古墳	飯田市	6.6	18	B3	1
42	稲葉遺跡	長野市	8.7	4.2	B2	1
43	吉田向井遺跡	塩尻市	8.7	11.7	A3	1

(2) 削屑法両の変化について

特に第4水田対応層でのみ確認された細かな削屑はどのような製品の加工によるものか。この段階は木簡の出土量の増加からも類推されるように、屋代遺跡群の性格上ひとつの画期と言える。祭祀具としての木形と木簡の増加は第4水田対応層の特徴のひとつではあるが、これらが鑿（おそらく叩き鑿）の使用によって生じたと考えられる細かな削屑と関連するかは疑問である。それは、同様に多くの祭祀具と木簡が出土する第3水田対応層でこの細かな削屑がほとんど出土していないことから窺える。もし建築に関わるものとする、官衙施設の存在と関連させて考えていく必要があるだろう。

第2水田対応層における削屑の減少と法量の変化は、この段階での木材加工の需要に変化があった可能性を含む。それは工房自体の変化だけではなく、それをとりまく屋代遺跡群の性格に大きく関わる現象かもしれない。第3水田対応層（8世紀前半）の直上の層位であるが、時期はおよそ9世紀前半に属し、100年ほどの時間差が存在する。この屋代遺跡群にはどのような変化が起きたのか、遺跡全体の遺構、遺物などから総合的に考えていく必要があるだろう。

(3) 考古資料としての削屑について

遺跡で出土する削屑は、製品としての形はもたないが、その分析の仕方によっては当時の木材加工の状況、さらには遺跡の性格を知る手がかりとなる遺物と思われる。ただ今回提示した屋代遺跡群の削屑の分類・計測・材精度の区分・資料化の方法が適切なものかどうかには疑問がある。さらにこれらを吟味することによって、得られるデータに変化が生じる可能性があるだろう。また、木材利用を考える上でかかせない樹種の同定が全点に及ばず、これを分析に加えることができなかった点は、資料としての効果を半減させるものと思われる。現段階では他に比較し手がかりとする資料がなく十分な分析ができなかったため、今後は製品に残る加工痕の資料化も含め、分析の方法を改善していくことが大きな課題となる。

註 表99で引用した鉄斧の引用文献は以下の通りである。

- 1 長野県史刊行会1988『長野県史 考古資料編』全一卷(四)遺構・遺物
- 2 長野県埋蔵文化財センター1990『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書7—松本市内その4—南栗遺跡』
- 3 長野県埋蔵文化財センター1993「栗毛坂遺跡群」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2—佐久市内その2—』
- 4 長野県埋蔵文化財センター1994「栗林遺跡」『県道中野豊野線バイパス志賀中野有料道路埋蔵文化財発掘調査報告書—中野市内—』
- 5 長野県埋蔵文化財センター1997『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書16—長野市内その4—篠ノ井遺跡群』
- 6 長野県埋蔵文化財センター1998「国分寺周辺遺跡群」『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書2—上田市内、坂城町内—』
- 7 長野県埋蔵文化財センター1990『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書8—松本市内その5—北栗遺跡』
- 8 長野県埋蔵文化財センター1997『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書15—長野市内その3—石川条里遺跡』
- 9 長野県埋蔵文化財センター1990『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書9—松本市内その6—三の宮遺跡』
- 10 長野県埋蔵文化財センター1989『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3—塩尻市内その2—吉田川西遺跡—』

引用・参考文献

長野県埋蔵文化財センター1996『長野県屋代遺跡群出土木簡』

第5節 集落の変遷

はじめに

更埴条里遺跡から屋代遺跡群では、自然堤防Ⅰ群上を中心に5カ所以上の集落域が確認されている。個々の集落は独自の變遷過程を示すとともに、全集落が連動したり、共通の状況を示す場合が見られる。第2章では、個別の集落について概観し、検出された遺構の説明と若干の分析を加えた。ここでは、それらの作業を総合し、集落の動向について見てゆくこととする。ただし、集落を理解する上で重要となる環境、遺物、集落外遺構などの成果を取り込めなかったことをおことわりしておく。

1 各集落内遺構の時間的位置づけ

ここでは、各集落の動向を復元するにあたって、まず、個別遺構の新旧関係と並行関係の把握を第一に進める。次に、そこで確証を得られた例に、同時存在の可能性が考えられる例を加え、細別段階における集落の構成や配置を検討する。また、同時に前後の段階との移り変わりを見てゆくことにしたい。

(1) 新旧・並行関係把握の素材

竪穴建物跡を中心として この地域の古代集落において、居住の中心はカマドの設置されたいわゆる竪穴住居である^(註1)。各集落の建物の主体をなしており、集落構成を知る上での基準とした。また、同一敷地内での建て替えが頻繁に行われており、切り合い関係による新旧把握にも利点がある。さらに、掘り込んで構築された建物であるため残存率が高く、出土遺物量も豊富で時期判定がおこないやすい。

そこで、まず住居を含めた竪穴建物跡を中心に新旧・並行関係の検討をおこなう。次に、それを基準として、その他の建物跡や柵列、溝跡について検討を加える。井戸跡や土坑については、多量の土器が出土しない限り時期比定が難しく、基本的には検討から除外した。

(2) 新旧関係の把握方法と前提条件

土器編年 1軒1軒の新旧関係をおさえる前に、中時期区分(表1)である0期～8期前半に遺構を振り分けた。この時期区分は土器編年に依拠し、切り合い関係を加味してある。

土器による時期区分は竪穴建物跡の埋土一括を基本としている。詳細な出土状況の検討は一部の遺構にとどまっており、遺構間接合による新旧・並行関係の検討も実施できなかった。そのため、中時期区分以下の細別段階設定には以下の方法を採用した。

重複関係 竪穴建物跡の重複は土器による時期区分を上回る回数が認められた。そのため、新旧関係の軸に重複関係を採用した。いくつかの建物群の重複関係軸を繋ぎあわせることによって、特に6～8期前半にかけての細別段階設定が可能となっている。

特異な堆積層 8期前半の遺構では、この時期に起こった洪水による砂層(Ⅲ-2層)の堆積によって、ある程度の新旧が推定できる。土器様相が同じ8期前半であっても、洪水時に埋まりきっていた竪穴建物跡とカマド内部にまで砂が流れ込んでいた竪穴建物跡では、後者が新しいのは明白である。これは、第2章第4節2-Bで見てきたように、大半の竪穴建物跡においては、壁上部にまで及ぶ「埋め戻し」が認められないことを前提としている。

柱の数や配置など この他、細別の基準とはできないが、大きな時期的な流れを押しえられる観点として

は以下のものがあげられる（第2章第4節2参照）。柱数とその配置では、当初、4本主柱が正・長方形に配置された例が多く、6期前後から主柱穴が消滅する傾向が明瞭となる。また、8期前半で礎石に変化する例も認められる。カマドでは、袖の芯材として礫を用いる量が次第に増加し、新しい段階ほどしっかりした石組みをおこなう傾向がうかがえる。ただし、完存している例が少ない点に難がある。カマドの位置については、新しい段階ほどコーナーへ寄る傾向が高くなる。しかし、洪水後の例に比べると変化の幅は小幅にとどまっている。煙道の長さも0～6期と比較して、それ以降短くなる傾向に向かう。竪穴建物の平面形は、正・長方形であったものが新しい段階に崩れる傾向が見られる。

これらの観点は、明確に段階を捉える材料とはできないが、大きな傾向として時期区分の目安とすることは可能である。

(3) 並行関係の把握方法と前提条件

主軸方位 1～2期にかけて、掘立柱建物群の集中する屋代遺跡群④～⑤区の一部では、中心となる建物の主軸に揃った建物が周囲に認められている。あるいは条里型地割が施工される6期には、条里型地割に合わせる形で、多くの建物が建てられている。これらの時期や地区では、建物の主軸方位によって同時性を予想することができる。また、その他の時期においても、土器によって同一時期とされた建物間では主軸方位が類似する傾向にある。こうした傾向から、同一時期の細別段階においても方位をある程度揃えていた可能性が高いと判断し、並行関係の目安とした。

ただし、全てがこの条件を満たしているわけではなく、条里型地割完成以前の伝統的集落である④～⑥区集落、あるいは、条里型地割完成以後でも、各集落内には主軸方位を異にする建物跡が存在する。しかし、細別段階における同時性証明には確実な方法が乏しく、主軸方位の一致が最も有力な根拠であること

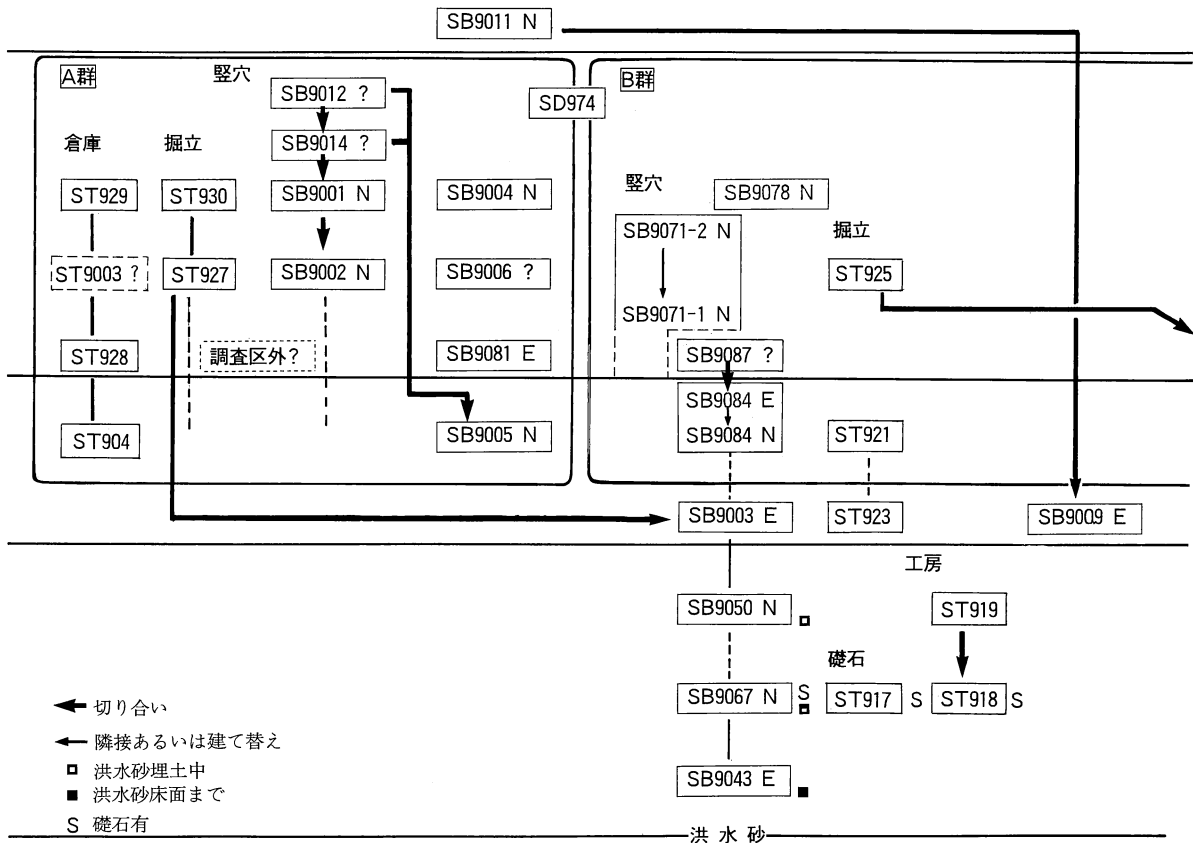


図181 更埴条里遺跡K地区集落 遺構新旧関係図

には違いない。

カマド設置壁の位置 同一時期で、主軸が揃う竪穴住居跡のカマド設置壁を見ていくと、類似した傾向が認められる。確証は得られないが、この点も並行関係を見る上での目安の一つになる。

集落内の配置 隣接した時期の建物が、ほぼ同一地点で建て替えられる例が多く認められている。また、倉庫や居住用と見られる掘立柱建物跡に関しても、集落内での配置において一定の傾向がうかがえる。この点も、基準としてのレベルは低いですが、目安の一つとなり得る。

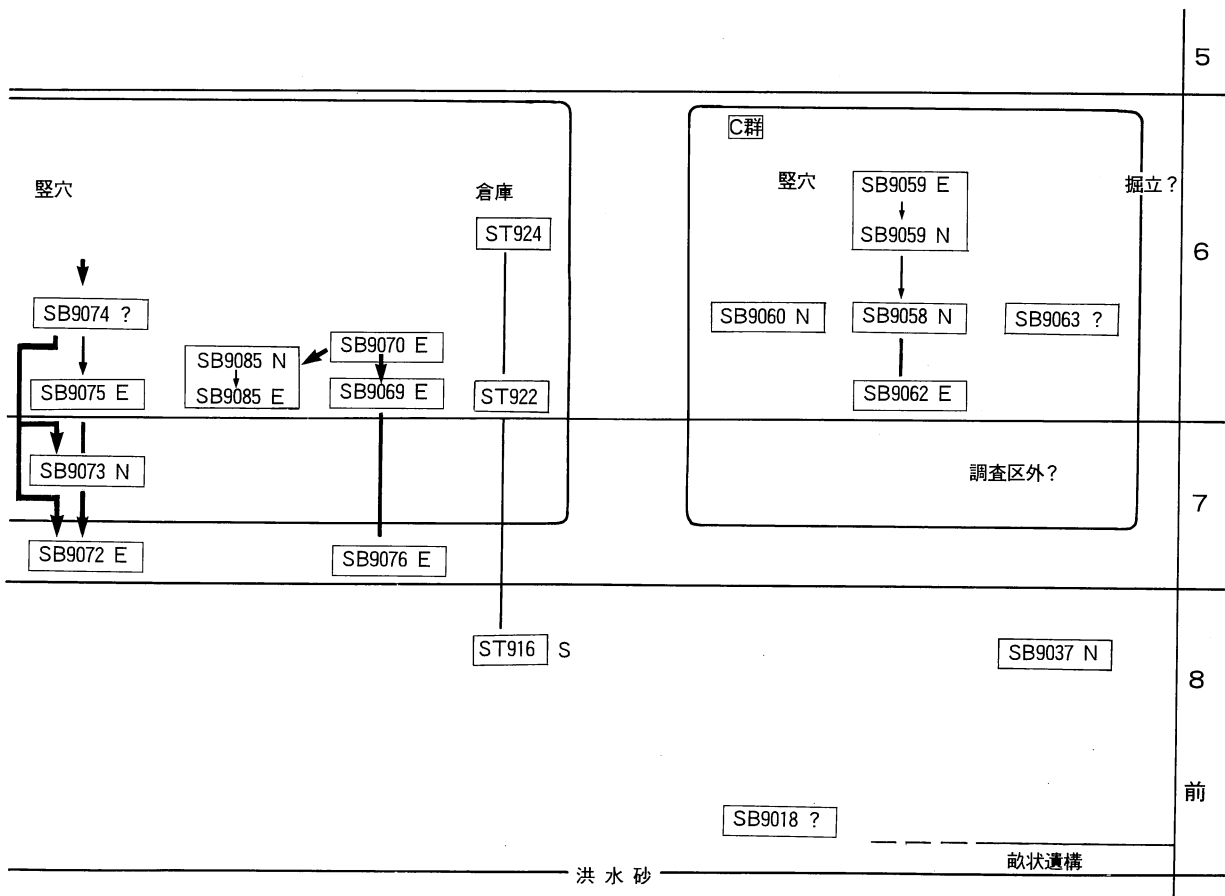
仮説としての同時性 同時性の判別には確証を得られる基準がなく、また、前提条件も多い。建て替えの時期が集落内で一定しているとは限らない点、主軸方位やカマド設置壁が集落内の全竪穴住居で一定しているとは言い切れない点、などであり、並行関係の模式図はあくまである程度の幅を持たせて見ていただきたい。また、作業の時間的な問題から、土器から見た細別段階と遺構の段階付けの検討が十分におこなえなかった。そのため、ここに示した並行関係は、遺構だけから推定したものと理解していただきたい。

2 更埴条里遺跡 K 地区集落の変遷

(1) 遺構の新旧関係と並行関係の検証 (図181)

K 地区の集落では、5～8期前半の遺構の存在が土器によって確認されている。このうち、6期に比較的多くの遺構が集中しており調査区西側などで多くの切り合い関係が認められる。

6期の新旧関係は、1つにはSB9001～9014が密集する地区を基準とした。古手となるSB9012→SB9014では残存部が少ないため、並行する遺構を確定できていない。SB9001とSB9002の新旧関係は、比較的長い煙道が見つかった6期のこの集落にあって、煙道の短いSB9001の場合、SB9002に切られたと推定した。並行する遺構は方位とカマドの位置によって推定した。6期では東壁にカマドを持つ竪穴



住居が数軒見つかっている。これらは、北カマド例とは異なった主軸方位を示しており、段階が異なる可能性が高い。調査区中央南側に位置する SB9074→SB9075では、前者のカマド設置壁が不明であるが、後者は東カマドを有している。また、C群のSB9062（東カマド）は、これもカマド設置壁不明であるSB9061を切っている。このことから、東カマドの住居より古い6期の住居が存在することだけは確かである。可能性として、東カマドの住居を6期の新しい段階に置いた。

7期では、土器による前・後半の区分を基準に、SB9073（北カマド）→SB9072（東カマド）の関係を当てはめ、北カマド例を7期前半、東カマド例を7期後半と考えた。

8期前半は、洪水砂層の厚さによって新旧を推定し、主軸方位の異なるものは段階が異なると考えた。洪水を受けた段階でほとんど埋没していなかったSB9043を最も新しい段階ととらえた。SB9050→SB9067は、隣接する建物が掘立（ST919）から礎石（ST918）に変わり、主軸が東へずれるのに対応すると推定し、ST919に主軸が類似するSB9050を古く、礎石を有し、主軸が東へずれるSB9067を新しく考えた。

これらを基準におこなった更埴条里遺跡K地区集落の新旧・並行関係推定作業をまとめたものが、図181である。

(2) 更埴条里遺跡K地区集落の変遷 (図182)

5期：SB9011段階 後の条里型地割からは大きく主軸が西に傾いた竪穴住居SB9011をもって、K地区内に集落が成立する。ただし、検出位置が調査区西際であるため、より古い集落や、あるいは5期集落の主体が西側調査区外にあった可能性もある。

SB9011の主軸は、北を流れるSD906溝群（溝群全体の土器様相は6～7期であるが、重複が激しく、下層の溝は古い可能性がある）に類似しており、近接した水路を基準に建物が造られたものと考えられる。このことは、この時期、まだ更埴条里遺跡から屋代遺跡群を含めた低地に対する条里型地割が成立していなかったか、あるいは、各々の集落内の建物の方位まで規制するには至っていなかったことを示している。

6期：SB9001段階・SB9002段階 集落が調査区のほぼ全域に拡大する時期である。

後の条里南北大畦畔の延長線上に位置する場所にSD974が存在し、これ（条里型地割）に主軸方位を揃えた建物がたてられる。SD974は5～6期の遺物を含んでいるが、近接する5期のSB9011とは主軸が大きくズレる。それに対し、6期の建物群と主軸が一致する点から、6期に入って設置された可能性が高い。

この段階では、SD974の西側に、掘立柱建物^(註2)、倉庫（掘立）、竪穴住居が整然と配置されたA建物群（A群）。調査区中央南寄りで竪穴住居1軒？の存在が確実なB建物群（B群）。調査区東側北寄りで竪穴住居2軒以上が集中するC建物群（C群）に分離が可能である。SB9002段階には、B群にも掘立柱建物と倉庫（掘立）が隣接して設置される。竪穴住居群の北、あるいは北東側に掘立柱建物や倉庫が存在するA・B群の建物配置から類推すると、C群の掘立柱建物などは東側調査区外に存在したと思われる。

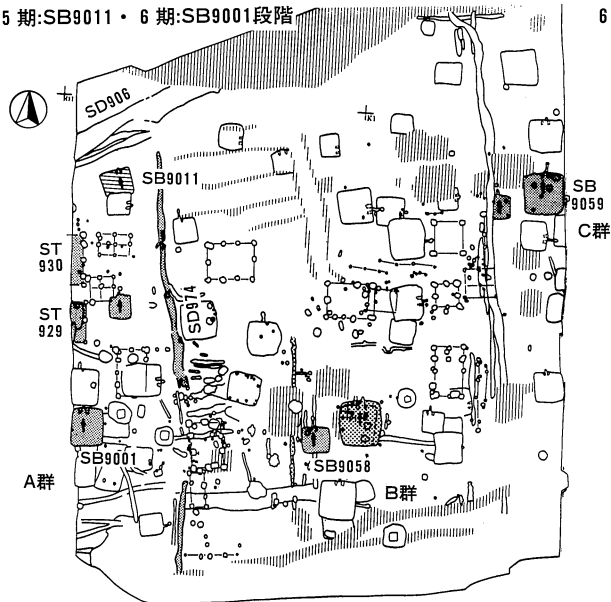
3つの建物群は、竪穴、掘立、倉庫のセットが類似した配置を示している点、南西から北東方向に間隔を置いて並列している点、主軸方位を揃えている点などから、かなり計画的に各敷地や建物が設定されたと考えられる。

屋代遺跡群①区の材木列？（SA4）と本地区のSD974に囲われた範囲から推定すると、A建物群を含むさらに西側に、集落の中心的な施設群が存在したと考えられる。

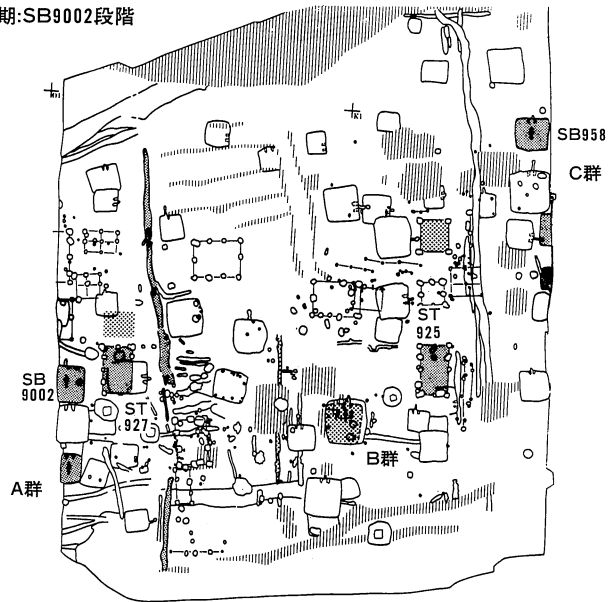
こうした3つの建物群とその配置は6期の期間中継続、踏襲される。

6期：SB9069段階 竪穴住居のカマドが東壁に設置される段階である。A～C群は存在するが、前段階に比べ規格性が低下している。A群では、中心が西側調査区外へ移ったか、あるいは縮小傾向に向かっ

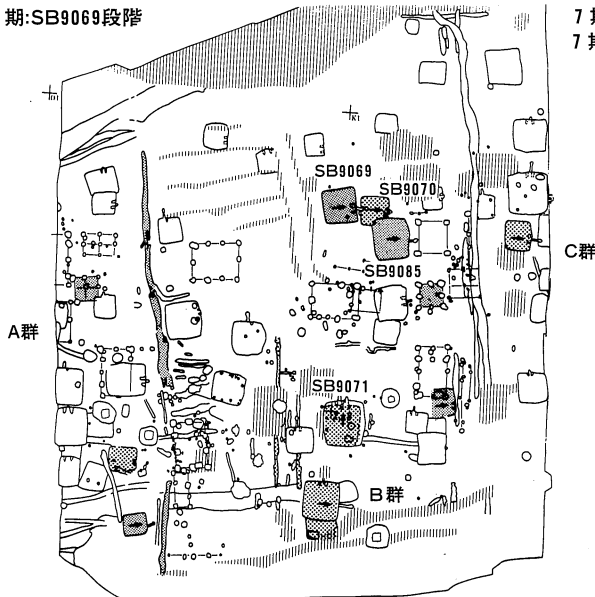
5期:SB9011・6期:SB9001段階



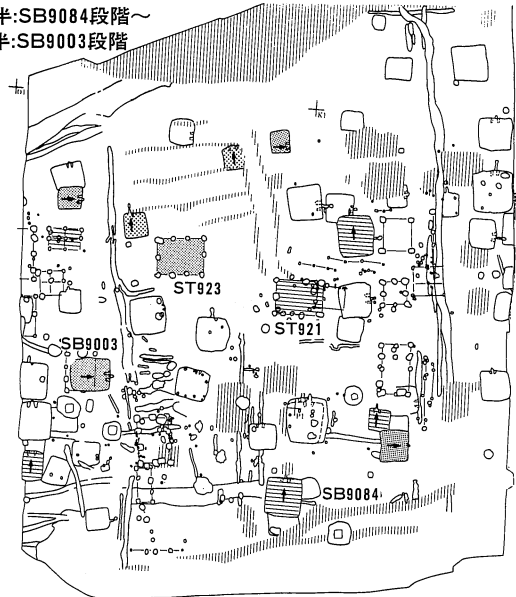
6期:SB9002段階



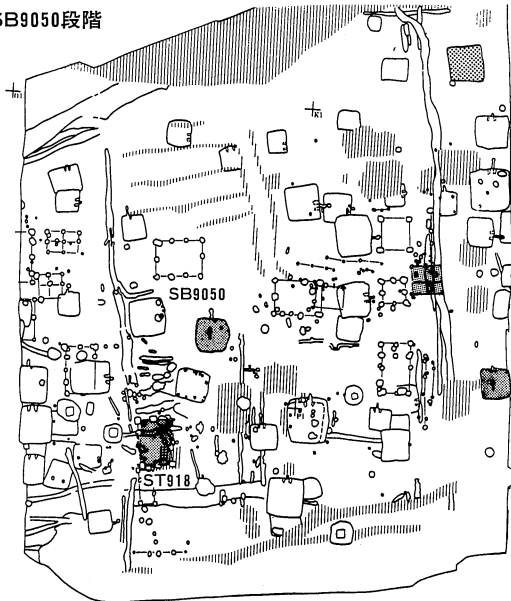
6期:SB9069段階



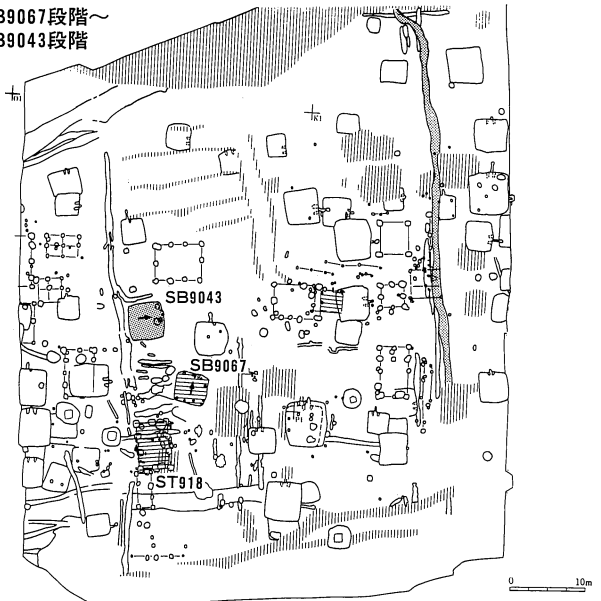
7期前半:SB9084段階～
7期後半:SB9003段階



8期:SB9050段階



8期:SB9067段階～
SB9043段階



■ 新段階 ▨ 古段階 ▩ 不明確 ||||| カラン+カマド主軸

図182 更埴条里遺跡K地区集落変遷図

たとえられる。B群の北側に新たな竪穴住居群 (SB9070~SB9085) が構築されるようになる。B群の倉庫エリア (ST922) に近接していることから、B群集団に属する建物と考えられる。C群は中心が東側調査区外に移ったか、あるいは縮小傾向に向かったと推定される。

前段階の整然とした配置が崩れると同時に、主軸方位も安定せず、条里型地割ともズレを生じている。

7期前半：SB9084~7期後半：SB9003段階 6期で認められた3つの建物群が東西方向に並列し、各建物群内に竪穴住居、その北~北東に配置された掘立柱建物および倉庫 (掘立) といった関係が解体する。

7期前半には、調査区ほぼ中央に掘立柱建物 ST921が建てられ、それを取り囲むように竪穴住居が配置されるようになる。7期後半でもこの配置が踏襲され、ST923を中心に竪穴住居が周囲を巡っている。

8期：SB9050段階 7期の集落構成が再び解体する。少数の竪穴住居が点在するだけになり、集落が縮小する。掘立柱建物 (ST919) はこの時期の可能性が高い。

8期：SB9067~SB9043段階 前段階同様少数の竪穴住居が点在する。鍛冶施設の付属する礎石建物 ST918が存在し、同様に礎石を持つ SB9067は工人の住居であった可能性が高い。また、床面まで洪水砂がおよんでいる SB9043は洪水前の最後の段階に位置付く。この時期まで鍛冶工房が存続していたか否かは不明である。

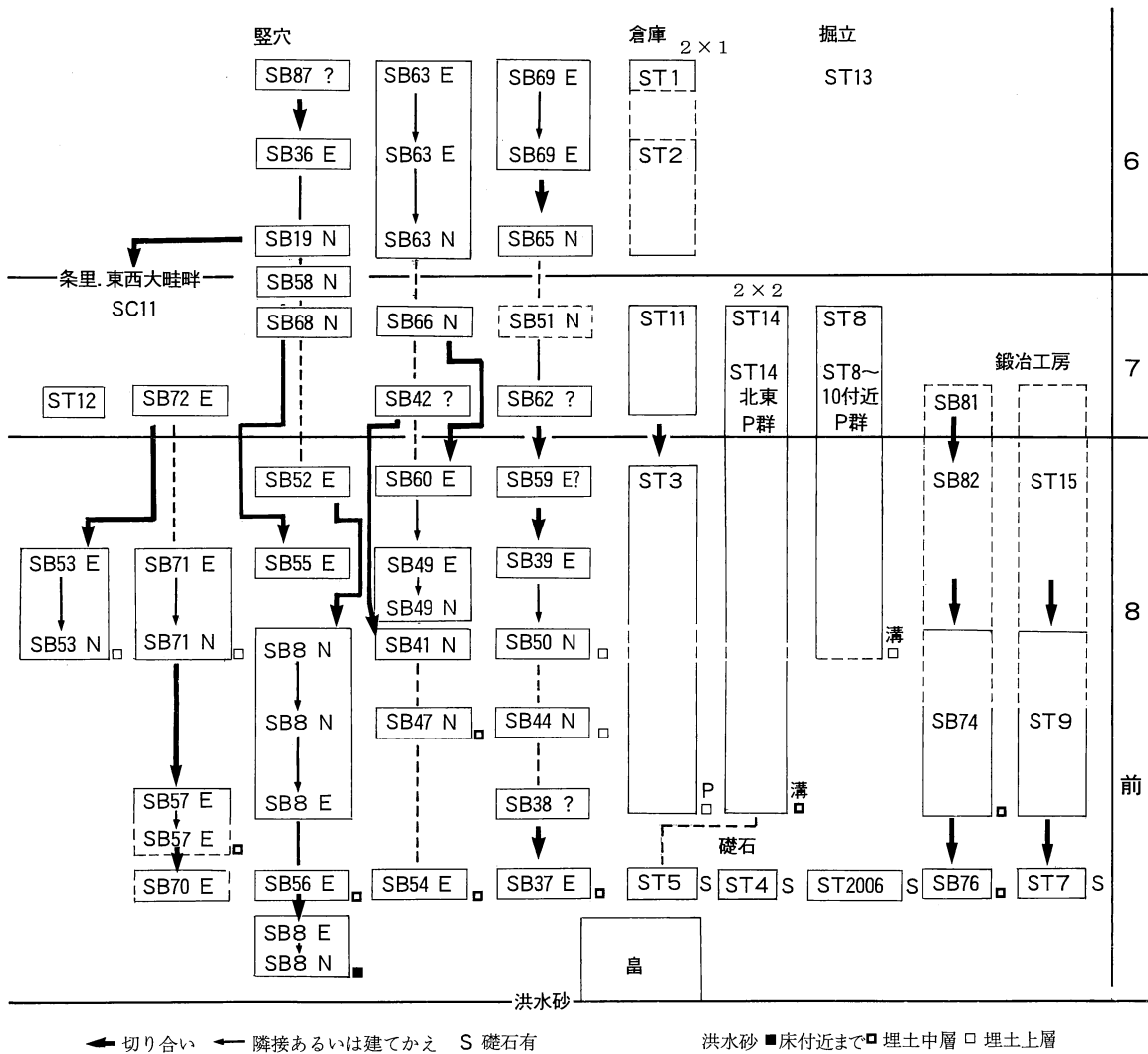


図183 屋代遺跡群①区 遺構新旧関係図

3 屋代遺跡群①区集落の変遷

(1) 遺構の新旧関係と並行関係の検証 (図183)

更埴条里遺跡 K 地区では 6 期の遺構が多く認められたが、この地区では 8 期前半の遺構数が多く、建て替えも頻繁におこなわれている。

6 期の細分は、SB87→SB36の切り合い関係と SB69→SB65の切り合い関係を軸にした。後者の例から、カマド設置壁は東→北に変化しており、そこから並行関係を類推した。埋め戻し層が顕著に認められた SB19は、条里東西大畦畔 (SC11) によって覆われている。7 期以降、この畦畔以南には建物跡が存在せず、条里水田造成時期を推定する決め手の一つとなっている。

7 期前半と後半では、重複関係が認められないため、土器様相によって区分している。ただし、土器様相から 7 期後半とされる SB51は、その主軸方位とカマドの位置から 7 期前半までさかのぼる可能性を示しておいた。

8 期前半は、洪水砂の堆積状況から大きく 4 段階に分かれる。古段階はほとんど洪水砂が認められないグループで、その中で SB59→SB39の切り合いが認められる。次の段階は、埋土上層に洪水砂が認められる例で、北壁にカマドを有する SB50や SB44の段階である。第 3 段階は、埋土中層まで洪水砂が入り込んでいる例で、東壁にカマドを持つ SB56などである。最も新しい段階は、カマド内まで洪水砂の入り込んでいる SB8あたり、SB56→SB8の切り合い関係が認められる。

並行関係は、各建物の主軸方位とカマド設置壁から類推した。ただし、鍛冶工房の主軸方位は必ずしも、一般の竪穴住居や掘立・礎石建物跡とは一致しなかった。また、掘立柱建物の建て替え時期は竪穴建物とは異なっていたと考えられ、時期幅を長く捉えておいた。

(2) 屋代遺跡群①区集落の変遷 (図184)

6 期以前：集落成立前、流路段階 古墳時代に設置された基幹水路 SD258→SD235は、その後埋没し、小規模な流路が蛇行をはじめ、周辺に土砂を堆積するようになる。こうした水路の状況から、古墳時代に広がっていた水田は放棄されたと考えられる。

6 期：SA4段階 6 期の集落を画する溝 (SD45) と材木列？ (SA2) に先行する溝 (SD44) や、溝 (SD32) を併設する材木列？ (SA 4) が認められる段階。いずれも、6 期 (5 期にさかのぼる可能性もある) の内に属するもので、水田が放棄された後、いったん、柵などによって広域を画する必要性が生じたと考えられる。

SA4の南側延長線上には、更埴条里遺跡 K 地区集落の SD974が存在する。これらは後の条里型地割と一致しており、この段階には条里型地割の南北基準線が、少なくとも屋代遺跡群①区中央付近までできあがっていたと考えられる。SA4は北側で鋭角に南西方向に屈曲している。この方向は古墳時代の畦畔の方向に近く、古い地割を継承していた可能性がある。と同時に囲われるべき施設が南西にあったことを示している。更埴条里遺跡 K 地区 SD974とともに考えると、6 期の古い段階の重要施設群が更埴条里遺跡 K 地区の西側に存在していた可能性が高い。

6 期：SB69～SB65段階 調査区のほぼ中央に 3 軒の竪穴住居が建てられ集落が成立する。この 3 単位は長期にわたって継続することとなる。また、確定はできないが、掘立柱建物と倉庫が伴っていたと考えられる。その配置は、各竪穴に伴うのではなく、竪穴住居群の東から東南の範囲に配置されていたと考えられる。また、これらの建物の方位は条里型地割にほぼ合致しており、前段階に比べ、地割が北へ拡大したことをうかがわせる。

6 期：SB58段階 3 軒の竪穴住居はほぼ同時期に移動、建て替えがなされていたと考えられる。その後、

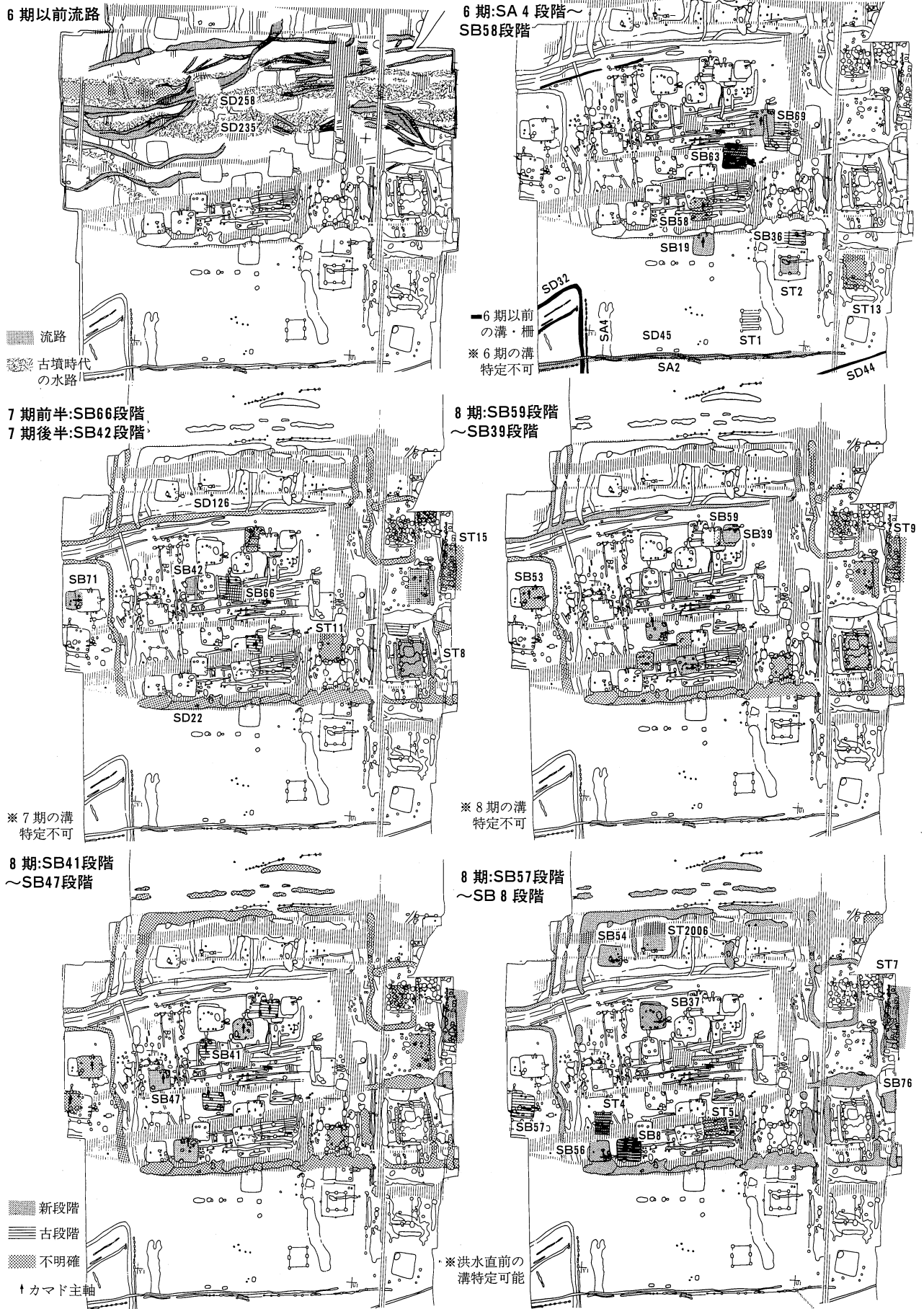


図184 屋代遺跡群①区 集落遺構変遷図

やや時期をズラしてSB58が建てられた可能性がある。この時間のズレは、条里型地割の東西大畦畔であるSC11の造成のため、そのライン上に存在していたSB19を移築する必要が生じたためと推定した。

この時期、SC11の南側に建てられていた倉庫（ST 1あるいはST 2）も北へ移動し、調査区東寄りの地点（ST11）に建て直されたと考えられる。

7期：SB66段階～SB42段階 調査区中央の3軒は継承されていたと推定される。これとは別グループの竪穴住居SB71が調査区西際に移動してくる。

細別段階の限定はできないが、調査区東寄りの地区に、竪穴を伴う掘立柱建物（ST8）や2×2間の倉庫（ST14かその周辺のピット群）、鍛冶工房と見られるST15やそれに関連する可能性のある竪穴建物（SB81）が相次いで建設される。

屋代遺跡群①区集落が発展してゆく段階と位置づけることができよう。

8期：SB59～SB47段階 何段階かの建て替えは認められるが、基本的な配置は前時期を踏襲している。

8期：SB54段階 SB57段階を経て、集落の配置と建物構造に変化が現れる。それまで、調査区東寄りの地区に集中的に建てられていた掘立柱建物が礎石立ちに変化し、個別の竪穴住居に近接して建てられるようになる。すなわち、SB56あるいはSB8とST4、SB54とST2006の関係である。

倉庫は、やや東寄りにST5が配置されている。また、鍛冶工房は掘立柱から礎石立ちに変化し、この段階まで存続していたと考えられる。

8期：SB8（新）段階 竪穴住居1軒のみが残存し、ST5の場所は畠に変わっていたと考えられる。SB8では、洪水砂を被る以前に、床上に堆積土が形成されており、洪水時には集落が放棄されていたか、竪穴以外の簡易な建物？だけが残っていたものと思われる。

4 屋代遺跡群②区集落の変遷

(1) 遺構の新旧関係と並行関係の検証 (図185)

②区集落は大きく東西の2グループに分かれる。東グループでは、竪穴住居が一カ所にまとまって重複している。屋敷地が長期間一定していたと推測でき、安定感がある。そのため、この重複関係を②区集落の変遷の基準軸として作業を進める。

6期では、SB125→SB126、SB126→SB123の切り合い関係が認められる。SB127は隣接するため並行とは考えられず、6期で4段階の変遷が認められる。

西グループとの並行関係は、手がかりが少なく確定はできない。仮説として、東カマドを有し、主軸方向がSB126などと類似しているSB110を比較的古い段階と考えた。この他、西グループには東カマドを有する例がほとんどないため、西グループ内での新旧関係SB129→SB113を、東グループのSB127→SB123の関係に対比させてみた。

東グループで7期と考えられるのはSB124のみである。7期の細分は、西グループの竪穴住居の土器様相から7期前半（SB111）と後半（SB120）に分離でき、SB120を切るSB119が最も新しい段階と考えられる。

掘立柱建物は、同一位置での建て替えが認められる。竪穴住居とは建て替え期間の間隔が異なっていると見られる。

8期にはSB128一軒だけが西グループ内に存在している。

(2) 屋代遺跡群②区集落の変遷 (図186)

6期以前：集落成立前 古墳時代に掘削された幹線水路が蛇行したり、本流周辺を削剝するなどの状況が

見られる。水路の管理が行き届いておらず、水田も放棄されていた可能性が高い。

6期：SB125段階 調査区東寄り（東グループ）に、竪穴住居1（SB125）、掘立柱建物1？（ST1005?）、倉庫（掘立）（ST1001）1の建物群で集落が開かれる。

6期：SB126段階

東グループでは倉庫を竪穴住居近くに移築し（ST1004）、西グループとの間のスペースには小規模な竪穴住居が配置されたと思われる。この竪穴住居を前段階に比定させると、倉庫にカマドが近接しすぎるため、この段階に属すると推定した。ST1004と雨落ち溝が共用となる掘立柱建物 ST1005もこの時期に存在していた可能性がある。

主軸方位の一致と、東カマドを持つ竪穴住居をこの段階と推定すると、SB110旧カマドやSB115があげられ、小規模なST1008が伴う可能性が高い。この段階で西グループが成立したと推定される。西グループは小規模な複数の竪穴住居が小規模な掘立柱建物を囲む形で成立している。

東グループとは集落構成が異なっており、建物規模や倉庫を伴わない点で、東グループよりも下位の別集団であったと思われる。

6期：SB127～123段階 東グループでは、大きな変化は認められない。

西グループでは、必ずしも東グループに対応した動きを見せておらず北カマドに変化する。竪穴住居、掘立柱建物ともに大型化してきており、経済力が備わってきたことを示している。ただし、倉庫と思われる建物は見つかっていない。

7期前半：SB124段階 掘立柱建物の使用期間が不明であり、一応存続したと仮定する。また、雨落溝から6～7期の土器を出土したST1002をこの時期と仮定した。溝が接続していたと考えられるST1004との同時性が考えられ、ST1004からST1002へ続く通路を確保するには、この段階かSB127段階しかなく、7期の可能性を持つ土器が出土している点からこの時期においてみた。

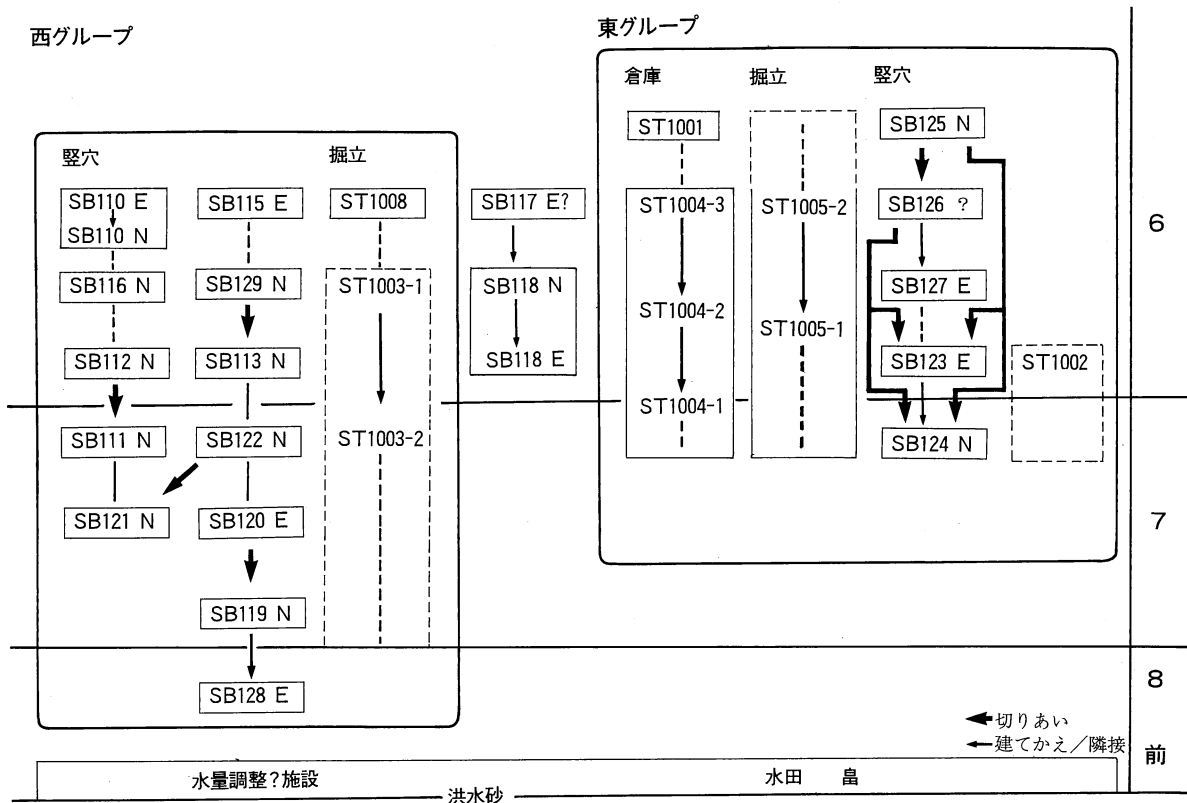


図185 屋代遺跡群②区 遺構新旧関係図

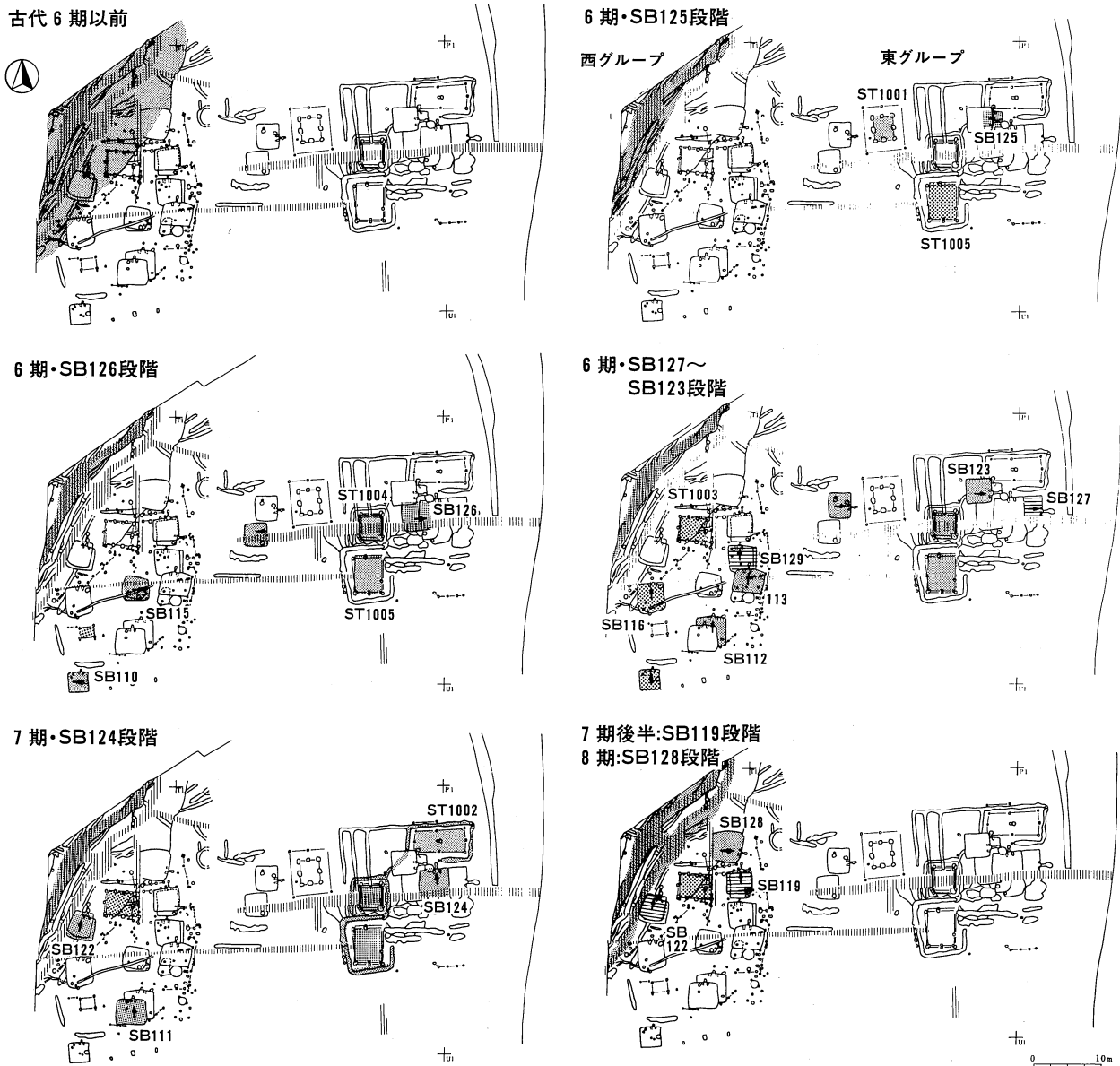


図186 屋代遺跡群②区集落変遷図

西グループでは、前時期のパターンを踏襲している。

7期後半：SB119段階 東グループでは建物がなくなり、土坑（SK1070ほか）が残存していた可能性がある。あるいは、新旧関係の確証はないが、ST1002のみがこの段階まで下り、SK群とともに居住施設とは異なる利用がなされていた可能性もある。

西グループでは、前時期のパターンを踏襲する。

8期：SB128段階 前段階の西グループが縮小しながら、1軒だけが残った形である。

この後、8期前半の内にこの竪穴住居も廃絶され、全域が水田・畠・水量調整？施設など、条里型耕地の関連施設に造成される。

5 屋代遺跡群③a区集落の変遷

(1) 遺構の新旧関係と並行関係の検証（図187）

6期に属する竪穴住居はSB3016の1軒のみである。これに主軸方向の一致する掘立柱建物が付属して

いたと考えられる。

7期では、SB3013-1→SB3013-2→SB3014、あるいは、SB3013-2→SB3019-1→SB3019-2の切り合い関係が認められ、4段階の区分が可能である。並行関係はカマド設置壁によって推定が可能である。

8期は礎石建物ST3001を介して、SB3010→ST3001→SB3008の3段階が想定される。この時期は、礎石建物群の成立をもって並行と考え、礎石建物との切り合い関係によってその前後と並行させた。

掘立柱建物の絶対数は竪穴住居に比べて少なく、建て替え時期は竪穴住居とは異なっていたものと考えられる。

(2) 屋代遺跡群③a区集落の変遷 (図188)

6期：SB3016段階 竪穴住居SB3016と母屋と思われるST3016に加え、大きさの異なる2棟の倉庫ST3010、3015の建物群で集落が成立する。幹線水路の分岐点脇に位置することから、水路が再整備された後、その分水点を掌握する目的もあり、集落が進出してきたものと考えられる。6期に属する竪穴住居は1軒しかなく、他の集落に比べ、成立時期が遅かった可能性がある。

竪穴住居は①区～④b区に展開する新規集落に比べ比較的大型であり、倉庫を2棟持つ点などから有力な集落であったと予想される。集落の大半が調査区東と南外の可能性があり、全貌は不明である。倉庫が西寄りに、居住域が東寄りに配置されており、この配置は8期前半の礎石建物群の段階まで継承される。

建物の主軸は、条里型地割に近く、北からやや西に振った方位をしめしている。

7期：SB3018段階～SB3014段階 西側に倉庫群、東側に居住施設といった配置は、この時期も踏襲される。また、竪穴住居は大型のSB3018の周辺に小型の竪穴住居SB3011とSB3013-1が新たに建てられ、集団の拡大を表していると考えられる。こうした大型住居と小型住居の関係は7期中継承されたと思われる。

8期前半：ST3012段階 8期のこの段階では、西側に倉庫、中央南側に居住施設と考えられる大型竪穴住居と掘立柱建物、北側に小規模な竪穴住居、といった構成に変化は認められない。

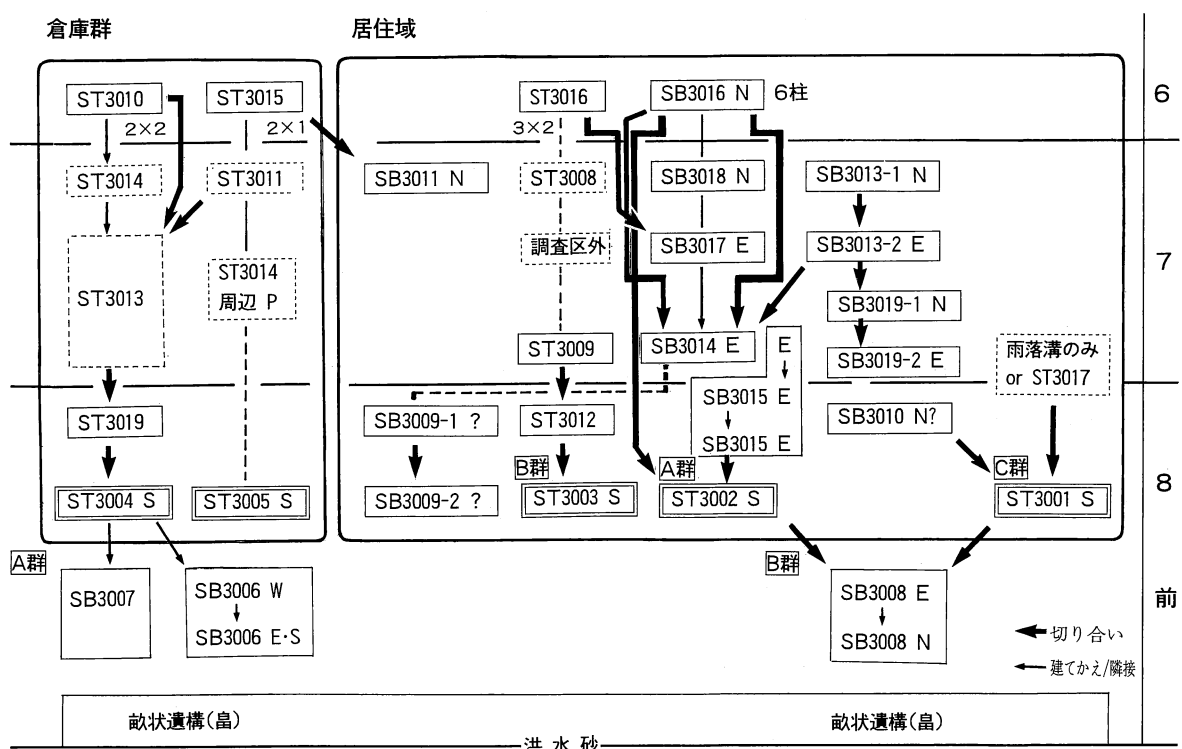


図187 屋代遺跡群③a区集落 遺構新旧関係図



図188 屋代遺跡群③a区集落変遷図

掘立柱建物には雨落溝が確実に伴うようになる。

8期前半：ST3002段階 それまで掘立柱建物であったものが全て礎石立ちに建て替えられる。主屋と見られる ST3002は礎石の残存率が悪く正確な規模は不明だが、雨落ち溝などから推定される面積は、それまでにない大規模な建物であったことがわかる。この建物を中心に、やや小規模な居住棟と見られる ST3003が南側に、ST3001が北側に配される。また、倉庫群は西側の ST3004と ST3005である。竪穴住居は東側調査区外に存在したと思われる。建物構造が充実し、大規模となるものの基本的な建物群の構成には変化が認められない。

図189は、集落内の導線などを示した図である。北の ST3001 (居住棟) から ST3002 (居住棟・母屋) 東側を経て南へ回り込み、ST3003 (居住棟) と ST3004 (倉庫) の間を抜ける道が想定できる。各々の建物はこの道に向けて入口を持ち、ST3001と ST3003には前庭が存在する。また、主屋 ST3002

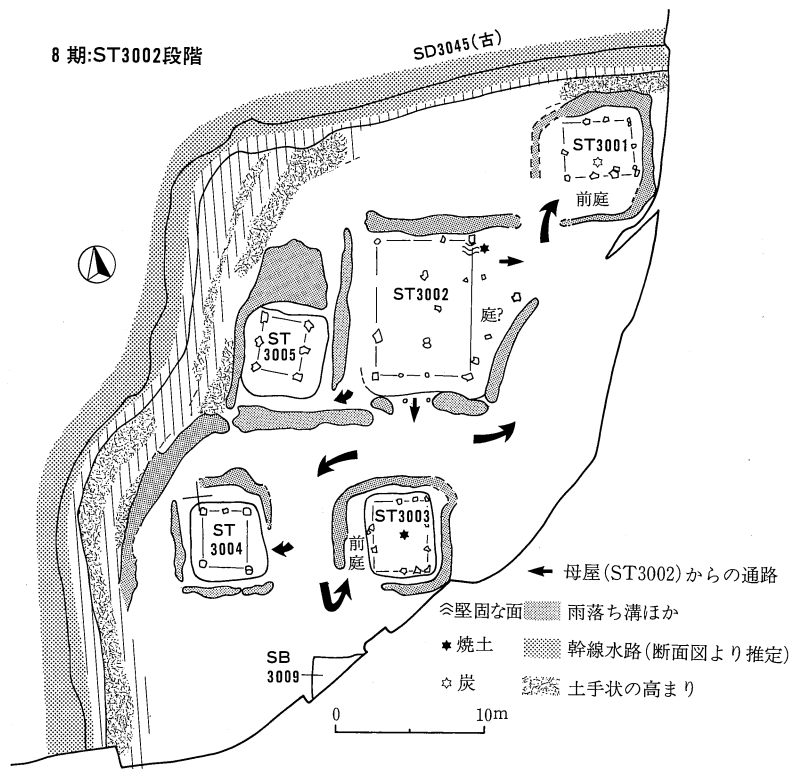


図189 屋代遺跡群③a区集落 礎石建物群配置図

の南入口部にはピット2基が並んで見つっている。2棟の倉庫のうち、導線と配置からST3005は母屋に直接付属していたと推定される。幹線水路SD3045と集落の境は若干高まりが残存しており、土手状になっていたと考えられる。

8期前半・SB3006段階 礎石建物群は短期間の内に廃絶し、③a区集落域では南側に竪穴住居SB3006とカマドのないSB3007、北側にSB3008を残すのみとなる。これらの住居も8期前半の内に廃絶に追い込まれる。

6 屋代遺跡群③b区集落の変遷

(1) 遺構の新旧関係と並行関係の検証 (図190)

③b区集落は東西の2グループに分かれる。竪穴住居の新旧関係はSB3035→SB3034→SB3032で、出土土器から6期と6～7期に比定される。これに、7期のSB3029、8期のSB3033を加え、5段階変遷を軸として設定する。

西グループと東グループの並行関係は、6期内でカマドの設置壁が東を向き、主軸方位も両グループ間では最も近似し、4本主柱穴を有するSB3034とSB3031(古)をほぼ同時存在と推定した。SB3031(新)は土器様相では6期であるが、近接する井戸SK3262の廃絶が6～7期である点、東グループでも本住居と同様にカマド設置壁が東から北へ変化するSB3030が存在する点から両者の並行関係を推定した。4本主柱穴がなくなるSB3030はカマド設置壁が同じSB3034に比べ若干後出と考えられる。

また、西グループでは、掘立柱建物と区画溝、柵列が配置と主軸方位の類似により各々の竪穴住居に伴っていたと考えられる。東グループでは、集落の南限を画する溝が、SK3277や溝同士の切り合い関係から、SD3306が6期、SD3304とSD3307が6期の新しい段階～7期の住居に伴うと考えられる。その他は、出土土器により時期を判断した。

水路について見ると、古墳時代から継承された幹線水路の内、IV層中で最も古いSD3309はSB3035と主軸方位が一致する。これを切るSD3279は、集落東グループ付近で集落を避けるように西へ若干屈曲する。このことは、SD3279掘削時には集落東グループがすでに存在していたことを示している。この溝

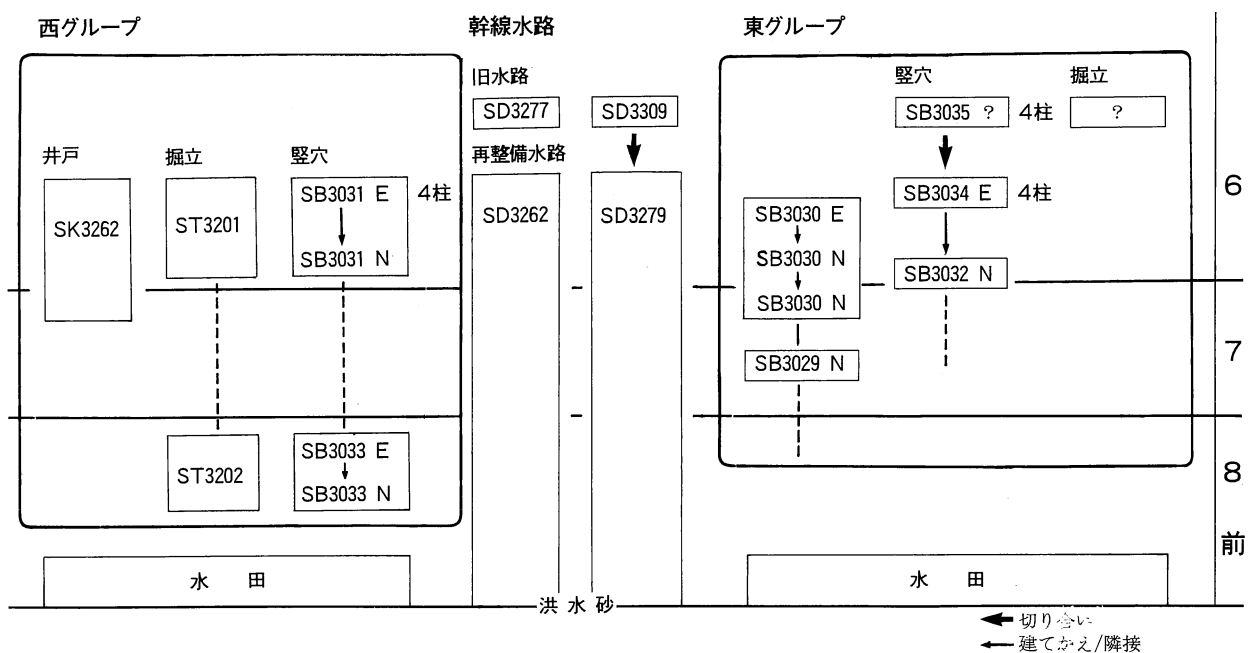


図190 屋代遺跡群③b区集落 遺構新旧関係図

からは、6～7期の土器が出土している。一方、SD3262はSB3031に主軸をほぼ一致させる。他の新規集落と同様、条里型地割に類似している。断面で確認される下層部分では、この水路は図示した位置より若干東にズレる（集落西グループから離れる）。この後、洪水砂（III-2層）による埋没まで両水路は存続（SD3262とSD3245）し、SD3245には両側に支水路（SD3242、SD3244）が付属する。

(2) 屋代遺跡群③b区集落の変遷（図191）

6期以前 古墳時代中期の幹線水路SD3290は、流路を絶えず変更し、あるいはVI層上部を削剝した時期が続いたと見られる。このことは、水田開発のために掘削された水路が、古墳時代中期以降のある時期から管理が行き届かなくなり、荒れるままになっていたと考えられる。

6期：SB3035段階 東グループに竪穴住居が1軒だけ確認された。調査区外（東側）の状況は不明であるが、主軸は流路に沿っている。

6期：SB3034段階 西グループが掘立柱建物1、竪穴住居1、竪穴建物1、井戸1を単位として成立する。この建物群単位は若干敷地を移動しながらも、8期前半（SB3033ほか）まで続いたと考えられる。また、これらの建物は条里型地割に類似し、さらに、方位の類似する水路SD3262の掘削と時期を同じくしている可能性が高い。

このことは、更埴条里遺跡～屋代遺跡群の広範囲におよぶ計画的な開発に則った、低地への集落進出の一環と考えられる。

先行して進出していた東グループでも、東へ傾いていた主軸方位が北に近くなる。統一的な地割に影響を受けてのことと思われる。

竪穴住居は2軒が確認されている。東側が不明ではあるが、西グループのように区画溝で仕切られた建物が整然と並ぶようではない。竪穴住居規模も西グループに比べ小規模であり、1軒毎に掘立柱建物が伴うのではなく、竪穴住居数軒に1棟が建つといった②区西グループに近いあり方が想定される。

水路を挟んで、西グループと東グループでは集落のあり方が異なっていたと考えられる。②区と同様の

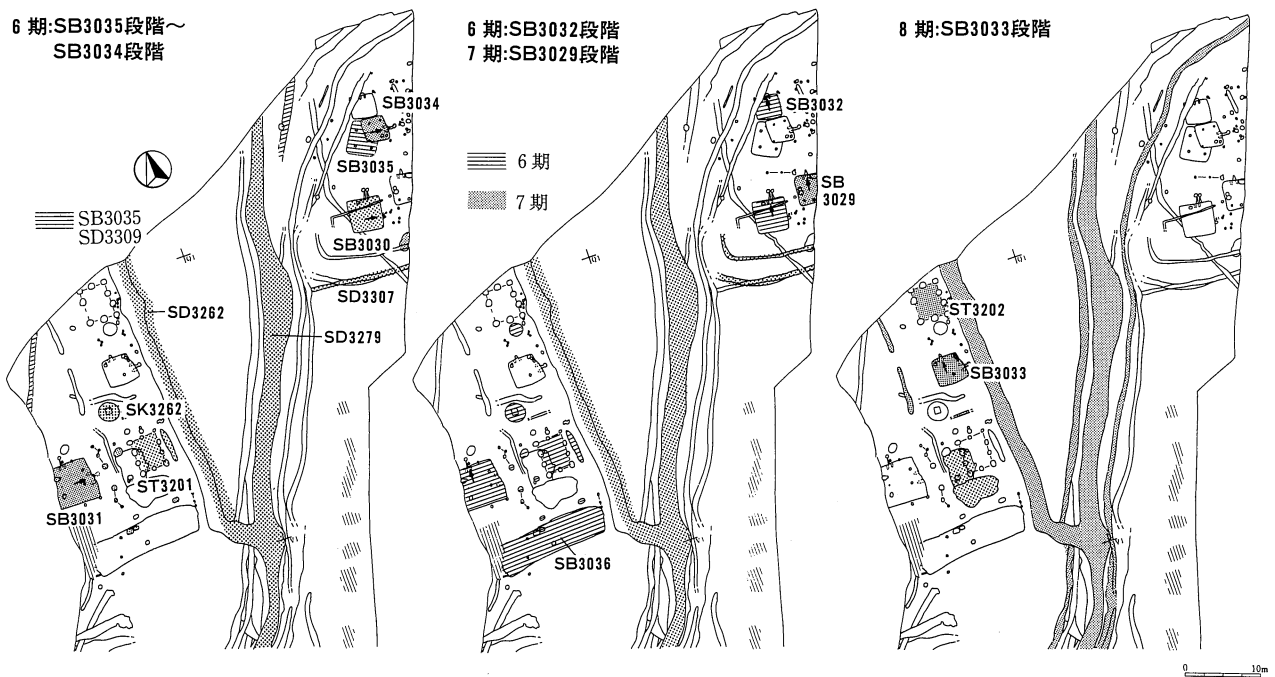


図191 屋代遺跡群③b区集落変遷図

パターンを取るとすると、竪穴住居1軒に掘立柱建物1棟、井戸や長大な竪穴建物が付属する西グループは上位にランクされる。これに対し、東グループは竪穴住居数棟が掘立柱建物1棟を囲むように配置されていたと考えられる。

東グループの上位にランクされる建物群は、東側調査区外に存在した可能性も想定でき、その場合、③b区の東・西両グループは別集落となる。

6～7期・SB3032段階 東グループでは、出土土器から井戸SK3262がこの時期まで存続していたと考えられ、大規模な攪乱を受けていた調査区西側に建物群が存在していた可能性が高い。東グループでは、前時期に続き小規模な竪穴住居2軒が見られる。

7期：SB3029段階 西グループは不明。東グループも集落が全体に東へ移動したためか、調査区東壁際で竪穴住居1軒が検出されただけである。幹線水路に並行し北東方向へ向かっていた流路が、水流の影響によって次第に東へ移動する傾向が見られる。住居移動の一因であろう。

8期前半：SB3033段階 西グループでは、6期段階と同様、竪穴住居1、掘立柱建物1が区画溝に仕切られて整然と配置されている。井戸は北側調査区外か。東グループは完全に調査区外に移ったか廃絶したかのいずれかである。

②区集落、④～⑥区集落－④b区南グループと同様、8期前半段階の内に集落が廃絶され条里水田に造成される。

7 屋代遺跡群④～⑥区集落の変遷1 －④b区南グループ－

(1) 遺構の新旧関係と並行関係の検証

6期以前のSB4015→6期のSB4014→SB4011→SB4010の切り合い関係が認められる。若干離れたSB4027の時期は限定できていない。

(2) 屋代遺跡群④b区南グループの変遷

6期：SB4014段階以前 古墳時代から継承された水路が埋没した後、その上層に竪穴住居が構築されている。このことは、③b区からつながる古墳時代の幹線水路SD4046の流路方向が大きく東向きに改変された可能性を示している。水路内には9世紀代と思われる土器片が微量ながら含まれており、6期頃に流路の改変がおこなわれたと考えられる。これは、低地への集落の進出時期や③b区の水路掘削時期と一致している。竪穴住居の方位も後の条里型地割に一致している。

6期以降 調査範囲が狭いため、集落の構成や変遷は不明である。8期前半には水田化されている。

8 屋代遺跡群④～⑥区集落の変遷2 －④b区北グループ－

(1) 遺構の新旧関係と並行関係の検証

土器によって、6期から8期前半の遺構が確認されている。6期の竪穴住居に切られた竪穴住居も存在するが、時期は限定できていない。

8期前半には4軒の竪穴住居が確認されており、SB4015→SB4006の切り合いが認められる。いずれも洪水砂の被覆がほとんど認められず、8期前半の比較的古い段階で集落が廃絶された可能性がある。

(2) 屋代遺跡群④b区北グループの変遷

6期 古墳時代以降、凹地として残存していたと考えられるSD4058が埋まりきった後、集落が成立する。主軸方位は条里型地割とほぼ一致している。調査範囲が狭いため集落の全貌は不明である。

7期 掘立柱建物1棟が確認されている。

8期 6期から継続して非常に狭い範囲で竪穴住居が変遷している。

9 屋代遺跡群④～⑥区集落の変遷3 —中枢部—

(1) 遺構の新旧関係と並行関係の検証 (図192)

④～⑥区については遺構の密集度が高く、切り合いが激しくなっている。そのため、出土土器が少ない例や混入品が多い点などから、時期を限定できない建物が多く存在している。また、条里型地割が整然と施工されている更埴条里遺跡K地区から屋代遺跡群③b区集落とは異なり、集落内の建物全てが一斉に主軸方位を揃える時期がほとんどない。そのため、④～⑥区中枢部に関しては、他集落の分析とは異なり、時期が絞り込めるものに限定し、細分も控え気味に検討を加えることとする。

0～1期前半前葉と1期前半段階には明確な重複関係が認められない。可能性がある例としてはSB5211→SB5177、SB6094→SB6117があげられるが、いずれか一方の細別段階が不明であるため断定はできない。出土土器から各々の時期に比定された建物群は、同一時期内ではほぼ主軸方位が一致しており、それに対し前後の時期間では明確な方位の違いが認められた。これを基準として、土器からは時期を限定できなかった例を各々の時期に比定した。ただし、SB5092のように、土器では同時期とされているが主軸方位が明らかに異なる例もある。0～1期前半前葉段階内の細別が可能かも知れないが、基準とすべき切り合い関係がないため、同時期として扱っておく。

1期前半では、SB6025に2基のカマドが存在する。また、1期全般で、SB6054→SB6126—(ST6002)—(ST6003)→SB6128→SB6053(2期)の切り合い関係があり、少なくとも2段階はあったと考えられる。

この時期の細別を重視する理由は、大型掘立柱建物ST4201の位置づけがあるためである。ST4201は2期のSB5035(=SB4811)に切られている。方位は、隣接する1期前半の竪穴住居SB4217と一致し、0～1期前半前葉や1期後半とは大きく異なっている。この点から、ST4201は1期前半に所属すると考えられる。

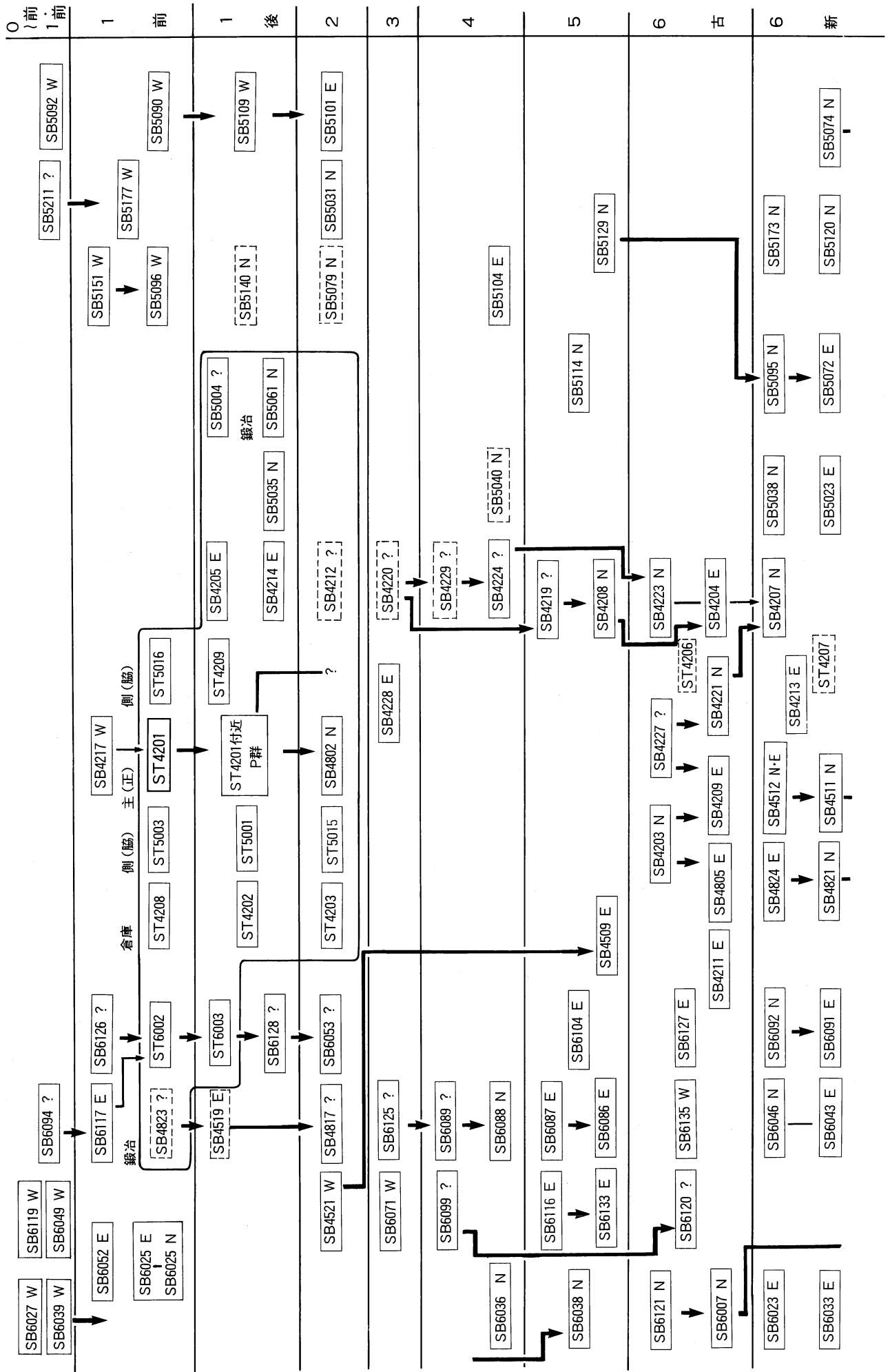
1期前半とすると、ST4201と煙道が重なる位置にあるSB4217との間で段階差があることとなる。ST4201を中心とした大規模掘立柱建物群は2期まで継承されることがわかっている。間断なく続いていたと考えると、大規模建物群の成立は、1期前半のうちSB4217が廃絶した段階と見る方がよさそうである。並行する切り合い関係としてSB5151→SB5096が存在する。

1期後半を含めた切り合い関係は、前述したSB6126→……………→SB6053が基準となる。SB6128を1期後半とすると、2段階に分離ができそうである。大規模建物群の遺構内には時期を特定する遺物がないため、この時期の竪穴住居SB4205やSB4214などと方位の一致する建物を抽出した。この建物群周辺から離れると方位が一致しなくなる。

2期内では切り合い関係が認められず、細別はできなかった。

3～4期では、SB6125→SB6089→SB6088の切り合い関係が認められる。3期と4期では主軸方位が異なっており、並行関係は土器と方位に依拠した。

4～6期では、同一地点での重複関係が多く見られる。例えば、④c区のSB4220→SB4229→SB4224—SB4208→SB4223ほかである。5期同士の切り合いでは、SB6087→SB6086が認められる。5期は少なくとも2段階区分が可能である。ただし、他の切り合い関係と対比させた場合、主軸方位やカマド設置壁などの変化に一定の方向性が見いだせず、集落全域の建物について並行関係を確定することはできなかった。



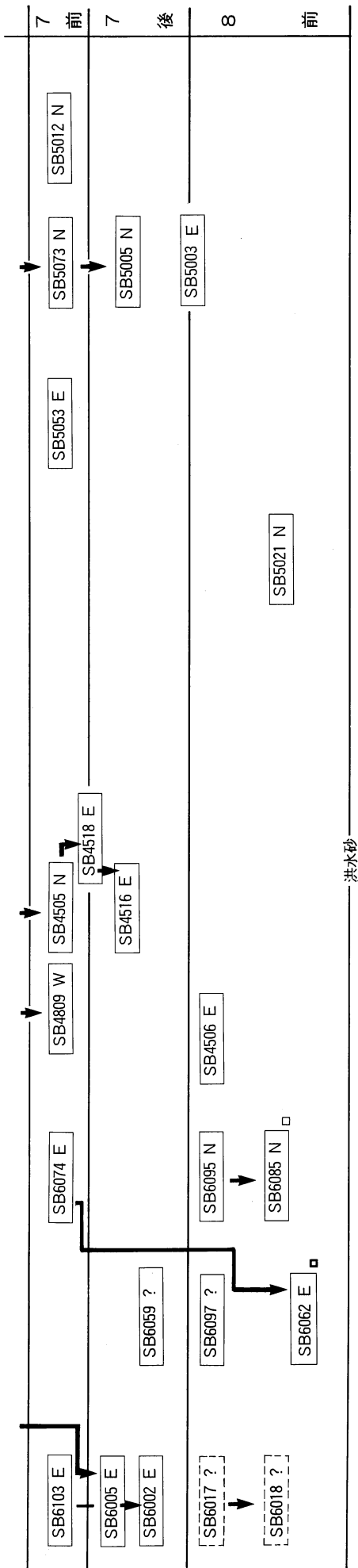


図192 屋代遺跡群④～⑥区集落 遺構新旧関係図

6期では、④c区における前述の切り合い関係に加え、6期内でSB4203→SB4209→SB4213、あるいは、SB4227→SB4221→SB4207が認められる。細別段階毎に集落全体の遺構を分けることはできないが、主軸方位の傾向から、大きく2段階に区分することは可能である。すなわち、上記の切り合い関係のうち、SB4221に類似した方位を持つ古段階とSB4207に類似した新段階である。

古段階はSB4203→SB4209の関係から、北カマド→東カマドへの変遷が想定される。新段階では、再度北カマド→東カマドのパターンが繰り返される。ただし、集落の西部では必ずしも当てはまっていない。

7期の新旧関係は、SB4011(6期)→SB4505(7期前半)→SB4518(?)→SB4516(7期後半)で確認することができる。7期後半にはSB6005→SB6002の切り合いが認められるが、集落全体での並行関係の確認は明確ではない。

7期後半と8期前半の切り合い関係には、SB6077→SB6018が存在する。8期前半内では、SB4215→SB4206がある。また、埋土中の洪水砂堆積状況から見ると、SB4206よりもSB6085やSB6062が後出であることが分かる。前者と後者では主軸方位の変化も認められる。

(2) 屋代遺跡群④～⑥区集落の変遷 (図193～196)

0～1期前半前葉 古墳時代の集落域を継承しており、⑤区より南では建物が途切れる。建物の配置が若干異なるが、集落の再編があったかどうかについては、もう少し広い範囲を見渡す必要があるだろう。

この時期、竪穴住居が⑤a区で南、中央、北の3群に分かれ、各々位置をずらしながら建て替えが行われていたと考えられる。⑤b区にも竪穴住居が存在するが建て替えのパターンは不明である。また、確実にこの時期に比定される掘立柱建物などは見つかっていない。

1期前半：SB4217段階 ④c区北部を含め竪穴住居が点在する。カマドの設置壁が、調査区東側の④c～⑤b区では西壁、西側の⑤a区では東か北壁であり、調査区中央付近で東西2グループに分かれる可能性がある。西カマド(東地区)グループのうちSB4217は、⑤b区北部の竪穴住居群との間に距離を置いており、別集団であったと考えられる。

1期前半：ST4201段階 大型掘立柱建物ST4201を中心



図193 屋代遺跡群④～⑥区集落変遷図 1

に、④c区～⑤区南際にかけて、N23°Eに主軸方位を整えた掘立柱建物群が密集して建設される。

ST4201は東西棟で、南北2面に底を有し、5×5間、74.6㎡(底を含む)の規模を誇る。柱は、柱穴の掘方100×64cm(最大)、柱痕径18～24cmを測り、柱を受ける礎盤石を持つ大型の建造物である。また、周囲にはST4201の北面柱列に柱列(南面)を揃えた南北棟(3×2間程度)が配置されている。また、2×2間の倉庫と思われる建物(ST4208)なども同じ段階になる可能性がある。

集落内では突出した建物群ではあるが、建物群を囲む溝や柵列などは見つかっておらず、視覚的に他から隔絶されていたとは言い切れない。

建物群と竪穴住居群との間には一定の距離がとられている。前段階のSB4217と⑤b区北部竪穴住居群の関係に類似しているが、前段階では建物の格差が認められなかった。そのため、前段階の集団関係を継承しているか否かは不明である。

④d区のSB4823は時期を限定できないが、その主軸方位からこの時期に属する可能性がある。この竪穴建物内には鍛冶関連遺物が多く認められ、床面中央には炉が見つまっている。鍛冶炉とは断定できていないが、大規模建物群に付属する鍛冶施設であった可能性が考えられる。

集落域北側の⑥区旧河道周辺は、水辺の祭祀域であるとともに木簡などの廃棄が行われている。

1期後半：ST5001段階 1期前半の集落構成を引き継いでいる。すなわち、④c区～⑤区南部にかけて大規模な掘立柱建物群が存在し、⑤b区北部に竪穴住居群が見られ、⑤a区側にも少数の竪穴住居が存在する、といったパターンである。

建物群の主軸方位は前時期と大きく異なっており、建て替えが行われている。遺構の重複が激しく、中心的な掘立柱建物は確認できなかったが、ST4201を継承した位置にあったと推測される。大規模建物群の南側に竪穴住居SB4214が進出してきている。

大規模建物群の北側に位置するSB5061は出土土器の様相から2期とされているが、主軸方位は1期後半の建物と一致しており、この時期までさかのぼる可能性がある。この竪穴建物の床面には鍛冶炉が敷設されており、1期前半のSB4823同様、大規模建物群に付属する鍛冶施設と考えられる。

また、⑤b区北部の竪穴住居群に属するSB5134からはガラス玉の鋳型が出土しており、集落の中心的な建物群の周辺に工房が配置されていた状況が考えられる。

集落北側の⑥区旧河道周辺域では、水辺の祭祀場が継承されているとともに木簡などの廃棄場所などにもなっている。

2期：ST5002段階 集落の構成は前時期と同様である。しかし、大型の掘立柱建物の存在していた場所には、竪穴住居SB4802が進出してくる。周辺には掘立柱建物が存在しており、大規模建物群自体は存続していたと見られ、中心となるべき建物の位置は東側調査区外に移動していたのかも知れない。掘立柱建物だけが狭い範囲に密集していた1期前半段階と異なり、東側調査区外を含めた広い範囲に竪穴住居などを混在した形で掘立柱建物群が展開していた可能性がある。この点は、周辺地区の調査結果とともに再考したい。

建物群が東へ移動したことを補足するように、前時期まで掘立柱建物が存在した⑤a区南東部(ST6003)にも竪穴住居SB6053が進出してくる。

前述した鍛冶炉を伴うSB5061の埋土から製錬関連の遺物が出土しており、2期段階にも鉄生産が大規模建物群の周辺で行われていたと考えられる。

また、集落北側の⑥区旧河道周辺では、水辺の祭祀場と木簡などの廃棄場所が継承されている。

3～4期 遺構数が激減し、検出された竪穴住居も小型のものが多し。掘立柱建物も見られなくなり、集落の中心を占めていた集団が移動した可能性が高い。この点は、⑥区溝、自然流路内出土の木簡や木製祭

祀具類がこの時期に皆無となるのと軌を一にしている。

3期には④c区(SB4228ほか)と⑤a区南部(SB6125ほか)にまとまりが見られる。この2グループはその後発展的に継承されてゆく。また、4期には④c～⑤区全域に小規模な竪穴住居が点在する傾向を見せるようになる。

5期：SB5129段階 再び竪穴住居を中心とした遺構数が増加に転じる時期である。竪穴住居の点在傾向は前時期と同じである。しかし、各々の地点で、6期まで建て替えが続いていくパターンが見られる。これは、各々の個別集団が長期的に同じ敷地を占有して変遷を遂げていったことを示している。

カマド設置壁の傾向を見ると、東カマドの住居が変遷してゆく④d～⑤a南部を中心とする西グループと、北カマドの住居が変遷する④c～⑤b区の東グループに分かれる。調査範囲においては、大きく2集団によって集落が成り立っていたことがうかがえる。ただし、住居の方位については両グループとも類似している。こうした東・西の違いは、前時期においても認められた。西側は北カマド、東側が東カマドといった傾向であるが、住居軒数が少なく明確ではなかった。

また、4期には突出した規模の住居が認められなかったが、この時期にはSB5129といった大型の竪穴住居が出現する。

6期：SB4228段階 切り合い関係と方位によって古段階と考えられる竪穴住居を中心に見てゆく。切り合い関係は、さらに細分が可能であることを示しているが、並行関係は明確にとらえられない。

前時期の東・西2グループのうち、東グループでは⑤b区中央の大型竪穴住居が不明確となる。主軸方位が他の竪穴住居と若干異なるが、SB5095があたるかも知れない。また、このSB5095の北側隣接地に建物が見られなくなり、南・北の各建物群のまとまりが明瞭となる。いずれも3～4期以来、建て替えを重ねてきた竪穴住居群である。また、建物群に掘立柱建物が伴っていたと思われるが明確ではない。

西グループは、⑤a区南部を中心として3～4期以来継続してきた竪穴住居群に加え、⑤a区北部でも竪穴住居軒数が増加する。

6期：SB4207段階 切り合い関係とカマド設置壁の異なる2軒が隣接する傾向があり、さらに2細分が可能であろう。

カマド設置壁などによって東・西のグループ分けを明示するようなことはなくなる。竪穴住居の建て替えは、前時期から継承された位置で続いており、東グループでは⑤b区中央付近、④c区と⑤b区北部に各々竪穴住居群が配置されている。しかし、前時期と比較して各竪穴住居群がまとまりを持つ傾向は認められず、⑤b区全体ではほぼ等間隔に竪穴住居が並置されている。住居軒数が増加するためその間隔が狭まり密度が高くなる。前時期から引き続き⑤b区中央付近に比較的大型の竪穴住居SB5072が存在する。切り合い関係にあるSB5095もこの段階まで下がる可能性がある。西グループでも、⑤a区南部で建て替えが続いている。⑤a区北部は不明確である。

こうした3～4期以来続いてきたと見られる集団とは別に、今まで居住域からはずれていた④b区北部や④b区南部に竪穴建物群が進出するようになる(本節6・7参照)。

集落を二分するSD4514の掘削は6～7期に行われたと推測されるが、建物との関係から掘削時期を絞り込むには至らなかった。

7期前半：SB4505段階 前時期、竪穴住居が密集していた⑤b区で減少し、⑤b区北部、⑤a区南部～④d区にまとまりが認められる。

7期後半：SB6002段階 竪穴住居は⑤a区にやや多く認められるが、密集はせず、間隔をあけて点在する傾向にある。軒数こそ異なるが、少なくとも4期以降共通する建物配置と見られる。

8期前半：SB4206段階 前時期からさらに住居数が減少し、竪穴住居間の距離も離れる。



図194 屋代遺跡群④~⑥区集落変遷図 2



図195 屋代遺跡群④～⑥区集落変遷図 3

8期前半：SB5062段階 細別段階で見ると、④～⑥区内に竪穴住居2軒程度にまで減少する。④区にまで広がっていた集落域は⑤区に集約される。洪水砂に覆われる時期にはすでにカマドが破壊されており、洪水時以前に集落が廃絶していたと考えられる。

10 高速道更埴条里遺跡、屋代遺跡群における古代集落の動向

(1) 集落の構成

集落の分解 ここまでは、竪穴住居や掘立柱建物といった建物を集落構成の最小単位（構成要素）と捉え、それらのいくつかがまとまってブロックを形成している場合を建物群と呼称してきた。そして、単独の建物群、あるいはいくつかの建物群の集合を個別集落として捉えた。個別集落間には水田や畠といった生産域が広がっており、他の個別集落との分離が明瞭となっている。逆に、広範囲にわたって竪穴住居が点在し、分離が難しかった屋代遺跡群④～⑥区については、ひとつの個別集落として扱った。この地区の場合、建物群間に多少の距離が認められた地点に対しグループという呼称を用いた。また、グループは、屋代遺跡群②区のように建物群間にある程度の距離が認められた上、各々の建物群での構成方法が大きく異なっている場合にも用いた。

集落の構成要素 古代0～8期前半の居住域で検出された主な遺構には以下のようなものがある。

- I. 居住施設 a. 竪穴住居跡 (SB)、b. 居住施設としての掘立柱・礎石建物跡 (ST)
- II. 収納施設 a. 竪穴建物跡 (SB)、b. 倉庫や納屋と考えられる掘立柱・礎石建物跡 (ST)
- III. 作業施設 a. 竪穴建物跡 (SB)、b. 掘立柱・礎石建物跡 (ST) ただし、一般的な作業ではなく鍛冶などの特殊な作業を行う工房に限定する。
- IV. 区画施設 a. 柵・材木列跡 (SA)、b. 溝跡 (SD)
- V. 給水施設 a. 井戸跡 (SK)、b. 水路跡 (SD)、c. 湧水坑跡 (SX)
- VI. 祭祀施設 居住域内では断定できるものがない、やや離れて水辺の祭祀施設跡 (SD、SX)
- VII. 廃棄施設 土坑 (SK)、竪穴建物埋没後の凹地など (SX)
- VIII. その他 土坑 (SK)

ここでは、居住域から離れる施設については割愛する。また、分析にあたって時期の特定が難しかったIVやV類、焼土坑などのVIII類、残存状況の悪かった居住域内のVI類については補足的に触れることとする。

建物群の構成 上記の施設は単独、あるいはいくつかが集まって建物群を形成している場合が多い。特にI～III類は、1つの集団が占有していた屋敷地の中心部分を示していると考えられる。各集団の地位や経済力を推定するには、この各建物群を構成している建物の種類、その数や配置、規模などが重要となる。また、その時期的な変遷を捉えることによって各集団の盛衰をみることができる。

今回、発掘された建物群は、各構成要素の有無によって大きく以下の類型に区分することができる。

- A. 竪穴住居 (I a) と掘立柱 (礎石) 建物 (I b)、IIの倉庫、IIIの作業施設、全てが揃っている例。
- B. IIIが欠落しているが、I a、I b、IIが揃っている例。
- C. IIとIIIが欠落し、I a、I bで構成される例。
- D. I aの竪穴住居だけで構成される例。

Aは1期前半～2期の屋代遺跡群④～⑥区集落のST4201建物群ほか、7?～8期前半の①区集落などである。③a区や更埴条里遺跡K地区集落もその可能性が高いが、一部の構成要素が調査区外にあったと見られるため確証がない。主屋とみられる建物の規模、居住施設の規模や数、倉庫の種類や数に各集落の特徴が現れる。

Bには、更埴条里遺跡K地区6期B建物群、7期のST923建物群、屋代遺跡群①区、②区東グループ、

③b区西グループなどがある。

Cには屋代遺跡群②区6期西グループがある。集落の大半が調査区外にあるため明確ではないが、③b区東グループや④b区南グループ、北グループなどもその可能性がある。

Dには、屋代遺跡群②区8期前半の西グループに見られる。また、遺構が密集していたため掘立柱建物の有無が明確ではないが、④～⑥区7・8期の多くの建物群にその可能性がある。

建物の配置 集落構成要素の種類の有無による類型が共通していても、その配置方法が異なる場合が見られる。例えば、Bの類型に属す更埴条里遺跡K地区集落7期では、中心となる居住用の掘立柱建物を中心に竪穴住居が囲む配置を取っている。これに対し、屋代遺跡群①区6期では、竪穴住居群と居住用の掘立柱建物、倉庫用の掘立柱建物の敷地が並列する配置を取っている。

こうした、配置によって建物群を分類すると以下ようになる。

1. 各施設の並置を基本とする場合

竪穴住居、居住用の掘立柱・礎石建物、倉庫、工房などの用途の異なる施設が一定の間隔をあけて並置される。建物の主軸方位を揃える場合が多く、整然とした配置となる。

例>更埴条里遺跡K地区6期、屋代遺跡群①区集落、②区集落東グループ、③a区集落、③b区集落西グループなどである。

2. 円形配置を基本とする場合

居住用と見られる掘立柱建物を中心にして、周囲に竪穴住居が点在する。

例>更埴条里遺跡K地区集落7期、屋代遺跡群②区集落西グループ6・7期がこれにあたる。③b区東グループもこの可能性がある。

3. 官衙的な配置を示すもの

大型で庇を有する掘立柱建物の東西棟が中心に位置し、その周囲に方位を揃えた南北棟が配置される。竪穴住居や倉庫が隣接しており、官衙機能だけに限定されていたとは言い切れない。

例>屋代遺跡群④～⑥区集落1期前半のST4201建物群から2期まで

集落の構成 各集落は、上記の建物群の集合として成立している。その組み合わせや規模は、時期毎、あるいは集落成因の政治的、経済的な力量によって多様化している。そのため、ここでは集落の類型化はこなわず、次項で時期的な変遷とあわせて論じることとする。

(2) 古代集落の動向

A. 0～1期前半前葉

自然堤防I群内で最も標高が高かったと予想される屋代遺跡群⑤区にだけ集落が見られる。竪穴住居が点在する配置は、古墳時代8期(長野県埋蔵文化財センター 1998)との間に大きな変化は認められない。つづく1期前半のSB4217段階までは同様な傾向を示している。住居用地は比較的ルーズに確保されており、同一地点で何度も建て替えてを繰り返す例は見られない。

B. 1期前半～2期

官衙風建物群の造営 弥生時代に集落が成立して以来、住居は⑤区の標高が最も高い地点を中心に建てられていた。1期前半に至ってはじめて南面する無遺構地帯であった④c区に竪穴住居SB4217が進出し、その直後、ST4201を中心とした官衙風建物群がその場所に造営される。

建物群の性格 この建物群は建て替えてを繰り返しながら2期まで存続し、その敷地を維持し続けている。周囲の竪穴住居群と建物群の間は無遺構地帯によって分離されているのみで、溝や柵列などの構築物によって隔絶するには至っていない。明確な区画がないため判然としないが、建物群の敷地は南北方向で最低

40m程度である。東西方向は、調査区外となるため不明であるが、南北方向より広い可能性がある^(註3)。

建物群内の配置を見ると、中心となる東西棟と隣接する南北棟は、官衙的な配置と考えることができる。しかし、中心棟の西側に倉庫が隣接している点、1期後半から2期には掘立柱建物に混じって竪穴住居が存在する点、1期前半のSB4823や1期後半から2期のSB5061といった鍛冶関連遺物や鍛冶炉を持つ竪穴建物を敷地内に取り込んでいる点などは、官衙とは言い切れない要素である。居住施設や作業施設、倉庫を取り込んでいる点は、公的な性格よりも首長層の居宅としての側面が強うかがえる。ただし、敷地を巡る溝や柵列がない点などは、居住者の実力が絶大でなかったことを示している。

1期前半の後葉から2期までの長くて数十年間に、主軸方位を異にした2度の全面的な建て替えがおこなわれている。この点は、この時期には集落を含めた周辺地区の地割が定まっておらず、建物群の安定性が欠けていたことを示している。

集落の構成と景観 (図196) この建物群の周辺では、0～1期前半前葉に引き続いて竪穴住居が構築され続ける。

集落の景観は、南側(④a~b)に低地や旧流路が存在し、その30~40m北に首長層の建物群が南面して配置されている。さらに建物群を取り囲むように竪穴住居が点在する状況であったと考えられる。北側背後の旧河道への斜面は水辺の祭祀場となっており、一部は建築材の木屑やモミガラなどの廃棄場としても使用されていた。さらに北側には旧河道を造成した水田域が広がっていた。水田造成の開始時期は、1期前半である。

C. 3・4期

集落の立地は前時期同様、屋代遺跡群④~⑤区のみである。ただし、首長層の建物群が消滅し、残った竪穴住居も小規模なものが点在するだけとなる。首長層の居住する中心的な集落が移動し、一般集落地へと変化したものと見られる。個々の竪穴住居はほぼ同一の地点で6期頃まで建て替えを繰り返すようになる。このことは、個別の竪穴住居に居住する最小単位の集団がその敷地を占有し、継承していったと予想される。

D. 5期

集落発展の胎動 屋代遺跡群④~⑥区集落では竪穴住居が一定間隔に点在するあり方に変化は認められない。ただし、住居数が増加に転じ、しかも⑤区SB5129のような大型住居が現れるようになる。このことは、集落が拡大期に入ったこと、その中で、大きな差がなかった竪穴住居居住者層の中に格差が生じてきたことを示している。

西からの低地進出 一方、更埴条里遺跡K地区にはじめて竪穴住居1軒が進出する。単独である上、条里型地割には則っておらず、6期にはじまる低地全域にわたる開発のための集落成立とは性格が異なっている。しかし、低地開発の先駆けであることには違いない。この竪穴住居は調査区西端で検出されており、6期には東側に集落が拡大していく。このことは、少なくともK地区付近で低地への進出を開始した集団の本拠地が、西側にあったことを示唆している。この点は、6期の集落構成からもうかがうことができる。

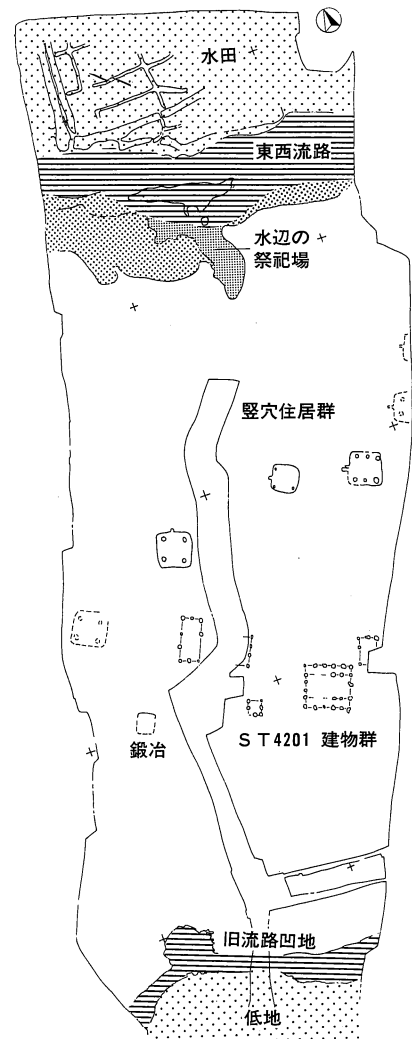


図196 1期前半：ST4201段階の集落景観

E. 6期

条里型地割の施工と集落の進出 6期には条里型地割の施工が開始され、低地での開発がはじまる。それとともに低地内の微高地上に集落が進出して行く。これらの集落では、条里型地割に則った建物の配置が見られるようになる。これに対し、伝統的な集落である屋代遺跡群④～⑥区集落では、建物の主軸が異なった状況を見せる。

また、低地へ進出した集落間には、進出時期の違いや集団の規模や力に格差が認められる。

条里型地割施工開始期の集落 最も早い段階で低地へ進出を開始したのは、更埴条里遺跡 K 地区集落である。5期のSB9011段階より後、5～6期に K 地区を南北に貫く SD974が掘削され、その西側で集落の整備が始まったと考えられる（6期：SB9012～9014段階頃）。この溝は後の条里の南北大畦の延長線上に位置し、条里型地割の痕跡としては最も古いものである。溝の延長線上は屋代遺跡群①区の SD32と SA4である。この溝と材木列に囲まれた範囲がこの段階の更埴条里遺跡 K 地区集落の本体と考えられ、その材木列の規模と範囲、あるいは畿内系土器が多く見られる点などから、官衙かあるいはその機能を持った有力集落であったと予想される。ただし、集落本体は、西側調査区外になるため推定の域をでない。

この段階では、北側の区画線（SA4）は大きく屈曲し、南西―北東方向を向く。この方向は古墳水田などに近い方位を示しており、条里型地割に先行する区画線が残存利用されていた可能性を示している。このことは、条里型地割の東西ラインの設定が南北方向よりも若干遅れていたことを示していよう。この点は、条里型地割の東西ラインの基準となる更埴条里遺跡 J 地区 SC1002の南側にまで K 地区集落に属する焼土坑が点在していること、あるいは、屋代遺跡群①区集落南境界線が SD45から SC11へ移動する点からも知ることができる。また、この屈曲する区画ラインの存在は、施行のはじまった条里型地割の南北ラインも屋代遺跡群①区途中で終わっていた可能性を示している。

K 地区集落は、この段階かあるいは1段階遅れて、B建物群、C建物群が間隔をおいて並列する形で東へ拡大していく。

復旧水路基点への集落進出 屋代遺跡群の新規集落の多くは、この K 地区集落より若干遅れて低地へ進出したと考えられる。①区集落は、K 地区集落から続いていた SA4と SD32を切る SA2と SD45に、東西軸をあわせる形で集落が成立する。また、②区集落、③ a 区集落、③ b 区集落は、6期に属する竪穴住居軒数の少なさと重複関係の少なさから K 地区集落に比べ後出であった可能性が高い。

これらの集落は、各々古墳時代の幹線水路の分岐点近くに位置する例が多い。①区は旧基幹水路で、南東と北西へ水路を分岐していた SD258上に進出する。③ a 区は、北東と東への水路の分岐点、③ b 区は北と北東への水路の分岐点にあっている。古墳時代の幹線水路は、その後管理が行き届かず蛇行し、氾濫を繰り返していた状況を呈していた。これらを再整備して開発を進めるため、集落が水路にとっての重要拠点ごとに配置されたと推測される。こうした開発の動きは、条里型地割の設定と並行して行われたのであろう。前述のように、K 地区に遅れて①区集落以北に条里型地割が広がっていったとすると、その地点への集落進出時期も K 地区集落よりも後出であったと考えられる。

この時期にはじまった、屋代遺跡群から更埴条里遺跡の全域を視野に入れた水路の整備と条里型地割の施工は、この地域全域を掌握していた有力者の存在があって、はじめて可能となったであろう。そうした有力者の居住地は今回の調査範囲内では確認されなかった。

集落形態の違い K 地区集落は、西側調査区外に官衙的な集落が存在したことが推測され、それに並列する形で B-1類型の建物群が東へ展開していた。これに対し、屋代遺跡群側の新規集落は B-1類型と C-2類型の建物群がセットで集落を構成していたと見られる。

集落をほぼ全掘できた②区集落で見ると、B-1類型の東グループと C-2類型の西グループの関係がそれ

にあたる。倉庫や溝を巡らした掘立柱建物を持つ東グループが、この地点での開発主体者であり、倉庫がなく、小規模な掘立柱建物の周囲に竪穴住居が点在する西グループが従属的な集団であった可能性が高い。

③a区集落や③b区集落も、全掘していないためはっきりしないが、②区のいずれかのグループに相当する部分を検出しているにすぎないと予想される。

また、集落の格差を見ると、水路の分岐点を掌握する位置にある③a区集落で、大型の竪穴住居と掘立柱建物、複数の倉庫が存在するのに対し、分岐点ではない②区集落には、小規模な建物が数少なく建てられていたことがわかる。しかし、その後、時間の流れとともに発展する集落と没落する集落が現れてくる。

伝統的な集落域である屋代遺跡群④～⑥区集落では、掘立柱建物が明確でないため判然としないが、比較的大型の竪穴住居 SB5095? を⑤b区中央付近に配し、その北と南に間隔を置いて小型の竪穴住居が点在するあり方に変化は見られない。低地へ進出した集落とは異なった原理が働いていたとも考えられる。

また、④b区の低地へ建物群が進出する。

F. 6期後半～7期

条里畦畔の造成と屋代遺跡群内集落の変化 6期の古段階には不明瞭であった条里型地割の東西ラインが大畦の造成を伴って開始されるのが、6期の新段階と考えられる。最も顕著に現れるのは①区集落である。SB19が埋め戻されて東西大畦（SC11）がその上に造成され、それまで南側に配置されていた倉庫や焼土坑などの遺構がSC11以南から姿を消す。これを機に①区集落は北側に若干移動するとともに、発展を遂げることになる。

K地区集落の南を区切るSC1002もこの頃整備されたと考えられる。

更埴条里遺跡 K地区集落の再編 屋代遺跡群側の集落の多くが、基本的には6期の集落構成を引き継いでいったのに対し、K地区集落では、7期に入って大きな集落の再編が進むこととなる。

それまで、西側調査区外に集落の中心があり、それに並列する形でいくつかの建物群が存在していた。しかし、この時期になるとK地区中央付近に比較的大型の掘立柱建物（東西棟）が配置され、それを囲むような位置に竪穴住居や倉庫が点在する形（B-2類型）に移る。これによって、6期に見られた条里型地割に則した敷地区分が崩壊する。6期にこの集落を掌握していた集団が移動したことによって、集落構造が一変したと考えられる。条里型地割の規制を受けて計画的に成立した集落から、ST921→ST923に居住する人物を中心に掌握された集落へ変化した可能性が高い。この時期を境にK地区集落は縮小へ転じる。

6期に計画的に低地へ進出していった集落の中では、②区集落において中心的な地位にあったと考えられる東グループが7期後半には消滅する。西グループは6期後半から掘立柱建物や竪穴住居が大型化して力をつけており、8期まで存続する。

このように、6期に条里型地割施工と同時に開始した開発に伴って低地へ進出した集落では、7期に入り、集落の構成を継承したままで発展してゆく①区集落・③a区集落、新たな集落再編がおこなわれるK地区集落、集落成立時に有力であった建物群が没落する②区集落などの変化を見せる。

G. 8期前半

8期前半には、さらに集落が発展してゆく①区集落や③a区集落、縮小化あるいは別集団と入れ替わったと見られるK地区集落などの違いが見られる。また、全体的には集落が個別・分散化してゆく傾向にあり、発展をみせた①区集落や③a区集落でも、この時期の内に個別・分散化する。また、全域が洪水に見舞われる時期には明確な遺構が存在していない。このことは、集落が低地から他へ移ったか、洪水時には竪穴住居を使用していなかったか、のいずれかと思われる。K地区集落のような8期後半以降も集落が継続している地点では、後者の可能性も視野にいれるべきであろう。

屋代遺跡群①区集落・③a区集落の発展 この2カ所の集落は、集落構成においては6期から大きな変化を見せておらず、同一系統の集団が安定的に発展をとげたものと考えられる。

①区集落では、7期段階から掘立柱建物の規模が大きくなり始める。7期後半かあるいは8期には鍛冶炉が2基以上並置された建物が集落内の一画に取り込まれる。また、集落の周辺は溝や柵によって圍繞されるようになる。このことは、①区周辺の開発に入った集団が時期を追うごとに力をつけていった状況を表している。8期前半の竪穴住居からは石帯や青銅製飾板などが出土しており、財力をつけたとともに、在地の有力者に成った人物が出てきたことを示している。

③a区集落も①区集落と同様、徐々に力を蓄えていったと考えられる。ST3002は8期前半においては調査範囲内最大の礎石建物であり、他の建物も全てこの時期に礎石立ちに改築されている。盛土と溝を有し、比較的しっかりとした礎石を使用している点など、建物群からは①区集落より上位に位置付く可能性を示している。鍛冶施設は調査区内では見つからなかったが、多量の鉄生産関連遺物が出土しているほか、隣接する水路内からは「侍」?と記された墨書土器が出土している。

集落の個別・分散化 ①区集落、③a区集落以外は、いずれの集落においても竪穴住居が分散し個別化してゆく状況を示している。K地区集落では、7期に見られた中心的な掘立柱建物がなくなり、再び集落の構成が変化する。この時期には、鍛冶工房1棟とその工人の住居と見られる竪穴住居1軒が調査区中央西寄りに存在し、やや離れて竪穴住居が1軒見られる。このように、集落域に点々と個別的な最小単位の集団が住居を構えていた可能性が高い。④～⑥区集落でも竪穴住居が点在する形態をとっている。

また、有力者層が居住していたと見られる①区集落や③a区集落でも、洪水直前には、このような個別・分散的な集落に転換していたようである。これらの地区では、竪穴住居の近くで畝状遺構(畝跡)が確認されており、少数の家屋の周辺に畝が広がる景観が推定される。

おわりに

今回、更埴条里遺跡から屋代遺跡群にかけての低地に長大なトレンチを入れたことによって、古代集落のあり方と低地開発のあり方を関連づけながら検討できる資料を得ることができた。しかし、そこから得られた多量の遺物、木簡に記されていた内容、あるいは環境復元のデータ、水田関連遺構の分析、等々を総合した上での集落論に到達することはできなかった。その点に関しては、今後の課題としておきたい。

最後に、集落内遺構に頼った分析から導き出した、現段階での集落変遷のまとめを表100に示した。詳細はこれまでに記した通りであるが、大きく概観すると、1期前半(7世紀後半)と6期(9世紀前半)、そして8期前半(9世紀後半)に画期が認められる。

1期前半(7世紀後半)では、自然堤防I群内の高所に営まれていた集落内に官衙風の建物群が造営される。屋代遺跡群④～⑥区集落がこの地域の政治・経済の中心地の一つとなる時期である。また、旧河道内の水田開発が実施される。

6期(9世紀前半)には、水路が再整備され、条里型地割の施工もはっきりと確認できる時期である。条里型地割の整備と耕地の開発は大きく3段階に分かれる。第1段階は、更埴条里遺跡K地区から地割がはじまる段階。第2段階は、更埴条里遺跡～屋代遺跡群のほぼ全域に地割と水路が整備され、集落が配置し終わる段階。第3段階は、集落の位置をズラして、東西大畦を造成する段階である。また、伝統的な集落内でも竪穴住居軒数が増加し、発展を見せる時期である。

8期前半(9世紀後半)は、6期に低地へ進出した集落間の格差が顕在化する時期であり、その後、ほとんどの集落が縮小・分散化してしまう。それに代わって条里水田、畝の造成が活発化するが、こうした景気刺激策?の直後、全域を大洪水が襲うこととなる。

表100 更埴条里遺跡・屋代遺跡群の集落変遷

立地 時期	後背湿地I群		自然堤防I群				旧河道内		
	A~J地区	K地区集落	①区集落	②区集落	③a区集落	③b区集落	④~⑥区集落 (④b区)	④~⑥区集落	⑥区旧河道
0~1期前半 前葉								古墳時代の集落を 継承 ④c区に堅穴進出	河道の急速な埋積 旧河道の水田化
1期前半								官衙風建物群の 造営 ↓ 継承	祭祀施設、水田 ↓
1期後半	水田・泥炭 (細別 時期不明)	?						↓ 継承	祭祀施設、水田 ↓
2期								↓ 継承	祭祀施設、水田 ↓
3~4期								官衙風建物群消滅 、堅穴も減少 小型堅穴が点在	
5期		堅穴1軒が水路脇 に進出						集落内に大型堅穴 出現、堅穴数増加	
6期	条里型地割施工 開始?	条里型地割に沿っ た建物群並立 ↓ 継承 ↓	条里型地割に沿っ た集落成立	条里型地割に沿っ た集落成立	条里型地割に沿っ た集落成立	水路際に堅穴進出	④~⑥区集落 (④b区)	継承 堅穴増加 ↓ (水路再掘削?)	水田? 水田?
7期前半		集落再編 掘立を中心に堅穴 が取り巻く 継承	東西大畦造成 それに伴い集落が 北へスレる 継承 ↓ 建物充実へ	継承	継承	水路埋没		西側(⑤a 区)優位へ ⑤b区大型堅穴消 滅 継承	水田?
7期後半	水田	継承	東グループ消滅	継承	継承	継承		継承	
8期前半		小規模、分散化 ↓ 継承 一部で畠	西グループに堅穴 1軒	継承発展 礎石建物群に成長 少数の堅穴に縮小	西グループ継承	堅穴減少		堅穴減少 ↓ ?	水田? 水田?
									水田再造成

『総論編』では、前後の時期の集落変遷の状況を加え、また、集落内遺構以外の成果を踏まえて改訂してゆきたい。

註

- 1 掘立柱建物に付属せず、カマドの敷設された竪穴建物を竪穴住居と呼称し、それ以外を竪穴建物と呼称している（第2章第4節参照）。
- 2 掘立柱建物の用途を限定するのは難しく、一応、倉庫と考えられる例は倉庫（掘立）、鍛冶施設が敷設された例は工房（掘立）と記述し、それ以外を単に掘立柱建物と記述する（第2章第4節参照）。後者は、居住施設が中心になると思われる。
- 3 隣接した地点で更埴市教育委員会が調査を実施しており、掘立柱建物跡が検出されている（佐藤1997）。

引用・参考文献

- 宇野隆夫 1991 『律令社会の考古学的研究』
- 小平和夫 1990 「第4章第1節 古代の集落」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4－松本市内その1－総論編』
- 佐藤信之 1997 「地域史から見た地方官衙の成立－信濃国更科郡衙（評衙）・埴科郡衙（評衙）－」『考古学ジャーナル』420
- 長野県埋蔵文化財センター 1996 『長野県屋代遺跡群出土木簡』
- 長野県埋蔵文化財センター 1998 『更埴条里遺跡・屋代遺跡群－弥生・古墳時代編－』
- 広瀬和雄 1990 「畿内とその周辺の村落」『日本村落史講座2 景観1』
- 山中敏史 1994 『古代地方官衙の研究』

第6節 鍛冶関連遺構

はじめに

屋代遺跡群では2期に比定される竪穴建物跡SB5061床面より鍛冶炉1基が検出され、さらに、その建物跡埋土から鍛冶関連遺物に混じって製錬滓が出土した。この時期は、隣接地点で大規模な建物群が検出されており、関連性が注目される。まず、これを中心に取り上げ、さらに7期までにわたる④～⑥区に見られる鍛冶関連遺構を概観する。次いで、7～8期に屋代遺跡群①区、更埴条里遺跡K地区に出現する鍛冶専用の大型建物跡に基づき、7期以前の「農鍛冶型鍛冶工房」(穴澤1994)的鍛冶作業が改変され、新たに大規模に組織化されていく様相を述べ、最後に今後の課題をまとめる。

1 竪穴建物跡内鍛冶関連遺構

屋代遺跡群においてはすでに古墳5期に、集落の中心的な場所にあたる二つの竪穴建物跡より椀形鍛冶滓等が出土した。その後も古墳末から古代初頭にかけて、建物跡や溝から鍛冶滓、羽口片、羽口溶解物の出土が続くが、鍛冶炉跡をはじめ、鍛冶に関連する遺構は確認できなかった。しかし、1期を迎える頃から鍛冶関連遺構が検出され始める。以下、時期を追って概観する。

1～2期 屋代遺跡群④f区、竪穴建物跡SB4823床面に焼土ブロック、炭化物が混入する地点が認められ、ピット1に鍛造剥片が付着した鍛冶滓を含め、鍛冶関連遺物が集中している(図197)。鍛冶炉状痕跡も認められるが上層の遺構に壊されていて、それ以上の調査は不可能であった。SB4823は出土土器から時期を特定することはできなかったが、隣接する掘立柱建物群と主軸方向が類似しており、1期前半に属する可能性がある。その場合、大規模な建物群に付属する鍛冶施設と見ることができよう(第2章第5節参照)。

⑤b区南寄りの竪穴建物跡SB5061の床面に、付属ピットを伴った鍛冶炉が検出された。SB5061はその主軸方向から1期後半にさかのぼる可能性がある。その場合、床面検出の鍛冶炉は、この時期の大規模建物群に付属する可能性がある。あるいは、2期まで継続使用されていたのかもしれない(第2章第5節参照)。さらに本建物跡埋土中より2期に属するものと考えられる鍛冶関連遺物、製錬関連遺物が出土している。これは、SB5061床面の鍛冶炉が廃棄された後も、引き続き周辺部に鍛冶炉が存在した可能性を示唆するものかもしれない。製錬関連遺物に関しては、その炉壁の形状より判断して、周辺に清水製鉄遺跡や松原遺跡に似た円形竪形製鉄炉の存在が推定される。

以上から、この時期④～⑥区では、周辺部に想定される製錬炉より鉄材の供給を受けて、精錬段階の作業とともに、刃物を鍛造するような鍛錬段階の進んだ工程にわたる鍛冶作業が実施されていたと考えられる。

3～5期 約70～80年間、鍛冶関連遺物は④～⑥区に僅

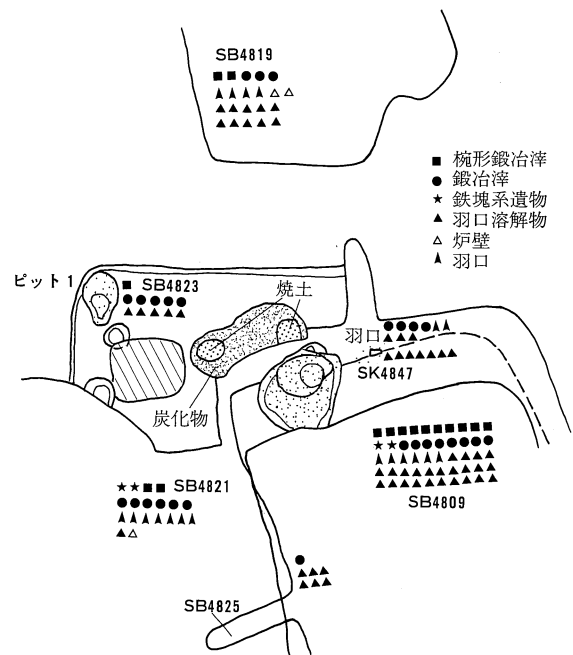


図197 屋代遺跡群④f区鍛冶関連遺物出土状況 (出土点数)

かに点在し、5期に入るとSB5037の羽口、鍛冶滓等、⑤b区に遺物が増え始める程度で過ぎる。

6期 更埴条里遺跡、屋代遺跡群全域にわたって出土遺物が激増する。その最も集中する④f地区、SB4819、4821、4825の鍛冶関連遺物出土状況を図197に示した。羽口、鍛造剥片の付着した遺物もあり、鍛冶遺構の存在を窺わせるが、その検出には至っていない。特徴的なことは、これ以降⑤区の遺構から出土する鍛冶関連遺物は減少傾向に向かう。

6～7期 前期に引き続き④f区、SK4847に遺物が集中する。遺構本体と、その周囲の採取土からは多量の鍛造剥片と粒状滓が検出された。周辺に鍛冶炉を含む鍛冶施設の存在が推定されるが、SB4809（7期後半）に壊されていて、全貌は掴めない。本遺構は排滓の一時的置き場（捨て場）であろうか。この時期の特徴点として、K地区、①地区に鍛冶関連遺物が出現し始める。

7期 ⑤b区竪穴建物跡SB5056床面の南東寄りに、25×20cmほどの楕円形の鍛冶炉状の遺構が認められるが遺構の性格は不明である。④f区7期後半の竪穴建物跡SB4809にもかなりの鍛冶関連遺物の出土が見られるものの、それ以上の確認はできなかった（図197）。

2 鍛冶専用大型建物に伴う鍛冶工房群

7期から8期前半にかけ更埴条里遺跡K地区、屋代遺跡群①区では、鍛冶作業が従来見られた竪穴建物内に一基の鍛冶炉を築き作業を営むという、小規模な農鍛冶型鍛冶形式から一変して、鍛冶作業専用の掘立柱建物や礎石建物が建てられ、内部には複数の炉が設けられて、大規模、組織的な操業が実施されるようになる。

(1) 更埴条里遺跡K地区、礎石建物跡ST918（鍛冶炉SF901）

ST918は7.2m×4.4mほどの礎石建物跡で、東北部床面に鍛冶施設が設けられ、南東部は上層の遺構に攪乱されている。建物西半分には施設跡は見られない。鍛冶炉は建物の東壁より1m強内側に設置され、関連施設が隣接する。鍛冶炉以外の他の遺構の性格は不明であるが、その位置関係からして、工人が鍛冶時に足を踏み入れる「足入れ穴」、金床台石置き場、排出滓を一時的に置く「排滓坑」、さらには、鑪羽口の設置場所と言うような施設である可能性が想定される。

本遺構は出土遺物から判断して、精練鍛冶から鍛錬鍛冶にわたる作業がなされていた工房と判断する。6～7期頃、竪穴建物内で行われていた鍛冶作業が一箇所に整理統合され、再編成された鍛冶専用工房と思われる。8期前半のこの段階、K地区では集落を構成する遺構が減少しており、ST918周辺では、隣接する竪穴住居SB9067だけに集約される（第2章第5節参照）。このことは、K地区内のこの地点が、鍛冶専用工房とその工人の住居？によって占められていた可能性が高い。

(2) 屋代遺跡群①区大型建物跡ST15・9・7鍛冶工房群

鍛冶専用建物は数度にわたって造り替えられ、加えて内部の鍛冶施設は激しく更新が繰り返されているため、遺構の形状と遺構間の関連性が掴みにくくなっている。さらに、遺構のかなりの部分が調査区域外であるため、一層その把握を困難にしているが、考えられる点を述べてみたい。

当時の施設の形状と、その相互の関係を比較的良好に示すものは、調査がなされた最も上面で、礎石建物跡ST7に付属するSF8、SK536・540と推定する。建物壁面より1.2m程内側に鍛冶炉（SF8）が構築され、その北側に接して深い土坑（SK536）、東側に接して浅い土坑（SK540）が三角形に設置されている。炉の周囲には炭化物が濃密度に広がり、鍛造剥片が検出されている。さらに、ST9段階では同時期と考えられる施設として、建物壁面より1.4m内側に鍛冶炉（SF11新）、深い土坑（SK538）、浅い土坑（SK537）が

三角形状を呈して置かれている（第2章第4節6、図23）。この配置は上記、更埴条里遺跡K地区の鍛冶炉に関しても同一である。

図198はSF8およびその関連遺構と茨城県鹿島町春内遺跡の連房式竪穴工房跡1号炉、ならびに付属ピットを対照させたものである。春内遺跡の場合は、炉に付属するピットは可能性として「鍛打する工人の足入れ穴」か「鉄滓の捨て場」が考えられるとしながら、さらに踏み込んで東側ピットを金床石の設置場所、南側の落ち込みを工人の作業位置と推定している（風間1995）。屋代遺跡群の場合、鍛冶炉に付属する土坑の性格は春内遺跡の場合のように特定できないが、「足入れ穴」「金床石置き場」などであろう。

次に考えられるのは、鍛冶炉とそれに付属する土坑群は同一建物内に複数基設置されていた可能性が高いということである。ST7においては、SF8北側に4～5mを隔てて鍛冶炉SF10が存在する（炉心部より東側は付属施設を含めて調査区域外）。ST9においても同様に、鍛冶炉SF11（新）の北3.5m～4mに鍛冶施設が認め

られる。その一部を成すSK535及びその周辺部は、鍛造剥片、粒状滓が最も濃密度に分布する地点の一つである。ST15も同様である。この様相を図23（54頁）においては「A」「B」として示した。

春内遺跡では29.4×5.5mという長い竪穴建物跡内に、22基の鍛冶炉が付属施設を伴って、一定の間隔を置いて両側に2列に分かれて並んでいる（風間1995）。屋代遺跡群本遺構群は建物跡東側の過半が調査区域外に及ぶため全貌の把握は出来ないが、少なくとも2基以上の鍛冶炉が設置された大規模な鍛冶工房が存在したといえよう。穴澤義功氏は、8世紀初頭、鍛冶遺構上特に東日本に顕著に現れる大きな変化を国衙工房型鍛冶と呼び、従来の、単一の鍛冶炉で数種の鍛冶作業を賄っていたものを農鍛冶型鍛冶工房としている（穴澤1994）。国衙工房型鍛冶炉とは、たびたび例に引いた春内遺跡のように、長大な建物内に複数の炉が並び設置された工場的大工房である。この遺跡は鹿島旧郡衙と鹿島神宮の造営のために操業されていたと考えられている（風間1995）。さらに茨城県では古代の国府、国分寺に隣接した石岡市の官衙の遺跡として知られる鹿ノ子C遺跡で大規模な鍛冶工房群が報告されている。これらの数十基の工房群が並ぶ遺跡は、その鉄生産が私的なものではなく、官の直接的な要請に基づいて営まれていたことを示すものと言われる（穴澤1994）。関東では他に群馬県前橋市の鳥羽遺跡、渋川市の中村遺跡、桐生市清水西遺跡が知られている。

この時期、屋代遺跡群の①区集落では、礎石建物や石帯を出土した竪穴建物などが存在している。こうした状況は、大型建物跡ST15・9・7に伴う鍛冶施設がK地区のそれとは異なり、有力な集落内の一面に配置された大規模な鍛冶工房であったことを示している。

3 課 題

9世紀中頃、更埴条里遺跡、屋代遺跡群では従来の、竪穴建物跡において個別的で小規模に営まれていた鍛冶操作が一大変革を遂げる。鍛冶専用の掘立柱建物、礎石建物が建てられ、内部には複数の鍛冶炉と広い作業場が設けられて、組織的で大規模な生産機構が形成され、大增産体制が確立し、8期前半に最盛期を迎え、そして姿を消していく。この変革を生んだ社会的背景は何か。また、その消滅を招いた理由は何か。今後その解明が期待される。

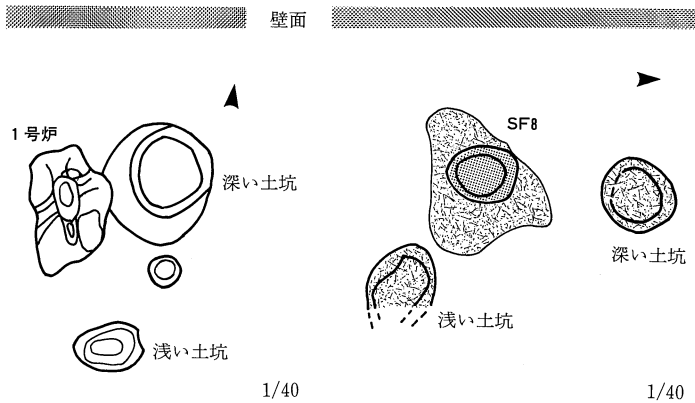


図198 春内遺跡1号炉 屋代遺跡群SF8対照図

今回の調査においては製錬炉や製錬に直接結びつく遺構の確認は出来なかった。先に、遺跡周辺部にその存在が想定されることを述べるに留まり、それ以上の追求はできなかった。また、それとともに鉄素材の供給源の課題にも迫り得なかった。最後に、これらの点について、整理段階より直接指導を仰いだ穴澤義功氏の指摘を参考にしてみとめとする。鉄源の砂鉄は流域山地の花崗岩や火山岩から供給された千曲川のものである。さらに、山地から供給された砂鉄は河川が平坦地に出合い、流れが屈曲する部分の内側に堆積する（今回、鍛造剥片等の検出用採取土より見いだされた砂鉄は角が摩耗した中流域独特の様相を呈する）。したがって、製鉄遺構は本遺跡の周辺部に留まらず、佐久から善光寺平に至る千曲川沿いに展開しているはずであり、現在までに見つかっているものは氷山の一角に過ぎない。今後の発掘調査により、漸次その姿が明白になっていくものと思われる。

引用参考文献

- 穴澤義功 1994「古代東国の鉄生産」『古代東国の産業』第2回企画展 栃木県立なす風土記の丘資料館
風間和秀 1995「検出された遺構と遺物、まとめ」『春内遺跡』（財）鹿島町文化スポーツ振興事業団

第7節 祭祀遺構と祭祀具集中廃棄 (SQ)

はじめに

本節では、屋代遺跡群⑥区で確認された祭祀遺構と考えられる湧水溝とSQとして取り上げた木製祭祀具の集中廃棄に焦点をあて、古代の祭祀について触れることとする。

1 祭祀遺構としての湧水溝

(1) 湧水の役割

⑥区で検出された人工の溝の多くは湧水が湧き出るポイントである湧水点を起点として掘られ、東西自然流路につながられている。また、湧水点を掘削した形跡も認められる(湧水坑)。湧水溝が掘られた目的について当初は、生活、灌漑用水なども視野に入れて調査を進めたが、水田面は自然流路よりレベルが高く、畦畔に設置された灌漑用水路の水が流路中に流れ込む状況がみられた。さらに、自然流路は堆積状況から湿地状となる時期が多かったと考えられ、⑥区の調査範囲においては自然流路から水田に取水された様子はみられない。よって湧水坑から流れ出す水が灌漑用水として利用された形跡はない。

また、湧水坑は埋没土からみて人為的に埋め戻されたことが窺え、坑内からは玉類、卜骨といった祭祀に関連する遺物が出土したことから湧水点および湧水坑は、生活に関わる水をを得る目的としてではなく、祭祀を行うために掘られたものと考えられる。その祭祀は湧水が不可欠なもので、溝はその湧水を自然流路に流し出すために掘られたものであったことが予想される。

(2) 湧水溝の分類

導水型祭祀遺構 古墳時代中期に造営されたSD7068・SX7038は、湧水を木樋によって導水する行為自体が祭祀において重要な意味をもつものと捉え、これを「導水型祭祀遺構」と分類した(宮島義和・寺内隆夫1996)。このように水を流す施設をもつ湧水溝は以下のものがあげられる。

SX7035 (図版171)：水門による貯水、水口からの導水。(第5水田対応層古段階)

SD7049 (図版174)：礫敷きの溝による導水。(第5水田対応層新段階)

SD7042 (図版176)：木樋による導水。(第5水田対応層新段階上層)

SD7038 (図版183)：水門による貯水、水口からの導水。(第4水田対応層)

これらは、SD7068・SX7038の系譜を引く「導水型祭祀遺構」と考えることができる。

湧水坑型祭祀遺構 湧水点および湧水坑を起点とする溝の掘り込みはみられるが、導水するための施設を特別にもたないものがみられる。湧水点は溝の底部に複数確認されることが多く、祭祀が行われる都度湧水を求めた掘削が行われた可能性がある。この場合は「導水型」とはやや異なり、湧き出す水自体に意味があるものと考えられ、これを「湧水坑型祭祀遺構」と分類する。「湧水坑型祭祀遺構」に含まれるのは以下の通りである。

SD7045=SD8032 (図版169)：P1～6、SX7036 (第5水田対応層古段階)

SD7062・SX7037 (図版175)：P1、2、SX7037 (第5水田対応層新段階下層)

SD7035 (図版180)：湧水坑は1カ所のみ確認 (第4水田対応層)

SD7030 (図版188)：P1～4 (第3水田対応層)

(3) 導水型と湧水坑型の変遷

変遷のグループ分け 湧水溝は本来の役割を終えて廃絶した後は徐々に埋没していくが、新たに別な湧水溝の掘削が行われている。その変遷の様子を各層位別に模式的に示したのが図199である。

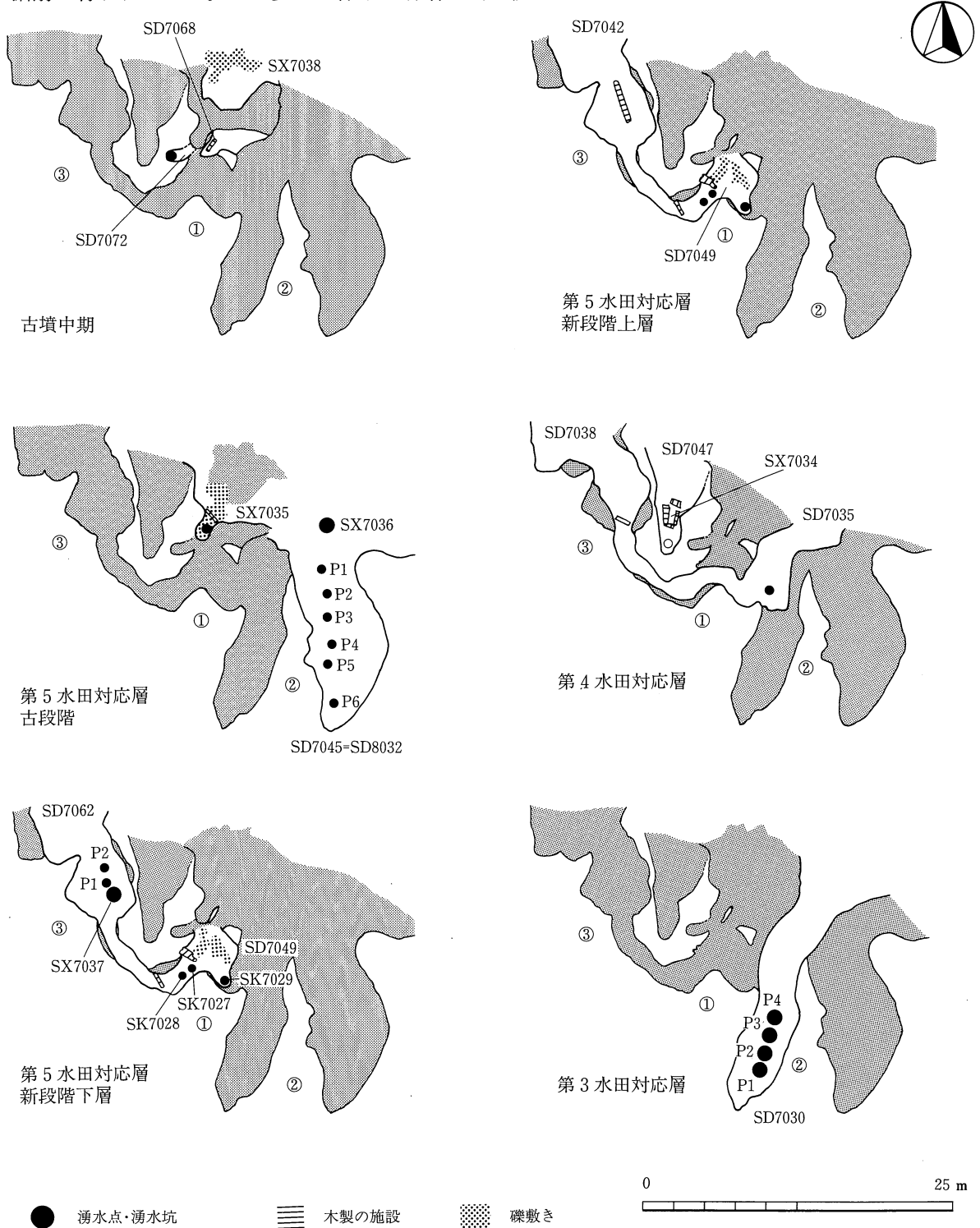


図199 屋代遺跡群⑥区湧水溝の変遷模式図

湧水溝の立地点は大きく3カ所が捉えられ、グループ分けすることができ、それぞれの発生段階から遺構の系譜を追うと表101のとおりになる。

①グループ 変遷グループの中央に位置する①グループは、古墳時代中期からの系譜を引く。SX7035に切られ全容が不明なSD7072を除き、それ以外は導水型である。第4水田対応層で遺構は途切れるが、そ

表101 立地別グループ内における湧水溝の変遷

	①グループ	②グループ	③グループ
古墳中期	SD7068・SX7038 導水型 ↓ 廃絶		
	SD7072 (分類不明) ↓ 廃絶		
第5水田対応層 古段階	SX7035 導水型 ↓ 廃絶	SD7045=SD8032 湧水坑型 ↓ 廃絶	
第5水田対応層 新段階下層	SD7049 導水型 ↓ ↓ ↓		SD7062・SX7037 湧水坑型 ↓ 廃絶
新段階上層	↓ ↓ 廃絶		SD7042 導水型 ↓ 廃絶
第4水田対応層		SD7035 湧水坑型 ↓ 廃絶	SD7038 導水型 ↓ 廃絶
第3水田対応層		SD7030 湧水坑型 ↓ 廃絶	

のやや西で検出された SD7047・SX7034があるいはその系譜を引くのかも知れない。第3水田対応層の段階では埋没によって平地となり、土坑群が検出されている。

②グループ ⑥区南側中央部に位置する②グループは湧水坑型のみが変遷する。湧水坑が埋め戻され、その機能が停止した後は湧水溝の埋没が進む。その過程で集落側から多量の遺物が廃棄される。さらに SD7045=SD8032、SD7030の窪地では SQ が多数確認され、祭祀具の廃棄場となっていたことがわかる。

③グループ ⑥区で最も西に位置する③グループは発生が遅く、第5水田対応層新段階からとなる。最古の SD7062・SX7037は湧水坑型で、特に SX7037は①グループの湧水坑 SX7036とよく似た遺構である。

SX7037および他の湧水坑が埋め戻された後は導水型が変遷する。しかしSD7042はSD7049と、SD7038はSD7035と溝でつながれており、一体の施設であったと考えられる。溝の埋没は自然堆積が主で、②グループの湧水溝のように目立って遺物が廃棄されたり、窪地が祭祀具の廃棄場となった形跡はない。おそらく湧水を常に導水した状態で埋没していったものと思われ、古墳時代中期の導水型祭祀遺構周辺が常に清浄に保たれていた点と共通する。

(4) 祭祀遺物

湧水坑型に関わる遺物 湧水溝で出土した祭祀に関わると思われる主な遺物は図201～203で示した。第5水田対応層新段階の下層までは湧水坑中から玉類が豊富に出土している。また、SD7045=SD8032で出土したト骨は、ここで行われた祭祀の性格を知る上での貴重な資料となる。さらに破碎された須恵器大甕の破片が複数の湧水点(P3・4・6)で確認されており、割られたト骨がSX7036とP2から出土した点からみても、湧水坑にはある種のグループがあったことが予想される。また、SD7062 P1で出土した大量の獣骨も特徴的な遺物である。湧水坑から出土した遺物は祭祀に関わって意図的に坑内に入れられた感強いが、第4水田対応層以後湧水坑からは目立った遺物の出土はみられなくなる。

導水型に関わる遺物 SX7035の湧水坑からは玉類の他に鍬身が出土し、周囲から浮子の可能性がある木製品が検出された(図版426)。遺物そのものからは祭祀との直接の関連は指摘できないが、他に多量の遺物が廃棄された様子がないことから祭祀遺構との関わりが考えらる。他に導水型祭祀遺構からは斎串、人形、刀形、舟形、琴形などが出土し、このように木製祭祀具がみられる点で湧水坑型とは異なる。しかし、斎串、人形以外は後述の祭祀具集中廃棄にはみられない遺物で、特に刀形は古墳中期のSD7068でも出土しており、共通点がみられる。

(5) 祭祀の性格

古墳時代中期に出現する導水型祭祀は、その前面を流れる千曲川旧河道と一体となり、水の流れ自体に儀礼的な意味があるものと想定した(宮島1998)。この場合まつる対象としては川が重要な位置をしめていたものと思われる。7世紀代に入っても導水型の伝統は継承されるが、この段階ではすでに千曲川本流は北へ移動しており祭祀遺構の前面には存在しない。同時に新たな湧水坑型祭祀という形態が加わり、第5水田対応層新段階からは導水型遺構と湧水坑型遺構が溝でつながっている点が注目される。時代が変遷するに従い、古来からの祭祀に新しい要素が加わり性格が変化していった可能性がある。

祭祀の対象が何であったかは難しい問題だが、ほぼ同時期に流路北側に造成される水田と決して無関係ではないように思う。湧水坑で出土したト骨は、ある種の吉兆を占ったものと考えられ、行われた祭祀が予祝的な性格を帯びることを示唆する。また、SX7035から出土した鍬身や浮子状の木製品からも生産活動との関連が窺え、さらにSD7062の多量の獣骨がもし犠牲獣的なものとする、やはり生産や豊穰に関わる祭祀が想定される。ただ、湧水が直接水田を潤す水源となるとは断定できない点に疑問が残る。当時の人々が湧水に対してどのような感覚をもっていたかがポイントになるだろう。

2 祭祀具集中廃棄(SQ)

(1) 祭祀具の組み合わせと廃棄地点の変遷

第5水田対応層古段階以降、祭祀に関わる道具と考えられる木製品(木形)が豊富に出土するようになる。その中で明らかに一括で廃棄された状況を示すSQに属する遺物は、祭祀において使用された道具立ての組み合わせと捉えることができる。その組み合わせと出土地点は図201～205に示した通りである。

第5 水田対応層古段階 (図201) : 「齋串」、「齋串・蛇形」、「馬形 A 類」の3種が認められ、SQ8003とSQ8004は獣骨を伴う。廃棄地点は全て自然流路内で、自然堤防傾斜部や湧水溝内には認められない。

第5 水田対応層新段階 (図202) : 「齋串」、「齋串・蛇形」、「齋串・馬形 A 類」、「齋串・馬形 B 類」、「蛇形」があり、SQ8007は獣骨を伴う。下層段階では流路中と流路中洲および導水型祭祀遺構である SD7049内の3カ所だが、上層では湧水溝 SD7045=SD8032が埋没した窪地に集中してみられる。この段階までは齋串のみのSQが非常に多いことがわかる。

第4 水田対応層 (図203) : 「齋串」、「齋串・穿孔板」、「齋串・蛇形」、「齋串・人形」、「齋串・人形・馬形 A 類」、「齋串・人形・馬形 A 類・穿孔板」、「齋串・人形・馬形 B 類、穿孔板」、「齋串・人形・馬形 A 類、馬形 B 類、鳥形」、「人形・馬形 A 類」とSQの数、種類ともに最大となる。またこの段階から人形を伴うSQが出現する点が特徴的である。廃棄地点は流路中、湧水溝 (SD7045=SD8032) の窪地の他に、流路南側の自然堤防傾斜面が加わる。

第3 水田対応層 (図204) : 「齋串」、「齋串・人形」、「齋串・馬形 A 類」、「齋串・人形・馬形 A 類」、「齋串・蛇形・穿孔板」、「馬形 A 類・穿孔板」、「蛇形」、「蛇形・馬形 B 類」がある。この段階で祭祀具の出土量は最大となるが、SQの数と種類は逆にやや減少する傾向がある。廃棄地点は流路中、湧水溝 (SD7030) の窪地、流路南側傾斜部の他に、流路北側の水田面への傾斜部が加わる。それまでSQの廃棄場であったSD7045=SD8032の窪地にはみられない。

第2 水田対応層 (図205) : SQは激減し、組み合わせも「齋串」、「馬形 A 類」が1カ所ずつ流路中にみられるのみとなる。湧水溝 SD7038の窪地が残るが廃棄場所とはならない。新たな湧水溝の掘削も行われず、前段階と比べ大きな変化がみられる。

(2) 組み合わせのもつ意味

最古のSQはSD8041の1層で確認されたSQ8001だが、それより下層であるSD8041の5～3層ですでに齋串、人形、馬形 B 類が出土している。これらは集中廃棄の状態で捉えることはできず、このような木製祭祀具が取り入れられた当初の廃棄法の一面を示すものと考えられ、以後も多くの祭祀具が単体で廃棄された状況で出土している。しかし、木製祭祀具が組み合わせによって使用されたのも事実である。この組み合わせにはどのような意味があるのだろうか。

組み合わせの画期 7世紀後半代にあたる第5水田対応層までは組み合わせの種類が非常に少ない。SQに画期がみられるのは8世紀初頭前後にあたる第4水田対応層で、人形がSQに加わるにより組み合わせの種類が一気に増加する。おそらくこの段階で、人形を使用する祭祀のあり方が体系化されたものと考えられ、馬形や齋串も人形と組み合わせることによって、それ以前にはなかったある種の役割が付加されたものと思われる。しかし、これ以前にみられた組み合わせが消滅したわけではなく、8世紀段階でも7世紀型の組み合わせが存続している。特に蛇形が人形と組み合わせることがない点が注目される。

祭祀の多面性 このようにみると、木製祭祀具を使用する祭祀全てが同質のものとは考えられない。単体で使用する場合、さらに組み合わせる場合はその種類によって、まつる対象や意味が異なる可能性がある。またSQによって同一の祭祀具の形状や細部の加工に違いがあり、このことは祭祀具を生産する人、さらには祭祀を行う人 (あるいは集団) の相違を示すのかもしれない。

(3) SQ 出土地点の特徴

置き去られる祭祀具 木製祭祀具の出土状況については「廃棄」という表現を使っているが、SQのようにまとまって出土する場合は、まとまりをもたず流路全域に広がって出土する場合と比べ廃棄の意味が異

なるように思う。少なくともSQの場合は、人が祭祀具をもってその場へ足を運んでいるのであり、捨てるというより置き去りにするという表現がより適合する。これは湧水坑内に玉類やト骨を意図的に入れるような場合とはやや異なるが、祭祀具を置く場所の意識は存在している。すなわちSQは祭祀具の組み合わせとともに、それが位置する場所にも重要な意味があると思われる。

置き去る空間 祭祀具が流路全域に広がって出土している場合は、廃棄の対象となる場が広がったことがわかる。これに対しSQ全体の配置をみると、各段階ともに当時存在していた湧水溝より東に集中していることがわかる。第3水田対応層のSQ8036～8039はSD7030の中であるが、これらが廃棄された段階ではすでに底部の湧水坑は埋め戻され、溝も埋没して窪地の状態となっている。第4水田対応層のSQ8032も同様である。わずかな例外はあるが、湧水溝の立地点からはずれる東側一帯が木製祭祀具を組み合わせる状態で置き去る空間として意識されていたと考えられる。この空間の中でさらに置き場に相違があり、それぞれに意味があったのではないだろうか。例えばSQ8013と8014はともに蛇形をもつが、第5水田対応層新段階の下層と上層の隔たりがあっても出土地点は流路中の中洲であり、ポイントもほとんど一致している。これを含め「蛇形」「齋串・蛇形」のSQは流路内での出土が主であり、蛇形を含む祭祀具の置き場の共通性が認められる。

山形県俵田遺跡では人形、馬形、齋串、刀形、人面墨書土器などが折り重なって出土した地点(SM60)が確認されている(図200)。これらの配置から、祭場としての形を残した状態と判断している(山形県教育委員会1984)。屋代遺跡群の場合も同様に、湧水溝東側の空間が木製祭祀具を使用して行う祭祀の場であったのかもしれない。

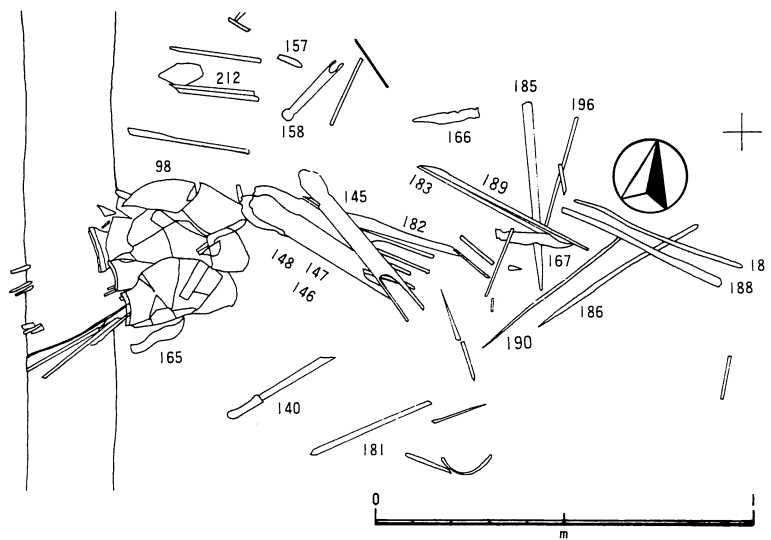


図200 俵田遺跡 SM60 遺物出土状況

(4) 祭祀の性格

齋串、人形、馬形といった木製祭祀具は、大宝律令制定に伴って体系化された国家的祭祀(律令的祭祀)に関わるものであると判断されることが多い。しかし、第3節「木製祭祀具の変遷」で述べたように、7世紀代にみられる屋代の木製祭祀具は都城とは異なった変遷をたどる。馬形の出土例が豊富な点や蛇形という特殊な祭祀具が存在する点などから考えても、都城で体系化された祭祀具が流入したとは現時点では考えにくい。どのような経過によって屋代の地にもたらされたかは大きな課題だが、この段階での木製祭祀具を使用する祭祀は、国家によって体系化される以前の古い要素をもつものと思われる。

しかし人形が祭祀具の組み合わせに加わる第4水田対応層は、時期的に大宝律令制定と前後する。この時期は都城でも人形の出土例が増加し、屋代の人形の形状もそれらと大きな相違点がないことから、この時点で木製祭祀具を使用する祭祀に新たな要素が加わったと考えることができるだろう。ここに国家によって体系化された祭祀との関わりが読みとれるかもしれない。しかし、同時に古い段階での組み合わせが残存している点も注目する必要がある。

3 課 題

祭祀の主体 屋代遺跡群⑥区において行われた祭祀は、遺構の状況や遺物の出土量からみてかなり大規模なものであったと考えられる。湧水に関わる祭祀は、溝、湧水坑の掘削、導水施設の設営などの工事を必要とし、斎串、人形、馬形、蛇形などの木製祭祀具はその製作にあたって、材（サワラが主）のまとまった供給を必要とする。また、湧水溝と木製祭祀具の集中廃棄の空間の使い分けが当初から行われていた点に、祭祀を司る大きな力が働いていたことが窺える。このことから考えて、かなりの勢力を有する存在が祭祀の主体であることが十分に想定できる。それは祭祀遺構の伝統性からみて、古墳時代中期に導水型祭祀を行った首長的存在の系譜をひき、自然流路北側の水田の造成にも大きく関わったものと考えられる。導水型祭祀という伝統を保ち、7世紀の段階で湧水坑型祭祀を加えるとともに木製祭祀具を取り入れるというように、主導性をもって祭祀を体系化した様子がみられる。

しかし、8世紀初頭前後の木製祭祀具にみられる変化は、それまでの在地主導的な祭祀の中に中央の影響が入ってきたことを窺わせる。8世紀前半の段階では木製祭祀具の量が最大になるのに対し、導水型祭祀遺構は消滅し、湧水坑型祭祀遺構のみとなる。さらに、湧水坑からは玉類やト骨といった祭祀遺物が出土しなくなる。8世紀初頭以降は出土する木簡の量が急増し、官衙施設の存在を色濃く示す時期と重なる。祭祀にみられる変化は、この官衙施設の整備と稼働に深く関わるものと考えられる。9世紀前半では湧水に関わる祭祀遺構がなくなり、木製祭祀具の出土量も激減する。そしてこの後盛土が行われ、⑥区全域が水田化されることによって、祭祀の空間そのものが消滅する。

このように⑥区にみられる変化はそのまま古代の屋代遺跡群周辺の変化を示す資料となるだろう。これに更埴条里遺跡・屋代遺跡群全域の水田や集落の変遷を加えて検討することにより、古代の地域社会のあり方を多面的に解明していくことが今後の大きな課題といえる。

引用文献

宮島義和・寺内隆夫 1996「屋代遺跡群」『水辺の祭祀』日本考古学協会三重県実行委員会

宮島義和 1998「第5章第5節古墳時代の祭祀」『更埴条里・屋代遺跡群—弥生・古墳時代編』長野県埋蔵文化財センター

山形県教育委員会 1984『依田遺跡第2次発掘調査報告書』

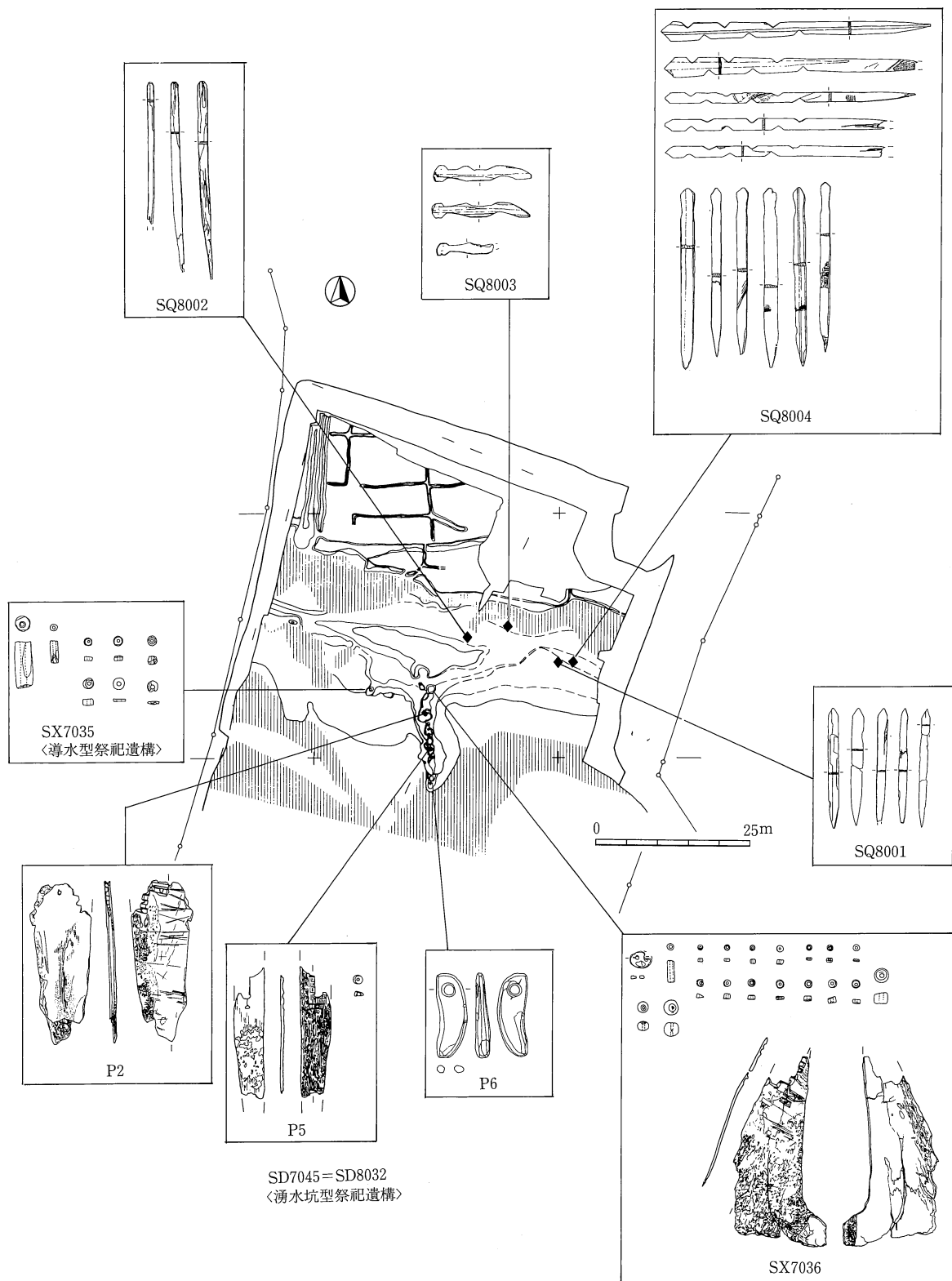


図201 第5水田対応層古段階 祭祀遺構SQ配置図

図201 第5水田対応層古段階 祭祀遺構 SQ配置図

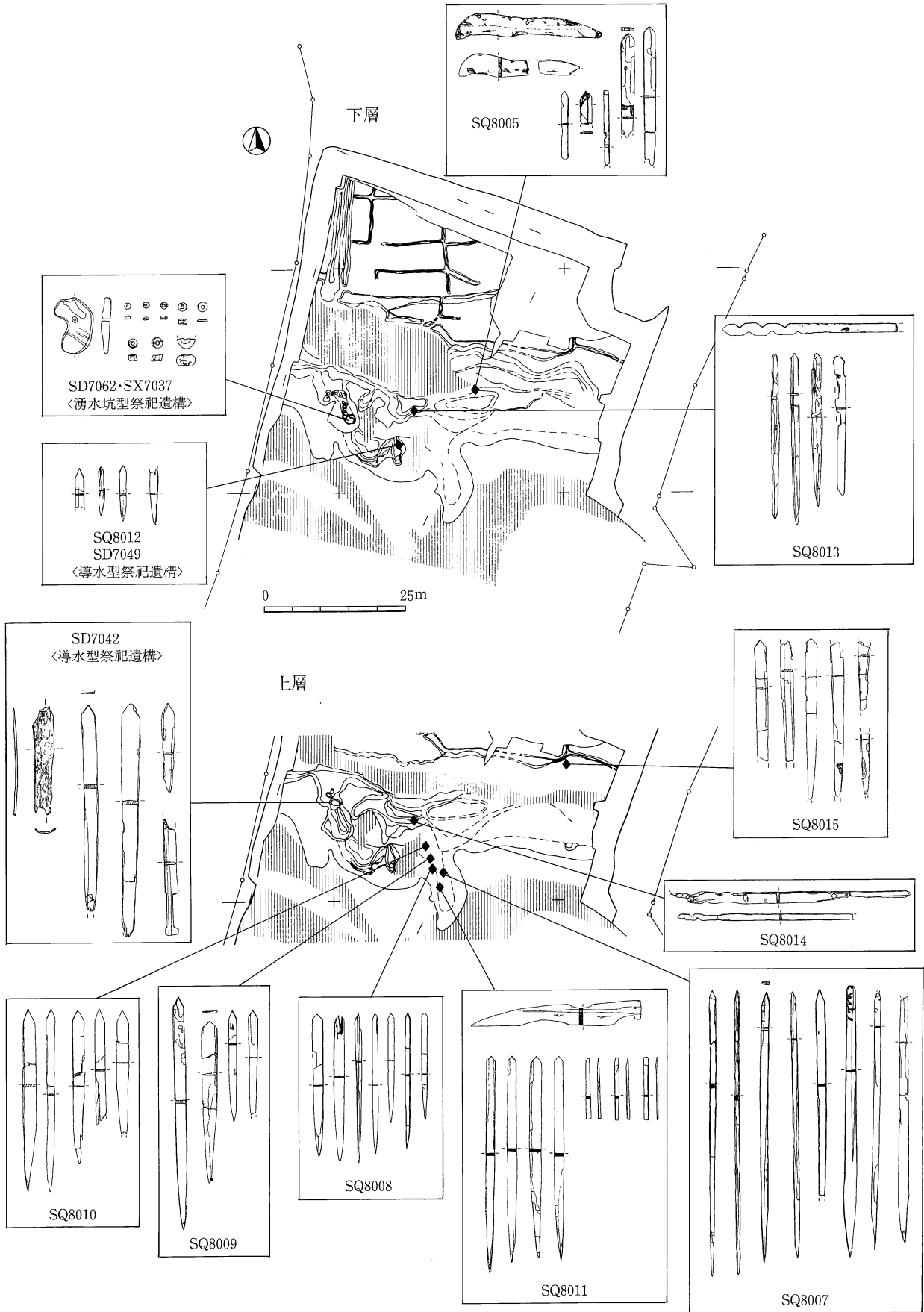


図202 第5水田対応層新段階 祭祀遺構 SQ配置図

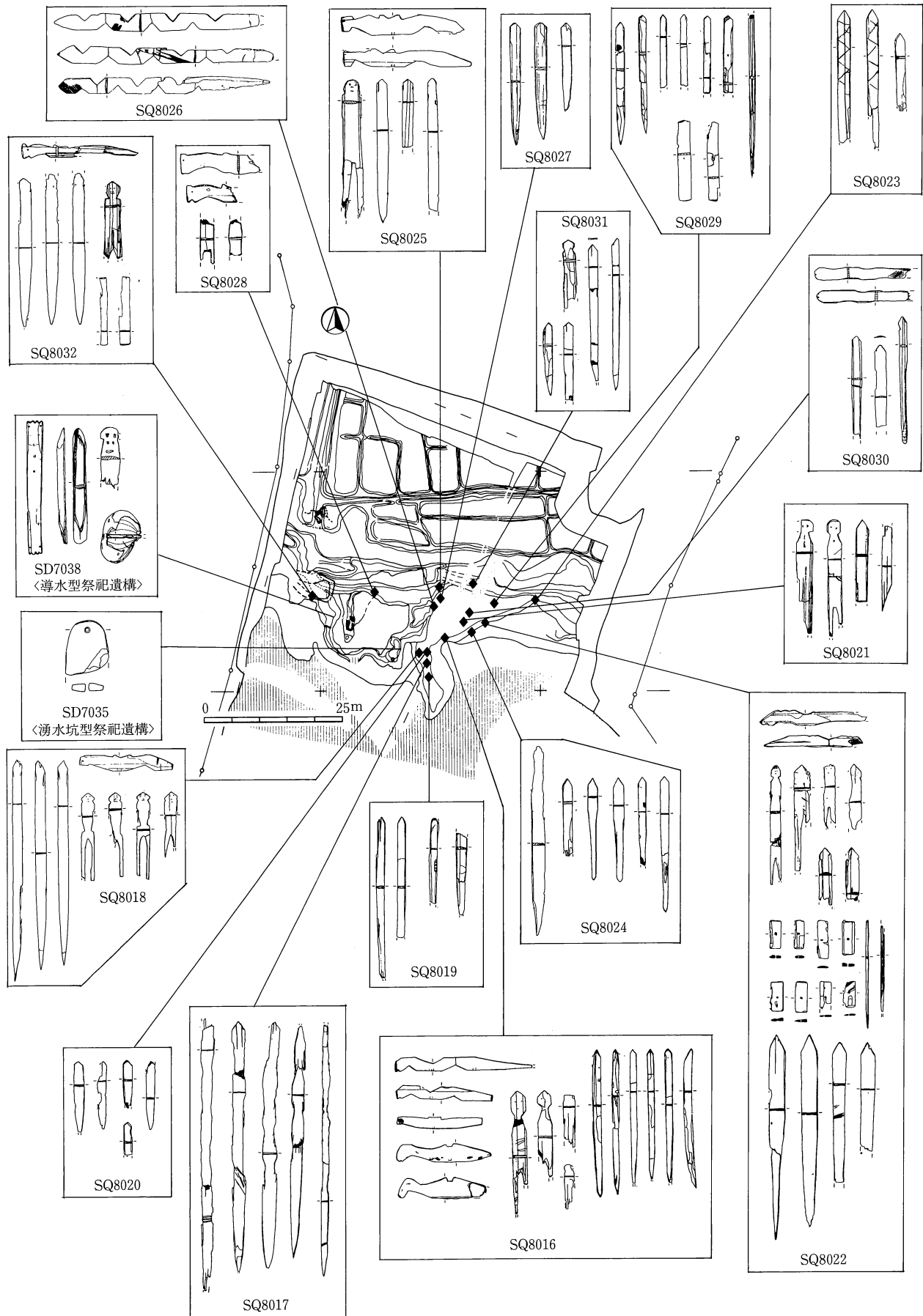


図203 第4水田対応層 祭祀遺構 SQ配置図

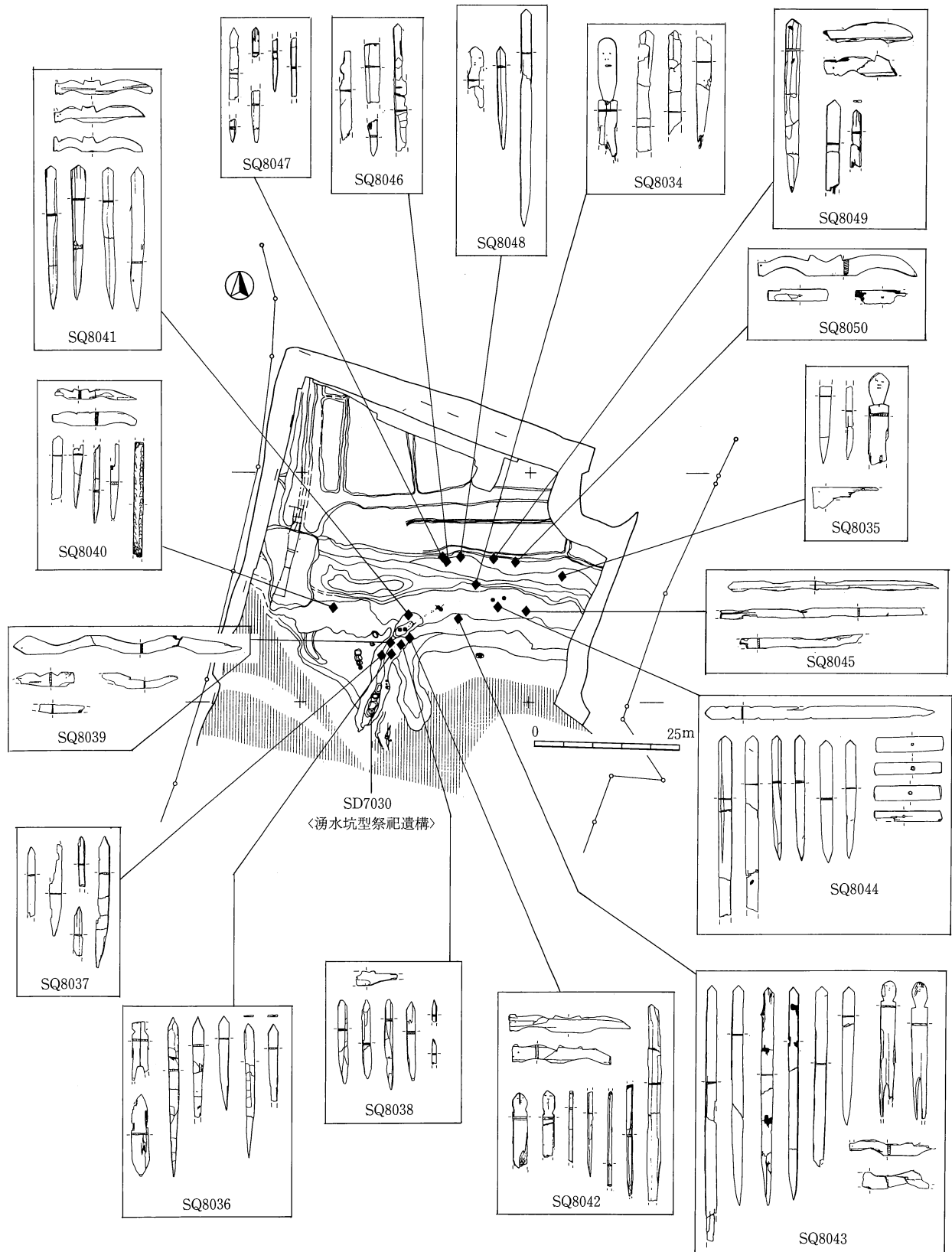


図204 第3水田対応層 祭祀遺構 SQ配置図



図205 第2水田対応層 SQ配置図

第8節 条里水田の成立と展開

本節では有明山山裾から屋代遺跡群⑥区に至る南北約2kmに展開する条里水田の様相について触れることとする。

1 条里型地割について

更埴条里遺跡・屋代遺跡群の条里水田は、南北大畦と東西大畦により坪区画が形成されている。南北大畦の主軸はN4~9°Wで、条里基準線は座標北から4~9°西に振れる。屋代遺跡群④区の南北大畦はさらに西に振れる。

まず後背湿地I群に位置する更埴条里遺跡では、①4.5~5.0m幅、②1.8~2.1m幅、③1.4m幅以下の3種類の大畦(東西)がある。②規模の大畦が最も多く、①に属する大畦にはSC1002がある。南北大畦は1.2~1.8m規模で、東西大畦よりやや小規模である。砂層で埋没する直前(9世紀第4四半期)の土地利用は、有明山山裾の更埴条里遺跡A地区からJ地区東西大畦SC1002より約30m北方まで水田域が広がり、K地区北半部に集落域が展開する。K地区南北溝SD936は、J地区南北半折畦畔の延長上に位置しており、条里型地割に規制された集落であったことを示している。

坪内区画は、南北50~56m、東西20~23m規模の南北に細長い田面が基本型で、一町四方を南北二等分、東西五分する、所謂「半折型」を示している。半折内部は水田面の勾配により細分している。水田面が東西方向に傾斜する更埴条里遺跡F地区では半折田面を東西に二分しており、南北二等分、東西10等分する水田区画を示している。

一方、現五十里川以北、自然堤防I群に位置する屋代遺跡群では坪境が①~④区に存在し、④区までは

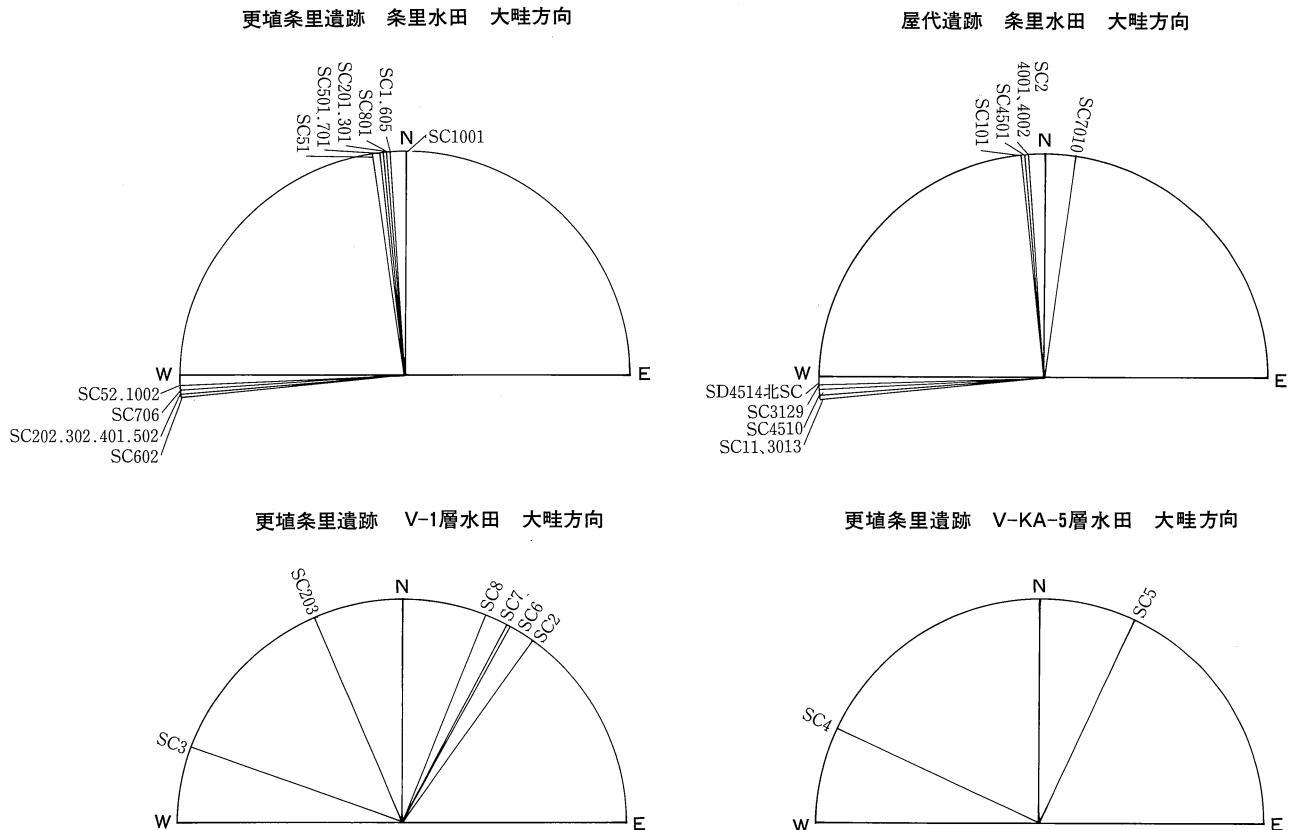


図206 条里水田、V-1層水田、V-KA-5層水田の大畦方向

更埴条里遺跡と同一基準の条里坪境線が設定されている。④区が条里型地割の北限である。この地割内の①f・g区と③a区(南東)には集落が展開する。

①・②区では、①区東西大畦 SC11、②区 SC218、SC137が一町間隔で配置されている。①区集落は SC11と SC218内を南北二等分する半折畦畔以南に限定され、集落が条里区画に規制されていたことを示している。さらに②区北側では半折一区画を単位とした畠が存在する。一方、③区には②区東西大畦 SC137の約105m北に位置する SC3013と、さらに約104m北方に位置する SC3118がある。東西坪境線は①・②区と同一基準で設定されている。坪内には集落、水田、畠が存在し、土地利用の変化する位置に②区北西隅から④区に向かう主要水路(SD239・3032・3243・3244など)と、分岐して水田へ配水する複数の水路が配置されている。坪内は地形の高まりを集落または畠に、それ以外を水田としており複雑な土地利用である。

今回の調査では、坪内は南北二等分、東西五分する、いわゆる「半折型」が基本で、傾斜に起因して細分されていることが確認された。更埴条里遺跡は昭和36年から40年に発掘調査が実施され「長地・半折の折衷型」(長野県教委1968)と理解されたことは周知のことであるが、調査地点(408地点)は更埴条里遺跡 E・F 地区のような南北二等分、東西10等分する水田区画であった可能性が高い。さらに408地点と馬口遺跡(更埴市教委調査)の水田区画(南北線)にズレが生じているとの指摘(佐藤信之1998)があるが、これは半折を東西に二等分した田面に相当すると解釈できる。両者は同一基準で設定された区画である。

2 条里水田の施工時期と埋没時期

平安砂層(Ⅲ-2層)で被覆された条里水田の埋没時期については、既存の調査で9世紀後半の年代が与えられた^(註1)。今回の調査では、洪水の性格が千曲川の溢流氾濫であることが明らかにされ^(註2)、砂層出土土器と覆土に洪水砂をもつ更埴条里遺跡 K 地区住居跡出土土器から、埋没時期を9世紀第4四半期(古代8期)に特定できた。被覆砂層が仁和4(888)年の自然災害に限りなく近いことを示す資料を得ることができた。ところが条里施工年代については、資料が乏しく不明であった。更埴条里遺跡と屋代遺跡群では、水田面と水田層(Ⅳ-1層)から土師器杯・須恵器杯・軟質須恵器杯・灰釉陶器碗・長頸壺などが多く出土している。大半は破片であり、水田層出土土器は耕作時に混入したものと考えられる。これらの遺物は、①古代1期前後、②古代0～5期前半、③古代7期～8期、の3時期に分かれる。特に古代7期～8期の遺物が多数を占めており、条里水田が古代7期から8期にかけて存続したことを示している。ところが、水田層下層のⅥ層では3条の東西溝(SD401・1027・1032・1033・1036など)が確認され、SD1032から古代6期、SD1036から古代6～7期の土器が出土している。さらに集落域(更埴条里遺跡 K 地区)を縦断する条里水田南北大畦延長上の SD974は古代6期で、同時期の竪穴住居跡(SB9001・9002・9004・9006)が正方位を示し、規格性をもつ配置が見られる。屋代遺跡群①区では SD974延長線上に位置し、条里水田南北大畦(SC03)直下で見つかった SD32は古代5～6期である。更埴条里遺跡 D 地区から屋代遺跡群①区の範囲は古代6期に条里型地割(正方位)が出現したことを示している。なお6期以前の条里プラン(金田1993)の存在については不明である。

3 条里水田とⅤ層水田について

有明山山裾に近い更埴条里遺跡 A～C 地区では条里水田下層でⅤ層水田が確認されている。そこで本項では両水田の主軸と時期について検討を加えることとする。

Ⅴ層水田については第2章で前述したが、Ⅴ-KA-1層水田は黒色泥炭層に覆われた埋没水田で、基軸畦畔は座標北から30°程東に振れ、山裾から北東に傾斜する地形に沿う細長い区画を形成する。山裾の湧

水を利用し傾斜に合わせて配水した可能性が高い水田である。遺物はV層とV-KA-1層水田面と大畦SC03から古代7期の須恵器杯が出土しており、9世紀第2四半期の埋没が考えられる。ところがV層水田を覆う泥炭層を母材とした条里水田は正方位を示し、V層水田とは42°程の主軸のズレがある。条里水田がV層水田の復旧型水田ではないことは明らかである。更埴条里遺跡A～C地区の範囲では、V層水田埋没から条里水田耕作開始までの9世紀第2四半期から第3四半期頃に、水田区画に大きな変革が認められる。一方、D地区以北、特に自然堤防に近接するK地区周辺では古代6期から古代7期まで正方位条里が施工されている。

以上のことは、古代6期から古代7期まで正方位条里が更埴条里遺跡D地区以北に施工され、C地区以南は座標北から30°程東に振れる異方向区画が存在したことが明確である。9世紀第2四半期頃は主軸が異なる水田区画が並存した可能性が高い。そしてV層水田が埋没した9世紀第2四半期以降に条里が山裾まで広がり、更埴条里・屋代遺跡群全域に条里区画が展開したと考えられる。

4 大畦(坪)間距離と半折距離について(条里の測量基準値)

更埴条里遺跡と屋代遺跡群では、南北大畦と東西大畦の交点が10地点確認された。大畦交点(真心)の国家座標から坪境距離を算出したものが図版220・221である^(註3)。なお、坪境線に位置するI地区の蛇田堰(圃場整備前)については推定値として算出した。それによると、坪境間距離には108.296m～112.650mの幅があった。平均値は109.035mである。一町を唐尺360尺とすると、30.287cmが算出される。この数値は唐大尺(約29.7cm)に酷似し(新井1992)、条里水田の測量基準値となっている。なお、東西大畦位置に小畦が存在するA地区とB地区大畦交点間(114.621m)と蛇田堰下とJ地区SC1002間(SC1002内法110.557m、真心112.650m)でやや異なる数値が認められた。前者についてはV層水田埋没後に延長された坪境線との認識、後者はSC1002内法距離が蛇田堰以南の大畦真心間距離と酷似することから、集落域と水田域の境界に位置し卓越する規模をもつSC1002は、坪境の設定段階で除外されていたと認識がされる。また、屋代遺跡群では現五十里川下に想定される坪境線とSC11間は110.214m(推定値)、SC11とSC218間は106.271mである。更埴条里遺跡の坪境間距離と差異は見られず、坪境線は自然堤防と後背湿地は同一基準で設定されている。計測値から条里坪境設定の基準線を導き出すことは困難であるが、東西方向の坪境はSC1002を基準として後背湿地側(更埴条里)と自然堤防側(屋代遺跡群)の2方向に設定された可能性が考えられる。

坪内については、半折区画の長辺・短辺を計測したものが図版220・221である。それによると、更埴条里・屋代遺跡群の半折田面(内法)は長辺51.7～57.6m、短辺20.4～22.8m規模である。これを尺に換算すると、基本的な規模は長辺180尺、短辺70尺を示す。坪単位に見ると、南北二等分的位置に半折畦畔があり長辺180尺の田面が南北に並ぶ坪と、半折畦畔が5尺ズレる坪がある。後者は175尺と185尺の田面が並ぶ坪となっている。

5 洪水直前の田面と洪水の季節

埋没直前の田面では、多くの耕作痕が確認された。特徴的なものは、①水田面の凹凸が著しく、ブロック状の土塊(耕作土)が分布する田面。②15～20cm間隔で幅10～12cm、深さ約5cmの平行する溝が8～10条、列状に並ぶ田面。③水田面は平坦で無数の窪みが分布する田面。④畝状遺構がある区画で水田面より一段高い場所に分布。以上の4つが認められる。①は荒起し段階、②は馬鍬等での代掻き段階、④は畝が推定され、洪水直前の農作業中の区画は①・②・④と認識される。③は農作業の過程が不明である。②田面のなかで更埴条里遺跡F地区(SC502脇)と屋代遺跡群②区(SC137脇)では、調査区西側から畦畔交点

に設けた水口まで溝を掘削し田面に配水した形跡がある。さらに②田面には畦畔が途切れた水口が少ない。この状況は、②田面が最も農作業が進行した区画と認識できる。さらに坪単位で見ると、耕作域は散在的に分布し田面の様子は半折単位もしくは田面単位で異なる。田面の相違は、坪単位で農作業が進行したのではなく、むしろ田面単位で耕作が進行していたこと、さらに坪内に耕作田面と非耕作田面が存在したことを示している。

洪水の季節であるが、条里水田の農作業が田起し、もしくは代掻き段階で、かつ現在のように麦などの二毛作がなかったとの仮定に立脚すると、春から初夏にかけての季節が想定される。

6 条里水田の水利形態

条里水田の用水施設として、更埴条里遺跡 C 地区 SC202、蛇田堰（推定）、屋代遺跡群①区 SD64・105、②区 SC218、SD239、③区 SD3032群、④区 SD4514、⑥区 SC7010がある。基本的に調査区西側から取水している。⑥区では北側の窪河原遺跡方向と南側の SD4514から取水している。用水施設から想定される水回しは5ブロックに分かれ、坪単位に配水・排水が行われたと考えられる。

- ① 更埴条里遺跡 A 地区は山裾から北東方向への畦越し灌漑。
- ② 更埴条里遺跡 B・C 地区（SC202以南）は SC202から取水し南側に向けて畦越し灌漑。
- ③ 更埴条里遺跡 C（SC202以北）～E 地区は集落域に近い J・K 地区の境界付近から南東側に向けて畦越し灌漑。
- ④ 屋代遺跡群①～④区は①区集落域を囲む SD64・105、②区 SC218・SD239、③区 SD3032群で取水し東側に向けて畦越し灌漑。
- ⑤ 屋代遺跡群⑥区は④区調査区西側から調査区内に入り現下条堰直下を流れる SD4514と SC7010に伴う水路により取水する。水田内は東側に向けて畦越し灌漑。

更埴条里遺跡では東西方向の水路は SC202のみである。圃場整備前の蛇田堰下に水路を伴う大畦が存在したとしても、東西水路はきわめて少ない。江戸時代の絵図^(註4)には、東西方向の堰として下町田堰（K 地区南側）、蛇田堰（I 地区）、あら堰（D 地区）、山裾の堰（A1・2地区境界）、南北方向の堰として蛇田堰（I 地区西側）から南下する堰がある。下町田堰は蛇田堰から分岐して自然堤防上の水田に配水する堰である。被覆砂層堆積後に同位置に溝が掘削されるが、条里水田まで遡る溝はない。さらに条里水田南北大畦は水路を伴わず、A 地区の水路は条里水田耕作時には存在しない。要するに、表層条里の水路は洪水後に掘削された水路を踏襲したものである。この状況から、条里水田耕作時は水路網が完備されず、坪単位の水回しが畦越し灌漑でなされていたと解釈される。一方、屋代遺跡群では、表層条里で確認される下条堰下には主要水路（SD4514など）が存在するなど自然堤防上の水田に水を供給するために水路網が発達している。主要水路である②区 SD239群、③区 SD3032群がVI層水田の水路と同位置（河西1998）であり、古墳時代のものを踏襲した水路網であることが解釈できる。

7 J 地区 SC1002について

東西大畦のなかで SC1002は4.5m幅をもち卓越した規模を示す。古代6期までは北側に大規模な溝 SD1032を伴う構造である。同規模の大畦は屋代遺跡群北中原遺跡^(註5)でも確認されている。SC1002上面に明確な硬化面はないが、規模的に交通路として利用された可能性がある。南北方向の坪境線は北中原遺跡1号畦畔を基準^(註6)として西方向に、東西坪境線は本址を基準に後背湿地と自然堤防（屋代④区を北限）の両側に設定された可能性が高い。本址は、砂層被覆後に大畦両側に溝が掘削されている。溝と SC1002の主軸には6°程のズレがあり、洪水後は条里基準線がズレて復旧されたと解釈できる。

註

- 1 1961～1964年の総合学術調査では、条里水田を埋める砂層を『類聚三代格』に記載された仁和4（888）年の大洪水に比定（長野県教育委員会1968）。馬口遺跡周辺での調査成果から、佐藤信之氏は9世紀後半頃に比定（佐藤1990）している。
- 2 発掘時に土層断面を観察した立命館大学高橋学氏の指摘。
- 3 環境間距離の計測方法は、木全敬蔵1987「条里地割の計測と解析」（『奈良県史』第4巻・条里制）によった。
- 4 文政9年絵図（更埴市教育委員会所蔵）
- 5 更埴市教育委員会が調査した北中原遺跡1号畦畔が該当する。
- 6 佐藤信之氏（佐藤1990）は1号畦畔を条里地割の西限と指摘。

参考文献

- 新井 宏 1992『まぼろしの古代尺—高麗尺はなかった—』
- 河西克造 1998「VI層水田と条里水田の水利形態」『更埴条里遺跡・屋代遺跡群—弥生・古墳時代編—』
- 金田章裕 1993「条里プランの成立と展開」『古代日本の景観』所収
- 佐藤信之 1988『屋代遺跡群北中原遺跡II』更埴市教育委員会
- 佐藤信之 1990「長野県更埴条里水田址の最近の調査から」『条里制研究』6号
- 長野県教育委員会 1968『地下に発見された更埴市条里遺構の研究』

第9節 古代の環境と開発

1 更埴条里遺跡・屋代遺跡群の環境史（2）

国立歴史民俗博物館歴史研究部

辻 誠一郎

開発の時代 更埴条里遺跡・屋代遺跡群の環境史は、古い方から、泥の時代（七ツ石層の堆積期）、砂礫の時代（反町層の堆積期）、氾濫・埋積の時代（屋代層下部層の堆積期）、開発の時代（屋代層中・上部層の堆積期）に区分することができるが、最後の時代すなわち開発の時代は弥生時代以降にあたると見なされ、遺跡発掘調査によって描き出された考古学的所見および歴史学的な解析からは、この地域がとくに農業一次生産と林産、および居住と政治的活動のための施設などの構築によって、大々的かつ総合的な土地改変が押し進められた時代として位置づけることができる。ここでは、広域的・局所的な生態系の復元をとおして見えてくるこの地域および特定域における人と自然のかかわり方を、いくつかの焦点にしばって考えてみることにしよう。

土地改変と生態系の変化 この地域における稲作・畑作を主体にした農耕地開発をともなう農業一次生産の開始時期・年代にはまだ多少の不明な点もあるが、弥生時代の始まりかそれに多少先行する可能性があるとして大きく食い違うことはない。これによる土地改変と生産者の居住にともなう土地改変は平野部を中心に進められ、とくに低地一帯の改変は水田遺構その他の施設の構築によって明らかになっている。

さまざまな植物遺体群から復元される遺跡とその周辺域の植生は、開発が集中的に行われる弥生時代から古墳時代にかけて大きく改変されたことを示している。すなわち、土地的な乾燥域に適したケヤキ、カツラ、アサダ、クリ、カエデ属などの落葉広葉樹を主とする低地域の森林植生は、開発によって大きく失われ、水田・畑という農耕地および居住域に改変されていった。屋代遺跡群⑥区における祭祀遺構と見られた溝・流路一帯では、古墳時代にすでに樹木を欠き、多年生の草本にも乏しく、水辺にも水湿地生草本がほとんどない開けた景観が復元されている。周辺域からもたらされる花粉群の内容も乏しくなり、樹木ではモミ属やツガ属が一見目立つようになるものの、草本の卓越は低地一帯だけでなく、周辺域の山地においてさえ森林植生が乏しくなったことを示唆している。針葉樹には他にカヤ、イヌガヤ、マツ属（ニョウマツ類である複雑管束亜属）が見られるようになるが、縄文時代後半期に起こり、縄文晩期から弥生前期に顕著となる気候の寒冷化も影響したと見られるが、それだけでなく、開発による山地斜面の不安定化と土壌流出によって増加が促された可能性も考えておかななくてはならない。洪水を指標すると見なされている砂を主とした粗粒碎屑物の度々の供給は、山地斜面の削剝が起こりやすい条件が形成されたためと考えることもできるのである。

モモ・オニグルミ・ヒョウタンと祭祀の場 屋代遺跡群⑥区では、5世紀後半頃にはすでに流路の斜面において湧水を利用した祭祀の場が作られた。その後7世紀後半には水田も営まれるようになり、湧水から流路へ流れ出る溝も作られた。このような流路を中心にした水田および溝・湧水からなる祭祀の場は平安時代まで維持されたことが明らかになっている。この流路と溝からは、さまざまな動・植物遺体群が検出されているが、植物遺体群の中で特異な産出状況を示すモモ核、オニグルミ核、およびヒョウタン果実と祭祀とのかかわりについて考えておこう。

植物遺体群の中で、産出個数が多く、かつまとまった産出状況を示すものに、モモ核とオニグルミ核がある。モモ核は完形で産する頻度が高いが、人為で半裁にされたものも比較的多い。オニグルミ核は半裁

されたものが多く、さらに小さな破片となっているものもある。こうした産状の違いは人の利用の仕方を反映したものである。屋代遺跡群から産したモモ核の形態と産出状況から、以下の点が指摘される。①もっとも古い第5水田対応期古段階から第1水田対応期を通してのモモ核の形態に注目すべき変化は認められない。むしろ、サイズの小さなものから大きなものまで、また、さまざまな彫紋をもったものがそれぞれの時期において認められる。すなわち、時期による偏りが認められない。②モモ核のサイズは、小さなものから大きなものまで多様であるが、集団としては常にまとまりがある。このことは、形態的には大きな隔たりをもつ特異な集団を含まないものの複数の品種が存在したことを示唆している。③各時期についてみても、堆積単位ごとにまとまりのある集団として捉えられ、しかも火による加熱といった人為がかかわったものである。これらのことは、モモ核集団には、食料としての利用だけでなく、祭祀などへの特殊な利用の対象であったことを示唆している。オニグルミ核の形態や産出状況についても同様のことが言え、とくに火による加熱を受けた核を含む集団は、祭祀において利用された可能性がある。

モモには古くから祭祀に結びつきやすい言い習わしが多くあり、花・枝・果実・核といった部位についても多様である。果実・核についてみると、古代中国ではモモの果実は仙果とされた。糖分の豊富な果実は滋養にずば抜けているとされた。『古事記』『日本書紀』ではモモの果実で鬼や雷神を退散させるというイザナギノミコトの神話がある。果実の中にある硬い核は火によって加熱したり少し力を加えると二つに割れる。核が二つに割れることは兆と見られた。兆は甲骨の占いにおいて火で加熱した際に生ずるひび割れを象徴したものである。そこで、モモ核は甲骨の占いにおける呪術性を帯びたのではないかと湯浅浩史は『植物と行事』（朝日新聞社1993）の中で指摘している。オニグルミ核についてはほとんど知られていないが、モモ核と同様な呪術性を帯びた可能性は多分にある。少なくとも屋代遺跡群の祭祀の場一帯で産出したモモ核とオニグルミ核が、しばしば加熱を受けた集団としてまとまっていたのは、祭祀との結びつきを示唆する重要な産出状況である。

モモ核の形態については、弥生時代以降の栽培化に伴うサイズの大型化があったとする見解や、そのような単純な図式にはならないとする指摘、さらに、モモが西方からの渡来を前提として、モモの導入が1回でなく、2、3回と時期を異にしてなされた可能性があるとする見解がある。最近では平城京など古代のモモ核を扱った事例も増えてきたが、資料が増加するにつれ、さまざまな形態を持つものが混在し、一様な図式では説明できなくなってきたのが実情である。屋代遺跡群から産したモモ核集団は、一カ所においてさえ古代を通して形態の多様性を示すものであり、複数の品種が継続的に持ち込まれるか栽培されていたことを示している。むしろ、ここで重要なことは、堆積単位あるいは廃棄単位ごとに形態を捉えるとともに、それら単位がいかなる人為によるものかを他の遺物との関連で検討する必要があることを示している。単純に統計処理をしたり、各地の資料を時代ごとに集約するだけでは、モモ核集団の持つ意味、とりわけ人とのかかわりを理解することはできないことを屋代遺跡群のモモ核集団は示している。

モモ核とオニグルミ核はともに、第2水田対応期において量的にはもっとも顕著な産出状況を示したが、ここでの核は火による加熱痕が認められず、オニグルミ核についてのみであるが、ネズミ類による食害痕が顕著に認められる。第3水田対応期までがウサギによる食害痕であったのとは大きな違いである。このことは、量的には第3水田対応期までを上回るものの、第2水田対応期では、祭祀に関連した遺物が乏しいことと併せ考えると、祭祀に用いられるというよりむしろ一般的な食用とされたものの残滓である可能性があると言える。

もう一つのヒョウタンの産出状況は特異である。藤下典之が記述しているように、これまで知られているヒョウタン果実の最多の記録は、5世紀の奈良・南郷大東遺跡からのもので、それでも10個の果実しか産していない。屋代遺跡群⑥区の流路・溝からはもっとも少なく見積もっても28個の果実が産しており、

古代の内陸部からこれだけの果実が産出したのは異例中の異例であるとしている。宮島義和が述べるように、明らかに2点については、ヒョウタンの一部を切り取り、中身を取り除いて器状にしたあと、柄を差し込んで柄杓状にしたものである。ヒョウタンには古くからさまざまな伝承があり、現在でも民俗に残っているものが多い。埴原和郎編『日本人の起源』の中で飯島武次は、朝鮮半島には古くから人間がヒョウタンから生まれたという観念が存在していたこと、中国から朝鮮半島にかけては婦人がヒョウタンを食べると懐妊するという俗信があること、またヒョウタンは魂の入るところという観念が存在することを紹介し、古くに日本でもこうした観念が広く行き渡ったとしている。また、日本には古くからヒョウタンは魂の容器であるという観念があり、ヒョウタンを柄杓として魂呼びに用いられてきたとしている。屋代遺跡群から産出したヒョウタン果実には加工痕が残るものが多く、その痕跡から藤下典之は、大部分のものは芯おちと果梗痕に穿孔して棒を差し込む柄杓としての利用が主であった可能性を指摘している。そうしてみると、屋代遺跡群のヒョウタン果実は、祭祀と強く結びつくもので、祭祀に関連した他の多数の遺物とあわせ考えると、祭祀具として利用されたものと見なすことができよう。

藤下典之は、ヒョウタンの種子のサイズ計測の結果から、少なくとも遺伝的に大きく異なる3系統のヒョウタンが認められるとし、いろいろなヒョウタンが栽培されていたことを指摘している。すでに述べたようにモモについても複数の品種が栽培されていたか持ち込まれたことが考えられた。これらのことは、祭祀にかかわる植物が、いくつかの他所から持ち込まれた可能性や、たとえ屋代地域で栽培されていたとしても、多品種群あるいは多系統群であった可能性を示しており、栽培植物群の系統群の形成および系統群の流通の歴史を考える上で示唆に富む資料である。

植物遺体群に見る堆積環境と農産物 発掘調査の際に現地では取り上げられた植物遺体群の中で、産出個数および種組成からみて特異なものに、水路内のSD7028から産したアサの果実を主体とするものがある。SD7028から産したものは、とくにアサの果実が大量であり、他にイネの籾・穎・炭化米、カナムグラの果実、ミゾソバやヤナギタデなどタデ属数種の果実、アカザ属の種子、ヒユ属の種子を随伴する。さらに少量ながら、ナスの種子、ゴボウ近似種の果実、ベニバナの果実、アブラナ科「ナタネ型」の種子、メロン（いわゆるメロン仲間）の種子といった栽培植物、エノコログサ属類、イボクサ属種子、アブラナ科種子、オナモミ果実など堆積域あるいは周辺域の雑草・人里植物とされる多種の分類群が含まれる。アサの果実を産するその他の試料についても、種組成は類似性が高く、とくにカナムグラ、ヤナギタデ、アカザ属は共通性が高い。これらは、人の利用がかかわった生活残滓としての性格をもつものから周辺域から自然の営力でもたらされた環境残滓としての性格をもつものが混合していると見ることができる。

層位的に堆積物を水洗して得られた遺体群には、次のような類似点が見いだされる。すなわち、草本類が種数・個数ともに卓越し、木本類の産出は乏しい。木本類は、低木または蔓性のクワ属、ニワトコ、ブドウ属、サルナシ、マタビの種子が大半を占め、高木としてはカヤ種子、モミ属葉、ヒノキ葉、ヤシヤブシ亜属果実、ケヤキ種子、エノキ属種子、サンショウ属核が少量産したに過ぎない。卓越する草本類では、イネ籾が大半を占めるほど多産する。水田においては雑草としての性格をもつコナギも多産するが、イネ籾との相関は小さい。栽培など人為が強いかかわった可能性が高い植物として、アワ、ヒエ、アサ、エゴマ、ナス、メロン、ヒョウタン、ベニバナを上げることができる。アサとヒエ類は大半の試料から産した。その他の水生植物や湿地性植物の種数・個数はともに多い。湿地性のヘラオモダカなどオモダカ科種子・果実はふつうに産する。湿地性のカヤツリグサ科もふつうな植物で、カヤツリグサ属、ホタルイ属、スゲ属が目立つ。イトトリゲモを主としオオトリゲモ、サガミトリゲモを含むイバラモ属がふつうに産し、シャジクモ属もみられる。土手や畦などやや乾いた条件下での草地の植物としては、複数のイネ科、サナエタデ、ポントクタデ、ヤナギタデを主とするタデ属とギシギシ属からなるタデ科植物、アカザ属、ヒユ

属、ナデシコ科を上げることができる。イネ科はふつうな植物で、とくにイネ科 A・B・C、エノコログサ属、イヌビエは全試料から産する。

現地では取り上げられた遺体群および水洗で得られた遺体群は、すでに述べたモモ、オニグルミ、ヒョウタンを除けば、当時の流路と周辺環境からもたらされた環境残滓と食用など生活に利用された生活残滓の混合したものと考えられることができる。環境残滓に含まれるのは、雑草あるいは人里植物として扱われる植物群であり、その内容からは、流路周辺には樹木がきわめて乏しく、いつも人の干渉を受ける開けた生態系を示している。生活残滓に含まれるものは、イネやアサなどの栽培植物がある。ここで、アサの果実がしばしば多量に産出したことは興味深い。すでに述べられたように、アサの果実は圧搾した可能性を留めるもので、油の採取に利用されていた可能性が指摘される。『延喜式』に記されているように、奈良時代以降の信濃国の貢納品には、布、麻子が含まれており、多量に産出する植物遺体群はこのことを裏付けるものであろう。『延喜式』にはさらに紅花の記述があるが、屋代遺跡群でも遺体として普通に見られ、同様に文献の記述と符号する。

屋代遺跡群の調査は、必ずしも当初から植生環境や人と植物のかかわりを明らかにするための総合的な検討を目指していたわけではない。しかし、木簡や祭祀にかかわる夥しい遺物が検出されたことで、古代を中心とする植物遺体群が幸いにも現地では取り上げられた。木簡などの遺物と同様に、これらの植物遺体群が、単に種類の同定に留まらず、祭祀とのかかわりなどに多少とも踏み込んで検討できたのは、ある程度産出状況が把握できたことと、個々の遺体を綿密に観察したことによっていると言ってもよい。これまでの植物遺体群の検討は、植生復元や栽培植物の探索のみに偏る傾向があった。人々の生業や環境とのかかわり、あるいは祭祀など精神的な側面を考えるための資料を提供できるものとして、植物遺体群の調査が展開され、可能性を広めうるものであることを屋代遺跡群の調査は示唆している。

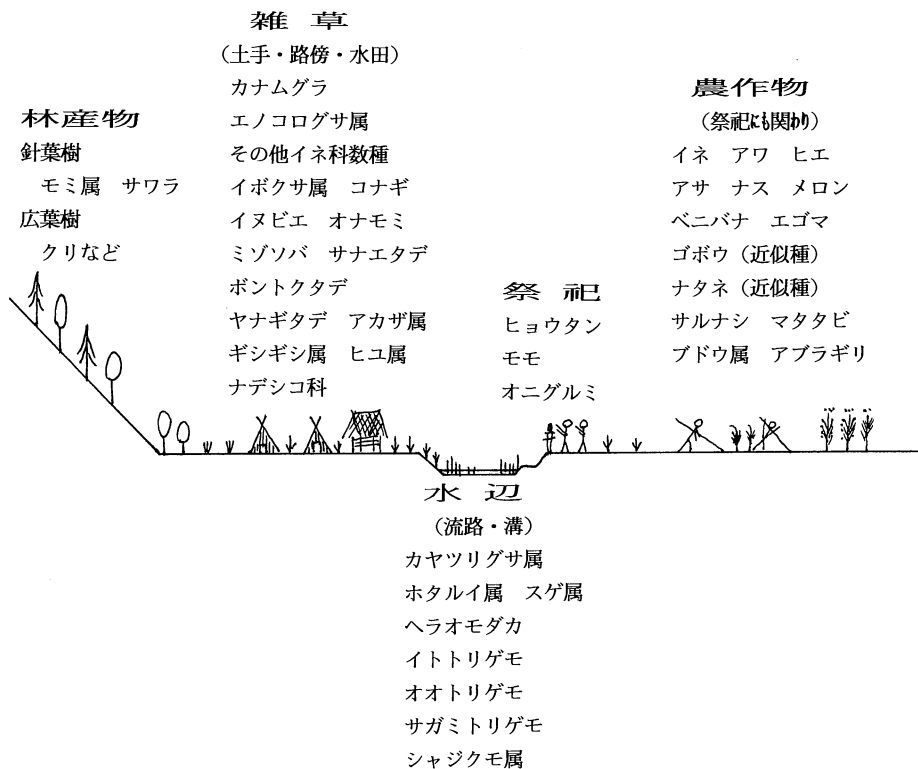


図207 屋代遺跡群における古代の植物誌

2 古代の環境と開発

パリノ・サーヴェイ株式会社

辻本 崇夫

屋代遺跡群・更埴条里遺跡、窪河原遺跡の古環境変遷に関して、現段階で判明していることを表4（第1章）にまとめた。ここでは、古代を中心とした土地利用の変遷について述べる。

縄文時代の土地利用 縄文時代は、河川作用の影響が活発であり、氾濫を繰り返しながら自然堤防Ⅰ群が形成されていった。自然堤防Ⅰ群には、土坑や焼土など生活の痕跡が残されており、洪水の合間には生活の場として利用していたと考えられる。特に、縄文時代中期前葉～後葉には、屋代遺跡群④・⑤・⑥区を中心に集落が形成されており、この時期は河川活動が安定していたと考えられる。

弥生時代・古墳時代の土地利用 弥生時代には自然堤防Ⅰ群が安定したため、更埴条里遺跡が立地する場所は後背湿地化する。そのため、表土が植生に覆われて土壌化し、VI層が形成される。低湿地にはヨシなどの水生植物からなる湿地が、自然堤防上にはタケ亜科やススキなどの草本やクルミ、ケヤキなどの河畔林が覆っていたものとみられる。このような土地条件の中で、自然堤防上には集落が、後背湿地には水田が形成されている。VI層より上位で、イネ属の植物珪酸体が高率に検出されるようになることから、弥生時代の比較的早い段階から稲作が始まった可能性がある。しかし、明確な遺構が見つかっておらず、その状態に関しては不明な点が多い。弥生時代中期に入ると、自然堤防縁辺部での河畔林（ケヤキなど）の伐採・焼却が行われ、水路の整備など水田開発が本格化する。古墳時代になると、水路の再編が行われ、水田開発がさらに進行する。このような開発が進むなか、森林が伐採されて草地が増加する。

古代の土地利用 飛鳥時代・平安時代には条里水田が作られ、水田域が自然堤防Ⅰ群上まで拡大される。一方、更埴条里遺跡のK地区や屋代遺跡群の高い場所では、集落が形成される。また、自然堤防Ⅰ群上にあたる屋代遺跡群では畝跡が検出され、畝作が行われていたと推定される。この時期、窪河原遺跡では、千曲川の旧流路が検出され、河川の影響を頻繁に受けていた。また、後背湿地にあたる更埴条里遺跡では、標高の低いA・B地区で湿地化が進み、水田が一時期放棄されたらしい。このような土地利用状況の変遷は、気候変化とも関係があるようである。この時期、「弥生の小海退」に伴う気候の湿潤化のため、河川作用の活発化や後背湿地での水位上昇が起り、より標高の高いところに生活基盤が移った可能性がある。その後、A・B地区は9世紀以降水田化され、条里水田が低地へと拡大していく。微化石分析結果等からみると、この時期にも小規模な洪水があったと考えられるが、耕作等によって攪乱されており、その痕跡ははっきりしない。なお、屋代遺跡群⑥a区では、第1～5水田が確認されている。おそらく、これらは、洪水を受けるたびに耕地の更新を繰り返した結果と考えられる。

古代の水田と畝 水田でイネ属植物珪酸体が多産するのは当然であるが、畝跡や集落内でも多産する。風塵など表土の移動も考えられるが、稲藁は様々な用途で生活資材として利用されることから、畝や集落に持ち込まれた可能性も高い。また畝の作物に関しては直接的な証拠はないが、炭化種実や花粉化石結果から、ソバ、オオムギ、マメ類などが考えられる。なお、アワやヒエなど雑穀類に由来する可能性がある植物珪酸体が畝跡から検出されており、その栽培が示唆される。しかし、現状では植物珪酸体の形状から栽培種と野生種を区別することはできないため、栽培されていたかどうかを断定することは難しい。

平安時代後期以降の土地利用 9世紀末の「仁和の洪水」は規模が大きく、遺跡全体を厚く砂が覆っている。その後、自然堤防Ⅱが安定化してくると、後背湿地や旧河道は水田、自然堤防上は畝や集落として利用されるようになる。水田域では富栄養化が進み、施肥などによる水質への影響が顕著になる。この時期にも洪水が頻繁にあったとみられるが、耕作が行われたため、堆積物の層相などからは確認できない。

第9章 結 語

— 7世紀前半～9世紀後半の更埴条里遺跡・屋代遺跡群—

はじめに 更埴条里遺跡、屋代遺跡群は縄文時代前期から近世に至る複合遺跡であり、各々の時代において重要な資料を得ることができた。特に、古代に関しては126点を超える木簡が出土して話題となり、その成果は本編に先行して公表した（長野県埋蔵文化財センター1996）。木簡には固有名が見られ、また、当時の生活の一端を鮮明に語っていたため、衝撃と多大な情報を私たちに与えてくれた。このことは、考古資料から古代屋代地域の実態を明らかにしなくてはならない者にとって、大きな重圧ともなった。本編が、その任を果たしているかはなはだ心許ないが、この場を借りてまとめをおこないたい。

時間軸の設定 今回の調査では、485軒の竪穴住居をはじめ多くの遺構が検出できた。豊富でしかも良好な検討材料によって、0～8期前半にわたる時期区分が可能となった。主に各竪穴住居出土土器を素材として、切り合い関係、洪水砂による遺構の埋没程度の差、さらに流路・溝の層位を利用し、土器の型式変化とあわせて時期区分をおこなった。さらに、屋代遺跡群⑥区の流路・溝では、紀年銘木簡数点が洪水砂を間層に挟んだ層位から出土し、ある程度の実年代比定をおこなうことも可能となった。

以下、ここで設定された時間軸にそって、7世紀前半～9世紀後半の動向を見てゆくこととする。

千曲川の流れの変化 7世紀前半（0期）に千曲川の流れが変化し、屋代遺跡群⑥区の河道は急速に埋積をはじめめる。時期の特定はできなかったが、自然堤防Ⅰ群背面に敷設された古墳時代の幹線水路が荒れるのも一連の変化であった可能性がある。こうした環境変化の中、集落景観には明瞭な変化が現れておらず、古墳時代から続いてきた自然堤防の高所に竪穴住居が点在（屋代遺跡群④～⑥区集落）している。

官衙風建物群の造営と木簡群 自然環境の変化からやや遅れ、7世紀後半代（1期前半）に変動が生じる。伝統的な集落に接し、南側の低地に面する位置に官衙風の配置をもつ建物群（ST4201建物群）が出現し、同じ頃、北側の旧河道内流路や溝に木簡の廃棄がはじまる。また、この流路への斜面付近は、湧水、あるいは木製祭祀具を使った祭祀の場となっている。さらに、北側の旧河道内は大規模な水田に造成される。その後、こうした景観は多少の変化を見せながら8世紀前半（2期）まで続いてゆくこととなる。

木簡は文書木簡が主体を占め、官衙的な機能を持つ施設が存在していたことを示している。この点は、温硯や朱墨硯の存在からも補足される。また、8世紀前半の溝からは布目瓦片が出土しており、近隣に瓦葺きの建物（寺院または官衙？）が存在していたことを示している。

しかし、ST4201建物群やそれに後続する建物群は、公的機能を担うためだけに造営されたとは考えがたい。周辺竪穴住居群との境が不明瞭なこと、敷地内に竪穴の鍛冶工房や倉庫を含んでいることなどは、在地首長層の居宅としての色彩を強く残していると言えよう。

水田開発と栽培植物 旧河道域で水田が見つかり、また、多くの植物種実が出土している。食生活を支えたイネ、アワ、ヒエ、ナス属、メロン仲間…、祭祀に利用されたと思われるモモやヒョウタン、あるいは繊維や油採取の可能性が指摘されているアサ、多用途のベニバナなどが認められる。

生業に関連する遺物としては漁業用の土錘が遺構数に比べて多く、木製の網針の出土も注目される。

隣接する手工業生産工房 建物群の周辺からは鍛冶工房やガラス玉鑄型、漆製品が見つかっており、各種手工業生産物の工房が集中していたと思われる。布生産に関しては「布手」が列記された木簡などとともに、紡錘車が多く見られる。また、木工では、建築材に関わる木屑類、あるいは搬入されたイスノキの削屑と製品（横櫛）の存在、サワラ材と製品としての祭祀具や木簡？の存在、などから知ることができる。

しかし、鍛冶工房が竪穴建物1棟であったように、大規模な建物群を形成してはいなかったと思われる。

流通と地域圏 陶邑産須恵器や畿内系土師器などの物品が遠方より搬入されている。また、信濃国内では「(東)間」(現松本市)と記された木簡も存在している。一方、近隣における流通関係は、荷札木簡に登場する郷名から推定することができる。そこには、『和名抄』では屋代郷と同じ埴科郡に属する郷であっても、遠方の坂城郷(現坂城町)と、千曲川に突出した山地によって遮られた英多郷(現松代付近?)は見られない。これに対して、千曲川対岸の更級郡の郷名は存在している(傳田1997)。こうした地域圏は、7世紀末(1期後半)に在地生産が搬入品を凌駕する須恵器についてもうかがうことができる。すなわち、恒常的に使用する食器としての須恵器の大半は、更級郡などの近隣の窯の製品を利用していたのである。

祭祀施設と遺物 この集落の位置づけを推定する上で重要な材料となるのが、集落北側の斜面から流路にかけて存在した水辺の祭祀遺構と遺物である。7世紀後半には、古墳時代から継承されてきた導水型祭祀に加え、湧水坑型の祭祀がはじまる。前者は古墳時代の首長層の系譜を暗示している。後者は湧水点を直接対象とし、卜骨が伴うなど、新たに開発された水田との関係で注目される。一方、木製祭祀具は7世紀末頃を境に人形が増加し、それに伴って祭祀具全般の組み合わせや型式に変化が起き、廃棄ブロック数が増加する。こうした動きは、この集落と中央との結びつきが一層強まったことを示している。ウマ・(ウシ)骨の一部も祭祀に関わるものと考えられ、少数ながらイヌの骨が出土している点も注目される。

集落の変貌 このように、④~⑥区集落では7世紀後半に官衙風建物群が成立し、各種の工房が集中し、大がかりな祭祀が行われるようになった。その後、木簡では文書中心(~8世紀初頭)から荷札主体の8期前半(2期)へと移行する。また、同時に木製祭祀具を使用した祭祀体系が整備されてゆく。生産力も向上し、須恵器の在地生産体制が確立する。このように、7世紀後半から8世紀前半は伝統的な集落が大きく変貌を遂げ、さらに中央との関係の中で発展を見せていく時期である。その主体者は建物群のあり方や導水型祭祀の継承などから、古墳時代以来の勢力を継承した在地首長層であったと考えられる。

しかし、8世紀中頃~後半(3~4期)には、大規模な建物群は消滅し、木簡や木製祭祀具をはじめとする遺物も急速に姿を消す。以降、この地区は竪穴住居を中心とした一般的な集落へと変化する。

条里型地割の施工と低地開発 古墳時代に掘削された幹線水路が氾濫を繰り返して土砂を供給し、屋代遺跡群①区などの水路沿いの地区は微高地化していった。そのため、古代当初の水田域は後背湿地I群でも最も低い更埴条里遺跡南部に限定されていた可能性が高い。荒廃した自然堤防側の耕地に再開発の手が入ったのは、9世紀初~前半(5?~6期)にかけてである。その要因には、低地域全体を掌握し開発を指導する有力者層が存在していたこと、そして、環境の変化があげられる。IV層形成の時期(古代)には、珪藻の変化などから湿地化が進んだと推定されており、更埴条里遺跡A~C地区の泥炭地化が進む。

一方、前述したように幹線水路沿いの土地は微高地化し、集落が進出しやすい状況を生みだしていた。

開発の端緒 8世紀末~9世紀初頭(5期)に、低地ほぼ中央西よりの更埴条里遺跡K地区に竪穴住居1軒が先端を切って進出する。9世紀前半(6期)の初期にはK地区集落の西側に溝と材木列?で囲まれた中核的な集落が成立したと考えられる。そのほとんどが調査区外のため実態は不明瞭だが、条里型地割に則した建物配置をとり、畿内系土師器が多出するなど、官衙的な色彩がうかがえる。条里型地割はこの地区を皮切りに整備が進んでおり、開発の主体者は低地西部に拠点を置いていたと予想される。

自然堤防側ではやや遅れて、水路の分岐点や微高地上に開発のための集落が進出する。これらの集落では、竪穴住居1~数棟、掘立柱建物(居住施設)1棟、倉庫1・2棟が条里型地割に則して配置される建物群(A1類型)と、2~数棟の竪穴住居が1棟の掘立柱建物の周囲に配置される建物群(B2類型)の2グループ、あるいはどちらか一方で成立する場合が多い。

集落の再編と盛衰 6期の後半から7期(9世紀中頃?)にかけて、屋代遺跡群①区以南で条里水田の東西

大畦が完成し、集落が北へ若干移動する。この頃を境に発展へと向かう①区集落や③a区集落と、没落する②区東グループなどがでてくる。こうした各集落の個別的な動きの中で、開発を主導したK地区集落は縮小へ向かう。この集落では条里地割に則った配置が崩れ、1棟の掘立柱建物周囲に竪穴住居が取り巻く形へ大きく変化する。このことは、開発を主導した勢力が他所へ移動し、残された小集団が集落を再編させたためと考えることができよう。この後、K地区集落は次第に縮小化してゆく。

集落の集約化から小規模・分散化へ 9世紀後半（8期前半）には、個別集落の盛衰がより明確となる。①区集落では連房式鍛冶施設が集落内に設置され、石帯を保有するまでに勢力を拡大する。また、③a区集落は調査範囲内で最大の礎石建物が建つまでに発展を遂げる。これとは対照的に②区や③b区集落は、他に先駆けて水田や畠に転換されてしまう。しかし、集約化の過程で個別的に発展を見せた集落も、その後すぐに小規模・分散化してゆく。こうした集落再編が進む中、この地域一帯は大洪水を被ることとなる。

集落の変遷と土器 以上のような、集落の盛衰を端的に表す遺物として搬入土器と墨書土器をあげることができる。畿内系土師器は、7世紀後半～8世紀前半では官衙風建物群の存在した④～⑥区集落で見られ、9世紀前半には開発を主導したと考えられる更埴条里遺跡K地区に集中的に見られた。緑釉陶器は、9世紀後半の①区集落に多い傾向を見せている。また、墨書土器は各々の集落で中心となる文字が存在し、しかも多量に出土する時期とその集落が発展していた時期が重なっている。すなわち、8世紀末～9世紀前半（5～6期）はK地区集落の「冨」「Ⅱ」、9世紀後半（8期前半）には①区集落の「太」、③a区集落の「由」などがその傾向を顕著に示している。

生産力の発展 条里型の耕地が段階的に整備されていった点は述べたが、そうした地割の中、水田化の困難な高所は畠となっており、陸稻か他の作物の栽培が推定されている。集落内にも畝状遺構が見られ、畠作物の利用が増大していたことをうかがわせる。また、水田面には犁跡が多く残され、ウシ骨の出土が多くなるなど、牛馬耕の普及が認められる。ウマからウシへの転換は、官衙的機能を持つ集落から一般的な集落への変化と対応するのであろうか。生業関係の遺物では、漁業用の土錘が増加する時期でもある。

9世紀代は耕地開発だけにとどまらず、多くの分野で産業が発展しモノが豊かになる。各種鉄製品や灯明具などの保有率が高くなるのもこの時期である。また、官衙風建物群に接して鍛冶工房が存在した7世紀後半～8世紀前半とは異なり、鍛冶に関連する鉄滓や鍛造剥片が各集落から発見されるようになる。実際、大小それぞれの鍛冶施設がK地区集落、①区集落、④～⑥区集落に存在していた。

9世紀代の開発と集落 9世紀の開発は、有力者の主導により低地全域に条里型地割が設定され、水路の再整備と集落の拠点（水路分岐点）への配置ではじまった。畦畔や水路の造成は9世紀後半まで継続的に実施され、その中で発展する集落と没落へ向かう集落が認められた。洪水直前にはさらに竪穴住居や掘立柱建物の個別分散化が起こっている。こうした変化は、有力者による全集落掌握の段階から、集落毎の自立化と格差が増大する段階へ、そして建物（群）単位での自立へ、の過程と見ることも可能であろう。

おわりに 屋代遺跡群出土木簡は、この地域に郡家や軍団、初期国府が存在していた可能性を示した。現在、考古資料から後二者の問題に対して明確な解答を引き出すことはできない。しかし、今回の資料の蓄積によって、7世紀前半から9世紀後半の屋代・更埴地域で起きた、大きな時代の動きを垣間見ることができそうである。今後、洪水後から中・近世の動向を明らかにするとともに、再考してゆきたい。

参考文献

- 傳田伊史 1997 「地域における古代史研究をめぐって」『歴史学研究』703
 長野県埋蔵文化財センター 1996 『長野県屋代遺跡群出土木簡』

報 告 書 抄 録

ふりがな	こうしょくじょうりいせき・やしらいせきぐん (おおざかいせき・くぼがわらいせき) こだいいちへん							
書名	更埴条里遺跡・屋代遺跡群 (含む大境遺跡・窪河原遺跡) - 古代 I 編 -							
副書名	上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	26 - 更埴市内 その5 -							
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 42							
編著者名	市川桂子、河西克造、寺内隆夫、鳥羽英継、平出潤一郎、水沢教子、宮島義和 ほか							
編集機関名	(財) 長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター							
所在地	〒387-0007 長野県更埴市屋代字清水260-6 長野県立歴史館内 Tel 026-274-3891							
発行年月日	1999年(平成11年)3月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こうしょくじょうりいせき 更埴条里遺跡	ながのけんこうしょくしやしらいせき 長野県更埴市屋代	20216	29	36° 31' 50" ~ 36° 32' 20"	138° 8' 30" ~ 138° 8' 40"	1991~1993、 1995	70,000	上信越自動車道 ・中央自動車道 建設に伴う事前 調査
やしらいせきぐん 屋代遺跡群	こうしょくしあめのみや 更埴市雨宮	20216	31	36° 32' 20" ~ 36° 32' 50"	138° 8' 30" ~ 138° 8' 40"	1991~1994	46,000	
おおざかいせき 大境遺跡	更埴市雨宮 (屋代遺跡群内)	20216	31-13	36° 32' 45"	138° 8' 35"	1993	500	
くぼがわらいせき 窪河原遺跡	更埴市雨宮 (屋代遺跡群内)	20216	31-17	36° 32' 50" ~ 36° 33' 00"	138° 8' 25" ~ 138° 8' 45"	1990、1993 ~1994	20,000 上信越道 5,500 中央道	
所収遺跡名	立地	種別		時代	主な遺物		特記事項	
更埴条里遺跡	千曲川の後背湿地 I群	集落 水田 (条里を含む)		古代	畿内系土師器		<ul style="list-style-type: none"> ・ 7世紀後半から8世紀前半の集落 (官衙風建物群を含む) ・ 水辺の祭祀施設と木製祭祀具廃棄場所 	
屋代遺跡群 (大境遺跡を含む)	千曲川の自然堤防 I群	集落、祭祀、 水田 (条里含む)		古代	奈良三彩、畿内系土師器、 緑釉陶器、瓦塔、瓦片、 木簡、木製祭祀具、網針、 鈴、帯金具、石帯、 ガラス玉鑄型		<ul style="list-style-type: none"> ・ 9世紀の集落 ・ 9世紀後半の礎石建物群 ・ 9世紀後半の条里水田、 畠 	
窪河原遺跡	千曲川の自然堤防 II群	河川跡に包含 された遺物		古代	土器片		<ul style="list-style-type: none"> ・ 河川跡 	

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 42

上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 26

—更埴市内 その5—

更埴条里遺跡・屋代遺跡群

(含む大境遺跡・窪河原遺跡)

—古代1編—

本文

発行 平成11(1999)年3月26日
発行者 (財)長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター
〒387-0007 更埴市屋代字清水260-6
長野県立歴史館内
TEL 026-274-3891
FAX 026-274-3892
印刷 第一法規出版株式会社

